財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第291集

波志江中屋敷東遺跡

北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集

2002

日　本　道　路　公　団
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第２９１集
「波志江中屋敷東遺跡」正誤表

頁	訂正箇所	誤	正
凡例	凡例１	（日本測地点）	（日本測地系）
凡例	凡例12	大江正之	大江正行
102	４行	溝７条	溝５条
116	10行	溝16条	溝18条
323	26行	渡　鄒（わたいまこ）	渡　鄒（わたなべあこ）

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第291集

波志江中屋敷東遺跡

北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集

2002

日　本　道　路　公　団
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

波志江中屋敷東遺跡全景（写真上が北）　ほぼ中央が波志江中屋敷東遺跡、上の山並みは赤城山、遺跡より北北東は波志江下沼

C区４面１号大畦調査風景（西から）

16号溝出土叩き板

C区４面１号大畦出土不明木製品

16号溝筒状木製品出土状況

青磁・白磁・１号溝出土鉄滓

序

北関東自動車道は、関越自動車道の高崎市から分岐し、茨城県那珂湊にいたる延長約150キロメートルの高速自動車道であります。その間、群馬・栃木・茨城各県の主要都市および東北自動車道・常磐自動車道を結び、地域社会の発展に大きな役割を果たすものと期待されております。

この北関東自動車道の高崎～伊勢崎間約15キロメートルの建設に先立って、平成７年６月から36遺跡で発掘調査が行われておりますが、当事業団ではそのうちの31遺跡の発掘調査を実施しております。本書は、その発掘調査報告書第10集として刊行するものです。

本遺跡は伊勢崎市波志江町に所在し、発掘調査は平成９年度から10年度にかけて実施されました。その結果、平安時代の火山灰に覆われた水田跡、古墳時代の洪水層に覆われた水田跡などが検出されました。古墳時代の水田の畦からは、多量の建築部材や木製の生活用具が出土したことが特に注目されました。当時の生活や自然災害と人間との関わりを知る上で貴重な資料です。整理作業は平成11年度から14年度にわたって実施され、上梓のはこびとなりました。

本書は、北関東自動車道の建設に先立って発掘調査された他の遺跡とともに波志江沼周辺地域を中心とした本県の古代史を明らかにしていく貴重な資料になるものと確信しております。

最後になりますが、日本道路公団東京建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、伊勢崎市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本書刊行まで終始ご協力を賜り、心から感謝の意を表します。また、発掘調査に携わった作業員の方々の労をねぎらい序といたします。

平成14年３月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　小 野 宇三郎

例　言

1．本書は、北関東自動車道建設に伴い事前調査された波志江中屋敷東遺跡（遺跡略号KT-230）の発掘調査報告書である。本書における報告は、波志江中屋敷東遺跡から検出された遺構・遺物を対象とする。

2．波志江中屋敷東遺跡は、群馬県伊勢崎市波志江町字中屋敷東2567・2566・2565・2564・2563-3・2563-2・2563-1番地（以上Ａ区）、字中屋敷東2429-1・2430-1・2430-2・2431・2440・2441番地（以上Ｂ区）、字中屋敷東2425-1・2428-1・2428-2・2433・2434・2439-1番地（以上Ｃ区）、字中屋敷東2388-1・2386-2・2388-4・2386-1・字大沼下2432番地（以上Ｄ１区）、字中屋敷東2426・2427・2435・2436番地（以上Ｄ２区）に所在する。

3．波志江中屋敷東遺跡の遺跡名は小字名の中屋敷東の前に大字名にあたる波志江町の町名を付し、大字名小字名で遺跡名としている。

4．平成９年度の発掘調査は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。平成10年度の発掘調査は日本道路公団から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が委託を受け実施されたものである。整理事業は、日本道路公団から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が委託を受け実施したものである。

5．発掘調査期間、整理期間は次のとおりである。

発掘調査	平成９年度調査	平成10年２月１日～平成10年３月31日
	平成10年度調査	平成10年４月１日～平成11年３月31日
整理事業	平成11年度	平成12年１月１日～平成12年３月31日
	平成12・13年度	平成12年４月１日～平成14年３月31日

6．発掘調査及び整理事業の体制は次のとおりである。

事務担当　菅野　清、小野宇三郎、原田恒弘、赤山容造、吉田　豊、渡辺　健、住谷　進、神保侑史、水田　稔、能登　健、津金澤吉茂、小潤　淳、坂本敏夫、大島信夫、佐藤明人、中束耕志、西田健彦、国定　均、井上　剛、小山建夫、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、宮崎忠司、岡島伸昌、森下弘美、片岡徳雄、田中賢一、大澤友治、吉田恵子、並木綾子、今井もと子、内山佳子、佐藤美佐子、本間久美子、星野美智子、本地友美、北原かおり、狩野真子、若田　誠、松下次男、浅見宣記、吉田　茂、蘇原正義

調査担当　平成９年度調査　関　晴彦、玉橋優子、茂木　剛

平成10年度調査　関　晴彦、井上哲男、佐藤理重、新倉明彦、伊平　敬、久保　学

整理担当　金井　武

7．本書作成の担当はつぎのとおりである。

編　　集　金井　武

本　文　執　筆　第１章第１節佐藤明人、第４章第１・２・３節株式会社古環境研究所、第４章第４・５節株式会社パレオ・ラボ、第５章第１節宮本長二郎（東北芸術工科大学）、第５章第２節桂　雄三（文化庁文化財部記念物課）、前記以外金井　武

遺構写真撮影　各発掘調査担当

遺物写真撮影　佐藤元彦
金属器保存処理　関　邦一、小材浩一、土橋まり子、高橋初美
木製品実測等　高橋真樹子、伊東博子、田中のぶ子、藤井文江、横倉知子
遺物機械実測　佐藤美代子、田中富子、富沢スミエ、小菅優子
整理作業　武永いち、高梨房江、高田栄子、飯田和子、都丸美奈子、中野和子、光安文子、小野寺仁子、田子弘子、酒井史恵

8．石材鑑定は、群馬県地質研究会の飯島静男氏にお願いした。
9．発掘調査資料、出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。
10．発掘調査及び報告書作成では以下の方々にご協力・ご指導いただいた。記して感謝の意を表す。
伊勢崎市教育委員会、宮本長二郎、桂　雄三、伊勢屋ふじ子、次山　淳、高谷和生、中川律子、藤永隆熙、南雲芳昭、松村和男、地元関係者各位

凡　例

1．挿図中に使用した方位は、座標北を表している。座標系は、国家座標（日本測地点）第Ⅸ系である。
2．遺構断面実測図、等高線に記した数値は標高を表し、単位は、mを用いた。
3．遺構名称は遺跡別に遺構の種類毎に通し番号をつけ、番号・種類で呼称した。なお、水田は調査面を付して呼称した。また本文中（第３章）では節毎に遺跡別に時代毎に報告している。
4．遺構・遺物実測図の縮尺率は原則として下記のとおりとし、各図にスケールを入れた。
遺構　土坑（平面図・断面図）1：40（大沼下遺跡は1：60）
住居（平面図・断面図）1：60
溝（平面図）1：100、1：200（断面図）1：40
水田（平面図）1：100（断面図）1：40
その他の遺構については逐一縮尺率を示した。
遺物　土器1：3石器1：2（石鏃1：1）金属製品1：2（古銭1：1）木器・木製品1：3、1：4、1：6、1：8の縮尺を用いた。それぞれの縮尺を図中に記載した。
5．遺構の方位は、北を基準に傾きを計測した。東に傾いた場合N-○°-Eというように表記した。
6．本書では、テフラの呼称として下記の略語を用いる。

テフラ等の名称	略語	年代
浅間Ａ軽石	As-A	1783（天明３）年
浅間Ｂテフラ	As-B	1108（天仁元）年
榛名二ツ岳伊香保テフラ	Hr-FP	６世紀中葉
榛名二ツ岳渋川テフラ	Hr-FA	６世紀初頭
榛名二ツ岳渋川テフラに伴う泥流	Hr-FA 泥流	６世紀初頭
浅間Ｃ軽石	As-C	４世紀初頭

7．本書の図版に使用したスクリーントーンは、次のことを示す。下記以外は図版ごとに凡例を示す。

(1) 遺構図スクリーントーン

地山　　拡大図の位置

焼土

(2) 遺物図スクリーントーン

陶器の施釉範囲　　炭化の範囲

繊維含む土器

8．水田面積の計測は、畦畔の下端で求め、プラニメーターで３回計測し、その平均値を採用した。また水田の形状が不明瞭のもので長軸と短軸が判るものについては長軸と短軸を乗じて面積を算出し、その面積の欄に☆印を付けた。

9．本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。

国土地理院　地形図　１：25,000「伊勢崎」

国土地理院　地勢図　１：200,000「宇都宮」

伊勢崎市現況図①　　１：5,000

10．遺物観察表の出土遺構・出土層位の項目は発掘調査時の取り上げNoである。量目の①は口径、②は底径、③は器高、④は長さ、⑤は幅、⑥は厚さ、⑦は重さで、それぞれの数値の（　）は現存部分の最大値および推定値である。なお、大きさの単位はcm、重さはgである。色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所監修1993年版『新版標準土色帳』を用いて記載した。

11．中近世の遺物および金属器は当事業団職員の大江正之の遺物観察による。

12．木器観察表の樹種の（　）は保存処理後の外観で、当事業団職員の関邦一の同定による。

目　次

口絵
序
例言
凡例
目次
挿図目次
写真図版目次
第１章　発掘調査の経過
第１節　発掘調査に至る経緯 …… 1
第２節　発掘調査の方法 …… 1
第３節　発掘調査の経過 …… 4
第４節　基本層序 …… 6
第２章　立地と周辺の遺跡
第１節　遺跡の立地 …… 9
第２節　周辺の遺跡 …… 9
第３章　遺構と遺物
第１節　大沼下遺跡の調査 …… 22
第２節　波志江中屋敷東遺跡近世の調査 …… 75
第３節　波志江中屋敷東遺跡古代の調査 …… 102
第４節　波志江中屋敷東遺跡古墳時代の調査 …… 117
第５節　波志江中屋敷東遺跡縄文時代の調査 …… 253
第６節　波志江中屋敷東遺跡旧石器時代の調査 …… 260
第４章　自然科学分析
第１節　自然科学分析にあたって …… 262
第２節　テフラ分析と放射性炭素（14C）年代測定 …… 263
第３節　波志江中屋敷東遺跡の植物珪酸体分析 …… 280
第４節　波志江中屋敷東遺跡の花粉分析 …… 293
第５節　波志江中屋敷東遺跡出土の種実同定 …… 303
第６節　波志江中屋敷東遺跡出土の木製品等の樹種同定 …… 307
第５章　まとめ
第１節　波志江中屋敷東遺跡出土建築部材の復原考察 …… 322
第２節　波志江中屋敷東遺跡の水田遺構（４～５世紀）上の洪水堆積物 …… 324
第３節　成果と課題 …… 328
抄録 …… 332
写真図版 …… 333

挿図目次

第1図　波志江中屋敷東遺跡の位置図
（国土地理院「宇都宮」1：200,000図使用）
第2図　波志江中屋敷東遺跡の調査区設定図
（伊勢崎市現況図1：5000図使用）……2
第3図　波志江中屋敷東遺跡のグリッド設定図……3
第4図　土層柱状図・土層柱状図作成位置図……6
第5図　基本土層模式図……7
第6図　波志江中屋敷東遺跡周辺地形分類図……10
第7図　波志江中屋敷東遺跡周辺遺跡図
（国土地理院「伊勢崎」1：25,000図使用）……11
第8図　大沼下遺跡調査区設定図……22
第9図　大沼下遺跡全体図……23、24
第10図　大沼下遺跡1号住居跡・出土遺物(1)……25
第11図　大沼下遺跡1号住居跡出土遺物(2)……26
第12図　大沼下遺跡2号住居跡……28
第13図　大沼下遺跡2号住居跡出土遺物……29
第14図　大沼下遺跡3号住居跡……30
第15図　大沼下遺跡4号住居跡・出土遺物(1)……31
第16図　大沼下遺跡4号住居跡出土遺物(2)……32
第17図　大沼下遺跡5号住居跡・出土遺物……33
第18図　大沼下遺跡6号住居跡……34
第19図　大沼下遺跡6号住居跡出土遺物……35
第20図　大沼下遺跡7号住居跡・出土遺物(1)……36
第21図　大沼下遺跡7号住居跡出土遺物(2)……37
第22図　大沼下遺跡7号住居跡出土遺物(3)……38
第23図　大沼下遺跡8号・9号・10号住居跡……40
第24図　大沼下遺跡8号・9号・10号住居跡
セクション、エレベーション……41
第25図　大沼下遺跡8号・9号住居跡エレベーション……42
第26図　大沼下遺跡8号住居跡出土遺物(1)……42
第27図　大沼下遺跡8号住居跡出土遺物(2)……43
第28図　大沼下遺跡9号住居跡出土遺物……44
第29図　大沼下遺跡11号住居跡・出土遺物……46
第30図　大沼下遺跡12号住居跡・出土遺物(1)……47
第31図　大沼下遺跡12号住居跡出土遺物(2)……48
第32図　大沼下遺跡13号住居跡……49
第33図　大沼下遺跡13号住居跡出土遺物……50
第34図　大沼下遺跡14号住居跡……51
第35図　大沼下遺跡14号住居跡出土遺物……52
第36図　大沼下遺跡15号住居跡・出土遺物(1)……54
第37図　大沼下遺跡15号住居跡出土遺物(2)……55
第38図　大沼下遺跡16号住居跡……56
第39図　大沼下遺跡16号住居跡出土遺物……57
第40図　大沼下遺跡17号住居跡……57
第41図　大沼下遺跡18号住居跡……58
第42図　大沼下遺跡18号住居跡出土遺物(1)……59
第43図　大沼下遺跡18号住居跡出土遺物(2)……60
第44図　大沼下遺跡19号住居跡・出土遺物……61
第45図　大沼下遺跡1号・2号・3号溝……62
第46図　大沼下遺跡2号・3号溝セクション……63
第47図　大沼下遺跡1号溝出土遺物……63
第48図　大沼下遺跡2号溝出土遺物……64
第49図　大沼下遺跡3号溝出土遺物……65
第50図　大沼下遺跡方形周溝遺構・出土遺物……67
第51図　大沼下遺跡1号・2号土坑……68
第52図　大沼下遺跡3号土坑・出土遺物……68
第53図　大沼下遺跡4号～7号土坑……69
第54図　大沼下遺跡8号～12号土坑……70
第55図　大沼下遺跡13号・14号土坑……71
第56図　大沼下遺跡15号土坑・出土遺物……71
第57図　大沼下遺跡16号土坑……72
第58図　大沼下遺跡1号井戸……72
第59図　大沼下遺跡遺構外出土遺物(1)……73
第60図　大沼下遺跡遺構外出土遺物(2)……74
第61図　6号溝出土遺物……75
第62図　6号溝……76
第63図　12号溝……77
第64図　13号溝木器出土状況……79、80
第65図　13号溝出土遺物(1)……81
第66図　13号溝出土遺物(2)……82
第67図　13号溝出土遺物(3)……83
第68図　13号溝出土遺物(4)……84
第69図　13号溝出土遺物(5)……85
第70図　2号～6号・8号土坑……90
第71図　1面遺構外出土遺物(1)……92
第72図　1面遺構外出土遺物(2)……93
第73図　1面遺構外出土遺物(3)……94
第74図　1面遺構外出土遺物(4)……95
第75図　1面遺構外出土遺物(5)……96
第76図　1面遺構外出土遺物(6)……97
第77図　2号・3号溝……103、104
第78図　27号・28号溝……105
第79図　29号溝……106
第80図　1号井戸……107
第81図　1号・9号～11号・22号土坑……108
第82図　7号ピット・出土遺物……109
第83図　1面水田全体図……110
第84図　1面水田出土遺物……111
第85図　A区1面水田全体図……112
第86図　C区1面水田全体図……113
第87図　D1区・D2区1面水田全体図……114
第88図　1号・11号溝……117、118
第89図　1号・11号溝遺物出土状況……119、120
第90図　1号溝出土遺物(1)……121
第91図　1号溝出土遺物(2)……122
第92図　1号溝出土遺物(3)……123
第93図　1号溝出土遺物(4)……124
第94図　1号溝出土遺物(5)……125
第95図　1号溝出土遺物(6)……126
第96図　1号溝出土遺物(7)……127
第97図　1号溝出土遺物(8)……128
第98図　11号溝出土遺物……134
第99図　4号溝出土遺物……135
第100図　4号・5号溝……137
第101図　7号・8号・18号・30号溝……139、140
第102図　9号・16号溝遺物出土状況、セクション……143、144
第103図　9号溝出土遺物(1)……145
第104図　9号溝出土遺物(2)……146
第105図　9号溝出土遺物(3)……147
第106図　9号溝出土遺物(4)……148
第107図　9号溝出土遺物(5)……149
第108図　9号溝出土遺物(6)……150
第109図　16号溝出土遺物(1)……153
第110図　16号溝出土遺物(2)……154
第111図　16号溝出土遺物(3)……155
第112図　9・16号溝出土遺物(1)……157
第113図　9・16号溝出土遺物(2)……158
第114図　23号溝出土遺物……161
第115図　19号～25号溝(1)……162
第116図　19号～25号溝(2)……163、164
第117図　19号～25号溝(3)……165
第118図　14号・16号・17号土坑……166

第119図　1号・6号・8号ピット …… 167
第120図　3面水田全体図 …… 168
第121図　C区3面水田全体図 …… 170
第122図　D1区・D2区3面水田全体図 …… 171
第123図　4面水田全体図 …… 172
第124図　A区4面水田全体図 …… 173
第125図　A区4面水田出土遺物 …… 174
第126図　C区4面水田全体図 …… 176
第127図　D1区・D2区4面水田全体図 …… 177
第128図　C区4面水田1号大畦・遺物出土状況 …… 179、180
第129図　C区4面水田1号大畦出土遺物(1) …… 181
第130図　C区4面水田1号大畦出土遺物(2) …… 182
第131図　C区4面水田1号大畦出土遺物(3) …… 183、184
第132図　C区4面水田1号大畦出土遺物(4) …… 185、186
第133図　C区4面水田1号大畦出土遺物(5) …… 187、188
第134図　C区4面水田1号大畦出土遺物(6) …… 189、190
第135図　C区4面水田1号大畦出土遺物(7) …… 191、192
第136図　C区4面水田1号大畦出土遺物(8) …… 193
第137図　C区4面水田1号大畦出土遺物(9) …… 194
第138図　C区4面水田1号大畦出土遺物(10) …… 195
第139図　C区4面水田1号大畦出土遺物(11) …… 196
第140図　C区4面水田1号大畦出土遺物(12) …… 197
第141図　C区4面水田1号大畦出土遺物(13) …… 198
第142図　C区4面水田1号大畦出土遺物(14) …… 199
第143図　C区4面水田1号大畦出土遺物(15) …… 200
第144図　C区4面水田南西部遺物出土状況 …… 205、206
第145図　C区4面水田北西部遺物出土状況 …… 207、208
第146図　D1区・D2区4面水田遺物出土状況 …… 209、210
第147図　C・D区4面水田出土遺物(1) …… 217
第148図　C・D区4面水田出土遺物(2) …… 218
第149図　C・D区4面水田出土遺物(3) …… 219
第150図　C・D区4面水田出土遺物(4) …… 220
第151図　C・D区4面水田出土遺物(5) …… 221
第152図　C・D区4面水田出土遺物(6) …… 222
第153図　C・D区4面水田出土遺物(7) …… 223
第154図　C・D区4面水田出土遺物(8) …… 224
第155図　C・D区4面水田出土遺物(9) …… 225
第156図　C・D区4面水田出土遺物(10) …… 226
第157図　C・D区4面水田出土遺物(11) …… 227
第158図　C・D区4面水田出土遺物(12) …… 228
第159図　C・D区4面水田出土遺物(13) …… 229
第160図　C・D区4面水田出土遺物(14) …… 230
第161図　C・D区4面水田出土遺物(15) …… 231
第162図　C・D区4面水田出土遺物(16) …… 232
第163図　C・D区4面水田出土遺物(17) …… 233
第164図　C・D区4面水田出土遺物(18) …… 234
第165図　C・D区4面水田出土遺物(19) …… 235、236
第166図　C区3・4面遺構外遺物出土状況 …… 247、248
第167図　C区3・4面遺構外出土遺物(1) …… 249
第168図　C区3・4面遺構外出土遺物(2) …… 250
第169図　13号・15号土坑 …… 253
第170図　15号土坑出土遺物 …… 254
第171図　B区5面全体図 …… 255
第172図　21号土坑 …… 256
第173図　縄文時代遺構外出土遺物(1) …… 257
第174図　縄文時代遺構外出土遺物(2) …… 258
第175図　旧石器時代の試掘グリッド設定図 …… 260
第176図　試掘グリッドセクション …… 261
第177図　分析試料採取地点図 …… 262
第178図　土層柱状図（第1～9地点） …… 268
第179図　土層柱状図（第10～19地点） …… 269
第180図　140-400Gにおけるテフラ組成ダイヤグラム …… 270
第181図　第9地点における植物珪酸体分析結果 …… 289
第182図　第9地点のAs-B直下層における
植物珪酸体分析結果 …… 289
第183図　第10地点における植物珪酸体分析結果 …… 289
第184図　第8地点における植物珪酸体分析結果 …… 290
第185図　第7地点における植物珪酸体分析結果 …… 290
第186図　第13・14地点における植物珪酸体分析結果 …… 291
第187図　第15地点における植物珪酸体分析結果 …… 291
第188図　第17地点における植物珪酸体分析結果 …… 291
第189図　第16地点における植物珪酸体分析結果 …… 292
第190図　第19地点における植物珪酸体分析結果 …… 292
第191図　第15地点における花粉ダイアグラム …… 301
第192図　第13・14地点における花粉ダイアグラム …… 302
第193図　第8地点における花粉ダイアグラム …… 303
第194図　1号大畦No.6・No.7柱軸部構造模式図 …… 325
第195図　1号大畦No.5・CD区4面水田No.156柱
による平屋建物構造模式図 …… 325
第196図　1号大畦No.18棟覆材による箱棟復元図 …… 325
第197図　叩き板・筵状木製品実測図 …… 331
付図1　波志江中屋敷東遺跡1面（As-B下）全体図
付図2　波志江中屋敷東遺跡3面（洪水層下）全体図
付図3　波志江中屋敷東遺跡4面（As-C混下）全体図

表目次

表1　周辺遺跡一覧表(1) …… 14
表2　周辺遺跡一覧表(2) …… 15
表3　周辺遺跡一覧表(3) …… 16
表4　周辺遺跡一覧表(4) …… 17
表5　周辺遺跡一覧表(5) …… 18
表6　大沼下遺跡1号住居跡出土遺物観察表 …… 27
表7　大沼下遺跡2号住居跡出土遺物観察表 …… 29
表8　大沼下遺跡4号住居跡出土遺物観察表 …… 32
表9　大沼下遺跡5号住居跡出土遺物観察表 …… 33
表10　大沼下遺跡6号住居跡出土遺物観察表 …… 35
表11　大沼下遺跡7号住居跡出土遺物観察表 …… 39
表12　大沼下遺跡8号住居跡出土遺物観察表 …… 43
表13　大沼下遺跡9号住居跡出土遺物観察表 …… 45
表14　大沼下遺跡11号住居跡出土遺物観察表 …… 46
表15　大沼下遺跡12号住居跡出土遺物観察表(1) …… 48
表16　大沼下遺跡12号住居跡出土遺物観察表(2) …… 49
表17　大沼下遺跡13号住居跡出土遺物観察表 …… 50
表18　大沼下遺跡14号住居跡出土遺物観察表 …… 53
表19　大沼下遺跡15号住居跡出土遺物観察表 …… 55
表20　大沼下遺跡16号住居跡出土遺物観察表 …… 57
表21　大沼下遺跡18号住居跡出土遺物観察表(1) …… 60
表22　大沼下遺跡18号住居跡出土遺物観察表(2) …… 61
表23　大沼下遺跡19号住居跡出土遺物観察表 …… 62
表24　大沼下遺跡1号溝出土遺物観察表 …… 63
表25　大沼下遺跡2号溝出土遺物観察表 …… 65
表26　大沼下遺跡3号溝出土遺物観察表 …… 66
表27　大沼下遺跡方形周溝遺構出土遺物観察表 …… 67
表28　大沼下遺跡3号土坑出土遺物観察表 …… 69
表29　大沼下遺跡15号土坑出土遺物観察表 …… 72
表30　大沼下遺跡遺構外出土遺物観察表 …… 74
表31　6号溝出土遺物観察表 …… 75
表32　13号溝出土遺物観察表(1) …… 85
表33　13号溝出土遺物観察表(2) …… 86
表34　13号溝出土遺物観察表(3) …… 87
表35　13号溝出土遺物観察表(4) …… 88
表36　13号溝木器観察表 …… 88

表37　1面遺構外出土遺物観察表(1) …… 97
表38　1面遺構外出土遺物観察表(2) …… 98
表39　1面遺構外出土遺物観察表(3) …… 99
表40　1面遺構外出土遺物観察表(4) …… 100
表41　1面遺構外出土木器観察表 …… 101
表42　7号ピット出土遺物観察表 …… 109
表43　A区1面水田出土遺物観察表 …… 111
表44　1面（As-B下）水田計測表 …… 115
表45　1号溝出土遺物観察表(1) …… 129
表46　1号溝出土遺物観察表(2) …… 130
表47　1号溝出土遺物観察表(3) …… 131
表48　1号溝出土遺物観察表(4) …… 132
表49　1号溝出土遺物観察表(5) …… 133
表50　11号溝出土遺物観察表 …… 134
表51　4号溝出土遺物観察表(1) …… 135
表52　4号溝出土遺物観察表(2) …… 136
表53　9号溝出土遺物観察表 …… 151
表54　9号溝木器観察表(1) …… 151
表55　9号溝木器観察表(2) …… 152
表56　9号溝木器観察表(3) …… 153
表57　16号溝出土遺物観察表 …… 156
表58　16号溝木器観察表(1) …… 156
表59　16号溝木器観察表(2) …… 157
表60　9・16号溝出土遺物観察表 …… 159
表61　9・16号溝木器観察表 …… 159
表62　23号溝出土遺物観察表 …… 161
表63　3面（洪水層下）水田計測表 …… 169
表64　A区4面水田出土遺物観察表 …… 174
表65　4面水田1号大畦木器観察表(1) …… 200
表66　4面水田1号大畦木器観察表(2) …… 201
表67　4面水田1号大畦木器観察表(3) …… 202
表68　4面水田1号大畦木器観察表(4) …… 203
表69　4面（As-C混土下）水田計測表(1) …… 211
表70　4面（As-C混土下）水田計測表(2) …… 212
表71　4面（As-C混土下）水田計測表(3) …… 213
表72　C・D区4面水田出土遺物観察表(1) …… 237
表73　C・D区4面水田出土遺物観察表(2) …… 238
表74　C・D区4面水田出土遺物観察表(3) …… 239
表75　C・D区4面水田木器観察表(1) …… 239
表76　C・D区4面水田木器観察表(2) …… 240
表77　C・D区4面水田木器観察表(3) …… 241
表78　C・D区4面水田木器観察表(4) …… 242
表79　C・D区4面水田木器観察表(5) …… 243
表80　C・D区4面水田木器観察表(6) …… 244
表81　C・D区4面水田木器観察表(7) …… 245
表82　C区3・4面遺構外出土遺物観察表(1) …… 250
表83　C区3・4面遺構外出土遺物観察表(2) …… 251
表84　C区3・4面遺構外出土遺物観察表(3) …… 252
表85　C区3・4面遺構外木器観察表 …… 252
表86　15号土坑出土遺物観察表 …… 254
表87　縄文時代遺構外出土遺物観察表(1) …… 258
表88　縄文時代遺構外出土遺物観察表(2) …… 259
表89　波志江中屋敷東遺跡における
　　火山ガラス比分析結果 …… 270
表90　波志江中屋敷東遺跡における
　　重鉱物組成分析結果 …… 270
表91　波志江中屋敷東遺跡における
　　テフラ検出分析結果(1) …… 271
表92　波志江中屋敷東遺跡における
　　テフラ検出分析結果(2) …… 272
表93　波志江中屋敷東遺跡における
　　屈折率測定結果(1) …… 273
表94　波志江中屋敷東遺跡における
　　屈折率測定結果(2) …… 274
表95　波志江中屋敷東遺跡第9・10地点における
　　プラント・オパール分析 …… 281
表96　波志江中屋敷東遺跡第8地点における
　　植物珪酸体分析 …… 282
表97　波志江中屋敷東遺跡第7地点における
　　植物珪酸体分析 …… 282
表98　波志江中屋敷東遺跡第13・14・15地点における
　　植物珪酸体分析 …… 283
表99　波志江中屋敷東遺跡第16・17地点における
　　植物珪酸体分析 …… 284
表100　波志江中屋敷東遺跡第13・14・15地点における
　　花粉分析結果(1) …… 294
表101　波志江中屋敷東遺跡第13・14・15地点における
　　花粉分析結果(2) …… 295
表102　波志江中屋敷東遺跡第13・14・15地点における
　　花粉分析結果(3) …… 296
表103　波志江中屋敷東遺跡第13・14・15地点における
　　花粉分析結果(4) …… 297
表104　波志江中屋敷東遺跡第8地点における
　　花粉分析結果 …… 299
表105　波志江中屋敷東遺跡第7地点における
　　花粉分析結果 …… 300
表106　大型植物化石一覧表(1) …… 305
表107　大型植物化石一覧表(2) …… 306
表108　波志江中宿遺跡の自然木 …… 307
表109　時期別の樹種同定結果 …… 310
表110　波志江中屋敷東遺跡
　　出土木材古墳時代前期の同定結果 …… 311
表111　近世の同定結果 …… 312
表112　出土木材の樹種同定試料と結果(1) …… 313
表113　出土木材の樹種同定試料と結果(2) …… 314
表114　出土木材の樹種同定試料と結果(3) …… 315
表115　出土木材の樹種同定試料と結果(4) …… 316
表116　出土木材の樹種同定試料と結果(5) …… 317
表117　出土木材の樹種同定試料と結果(6) …… 318
表118　出土木材の樹種同定試料と結果(7) …… 319
表119　出土木材の樹種同定試料と結果(8) …… 320
表120　出土木材の樹種同定試料と結果(9) …… 321

写真図版目次

ＰＬ１　大沼下遺跡全景（南西から）
　　大沼下遺跡全景（南西から）
ＰＬ２　大沼下遺跡１号住居全景（南から）
　　大沼下遺跡２号住居全景（西から）
ＰＬ３　大沼下遺跡３号住居全景（南から）
　　大沼下遺跡４号住居全景（西から）
ＰＬ４　大沼下遺跡４号住居カマド全景（西から）
　　大沼下遺跡４号住居カマド全景（北から）
　　大沼下遺跡４号住居遺物出土状況（北から）
　　大沼下遺跡５号住居カマド全景（西から）
　　大沼下遺跡５号住居全景（西から）
ＰＬ５　大沼下遺跡６号住居全景（南から）
　　大沼下遺跡７号住居全景（西から）
　　大沼下遺跡７号住居カマド全景（西から）
　　大沼下遺跡７号住居遺物出土状況（西から）
ＰＬ６　大沼下遺跡７号住居遺物出土状況
　　大沼下遺跡７号住居遺物出土状況（南から）
　　大沼下遺跡８号・９号・10号住居全景（西から）
　　大沼下遺跡８号住居遺物出土状況（北から）
　　大沼下遺跡９号住居カマド（東から）

PL 7　大沼下遺跡11号住居全景（北西から）
大沼下遺跡12号住居全景（南から）
PL 8　大沼下遺跡13号住居全景（西から）
大沼下遺跡13号住居セクションA－A′（南から）
大沼下遺跡13号住居カマド全景（西から）
大沼下遺跡13号住居カマド全景（西から）
大沼下遺跡13号住居カマド全景（北東から）
PL 9　大沼下遺跡14号住居全景（南から）
大沼下遺跡14号住居セクション（西から）
大沼下遺跡14号住居カマド（西から）
大沼下遺跡14号住居カマド（北から）
大沼下遺跡14号住居遺物出土状況
PL10　大沼下遺跡15号住居全景（西から）
大沼下遺跡16号住居全景（南から）
PL11　大沼下遺跡17号・18号住居全景（南東から）
大沼下遺跡17号住居セクション（南から）
大沼下遺跡18号住居セクション（東から）
大沼下遺跡19号住居全景（西から）
PL12　大沼下遺跡方形周溝遺構全景（南から）
大沼下遺跡方形周溝遺構南北セクション（東から）
大沼下遺跡方形周溝遺構南北セクション（東から）
大沼下遺跡方形周溝遺構セクションA－A′（南から）
大沼下遺跡方形周溝遺構セクションA－A′（南から）
PL13　大沼下遺跡1号・2号住居出土遺物
PL14　大沼下遺跡4号・5号・6号・7号住居出土遺物
PL15　大沼下遺跡7号・8号・9号住居3号土坑出土遺物
PL16　大沼下遺跡9号・11号・12号住居出土遺物
PL17　大沼下遺跡12号・13号・14号住居出土遺物
PL18　大沼下遺跡14号・15号・16号・18号住居出土遺物
PL19　大沼下遺跡18号・19号住居、1号・2号溝出土遺物
PL20　大沼下遺跡2号・3号溝出土遺物、遺構外出土遺物
PL21　6号溝全景（南から）
6号溝セクション（北から）
13号溝全景（北から）
13号溝遺物出土状況（南から）
13号溝木杭出土状況（西から）
13号溝セクションA－A′（南から）
PL22　2号土坑全景（南から）
2号土坑セクションA－A′（南から）
4号土坑全景（南から）
4号土坑セクションA－A′（南から）
5号土坑全景（西から）
6号土坑全景（西から）
8号土坑全景（南から）
8号土坑セクションA－A′（西から）
PL23　1面遺構外No86出土状況（西から）
1面水田No3出土状況（西から）
2号溝全景（北から）
2号溝セクションD－D′（南から）
2号・3号溝全景（南から）
3号溝セクションA－A′（南から）
3号溝セクションB－B′（南から）
3号溝セクションC－C′（南から）
PL24　4号溝北半全景（南から）
4号溝セクションA－A′（南から）
4号溝セクションD－D′（南から）
4号溝南半全景（南から）
4号溝セクションE－E′（北から）
4号溝遺物出土状況
PL25　5号溝全景（南から）
5号溝セクションA－A′（南から）
10号土坑全景（南から）
1号井戸全景（東から）
1号井戸セクション
9号土坑全景（北東から）
9号土坑セクションA－A′（南西から）
PL26　11号土坑全景（北東から）
11号土坑セクション（南から）
7号ピット全景（南から）
7号ピットセクション（南から）
C区1面（As-B下）水田全景（北上空から）
C区1面（As-B下）水田全景（東から）
C区1面（As-B下）水田全景（南西上空から）
PL27　D1区1面（As-B下）水田全景（西上空から）
D1区1面（As-B下）水田全景（南から）
D1区1面（As-B下）水田畦畔・水口（西から）
D2区1面（As-B下）水田全景（北東上空から）
D2区1面（As-B下）水田全景（東から）
D2区1面（As-B下）水田全景（北西上空から）
D2区1面（As-B下）水田全景（北から）
PL28　1号・11号溝全景（西から）
1号溝全景（東から）
1号溝セクションA－A′（西から）
1号溝セクションB－B′（北西から）
1号溝セクションC－C′（西から）
1号溝セクションD－D′（東から）
PL29　1号溝全景（東から）
1号溝全景（西から）
1号溝遺物出土状況（西から）
1号溝遺物出土状況（西から）
1号溝No17出土状況（北西から）
1号溝No54出土状況（西から）
PL30　1号溝No75出土状況（南から）
1号溝遺物出土状況
1号溝遺物出土状況
1号溝遺物出土状況
1号溝遺物出土状況
1号溝遺物出土状況
1号溝遺物出土状況
1号溝遺物出土状況
PL31　1号溝遺物出土状況
1号溝遺物出土状況
1号溝No111出土状況
7号溝セクション（北から）
8号溝全景（北から）
8号溝セクションA－A′（北から）
8号溝1号水口（西から）
8号溝2号水口（西から）
PL32　7号溝全景（南から）
30号溝全景（南から）
8号・18号溝全景（南から）
9号・16号溝全景（南から）
9号溝全景（北から）
PL33　9号・16号溝分岐付近（北から）
9号・16号溝セクションA－A′（南から）
9号・16号溝セクションC－C′（南から）
9号・16号溝セクション（南から）
9号・16号溝セクションD－D′（東から）
9号・16号溝セクション（南から）
9号溝No2出土状況
PL34　9号溝遺物出土状況（東から）
9号溝遺物出土状況（東から）
9号溝No23出土状況（南西から）
9号溝No24出土状況
9号溝No25出土状況（南から）
16号溝No42出土状況（東から）
16号溝No49、No57出土状況

PL35　16号溝№45出土状況
16号溝№50出土状況（北から）
9・16号溝遺物出土状況
9・16号溝遺物出土状況（南から）
9・16号溝№64出土状況
9・16号溝№65出土状況（西から）
20号・21号・22号溝全景（南から）
20号溝セクションE－E'（南から）
PL36　20号・21号・22号溝全景（北から）
21号溝セクションB－B'（南から）
22号溝セクションC－C'（南から）
24号溝セクションH－H'（南から）
25号溝セクションF－F'（東から）
17号土坑全景（北西から）
16号土坑全景（北から）
16号土坑セクションA－A'（西から）
PL37　1号ピット全景（南から）
1号ピットセクションA－A'（南から）
6号ピット全景（東から）
6号ピットセクション（東から）
C区3面水田東部分（北から）
PL38　C区4面水田1号大畦調査風景（西から）
C区3面水田全景（西から）
PL39　D1区3面水田（東から）
D1区3面水田西部（南から）
PL40　D2区3面水田全景（東から）
A区4面水田全景（東から）
PL41　C区4面水田1号大畦（東から）
C区4面水田1号大畦№18出土状況（南から）
PL42　C区4面水田1号大畦№44出土状況（南から）
C区4面水田1号大畦№51出土状況
C区4面水田1号大畦№45出土状況（東から）
C区4面水田№58出土状況
C区4面水田№59出土状況（東から）
PL43　C区4面水田調査風景（南から）
C区4面水田西隅部（北から）
PL44　C区4面水田№66出土状況（東から）
C区4面水田№75出土状況（西から）
C区4面水田遺物出土状況（西から）
C区4面水田№79出土状況（西から）
C区4面水田№92出土状況
C区4面水田№93出土状況
C区4面水田№94出土状況（東から）
PL45　C区4面水田№120出土状況（東から）
C区4面水田№123出土状況（東から）
13号土坑全景（南東から）
13号土坑セクションA－A'（南から）
15号土坑全景（東から）
15号土坑セクションA－A'（南から）
21号土坑全景（南から）
21号土坑全景（西から）
PL46　B区5面全景（南西から）
C区旧石器試掘トレンチ設定状況（北から）
C区旧石器試掘トレンチ140-370Gセクション（西から）
C区旧石器試掘トレンチ120-370Gセクション（南西から）
PL47　6号・13号溝出土遺物(1)
PL48　13号溝出土遺物(2)
PL49　13号溝出土遺物(3)、1面遺構外出土遺物(1)
PL50　1面遺構外出土遺物(2)
PL51　1面遺構外出土遺物(3)
PL52　4号溝、7号ピット、1面水田、1号溝出土遺物(1)
PL53　1号溝出土遺物(2)
PL54　1号溝出土遺物(3)
PL55　1号溝出土遺物(4)
PL56　1号溝出土遺物(5)
PL57　1号溝出土遺物(6)
PL58　1号溝出土遺物(7)、11号溝、9号溝出土遺物(1)
PL59　9号溝出土遺物(2)
PL60　9号溝出土遺物(3)
PL61　9号溝出土遺物(4)
PL62　9号溝出土遺物(5)、16号溝出土遺物(1)
PL63　16号溝出土遺物(2)
PL64　16号溝出土遺物(3)、9・16号溝出土遺物(1)
PL65　9・16号溝出土遺物(2)、23号溝、
A区4面水田出土遺物(1)
PL66　A区4面水田出土遺物(2)、
C区4面水田1号大畦出土遺物(1)
PL67　C区4面水田1号大畦出土遺物(2)
PL68　C区4面水田1号大畦出土遺物(3)
PL69　C区4面水田1号大畦出土遺物(4)
PL70　C区4面水田1号大畦出土遺物(5)
PL71　C区4面水田1号大畦出土遺物(6)
PL72　C区4面水田1号大畦出土遺物(7)
PL73　C区4面水田1号大畦出土遺物(8)
PL74　C区4面水田1号大畦出土遺物(9)
PL75　C区4面水田1号大畦出土遺物(10)
PL76　C区4面水田1号大畦出土遺物(11)、
C・D区4面水田出土遺物(1)
PL77　C・D区4面水田出土遺物(2)
PL78　C・D区4面水田出土遺物(3)
PL79　C・D区4面水田出土遺物(4)
PL80　C・D区4面水田出土遺物(5)
PL81　C・D区4面水田出土遺物(6)
PL82　C・D区4面水田出土遺物(7)
PL83　C・D区4面水田出土遺物(8)
PL84　C・D区4面水田出土遺物(9)
PL85　C・D区4面水田出土遺物(10)
PL86　C・D区4面水田出土遺物(11)
PL87　C・D区4面水田出土遺物(12)
PL88　C・D区4面水田出土遺物(13)
PL89　C・D区4面水田出土遺物(14)
PL90　C区3・4面遺構外出土遺物(1)
PL91　C区3・4面遺構外出土遺物(2)、15号土坑、
縄文時代遺構外出土遺物(1)
PL92　縄文時代遺構外出土遺物(2)
PL93　第9・10地点のプラントオパール
PL94　第8地点のプラントオパール
PL95　第13・14地点のプラントオパール(1)
PL96　第13・14地点のプラントオパール(2)
PL97　第16～19地点のプラントオパール
PL98　波志江中屋敷東遺跡の花粉・胞子遺体（第13～15地点）
PL99　波志江中屋敷東遺跡の花粉・胞子遺体（第8地点）
PL100　波志江中屋敷東遺跡の花粉・胞子遺体（第7地点）
PL101　出土した大型植物化石（種実）(1)
PL102　出土した大型植物化石（種実）(2)
PL103　出土木材組織顕微鏡写真(1)
PL104　出土木材組織顕微鏡写真(2)
PL105　出土木材組織顕微鏡写真(3)
PL106　出土木材組織顕微鏡写真(4)
PL107　出土木材組織顕微鏡写真(5)
PL108　出土木材組織顕微鏡写真(6)
PL109　出土木材組織顕微鏡写真(7)
PL110　出土木材組織顕微鏡写真(8)
PL111　出土木材組織顕微鏡写真(9)
PL112　出土木材組織顕微鏡写真(10)

第１図　波志江中屋敷東遺跡の位置図（1：200,000図使用）

第１章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至る経緯

北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域埋蔵文化財発掘調査事業は、高崎市上滝町（高崎ジャンクション）から伊勢崎市三和町（伊勢崎インター）の間、延長14.9kmの路線内に所在する遺跡を対象とする。平成７年度の全体計画では、遺跡数は35遺跡、総面積687,429㎡であった。

事業着手に先立ち、県教育委員会文化スポーツ部文化財保護課、県土木部道路建設課高速道路対策室、原因者である日本道路公団東京第二建設局により協議が行われ、その結果、本線部分の発掘調査については財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施することに決定した。

平成７年６月、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団により最初本格的発掘調査が高崎市上滝町において着手され、以後、用地取得、工事計画に基づく道路公団と群馬県教育委員会との協議に従って進められた。事業区間内全体の進行は、高崎市所在遺跡を皮切りに、平成８年１月に前橋市所在遺跡、平成８年３月に伊勢崎市所在遺跡と続くが、波志江中屋敷東遺跡の発掘着手は平成10年２月であった。

発掘調査に先立ち、群馬県教育委員会文化財保護課が平成８年７月31日から８月５日、及び平成８年11月７日から11日にかけて波志江地区の試掘調査を実施した。本遺跡では全体公用地化されていたため、中屋敷集落東端の市道から比高３ｍの伊勢山遺跡ののる台地西端部までの間（Ａ～Ｄ区約410ｍ区間）で実施された。試掘の結果はこの区間は全体に低地地形にあって大方浅間Ｃ層より上層は削除され、客土が及んでいる状況であったが、遺跡の西部（Ａ区）の一部で浅間Ｂ層下に水田の存在が確認された。また、東部（Ｄ区）はシルト、砂層による水成層、下層は泥炭質層がみとめられ、湿地、もしくは沼地と予想された。

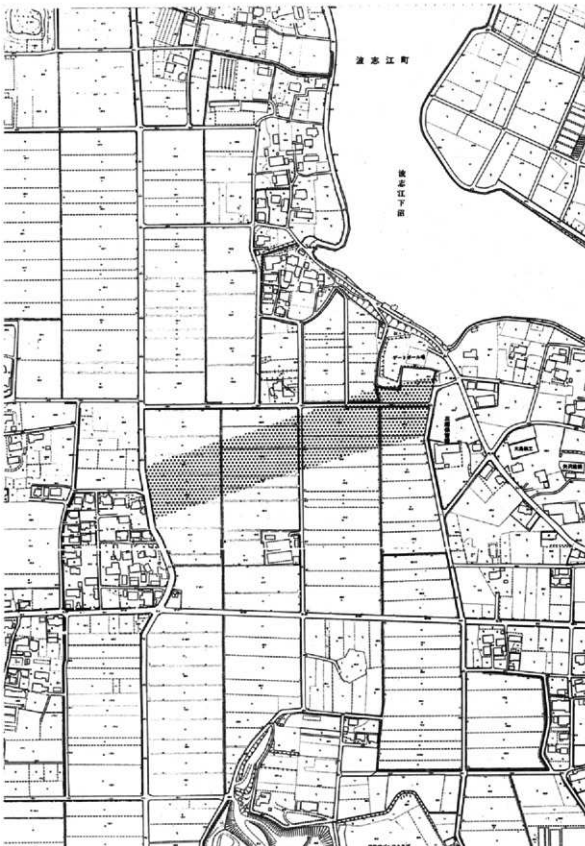
本調査は、試掘の結果に基づき、Ａ区を中心とする5,800㎡を対象区域として平成10年２月９日から着手した。ただし調査の当初は、Ａ区以東の遺跡の範囲確認のため、Ｂ区において、調査事務所用地の整地用に表土が除去された面で遺構確認作業を進めた。この調査の過程でＢ区東端において小範囲のローム台地が確認され、古墳時代の溝の存在も認められ、同様の状況がさらに東のＣ区に伸びることから、引き続きＣ区以東の範囲確認調査を実施するところとなり、最終的には調査対象地はＤ区まで広がり、伊勢山遺跡の台地端までの路線区間全域に及ぶこととなった。本調査は平成10年度に継続され、工事工程上水路・道路ボックス構造物の着工が急がれるＣ区、Ｄ区を優先に進められた。

第２節　発掘調査の方法

(1)　表土掘削には、調査の効率を図るため、掘削機械を利用した。

(2)　グリッドの設定は、日本平面直角座標（国家座標）を基準に５ｍ方眼を設定した。

基準点のＸ軸Ｘ＝39200，Ｙ軸Ｙ＝－57200を基準にし、100ｍピッチ杭をＸ及びＹ軸の座標値を全桁で表示し、他の並杭を下３桁のＸ及びＹ軸の座標値で表示した。グリッドの名称は、南東隅を起点にし、下３桁のＸ及びＹ軸の座標値で表現した。また、調査区は便宜的に水路や道路で区切られた区画で、西からＡ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ１区・Ｄ２区と名称をつけた。



第２図　波志江中屋敷東遺跡の調査区設定図（伊勢崎市現況図使用）１：5,000図使用

(3) 遺構名称は、種別ごとに通し番号を付した。遺物の取り上げに際しては、遺構単位、グリッド単位、調査面単位を基本とした。

(4) 遺物の注記は遺跡略号（ＫＴ-240）・調査面・遺構名またはグリッド名・層位を書き込んだ。

(5) 遺構等の測量は、平面図は平板測量で一部簡易やり方測量を併用し、1/20・1/40・1/100・1/200縮尺図を作成した。断面図は1/20縮尺図を作成した。

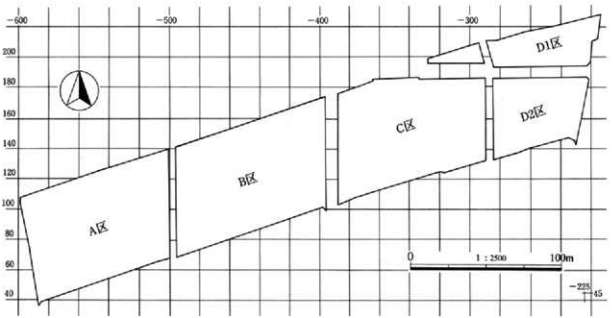
(6) 作成された遺構実測図には、遺跡名・遺跡略号・実測図名・縮尺・実測者名・レベル高・ベンチマークの高さ・作成年月日を記入し、１枚ごとに通し番号を付し、台帳を作成した。

(7) 写真撮影には、中型カメラと小型カメラのモノクロとリバーサルフィルムを使用した。撮影対象に応じて、高所作業車を使用し、またラジコンヘリコプターによる写真撮影を行った。撮影データーは、カードに記入した。カードは撮影対象を撮影する前に撮影することを基本とした。

(8) 撮影したフィルムは現像処理し、モノクロはベタ焼きをおこなった。ベタ焼きはネガ検索台紙に調査面、遺構ごとに貼り付け、撮影対象・撮影方向・撮影日・フィルム番号を記録した。リバーサルフィルムはコマごとに遺跡名・遺跡略号・撮影対象・撮影方向・撮影日を記入し、コマごとに通し番号を付し、台帳を作成した。

(9) 本遺跡の調査では、自然科学分析を株式会社古環境研究所と株式会社パレオ・ラボに委託し、分析結果を第４章に掲載した。自然科学分析は、テフラ分析、プラントオパール分析、花粉分析、樹種同定、種実同定の５項目である。

(10) 出土した遺物のうち木器・木製品の一部は財団法人元興寺文化財研究所保存科学センターと株式会社東都文化財保存研究所に保存処理を委託した。保存処理はＰＥＧ含浸法と脂肪酸エステル法で実施した。また残った木器・木製品も財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団保存処理室でＰＥＧ含浸法を中心とした処理方法で保存処理を行う予定である。木器・木製品および一部の自然木はプレパラートを採取し、保存している。



第３図　波志江中屋敷東遺跡のグリッド設定図

第３節　発掘調査の経過

発掘調査は、平成９年度の２ヶ月間と平成10年度の１年間の計14ヶ月間行われた。その結果、後述する各期の遺構・遺物を確認した。発掘調査は、主に西側のＡ区・Ｂ区から行い、順次東側に進む計画で実施された。Ｃ区・Ｄ区にまたがる低地では、As-Ｂ下水田（第１面）、洪水層下水田（第３面）とその基底面の水田（第４面）が確認され、現地表面から２ｍ以上の深さのため安全対策と浦水対策に苦慮しながら調査を進めた。また洪水層下水田の基底面調査時に水田およびその畦畔から大量の建築部材や農具等の生活用具が出土し、発掘調査は難航した。一時的に調査班を増班して、発掘調査を行った。発掘調査も終盤をむかえた最終面の確認調査でＡ区・Ｂ区の河川性の堆積物（XI'層）下で黒色粘質土（XII層）を確認した。XII層上面で自然木が横たわった状態の中で21号土坑を確認した。さらにXII層より下層の確認調査を行ったが、遺構・遺物は確認できず、埋め戻しを行い、平成10年度末で発掘調査を終了した。

発掘調査日誌の抄録を掲載するので、発掘調査の経過として参照していただきたい。

調査日誌抄録

平成９年度調査（平成10年２月１日～３月31日）

・10年２月２日（月）　関・玉嶋・茂木で調査を担当。
　　９日（月）　下堤旧越流遺跡より引っ越し。荷物整理。
　　10日（火）　Ａ区南西部より調査開始。トレンチ調査で土層確認。トレンチはＡ区東・西・南壁際に設定。
　　12日（木）　Ｂ区グリッド調査開始。バリケード設置。
　　16日（月）　Ａ区 As-Ｂ下（第１面）調査開始。重機で As-Ｂまで掘削。
　３月５日（木）　Ｃ区重機によるトレンチ調査開始。
　　９日（月）　Ｂ区東端のローム台地遺構確認。
　　10日（火）　Ｂ区１号溝調査開始。１号土坑調査終了。
　　17日（火）　Ａ区グリッド・水準点杭打ち。Ｂ区１号溝遺物取り上げ、平面図、写真撮影。
　　31日（火）　平成９年度調査終了。

平成10年度調査（平成10年４月１日～平成11年３月31日）

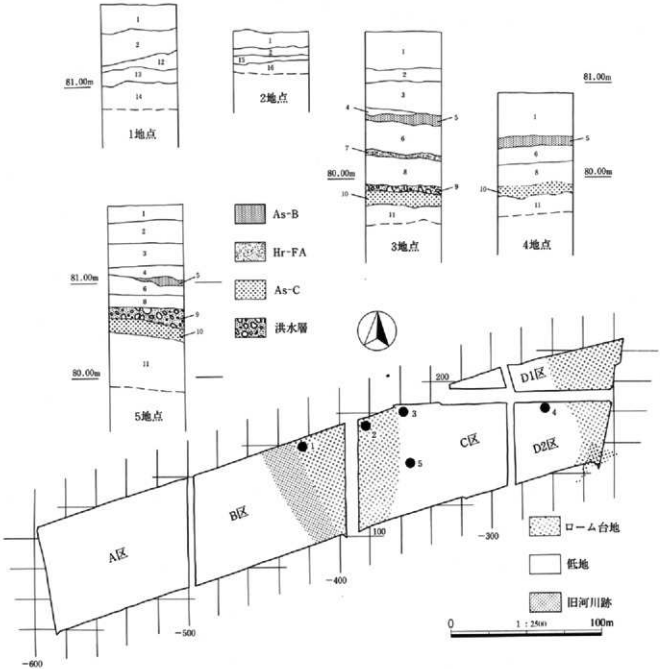
・10年４月１日（水）　関・井上・佐藤で調査を担当。
　　16日（木）　Ｃ区重機による表土掘削。
　　22日（水）　Ｃ区遺構面精査。
　５月１日（金）　Ｃ区 As-Ｂ下（第１面）水田検出作業。
　　６日（水）　Ｄ２区南・東壁際トレンチ掘削開始。
　　11日（月）　Ｄ１区調査区の設定。
　　14日（木）　Ｃ区グリッド・水準点設置。
　６月１日（月）　Ｃ区 As-Ｂ下（第１面）水田全景を高所作業車で写真撮影。
　　８日（月）　Ｃ区北東調査区 Hr-FA（第２面）掘削。Ｄ１区表土掘削。
　　９日（火）　Ｄ１区 As-Ｂ下（第１面）水田調査。
　　12日（金）　Ｄ１区全体図作成。杭打ち。
　　16日（火）　Ｃ区 As-Ｃ混土下（第４面）調査のため掘削。Ｄ１区高所作業車で As-Ｂ下（第１面）水田全景写真撮影。
　　18日（木）　Ｃ区 As-Ｃ混土下（第４面）より木製品出土。Ｄ２区残土をＢ区に移動開始。
　　22日（月）　前日からの雨で、Ｂ区南半分とＣ区東半分水没。
　　25日（木）　Ｄ１区 As-Ｃ混土下（第４面）調査のため重機による掘削。
　　26日（金）　Ｄ１区 As-Ｃ混下（第４面）水田調査開始。
　７月２日（木）　Ｄ１区 As-Ｃ混下（第４面）水田全景写真撮影。
　　３日（金）　Ｄ１区 As-Ｃ混下（第４面）水田平面図作成。
　　７日（火）　Ｄ２区 As-Ｂ下（第１面）調査。重機による掘削開始。
　　８日（水）　Ｄ１区 As-Ｃ混下（第４面）水田空撮。
　　21日（火）　Ｄ１区 As-Ｃ混下（第４面）水田の木製品取り上げ。
　　22日（水）　Ｃ区北側洪水層下（第３面）水田精査。水口の写真撮影。
　　27日（月）　Ｄ１区低地確認調査のため重機による掘削開始。
　　29日（水）　Ｃ区 As-Ｃ混下（第４面）水田の１号大畦・作業風景を高所作業車で撮影。
　８月３日（月）　Ｄ２区 As-Ｂ下（第１面）調査。現代溝調査。Ｃ区（第４面）水田１号大畦実測・写真撮影。
　　６日（木）　宮本長二郎氏来跡。As-Ｃ混下（第４面）水田出土の木製品について指導を受ける。
　　19日（水）　Ｃ区 As-Ｃ混下（第４面）水田調査開始。Ｄ１区低地確認調査終了。

24日（月）　Ｄ２区 As-B 下（第１面）水田調査。
25日（火）　Ｄ１区埋め戻し。
31日（月）　１班増班の調査体制。関・井上・佐藤・新倉・伊平・久保で調査を担当。
９月７日（月）　Ｄ１区ローム台地部分重機による表土掘削。
９日（水）　Ｄ１区ローム台地精査。
10日（木）　Ｄ１区高所作業車でローム台地全景写真。
12日（土）　Ｄ１区埋め戻し。
14日（月）　Ｃ区 As-C 混下（第４面）空撮準備。
15日（火）　台風５号襲撃。
19日（土）　Ｃ区を中心に現地説明会。見学者402名。
22日（火）　Ｄ１区調査終了。明け渡し。
24日（木）　Ａ区 As-B 下（第１面）調査。Ｃ区 As-C 混下（第４面）水田１号大畦全景写真。
25日（金）　Ｃ区 As-C 混下（第４面）水田１号大畦の木材取り上げ。
29日（火）　Ｄ２区 Hr-FA 下（第２面）調査。
30日（水）　Ｄ２区 Hr-FA 下（第２面）全景写真。
10月２日（金）　Ｄ２区 As-C 混下（第４面）調査のため重機で掘削。
７日（水）　Ｄ２区 As-C 混下（第４面）水田確認・調査。
15日（木）　Ｄ２区 As-C 混下（第４面）水田全景写真撮影。Ｂ区東30m試掘調査。
19日（月）　Ｄ２区低地確認調査。
22日（木）　Ｃ区低地確認調査。Ｄ２区ローム台地旧石器試掘調査（台地部）。
11月２日（月）　Ｃ区北側道部表土掘削。
４日（水）　Ｃ区側溝部 As-B 下（第１面）水田確認。
５日（木）　Ｃ区ローム台地旧石器試掘調査。
10日（火）　Ａ区北側道部表土掘削。
18日（木）　Ｃ・Ｄ２区確認調査空撮。
25日（水）　Ｄ２区道下表土掘削。
27日（金）　Ｂ区旧石器試掘調査。
30日（月）　Ｂ区北側道部埋め戻し。
12月１日（火）　Ｃ区縄文包含層調査。
３日（木）　桂雄三氏来跡。Ｃ区洪水層の成因について指導を受ける。（～４日）
11日（金）　Ａ区北側道部 As-B 下（第１面）水田確認。
18日（金）　Ａ区 As-B 下（第１面）水田空撮。
・11年１月６日（木）　Ａ区 As-C 混土下（第４面）掘削開始。
７日（木）　Ｂ区東30m・Ｃ区東半分・Ｄ２区明け渡し。Ａ区 As-C 混下（第４面）水田調査開始。
18日（月）　Ｂ区西側から As-B 下（第１面）調査のため表土掘削開始。
19日（火）　Ａ区西40m As-C 混下（第４面）水田を高所作業車で写真撮影。
25日（月）　Ｃ区明け渡し。
26日（火）　宮本長二郎氏来跡。木製品について指導を受ける。
２月８日（月）　１班減班の調査体制。調査担当は関・井上・佐藤の体制。
12日（金）　Ｂ区西70m確認調査。掘削開始。
15日（月）　Ａ区西40m埋め戻し。Ｂ区西70m確認調査で遺構確認。第５面調査とする。
17日（水）　Ａ区西40m明け渡し。
３月11日（木）　Ｂ区西70m確認調査終了。
12日（金）　Ｂ区埋め戻し開始。
17日（水）　伊勢屋ふじ子氏来跡。地形について指導を受ける。
19日（金）　Ａ区埋め戻し開始。
31日（水）　調査終了。

第４節　基本層序

波志江中屋敷東遺跡は、Ｂ区からＣ区にかけてはローム台地である。このローム台地を挟んで東西に低地を有する。西側の低地はＡ区・Ｂ区で、西隣の波志江中屋敷遺跡のローム台地へとつながる。東の低地はＣ区・Ｄ区と続き、Ｄ区の東端で、伊勢山遺跡に続くローム台地がわずかに確認できる。

第４図は第１地点から第５地点までの土層柱状図とその作成位置を示した。第５図は、第１地点から第５地点の土層観察、他の地点の土層観察や遺構調査所見をもとに西低地（Ａ区・Ｂ区低地）、東低地（Ｃ区・Ｄ区低地）の基本土層を模式図にしたものである。



第４図　土層柱状図・土層柱状図作成位置図

Ⅰ層は現代の畑や水田の耕作土及び昭和52年頃の土地改良事業による盛り土である。低地部ではⅠ層の盛土が黄褐色土、いわゆるローム層であるところが観察された。おそらく周辺のローム台地を削った土の可能性が考えられる。またこの盛土の下に土地改良以前の耕作土が確認された所もある。土地改良以前の耕作土には、白色の軽石が含まれる。この白色軽石はAs-Aと考えられる。さらに部分的であるが、As-Aを多く含む土がみられ、近世の耕作土の可能性が考えられる。土地改良以前と以後の耕作土、土地改良時の盛土、近世の耕作土の可能性のある土をⅠ層とした。層厚は30㎝～80㎝であった。調査区全域にみられる。

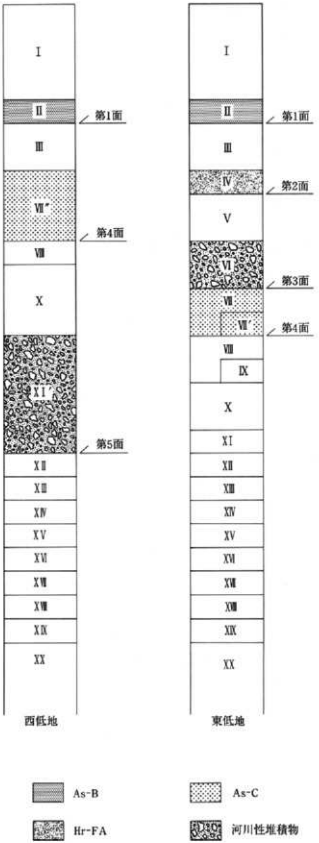
Ⅱ層はAs-Bで上部に部分的ではあるが、あずき色のアッシュがみられる。A区とC・D区の低地で確認された。10㎝程の厚さである。この層の直下を第１面として発掘調査をおこなった。

Ⅲ層は黒色粘質土でAs-B下水田の耕作土である。15～20㎝程の厚さである。Hr-FAを混在する。この層はC・D区の低地部とA区で確認された。

Ⅳ層はHr-FAで２㎝程の厚さである。C・D区の低地のみで確認された。この層の直下を第２面として発掘調査をおこなった。遺構は確認できなかった。

Ⅴ層は泥炭質黒色土で粘性が強く、腐植物を含む。25～30㎝程の厚さである。C・D区の低地のみで確認された。

Ⅵ層は洪水層で、砂礫層である。C・D区の低地のみで確認された。西側が厚く、東に行くにしたがい薄くなる。厚い所では80㎝程である。西側に大きい礫が多く、東になるにしたがい礫の量や大きさが小さくなる。この層の直下を第３面として発掘調査をおこなった。



第５図　基本土層模式図

Ⅶ層は黒色土で粘性が強い。As-Cを含む。

Ⅶ″層はAs-C、Hr-FAを含む層で、As-B下水田まで連続して耕作していたものと思われる。Ⅶ″層はA区のみで確認できた。Ⅶ″層はAs-Cで他の混入物は少なく、畦畔の中にブロック状に含まれる。Ⅶ層・Ⅶ′層およびⅦ″層直下を第４面として発掘調査を行った。第３面で確認した水田の基底部を確認した。Ⅶ″層下もほぼ同じ時期の水田基底部と考える。

Ⅷ層は黒色土で粘質である。As-Cは含まない。20cm程の厚さである。

Ⅸ層は泥炭質茶褐色土でAs-Cは含まない。20cm程の厚さである。C区のローム台地東側の低地部とローム台地の変換点付近のみで確認された。縄文時代前期の遺物が包含されていた。

Ⅹ層は暗褐色土で泥炭質から漸移的にシルト質土に変化している。

XI層は黄白色細粒シルト。XI′層はA・B区のみで河川性の堆積物が砂・礫・シルト質土が互層をなしている。この層の直下を第５面としてB区で発掘調査を行った。この層は厚い所では１m近くに達する。

XII層は黒色粘質土で１cm前後の白色の軽石が含まれている。この軽石は自然科学分析により浅間藤岡軽石（As-Fo）と同定されている。さらにこの層の上部で鬼界アカホヤ火山灰が検出されている。XI′層は鬼界アカホヤ火山灰降下後ということになる。

XIII層は黒色泥炭質土で植物の腐植が多い。

XIV層は黒色粘質土で浅間総社軽石（As-Sj）を含む。

XV層は黒色泥炭質土で植物の腐植が多い。

XVI層は淡褐色砂質土でAs-YPの再堆積土の可能性がある。

XVII層は黄白色細粒シルト。

XVIII層は淡褐色砂質土でAs-YPの一次堆積。

XIX層は淡褐色粘質土。

XX層は灰緑色砂質土。

第４図土層注

１：現代の耕作土（基本土層Ⅰ層）
２：土地改良時の盛土（基本土層Ⅰ層）
３：土地改良以前の耕作土、白色軽石（As-A）少量含む（基本土層Ⅰ層）
４：土地改良以前の耕作土、近世の耕作土の可能性。３より白色軽石（As-A）を多く含む（基本土層Ⅰ層）
５：As-Bで、部分的にアッシュが確認できる（基本土層Ⅱ層）
６：黒色粘質土、As-B下（１面）水田の耕作土（基本土層Ⅲ層）
７：Hr-FA（基本土層Ⅳ層）
８：泥炭質黒色土で部分的に砂質である。腐植物を含む（基本土層Ⅴ層）
９：洪水層（基本土層Ⅵ層）
10：As-Cを含む黒色土で、洪水層下（第３面）水田耕作土（基本土層Ⅶ層）
11：黒色粘質土でAs-Cを含まない（基本土層Ⅶ層）
12：泥炭質茶褐色土で、少量のローム粒を含む（基本土層Ⅸ層）
13：暗褐色土で泥炭質から漸移的にシルト質に変化している（基本土層Ⅹ層）
14：褐色シルト質土（基本土層XI′層）
15：ハードローム層
16：暗色帯

第2章　立地と周辺の遺跡

第1節　遺跡の立地

波志江中屋敷東遺跡のある群馬県伊勢崎市は、群馬県の南部で、利根川を境にして埼玉県本庄市と接する。伊勢崎市は関東平野の北西部に位置し、北に赤城山、北東に足尾山地、北西に榛名山を望む利根川流域に広がる沖積平野から赤城山南麓にかけて位置する。伊勢崎市の地形は、関東平野の一角である低平な台地（伊勢崎台地）と沖積地、赤城山南麓の斜面台地からなる。市の南西部の北西から南東に利根川が流れ、中央部を広瀬川が北西から南東に流れ利根川に注ぐ。さらに市の北部は赤城山から小河川（神沢川、桂川、鮎川）が南北に流れ広瀬川に注ぐ。この小河川により開析され、平坦の中にも起伏に富んだ地形が作られている。

波志江中屋敷東遺跡は、伊勢崎市の北部の波志江町に所在し、市街地から北に約5㎞のところに位置する。波志江中屋敷東遺跡の所在する波志江町は、北から西が前橋市と、北から東が赤堀町と接する。赤城山の斜面台地から伊勢崎台地に変わる伊勢崎台地上で、ローム台地、微高地、低地と南北に細長く入り組んだ地形である。東側のローム台地は波志江西宿遺跡・伊勢山遺跡に続き、この台地は赤城山斜面台地である。低地は波志江中屋敷東遺跡から北に200ｍ程の所に波志江下沼が、さらに北に波志江上沼がある。波志江沼は中世以降に堰堤が築かれ、農業用の灌漑施設として利用されたものと思われる。波志江下沼・波志江上沼は低地の谷頭にあたると思われる。波志江中屋敷東遺跡の標高は80ｍ～82ｍである。

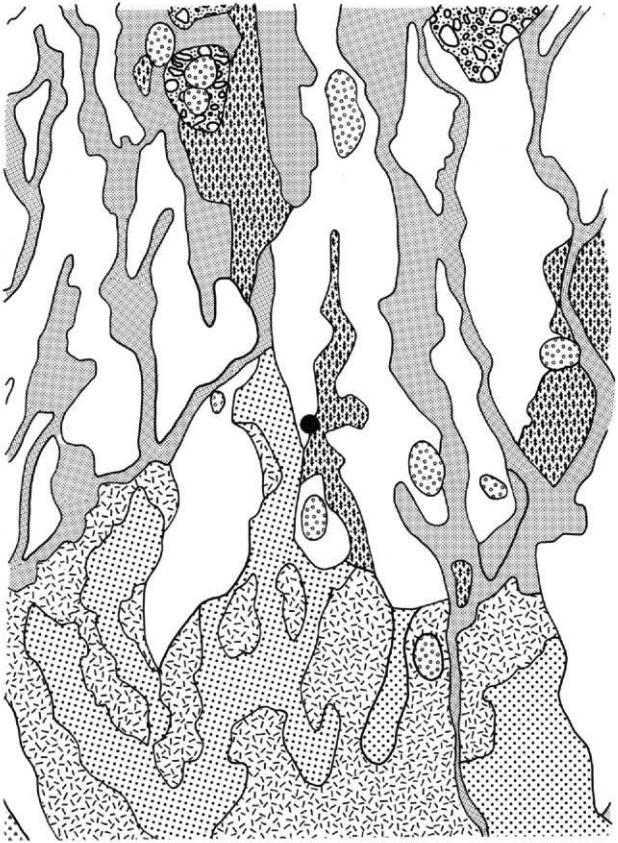
現在この地に北関東自動車道が建設され、昭和60年代前半に上武道路が建設された。また昭和50年代から60年代にかけて伊勢崎市北部から前橋市荒砥地区、赤堀町下触周辺地区で大規模な土地改良事業が実施された。土地改良事業で台地は削られ、低地は埋められ、現在のような平坦な景観になった。

第2節　周辺の遺跡

波志江中屋敷東遺跡は縄文時代前期から近世までの複合遺跡である。確認された遺構は、水田跡を中心とした生産跡である。住居・墓跡の集落に関係した遺構は確認されていない。

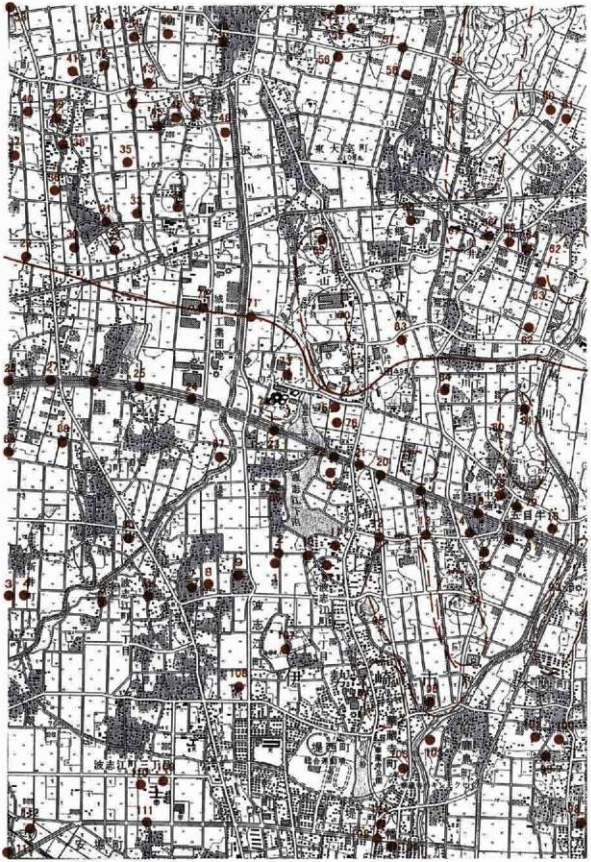
波志江中屋敷東遺跡を中心とした伊勢崎市・前橋市・赤堀町の赤城山南麓地域の遺跡の概要をまとめたものが「周辺遺跡一覧表」である。各時代の周辺の遺跡の概要を記す。なお遺跡名の番号は第7図と「周辺遺跡一覧表」と同一番号である。

旧石器時代にとってこの赤城山南麓地域は岩宿遺跡の発見に象徴されるように、旧石器時代研究にとって重要な地域である。岩宿遺跡の発掘調査にかかわった相沢忠洋氏により1948年伊勢崎市豊城町の権現山遺跡が調査され、岩宿遺跡より古いとされる石器が出土したことで著名である。石器は関東ローム層の八崎軽石層（Hr-HP）下で確認され、現在のところ、赤城南麓の地域では最も古いものである。石器の形態は洋ナシ型握斧といわゆる斜軸尖頭器で全国的にも類似する資料はみられない。1967年相沢氏は赤堀町の石山遺跡(69)で発掘調査を行い、旧石器時代末期から縄文時代初めの石器を確認している。このように相沢氏の勢力的な旧石器時代研究で、赤城山南麓地域は旧石器時代研究の上で先進的な地域であった。しかし、1982年の下触牛伏遺跡(73)の調査まで旧石器時代研究は低迷した。下触牛伏遺跡は石山遺跡の南で、調査区全域が発



「群馬県史」通史編1より作成
(1:25,000)

第6図　波志江中屋敷東遺跡周辺地形分類図



第7図　波志江中屋敷東遺跡周辺遺跡図（国土地理院「伊勢崎」1：25,000図使用）

掘調査され、２層の文化層が確認された。出土した石器が径50ｍほどの範囲に分布して出土することから「環状ブロック」「環状ユニット」と呼ばれ、旧石器時代のムラの姿を想起することができる。ほぼ同じ頃上武道路建設に伴う発掘調査が行われ、書上本山遺跡（伊勢崎市）、堀下八幡遺跡(19)、波志江六反田遺跡、飯土井二本松遺跡（24）、飯土井中央遺跡(25)から旧石器時代の遺物が出土し資料が増加した。近年北関東自動車道建設に伴う調査で伊勢山遺跡(10)、波志江西宿遺跡(11)、波志江中宿遺跡(12)で２層の文化層が確認された。伊勢山遺跡・波志江西宿遺跡は波志江中屋敷東遺跡の東端から続くローム台地上である。

縄文時代の遺跡は扇状地形や伊勢崎台地上に分布している。草創期から早期の遺跡は、草創期の竪穴住居が確認された五目牛新田遺跡(13)、早期の竪穴住居が確認された波志江中屋敷遺跡（９）、五目牛新田遺跡があげられる。波志江中屋敷遺跡は撚糸文の稲荷台式の住居である。また包含層から押形文土器（楕円文と山形文）が出土している。前期の花積下層式の竪穴住居がみつかった上武道路の五目牛清水田遺跡(17)・五目牛南組遺跡(18)などがあげられる。さらに、包含層出土遺物など前期になると出土遺跡が多くみられるようになる。さらに中期～後期の遺物や遺構が確認された遺跡が多くなる。前期～後期前半の集落である荒砥二之堰遺跡(87)は35軒の竪穴住居が確認されている。後期は９軒の住居が確認され、９軒とも柄鏡形住居である。波志江中野面遺跡（５）は中期の加曽利Ｅ式の住居が８軒確認されている。埋甕は中期から後期で10基確認され、そのうちの１基は加曽利Ｅ式の大型の埋甕である。後期から晩期になると遺跡の数は少なくなる。第６図には掲載できないが八坂遺跡があげられる。八坂遺跡は神沢川が合流する荒砥川左岸で、配石遺構・獣骨・土製耳飾り等が出土している。

弥生時代の群馬県は中期からと考えられていたが、近年の発掘調査で前期の土器が出土することから、弥生時代の成立を前期まで遡る可能性が考えられるようになった。波志江中屋敷東遺跡周辺では前期遺跡はまだ確認されていない。中期の遺跡は前橋市の荒砥地区や伊勢崎台地で確認されている。荒砥地区では竪穴住居が確認された上蛭沼遺跡(33)、頭無遺跡、荒砥島原遺跡がある。伊勢崎台地上では中組遺跡(111)、西太田遺跡(113)で中期の竪穴住居が確認されている。後期は間之山遺跡(96)、西太田遺跡で竪穴住居が確認されている。いづれの遺跡も大きな集落に発展はしていない。

昭和50年代から昭和60年代の初めに前橋市の荒砥地区に大規模な土地改良事業が実施され、膨大な面積の発掘調査が行われた。特に古墳時代から奈良・平安時代の遺跡が数多く調査された。発掘調査報告書が徐々に刊行され全容が明らかになりつつある。

古墳時代前期に、前橋市荒砥地区や伊勢崎市北部に遺跡の数が多くみられる。前期の遺跡の中で、竪穴住居と方形周溝墓を中心とする墓域がセットで確認された遺跡は、間之山遺跡、波志江中野面遺跡、荒砥二之堰遺跡、荒砥上ノ坊遺跡である。方形周溝墓が確認された遺跡は伊勢崎市で中組（111）、上西根遺跡（102）、蟹沼東古墳群（95）、前橋市荒砥地区で堤東遺跡（53）、阿久山遺跡（52）、地田栗遺跡（46）である。前橋市荒砥地区は方形周溝墓が多く確認されている。竪穴住居が確認された遺跡は大沼下遺跡（２）、上植木廃寺周辺遺跡（100）、萩原遺跡（３）、荒砥中屋敷Ⅰ遺跡（37）、地田栗Ⅲ遺跡（47）等である。大沼下遺跡は波志江中屋敷東遺跡の集落部分にあたり、同一の遺跡と考えられる。粘土採掘坑が確認され、「Ｓ」字状口縁台付甕や小器が出土した波志江中宿遺跡（12）、本遺跡の南東約1.5㎞に所在する華蔵寺裏山古墳（103）、南東約１㎞に所在する地蔵山古墳（94）などがあげられる。

古墳時代中期は遺跡の数が多くないが、荒砥荒子遺跡で、柵を伴う方形区画溝が確認され、豪族の居館と考えられる。竪穴住居が確認された遺跡は荒砥上ノ坊遺跡、下境Ⅱ遺跡（41）、二本松遺跡（72）、八幡町Ｂ遺跡（105）、西太田遺跡があげられる。本遺跡の南西約2.5㎞に、この地域最大の墳丘を有する前方後円墳

のお富士山古墳（112）が所在する。

古墳時代後期の遺跡は岡屋敷遺跡（7）、八幡町B遺跡、八幡町D遺跡、西太田遺跡、萩原遺跡、荒砥荒子遺跡、荒砥上ノ坊遺跡、荒砥二之堰遺跡、下触向井遺跡（65）等である。岡屋敷遺跡では91軒以上もの竪穴住居が確認されている。集落の規模が大きくなっている。

古墳時代の水田が確認された遺跡は波志江中屋敷西遺跡（8）、波志江中屋敷遺跡、波志江中宿遺跡、萩原遺跡で、As-Cを耕作土に含む水田の基底面が発掘調査されている。波志江中屋敷遺跡と波志江中屋敷西遺跡は本遺跡の西に隣接し、本遺跡周辺で確認されている。この付近の水田開発はAs-C降下前後と現在のところ考えられる。前橋市の荒砥地区では二之宮宮下東遺跡で、Hr-FA上で洪水によって埋没した水田が確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は調査された数も多くなり、集落の規模も大きくなる。前橋市の荒砥地区では飯土井二本松遺跡、二本松遺跡、飯土井上組遺跡（26）、荒砥天之宮遺跡（88）、荒砥上ノ坊遺跡、荒砥荒子遺跡、地田栗Ⅲ遺跡、堤東遺跡、荒砥上川久保遺跡で竪穴住居が確認された。伊勢崎市から赤堀町では田向遺跡（60）、柳田遺跡（61）、下触向井遺跡（65）、鷹巣遺跡（84）、今井南原遺跡（63）、大沼下遺跡、恵下遺跡（98）中組遺跡（110・111）等で竪穴住居が確認されている。荒砥天之宮遺跡・荒砥上ノ坊遺跡・今井南原遺跡では100軒以上の竪穴住居が確認されている。上植木廃寺（99）は白鳳期の創建とされ、金堂・講堂・塔等の建物の基壇を確認している。

平安時代の水田は古墳時代の水田に比べ増加している。昭和50年代後半に、As-B等の火山灰や軽石で埋没している水田、洪水層等で埋没している水田の存在が明らかになり、低地部で発掘調査が行われるようになった。平安時代の水田が確認された遺跡は、新井大田関遺跡（4）、波志江中野面遺跡、波志江中峰岸遺跡（20）、波志江六反田遺跡（21）、波志江今宮遺跡（23）、二之宮宮東遺跡（27）、二之宮宮下東遺跡、荒砥天之宮遺跡、西裏遺跡（50）、五目牛清水田遺跡（17）等でAs-Bで埋没した水田を確認している。五目牛清水田遺跡はAs-B下水田の他に粕川の氾濫による洪水層下の水田を確認している。前橋市の南部地区等では居住域の一部を水田に開拓している事実が確認されている。しかし、現在のところ波志江周辺地域では確認されていない。

中近世の遺跡は、農業用水路、城館跡、環濠屋敷跡等があげられる。農業用水路は女堀（71）で、前橋市上泉町から佐波郡東村国定までの12.75kmの終末点送水を目的にしている。工事は未完成で目的は達せられなかったことが発掘調査で確認された。女堀は本遺跡の北、波志江上沼の北側を通過している。波志江沼は上沼と下沼に分かれ、下沼は本遺跡の北200mに堰堤が築かれている。現在は神沢川と桂川から取水し、農業用のため池として利用している。元々は沼のどこかに湧水があったと思われる。堰堤から細長い低地が本遺跡を通過し南に延びる。堰堤の築造時期は不明であるが、寛政2年（1790年）の『伊勢崎風土記』に「大沼二ツ　上ノ沼　下ノ沼」と記されている。中世以降で寛政2年以前の可能性が考えられる。城館跡は大室城跡（49）、荒子の砦跡（39）、赤石城跡（90）等があげられる。環濠屋敷が確認された遺跡は岡屋敷遺跡、波志江中屋敷西遺跡、波志江中屋敷遺跡等があげられる。

【参考文献】

『伊勢崎市史通史編1』　伊勢崎市　1987
『波志江中野面遺跡Ⅱ』古墳時代以降編　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　2001
『舞台遺跡Ⅱ』（奈良・平安時代他編）　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　2001

表１　周辺遺跡一覧表(1)

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	調査年次・報告書等
1	波志江中屋敷東遺跡	伊勢崎市波志江町	本遺跡	本書
2	大沼下遺跡	伊勢崎市波志江町	１と同一遺跡。古墳時代前期の住居・奈良平安時代の住居19軒。溝・井戸・土坑等。	伊：調査1977 報告1977・本書
3	萩原遺跡	前橋市二之宮町	縄文時代の陥穴２基。弥生時代住居跡１棟。古墳時代前期の住居跡５棟、後期12棟。平安時代の住居８棟。	団：調査1996～97 年報16・17
4	新井大田間遺跡	前橋市新井町	古墳時代前期の溝１条。平安時代の住居跡４棟、溝１条、As-B下水田が確認された。	団：調査1996～97 年報16
5	波志江中野面遺跡	伊勢崎市波志江町	縄文時代中期の住居８軒・土坑８基・埋甕10基。古墳時代の集落（住居29軒・掘立柱建物２棟）・方形周溝墓17基・前方後方形周溝墓２基。奈良・平安時代集落（住居45軒・掘立柱建物５棟）。As-B下水田・畠。	団：調査1997～99 一部報告2001
6	波志江西屋敷遺跡	伊勢崎市波志江町	古墳時代の掘立柱建物１棟。奈良・平安時代の集落（住居28軒・掘立柱建物10棟）。	団：調査1998～99 年報18
7	岡屋敷遺跡	伊勢崎市波志江町	古墳時代後期の集落（住居91軒）。奈良平安時代の集落（住居11軒）。近世の屋敷。	団：調査1998～99 年報18
8	波志江中屋敷西遺跡	伊勢崎市波志江町	As-C混土を耕作土とする小区画水田。奈良・平安時代の住居５軒・畠。中世の館・As-B混土が耕作土の水田。	団：調査1998～99 年報18
9	波志江中屋敷遺跡	伊勢崎市波志江町	縄文時代早～後期の遺物包含層。早期撚糸文の住居１軒。As-C混土下水田。平安時代住居２軒。	団：調査1998～99 年報18・19
10	伊勢山遺跡	伊勢崎市波志江町	旧石器時代の遺物。近世の墓域が調査されている。	伊：調査1999～00
11	波志江西宿遺跡	伊勢崎市波志江町	旧石器時代の３層の文化層。古墳時代前期の住居跡19軒、掘立柱建物跡２棟。中近世の土坑・溝。	団：調査1998～00 年報17～19
12	波志江中宿遺跡	伊勢崎市波志江町	旧石器時代の２層の文化層確認。奈良・平安時代の集落。古墳時代前期の粘土採掘坑と粘土採掘坑より出土の水製品。Hr-FAとAs-C混土を耕作土とする水田。中近世は井戸・掘立柱建物。	団：調査1997～99 報告2001
13	五目牛新田遺跡	佐波郡赤堀町五目牛	縄文時代早期の住居４軒。弥生時代～古墳時代の集落（32軒）。平安時代の住居２軒、溝、土坑。	赤：調査1997～99 団：年報17・18
14	五目牛南組遺跡（北関東）	佐波郡赤堀町五目牛	縄文時代住居２軒。古墳１基。近世屋敷。	赤：調査1998～99 団：年報18
15	稲荷山古墳	佐波郡赤堀町五目牛	古墳１基。古墳時代の畠。古代の水田、畠。	赤：調査1997～00 団：年報17・19
16	五目牛清水田遺跡（北関東）	佐波郡赤堀町五目牛	縄文時代包含層・前期住居２軒。古墳時代住居４軒・古墳１基。水田。	赤：調査1998～99 団：年報17・18
17	五目牛清水田遺跡（上武道路）	佐波郡赤堀町五目牛	縄文時代前～晩期の遺物包含層、住居（花積下層）６軒・土坑15基・集石土坑22基・配石８基。古墳～奈良時代の集落（住居47軒・掘立柱建物17棟）。As-B下水田以下９面の粕川の氾濫層下の水田を確認。	団：調査1984～86 報告1993
18	五目牛南組遺跡（上武道路）	佐波郡赤堀町五目牛	縄文時代前期（花積下層）住居４軒・陥穴。弥生時代再葬墓１基。古墳時代後期古墳（円墳）６基。	団：調査1984～85 報告1992
19	堀下八幡遺跡	佐波郡赤堀町堀下	旧石器時代の石器集中地点20ヵ所（総計998点）。縄文時代早～後期の遺物包含層。前期諸磯ｂ式期の住居１軒・土坑。平安時代集落（住居９軒）。	団：調査1984～85 報告1990
20	波志江中峰岸遺跡	伊勢崎市波志江町	平安時代の溝36条・As-B下水田。	団：調査1985 報告1995
21	波志江六反田遺跡	伊勢崎市波志江町	旧石器時代の石器６点出土。縄文時代の遺物包含層から撚糸文土器が出土。平安時代の住居３軒。As-B下水田。	団：調査1985 報告1992
22	波志江天神山遺跡	伊勢崎市波志江町	縄文時代の前期の遺物包含層（諸磯ｂ）・陥穴５基。近世の土坑・溝。	団：調査1985 報告1992
23	波志江今宮遺跡	伊勢崎市波志江町	古墳８基。形象埴輪・円筒埴輪・太刀・馬具等出土。奈良時代住居１軒。As-B下水田。	団：調査1980～81・85 報告1994
24	飯土井二本松遺跡	前橋市飯土井町	旧石器時代の石器出土。縄文時代早～後期の遺物包含層、陥穴。古墳時代前期の住居１軒。奈良・平安時代集落（23軒）。中・近世の方形区画の溝。	団：調査1985～86 報告1991
25	飯土井中矢遺跡	前橋市飯土井町	旧石器時代の石器集中地点５ヵ所（総計170点）。縄文時代遺物包含層より創草期の爪形文・押圧縄文出土。陥穴13基。古墳時代後期住居１軒。平安時代住居１軒。	団：調査1986 報告1991
26	飯土井上組遺跡	前橋市飯土井町	古墳時代の住居４軒・畠。平安時代の住居２軒・土坑・溝。近世の土坑墓。	団：調査1985～86 報告1995

表２　周辺遺跡一覧表(2)

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	調査年次・報告書等
27	二之宮宮東遺跡	前橋市二之宮町	平安時代の集落（住居23軒）、As-B下水田。中世の館。近世の屋敷、大池より石製品・木製品出土。	団：調査1965～86 報告1994
28	二之宮宮下東遺跡	前橋市二之宮町	縄文時代陥穴１基。古墳時代後期～奈良・平安時代集落。Hr-FA上から木製品出土。Hr-FA上で４面の洪水層下水田。As-B下水田。中世の館跡。中世水田と畠。	団：調査1987～88 報告1994
29	荒砥上ノ坊遺跡	前橋市二之宮町	縄文時代前期諸磯ｂ式期の住居３軒。古墳時代前期の住居34軒・方形周溝墓６基。古墳時代中・後期の住居29軒。奈良・平安時代の住居191軒。中世以降は掘立柱建物16棟・井戸22基・火葬墓。	団：調査1982～83 報告1995・96・97 98
30	元屋敷遺跡	前橋市荒子町	古墳時代～平安時代の住居跡29軒。地割れ跡を確認し、地割れ跡から噴砂の状況が確認された。女堰の一部を調査。	県：調査1990 報告1991
31	前沼遺跡Ⅰ	前橋市荒子町	平安時代の住居跡１軒。溝１条。	調査1990
32	前沼遺跡Ⅱ			
33	上細沼遺跡	前橋市荒子町	弥生時代中期末の住居跡１軒。古墳時代の住居跡15軒。古墳１基。	調査1990
34	天神遺跡	前橋市西大室町	古墳時代～平安時代の住居跡12軒。古墳２基（その内１基は帆立貝形古墳）。溝２条。	県：調査1989～90 報告1990
35	西大室丸山遺跡	前橋市西大室町	古墳時代の住居17軒・古墳７基・巨石祭祀遺構１基。巨石祭祀遺構から多量の石製模造品が出土。平安時代の殿冶遺構１基。	県：調査1990 報告1997
36	荒砥荒子遺跡	前橋市荒子町	古墳時代中期の櫓を伴う方形区画の溝に囲まれた居館１、住居跡４棟。古墳時代後期の住居跡10棟。奈良時代の住居跡３棟。平安時代の住居跡３棟が発掘調査された。	団：調査1983 報告2000
37	荒砥中屋敷Ⅰ遺跡	前橋市荒子町	古墳時代前期の住居跡５棟、中近世の溝１条が調査されている。	県：調査1982 団：「年報」２　1983
38	舞台遺跡	前橋市荒子町	５世紀中頃～後半築造と考えられる竪穴式の主体部もつ古墳３基。この内１基は全長42mの帆立貝形古墳。	県：調査1990～91 報告1991
39	荒子の砦跡	前橋市荒子町	東西80m、南北120mの単郭堡をもつ。北東、南は自然の濠を数m下に造らす。	発掘調査は行われていない。
40	舞台西遺跡	前橋市荒子町	中世の井戸３基が調査され、内耳鍋・砥石・石臼・板碑が出土している。	県：調査1982 団：「年報」２　1983
41	下境Ⅱ遺跡	前橋市荒子町	古墳時代中期の住居跡４軒。中世の溝４条、井戸１基を調査。中世の環濠館跡の可能性が考えられる。	県：調査1989 報告1990
42	下境Ⅰ遺跡	前橋市荒子町	古墳時代の住居跡95軒。古墳22基。中世の寺院及び墓地、井戸２基、溝２条が発掘調査された。	県：調査1989～90 報告1990
43	富士山Ⅰ遺跡	前橋市西大室町	７世紀末の横穴石室を主体部とする円墳１基。墳丘の径36m。古墳時代～平安時代の住居跡32軒。近世の堀１基。溝４条。	県：調査1990～92 報告1992
44	稲荷山Ⅱ遺跡	前橋市西大室町	平安時代の住居跡４軒。近世の溝１条。	県：調査1990
45	稲荷山遺跡	前橋市西大室町	奈良・平安時代の住居３軒。	県：調査1989
46	地田聖遺跡	前橋市西大室町	方形周溝墓２基。古墳３基。奈良時代の住居２軒。	県：調査1989
47	地田聖Ⅲ遺跡	前橋市西大室町	６世紀後半～７世紀前半にかけての円墳３基。２基の古墳から円筒埴輪が出土。古墳時代前期の住居跡４棟・後期の住居跡３棟。奈良・平安時代の住居跡16棟。近世は溝から18～19世紀の陶磁器多数出土。	前堀：調査1993 報告1994
48	荒砥東原遺跡	前橋市東大室町	古墳時代前期～平安時代集落（住居22軒）。	団：調査1977 報告1979
49	大室城跡	前橋市西大室町	中世の城館跡。本丸と本丸の東に二の丸が並び、いずれも濠で囲まれている。	発掘調査はおこなわれていない。
50	西裏遺跡	前橋市西大室町	平安時代As-B下水田は確認できない。遺物散布地。	県：調査1989 報告1990
51	富士山Ⅱ遺跡	前橋市西大室町	平安時代の住居４軒。溝１条。	県：調査1989
52	阿久山遺跡	前橋市西大室町	前方後方形周溝墓１基、方形周溝墓５基。古墳10基。古墳時代の住居１軒。平安時代の住居２軒。	県：調査1989
53	堤東遺跡	前橋市荒子町	古墳時代前期の周溝墓３基（内１基は前方後方形）。平安時代の集落（住居13軒で内１軒は小殿冶跡）。	県：調査1983 報告1985
54	中二子古墳	前橋市西大室町	全長85mの前方後円墳。周堀を有し、一部は二重。	前：調査1993～94 報告1995
55	前二子古墳	前橋市西大室町	全長95mの前方後円墳。釜無型横穴石室。６世紀前半の築造。	前：調査1992 報告1993

表3　周辺遺跡一覧表(3)

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	調査年次・報告書等
56	荒砥上諏訪遺跡	前橋市西大室町	A地点では縄文時代の住居跡1軒、古墳時代の住居跡3軒。B地点では縄文時代の早・前・中期の土器・石器が出土。C地点では古墳の周堀1基と古墳時代後期の住居跡2軒。D地点では平安時代の掘立柱建物跡1棟、土坑、溝が調査されている。	県：調査1977 報告1977 団：調査1979 報告1982
57	荒砥五反田遺跡	前橋市西大室町	古墳時代前期～奈良平安時代の住居跡20軒、掘立柱建物跡1棟、溝5条が調査されている。	県：調査1977 報告1978
58	荒砥上川久保遺跡	前橋市大室町	縄文時代の住居1軒・配石2地点・土坑。古墳時代前期の方形周溝墓4基・住居2軒。古墳時代後期の住居6軒。奈良・平安時代の住居102軒で小鍛冶跡を含む。	団：調査1976 報告1982
59	多田山田向井古墳群	佐波郡赤堀町今井	多田山丘陵の東南斜面で古墳時代後期の円墳が集中する。「上毛古墳綜覧」によると20基以上となる。9基の古墳が調査されている。	
60	田向遺跡	佐波郡赤堀町今井	縄文時代中期の住居跡1軒、古墳時代前期～奈良・平安時代の住居跡41軒、土坑・溝等が調査されている。	赤：調査1981 報告1982
61	柳田遺跡	佐波郡赤堀町今井	縄文時代前期・後期の住居跡10軒で、1軒は後期堀之内式の柄鏡形敷石住居である。古墳時代後期から奈良・平安時代の住居跡21軒が調査されている。	赤：調査1981 報告1982
62	南原古墳群	佐波郡赤堀町今井	粕川の右岸の台地上で、「上毛古墳綜覧」に愛宕山古墳を中心に28基の古墳が記載されている。50年に4基、66年に3基、67年に1基が調査。	群大調査1950 赤：調査1966・67
63	今井南原遺跡	佐波郡赤堀町今井	縄文時代前期諸磯式期の住居跡1軒、弥生時代後期の住居跡36軒、古墳時代前期・古墳時代後期・奈良・平安時代の住居跡112軒。3棟の掘立柱建物跡、古墳1基。	赤：調査1980～81 報告1981
64	今井赤坂南遺跡	佐波郡赤堀町今井	縄文時代前期関山式期の住居跡1軒。古墳時代後期の住居跡13軒。古墳1基。その他土坑が調査されている。	赤：調査1989 報告1990
65	下触向井遺跡	佐波郡赤堀町下触	縄文時代早期の集石遺構1基、前期の土器片及び石器が出土。住居跡は古墳時代後期26軒、奈良・平安時代14棟である。平安時代の住居・土坑から墨書土器出土。5棟の掘立柱建物。	赤：調査1980 報告1981
66	下触向井遺跡第Ⅱ地点	佐波郡赤堀町下触	縄文時代の遺物包含層で前期と中期の土器が出土。古墳時代の住居跡17軒。	赤：調査1988～89 報告1989
67	向井古墳群	佐波郡赤堀町	桂川の左岸で、下触向井遺跡の西側にあたる。横穴石室を有する古墳1基が調査されている。	調査1952
68	下触下寺遺跡	佐波郡赤堀町下触	古墳時代の集落で住居跡47棟、掘立柱建物3棟、方形周溝墓3基、円形周溝墓1基が発掘調査された。	赤：調査1986～87 報告1987
69	石山遺跡	佐波郡赤堀町下触	旧石器時代末の尖頭器104点・掻器4点・剥片2,477点出土。 「考古学ジャーナル」1967年6月号	相沢忠洋氏調査1967 報告1967
70	石山片田古墳群	佐波郡赤堀町下触	石山・尻塚・片田にかけての低い丘陵が南北につながる。「上毛古墳綜覧」によると約70基の古墳が記載されている。「上毛古墳綜覧」に記載されている赤堀村59号墳が発掘調査された。下触牛伏遺跡の古墳もこの古墳群に含まれる。	赤：調査1989 報告1990
71	女堀	前橋市東大室町・飯土井町・二之宮町・荒口町	縄文時代中期の藤沢期から佐波郡東村国定までの12.75kmの終末点送水を目的とした農業用水である。8地点で発掘調査が行われ、梯形に掘削し、中段を設け、中央に通水溝を掘る。未完成で放棄されている。	団：調査1979～82 報告1984
72	二本松遺跡	前橋市南上井町	縄文時代中期の住居跡2軒。古墳時代中期の住居6軒。平安時代の住居84軒。奈良・平安時代の掘立柱建物跡3棟。女堀調査。	前：調査1982 報告1983
73	下触牛伏遺跡	佐波郡赤堀町下触	旧石器時代の文化層を2層確認、約3,000点の遺物が出土。縄文時代の住居3軒・陥穴25基・土坑18基・集石3基。古墳時代の住居13軒・古墳10基。	団：調査1982～84 報告1986
74	宮貝戸古墳群	伊勢崎市波志江町	神沢川とその支流にはさまれた細長い丘陵に位置し、「上毛古墳綜覧」には、前方後円墳をはじめ10基の古墳が記載されている。4基の円墳が発掘調査された。	伊：調査1979～80 報告1980
75	牛伏第1号墳	伊勢崎市波志江町	「上毛古墳綜覧」記載漏れで、周堀を含め径30mの円墳である。横穴石室で、袖部の形状は不明。石室内より鉄剣7本が出土。	伊：調査1981 報告1982
76	祝宝古墳	伊勢崎市波志江町	「上毛古墳綜覧」三郷村第73号墳である。横穴式両袖型石室で、二重の周堀で、墳丘径30mの円墳である。	伊：調査1981 報告1982
77	八幡林古墳群	佐波郡赤堀町堀下	4基の円墳と4軒の縄文時代前期の住居が調査された。地蔵山古墳の1支群とも考えられる。	赤：調査1981～82 報告1982
78	寺跡古墳	佐波郡赤堀町五目牛	主体部は輝石安山岩の割れ石の石室に石棺の横穴式無袖型石室である。刀子・馬具等が出土。墳丘の規模・形状は不明。築造時期は6世紀後半。	調査1954

表４　周辺遺跡一覧表(4)

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	調査年次・報告書等
79	五目牛洞山遺跡	佐波郡赤堀町堀下	縄文時代後期の住居跡３軒。その内１軒は柄鏡形敷石住居である。土偶が出土。	赤：調査1980 報告1981
80	洞山古墳群 （洞山古墳）	佐波郡赤堀町五目牛	舶川の右岸で南北150m、東西170mの小丘で、洞山古墳をはじめ21基の古墳が確認されている。洞山古墳は全長22mの前方後円墳で６世紀前半から中葉の築造である。1982年２基の円墳が発掘調査されている。	群大：調査1950 赤：調査1982 報告1983
81	北通遺跡Ａ・Ｂ	佐波郡赤堀町下触	舶川の右岸の台地縁辺。縄文時代前期の住居跡７軒・土坑５基、遺構外で後期の土偶が出土。古墳時代の住居跡１軒。平安時代の住居跡２軒。「大門」の墨書土器出土。	赤：調査1982 報告1983
82	川上遺跡	佐波郡赤堀町下触	住居跡49軒で古墳時代前期～後期・奈良・平安時代である。礎石を伴う掘立柱建物跡と多量の瓦が出土したことから寺院の可能性が考えられる。墨書土器出土。	赤：調査1979～80 報告1980
83	中畑遺跡	佐波郡赤堀町下触	古墳時代前期から後期の集落で住居跡35棟、掘立柱建物１棟。調査区の南端で女埴を発掘調査。	赤：調査1985～86 報告1986
84	鷹巣遺跡	佐波郡赤堀町下触	旧桂川の左岸台地縁辺。縄文時代前期の住居跡２軒・土坑３基。平安時代の住居跡18軒・掘立柱建物４棟。「川西」「中」の墨書土器出土。	赤：調査1982 報告1983
85	大沼上遺跡	伊勢崎市波志江町	土師器使用の住居跡１棟、溝１条確認。	伊：調査1981報告1982
86	宮貝戸下遺跡	伊勢崎市波志江町	奈良時代の住居跡２棟、中近世の井戸・墓。井戸から板碑が出土。	伊：調査1977～78 報告1978
87	荒砥二之堰遺跡	前橋市飯土井町	縄文時代前期８軒・中期18軒・後期９軒の住居。後期９軒は柄鏡形。古墳時代前期の住居13軒・方形周溝墓９基・円形周溝状遺構１基。古墳時代後期の住居９軒・古墳21基。	団：調査1980 報告1985
88	荒砥天之宮遺跡	前橋市二之宮町	古墳時代の住居73軒。奈良・平安時代の住居100軒。時期不明の住居33軒。Ａx・Ｂ下水田。溜井４基。	団：調査1980～81 報告1988
89	荒砥青柳遺跡	前橋市二之宮町	奈良・平安時代の住居４軒・溝・土坑。	団：調査1982報告1986
90	赤石城跡	前橋市飯土井町	郭を区画する濠とピット列を確認。濠は上幅５～６mで断面形は「Ｖ」字形。	団：調査1977 報告1985
91	波志江伊勢山古墳	伊勢崎市波志江町	田三郷村71号墳。横穴式両袖型石室の円墳。	群大：調査1951
92	五目牛東遺跡群	佐波郡赤堀町五目牛	３地点で調査。Ａ地点は縄文時代早期の山形押型文・沈線文土器出土。古墳時代住居12軒。Ｂ地点は古墳時代～平安時代集落（住居22軒）。Ｃ地点は縄文時代前期の住居２軒（黒浜式・諸磯式）。	赤：調査1979 報告1980
93	間山古墳群	伊勢崎市本関町・三和町	舶川右岸の台地上で、上武道路の上植本荒仙原遺跡で10基の古墳が調査された。その他に５基の古墳が調査されている。	団：調査1983～84 報告1989
94	地蔵山古墳群	佐波郡赤堀町五目牛	地蔵山と呼ばれる南北に細長い丘陵で、頂上に全長60mの地蔵山古墳をはじめ、55基の古墳が確認され、43基の古墳が発掘調査された。	赤：調査1977～79 報告1978・1979
95	蟹沼東古墳群	伊勢崎市波志江町	蟹沼の東の東西100m、南北400mの細長い台地上に約70基の古墳が存在する。発掘調査で25基の円墳を調査。７世紀前半の古墳が主体。縄文時代の陥穴５基、方形周溝墓６基が調査されている。	伊：調査1977～78・1986 報告1978・79・88
96	間之山遺跡	伊勢崎市波志江町	蟹沼東古墳群として発掘調査された一部分で間之山丘陵にかかる遺構を遺跡名の変更で間之山遺跡とした。弥生時代後期の住居跡１棟、古墳時代前期の住居跡１棟、方形周溝墓が発掘調査されている。	伊：調査1977～78・86 報告1978・79・88
97	台所山古墳群	伊勢崎市波志江町	舶川の支流の西桂川の右岸台地上で、「上毛古墳総覧」によると７基の古墳が数えられた。1971年埋式石棺の主体部を６つ古墳が１基検出され、石槍関辺から円筒埴輪と土師器坏が出土。古墳の築造時期は６世紀中頃から後半と推定される。	発掘調査は行われていない。
98	恵下遺跡	伊勢崎市上植木本町	古墳時代前期～奈良・平安時代の住居跡84軒、古墳３基、溝、井戸等を調査している。古墳はいずれも６世紀中頃の構築である。	伊：調査1978～79 報告1979
99	上植木廃寺	伊勢崎市上植木町・本関町	白鳳期創建の地方寺院。金堂・講堂・塔・中門・回廊・基壇を検出。瓦・三彩陶片・墨書土器・瓦塔が出土。	伊：調査1982～87 報告1988
100	上植木廃寺周辺遺跡	伊勢崎市上植木町・本関町	上植木廃寺周辺で14地点の発掘調査がおこなわれた。古墳時代前期の住居跡３軒、奈良・平安時代の住居跡４軒、時期不明の住居跡２軒、井戸５基、溝６条、中世の土坑墓７基が調査され、墨書・刻書土器、古銭が出土している。	伊：調査1984～88・92・93・95 報告1996
101	新屋敷遺跡	伊勢崎市本関町	古墳時代初頭の住居跡。平安時代の住居跡１軒。墨書土器が出土。	伊：調査1982 団：「年報」２　1983
102	上西根遺跡	伊勢崎市鹿島町	古墳時代～奈良時代の住居跡26軒、方形周溝墓５基、溝15条、井戸３基が発掘調査された。住居の主体は古墳時代中後期である。	伊：調査1983～84 報告1985

表5　周辺遺跡一覧表(5)

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	調査年次・報告書等
103	華蔵寺墓山古墳	伊勢崎市華蔵寺町	5世紀初頭と推定される墳丘40mの前方後円墳である。出土遺物は複合口縁壺形土器や壺形土器である。出土遺物等から前方後方墳の可能性が考えられる。	発掘調査は行われていない。
104	八幡町遺跡	伊勢崎市八幡町	古墳時代後期の住居跡35棟、溝2条が発掘調査された。	伊：調査1985報告1999
105	八幡町遺跡（B地区）	伊勢崎市八幡町	古墳時代中期・後期の住居跡19棟、平安時代の溝2条、近世以降の溝6条が発掘調査された。住居跡から石製模造品が出土。	伊：調査1987～88 報告1988
106	八幡町遺跡（D地区）	伊勢崎市八幡町	古墳時代の住居跡15棟、溝2条、井戸10基が調査された。	伊：調査1989 報告1990
107	波志江椎塚山遺跡	伊勢崎市波志江町	縄文時代早期条痕文土器・撚糸文土器・押形文土器・スタンプ形石器等が採取されている。	発掘調査はおこなわれていない
108	西福岡遺跡	伊勢崎市波志江町	古墳時代の溝2条、時期不明の溝1条が発掘調査された。	伊：調査1976 報告1977
109	中組遺跡	伊勢崎市波志江（県立伊勢崎商）	住居跡は古墳時代前期1棟・中期4棟奈良時代9棟。土坑、井戸が発掘調査された。	団：調査1997～98 報告2001
110	中組遺跡	伊勢崎市波志江（県立伊勢崎商）	奈良・平安時代の住居跡13棟、掘立柱建物1棟、溝1条が発掘調査された。	県：調査1984 報告1985
111	中組遺跡	伊勢崎市安堀町	奈良・平安時代の住居跡7棟、方形周溝墓1基、溝8条が発掘調査された。	伊：調査1981 報告1982
112	お富士山古墳	伊勢崎市安堀町	墳丘全長125mの前方後円墳で、後円部に長持型石棺が現認されていた。1988年調査で土師器小片と埴輪小片が出土している。	伊：調査1988 報告1990
113	西大田遺跡	伊勢崎市安堀町	住居跡209棟（弥生時代4棟、古墳時代中期1棟、他は古墳時代後期から奈良・平安時代）掘立柱建物9棟、土坑、井戸が発掘調査された。弥生時代の住居跡から十王台式と思われる壺が出土。	伊：調査1981～82 報告1983

＊県：群馬県教育委員会　伊：伊勢崎市教育委員会　前：前橋市教育委員会　前埋：前橋市埋蔵文化財調査団
赤：赤堀町（村）教育委員会　団：財群馬県埋蔵文化財調査事業団

【参考文献】 ＊第7図中の番号と遺跡一覧表と註の番号は同一である。

2　『大沼下遺跡　西福岡遺跡』　伊勢崎北部土地改良事業に伴う昭和51年度発掘調査報告書　伊勢崎市教育委員会　1977
3　『荻原遺跡』『年報』16・17　財群馬県埋蔵文化財調査事業団　1997・1998
4　『新井大田関』『年報』16　財群馬県埋蔵文化財調査事業団　1997
5　『波志江中野面遺跡』『年報』17・18　財群馬県埋蔵文化財調査事業団　1998・99
『波志江中野面』古墳時代以降編　北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
財群馬県埋蔵文化財調査事業団　2001
6　『波志江西屋敷遺跡』『年報』18　財群馬県埋蔵文化財調査事業団　1999
7　『岡部敷遺跡』『年報』18　財群馬県埋蔵文化財調査事業団　1999
8　『波志江中屋敷西遺跡』『年報』18　財群馬県埋蔵文化財調査事業団　1999
9　『波志江中屋敷遺跡』『年報』18　財群馬県埋蔵文化財調査事業団　1999
10　『県内埋蔵文化財発掘調査一覧表　西宿』『年報』19　財群馬県埋蔵文化財調査事業団　2001
11　『波志江西宿遺跡』『年報』18～20　財群馬県埋蔵文化財調査事業団　1998～00
12　『波志江中宿遺跡』北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第7集
財群馬県埋蔵文化財調査事業団　2001
13　『県内埋蔵文化財発掘調査一覧表』『年報』17・18　財群馬県埋蔵文化財調査事業団　1998・1999
14　『県内埋蔵文化財発掘調査一覧表』『年報』18　財群馬県埋蔵文化財調査事業団　1999
15　『県内埋蔵文化財発掘調査一覧表』『年報』19　財群馬県埋蔵文化財調査事業団　2000
16　『県内埋蔵文化財発掘調査一覧表』『年報』17　財群馬県埋蔵文化財調査事業団　1998
17　『五目牛清水田遺跡』　一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
財群馬県埋蔵文化財調査事業団　1993
18　『五目牛南組遺跡』　一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
財群馬県埋蔵文化財調査事業団　1992
19　『堀下八幡遺跡』　一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
財群馬県埋蔵文化財調査事業団　1990
20　『飯土井上組遺跡・波志江中峰岸遺跡』　一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
財群馬県埋蔵文化財調査事業団　1995
21　『書上本山遺跡・波志江天神山遺跡・波志江六反田遺跡』　一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
財群馬県埋蔵文化財調査事業団　1992
22　『書上本山遺跡・波志江天神山遺跡・波志江六反田遺跡』　一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
財群馬県埋蔵文化財調査事業団　1992
23　『波志江今宮遺跡』　一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　財群馬県埋蔵文化財調査事業団　1995
24　『飯土井二本松遺跡・下江田前遺跡』　一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

　　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1991
25 『飯土井中央遺跡』　一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1991
26 『飯土井上組遺跡・波志江中峰畑遺跡』　一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
　　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1995
27 『二之宮宮東遺跡』　一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1994
28 『二之宮宮下東遺跡』　一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
　　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1994
29 『荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ』　昭和57年度県営圃場整備事業荒砥北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
　　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1995
　『荒砥上ノ坊遺跡Ⅱ』　昭和57年度県営圃場整備事業荒砥北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
　　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1996
　『荒砥上ノ坊遺跡Ⅲ』　昭和57年度県営圃場整備事業荒砥北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
　　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1997
　『荒砥上ノ坊遺跡Ⅳ』　昭和57年度県営圃場整備事業荒砥北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
　　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1998
30 『舞台・西大室丸山』　平成２年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告　群馬県教育委員会　1991
31 『遺跡の位置と周辺の遺跡』『舞台・西大室丸山』　平成２年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告　群馬県教育委員会　1991
32 『遺跡の位置と周辺の遺跡』『舞台・西大室丸山』　平成２年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告　群馬県教育委員会　1991
33 『遺跡の位置と周辺の遺跡』『舞台・西大室丸山』　平成２年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告　群馬県教育委員会　1991
34 『下境Ⅰ・天神』　平成元年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告　群馬県教育委員会　1990
35 『舞台・西大室丸山』　平成２年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告　群馬県教育委員会　1991
　『西大室丸山遺跡』　平成２年度県営12場整備事業荒砥北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書　群馬県教育委員会　1997
36 『荒砥荒子遺跡』　昭和57・58年度県営圃場整備事業荒砥北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
　　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団2000
37 『荒砥下押切Ⅰ遺跡・舞台西遺跡・中屋敷Ⅰ遺跡』『年報』２　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1983
38 『舞台・西大室丸山』　平成２年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告　群馬県教育委員会　1991
39 山崎　一『群馬県古墳墓並の研究』上巻　1971
40 『荒砥下押切Ⅰ遺跡・舞台西遺跡・中屋敷Ⅰ遺跡』『年報』２　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1983
41 『下境Ⅰ・天神』平成元年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告　群馬県教育委員会　1990
42 『下境Ⅰ・天神』平成元年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告　群馬県教育委員会　1990
43 『富士山Ⅰ遺跡１号古墳』平成３年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告　群馬県教育委員会　1992
44 『遺跡の位置と周辺の遺跡』『舞台・西大室丸山』　平成２年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告　群馬県教育委員会　1991
45 『遺跡の位置と周辺の遺跡』『下境Ⅰ・天神』　平成元年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告　群馬県教育委員会　1990
46 『遺跡の位置と周辺の遺跡』『下境Ⅰ・天神』　平成元年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告　群馬県教育委員会　1990
47 『地田果Ⅲ遺跡』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1994
48 『荒砥東原遺跡』　昭和53年度県営圃場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
　　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1979
49 山崎　一『群馬県古墳墓並の研究』上巻　1971
50 『下境Ⅰ・天神』　平成元年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告　群馬県教育委員会　1990
51 『遺跡の位置と周辺の遺跡』『下境Ⅰ・天神』　平成元年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告　群馬県教育委員会　1990
52 『遺跡の位置と周辺の遺跡』『下境Ⅰ・天神』　平成元年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告　群馬県教育委員会　1990
53 『堤東遺跡』　群馬県教育委員会　1985
54 『中二子古墳』　大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概報Ⅲ　前橋市教育委員会　1995
55 『前二子古墳』　大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概報Ⅱ　前橋市教育委員会　1993
56 『荒砥上諏訪遺跡』　県道今井前橋線地域内埋蔵文化財発掘調査報告書　群馬県教育委員会　1977
　『荒砥上諏訪遺跡』　県道今井・前橋線道路改良工事　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1982
57 『荒砥五反田遺跡』　県道今井前橋線地域内埋蔵文化財発掘調査報告書　群馬県教育委員会　1978
58 『荒砥上川久保遺跡』　昭和50・51年度県営圃場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
　　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1982
59 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』　1966
　『佐波郡赤堀村』『群馬県史　資料編３　原始古代３』　群馬県　1981
60 『今井柳田遺跡発掘調査概報』　今井南部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告　赤堀村教育委員会　1982
61 『今井柳田遺跡発掘調査概報』　今井南部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告　赤堀村教育委員会　1982
62 尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』　1966
　『佐波郡赤堀村』『群馬県史　資料編３　原始古代３』　群馬県　1981
　松村一昭『赤堀村大字南原古墳発掘調査概報』『群馬文化86』　群馬文化の会　1966
63 『今井南原遺跡発掘調査概報』　今井南部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告　赤堀村教育委員会　1981
64 『今井赤坂南遺跡発掘調査概報』　赤堀町教育委員会　1990
65 『下触向井遺跡発掘調査概報』　今井南部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告赤堀村教育委員会　1981

66　「下触向井遺跡第Ⅱ地点発掘調査」『町内遺跡発掘調査報告』　赤堀町教育委員会　1989
67　尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』　1966
68　「下触下寺遺跡及び鍛十二所遺跡発掘調査概報」下触下寺土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告他　赤堀町教育委員会　1987
69　相沢忠洋「群馬県赤堀石山遺跡　上部ローム層中鉄末期の石器文化」『考古学ジャーナル』６　1967
70　「下触竹田古墳群発掘調査概報」　赤堀町教育委員会　1990
71　「女堀」中世初期・農業用水址の発掘調査　馬営圃場整備事業荒砥南部・北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
　　㈱群馬県埋蔵文化財調査事業団　1984
72　「二本松遺跡」『文化財調査報告書第13集』　前橋市教育委員会　1983
73　「下触牛代遺跡」身体障害者スポーツセンター建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　㈱群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986
74　『宮貝戸古墳群鬚面東古墳群』　伊勢崎北部土地改良事業に伴う昭和54年度発掘調査報告書　伊勢崎市教育委員会　1980
75　「牛伏第１号墳祝堂古墳大沼上遺跡」　伊勢崎北部土地改良事業に伴う昭和56年度発掘調査報告書　伊勢崎市教育委員会　1982
76　「牛伏第１号墳・祝堂古墳・大沼上遺跡」　伊勢崎北部土地改良事業に伴う昭和56年度発掘調査報告書　伊勢崎市教育委員会　1982
77　「八幡林古墳群及び縄文住居跡調査概報」　伊勢崎北部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告　1982　赤堀村教育委員会
78　「佐波郡赤堀村」『群馬県史　資料編３　原始古代３』　1981　群馬県
79　「五目牛剣山遺跡発掘調査概報」　伊勢崎北部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告　赤堀村教育委員会　1980
80　「剣山古墳」『群馬県史　資料編３　原始古代３』　1981　群馬県
　　『剣山古墳群及び北道、鷹巣遺跡発掘調査概報』　伊勢崎北部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告　赤堀村教育委員会　1983
81　「剣山古墳群及び北道、鷹巣遺跡発掘調査概報」　伊勢崎北部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告　赤堀村教育委員会　1983
82　尾崎喜左雄「下触廃寺関係発掘調査資料」　群馬大学史学研究室　1975
　　『川上遺跡、女堀遺構発掘調査概報』　今井南部土地改良事業に伴なう埋蔵文化財調査報告　赤堀村教育委員会　1980
83　「中畑遺跡、女堀用水遺構発掘調査概報」　村宮下地土地改良事業に伴なう埋蔵文化財調査報告　赤堀村教育委員会　1986
84　「剣山古墳群及び北道、鷹巣遺跡発掘調査概報」　伊勢崎北部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告　赤堀村教育委員会　1983
85　「牛伏第１号墳・祝堂古墳・大沼上遺跡」　伊勢崎北部土地改良事業に伴う昭和56年度発掘調査報告書　伊勢崎市教育委員会　1982
86　「蟹沼東古墳群・宮貝戸下遺跡」　伊勢崎北部土地改良事業に伴う昭和52年度発掘調査報告書　伊勢崎市教育委員会　1978
87　「荒砥二之堰遺跡」　昭和55年度県営圃場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
　　㈱群馬県埋蔵文化財調査事業団　1985
88　「荒砥天之宮遺跡」　昭和55年度県営圃場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
　　㈱群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988
89　「荒砥北原遺跡　今井神社古墳群　荒砥青柳遺跡」　昭和56年度県営圃場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
　　㈱群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986
90　「荒砥前原遺跡　赤石城址」　昭和51年度県営圃場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
　　㈱群馬県埋蔵文化財調査事業団　1985
91　尾崎喜左雄『横穴式古墳の研究』　1966
92　「五目牛東遺跡群及び赤堀村８号墳発掘調査概報」　伊勢崎北部土地改良事業に伴なう埋蔵文化財調査報告　赤堀村教育委員会　1980
93　「上植木先仙岳遺跡」　一般国道（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　㈱群馬県埋蔵文化財調査事業団　1989
94　「赤堀村地蔵山の古墳１」『伊勢崎北部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告　赤堀村教育委員会　1978
　　「赤堀村地蔵山の古墳２」伊勢崎北部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告　赤堀村教育委員会　1979
95　「蟹沼東古墳群　宮貝戸下遺跡」　伊勢崎北部土地改良事業に伴う昭和52年度発掘調査報告書　伊勢崎市教育委員会　1978
　　「蟹沼東古墳群」　伊勢崎北部土地改良事業に伴う昭和53年度発掘調査報告書　伊勢崎市教育委員会　1979
　　「蟹沼東古墳群」　仮称いせさき聖苑建設事業に伴う発掘調査報告書　伊勢崎市教育委員会　1988
96　「蟹沼東古墳群・宮貝戸下遺跡」　伊勢崎北部土地改良事業に伴う昭和52年度発　掘調査報告書　伊勢崎市教育委員会　1978
97　「台所山古墳」『伊勢崎市史』　通史編１　原始古代　伊勢崎市　1987
98　「恵下遺跡」　大正用水東部土地改良事業に伴う昭和53年度発掘調査報告書　伊勢崎市教育委員会　1979
99　「上植木廃寺発掘調査概報Ⅰ」　伊勢崎市　1984
　　「上植木廃寺」昭和59年度発掘調査概報　伊勢崎市教育委員会　1985
　　「上植木廃寺発掘調査概報Ⅱ」　伊勢崎市　1986
　　「上植木廃寺」　昭和60年度発掘調査概報　伊勢崎市教育委員会　1986
　　「上植木廃寺」　昭和61年度発掘調査概報　伊勢崎市教育委員会　1987
　　「上植木廃寺」　昭和62年度発掘調査概報　伊勢崎市教育委員会　1988
　　「上植木廃寺」　平成２・３年度発掘調査概報　伊勢崎市教育委員会　1992
　　「上植木廃寺」　平成４・５年度発掘調査概報　伊勢崎市教育委員会　1994
100　「上植木廃寺周辺遺跡」　伊勢崎市教育委員会　1996
101　「伊勢崎市史通史編１」　伊勢崎市　1987
　　「昭和57年度県内埋蔵文化財発掘調査一覧表」「年報」２　㈱群馬県埋蔵文化財調査事業団　1983
102　「上西根遺跡」昭和58年度植木土地改良事業に伴う発掘調査報告書　伊勢崎市教育委員会　1985
103　板垣一郎「華蔵寺裏山古墳」『伊勢崎市史』　通史編１　原始古代　伊勢崎市　1987
104　「八幡町遺跡発掘調査報告書」　伊勢崎市教育委員会　1999
105　「八幡町遺跡Ｂ地区」　伊勢崎都市計画道路３・３・３号北部環状線建設工事に伴う発掘調査報告書　伊勢崎市教育委員会　1988

106　『八幡町遺跡Ｄ地区』　伊勢崎都市計画道路３・３・３号北部環状線建設工事に伴う発掘調査報告書　伊勢崎市教育委員会　1990
107　「縄文文化のはじまり」『伊勢崎市史』通史編１　原始古代　伊勢崎市　1987
108　『大沼下遺跡　西福岡遺跡』　伊勢崎北部土地改良事業に伴う昭和51年度発掘調査報告書　伊勢崎市教育委員会　1977
109　『中組遺跡』　群馬県立伊勢崎商業高等学校第２体育館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
　　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団2001
110　『中組遺跡』　県立伊勢崎商業高校セミナーハウス建設に伴う発掘調査　群馬県教育委員会　1985
111　『中組遺跡』　市道１－711号線道路改良工事に伴う発掘調査報告書　伊勢崎市教育委員会　1982
112　『お富士山古墳　範囲確認調査報告書』　伊勢崎市教育委員会　1990
113　『西太田遺跡』　伊勢崎都市計画道路３・３・３号線及び取付道路改良工事に伴う発掘調査報告書　伊勢崎市教育委員会　1983

第３章　遺構と遺物

第１節　大沼下遺跡の調査

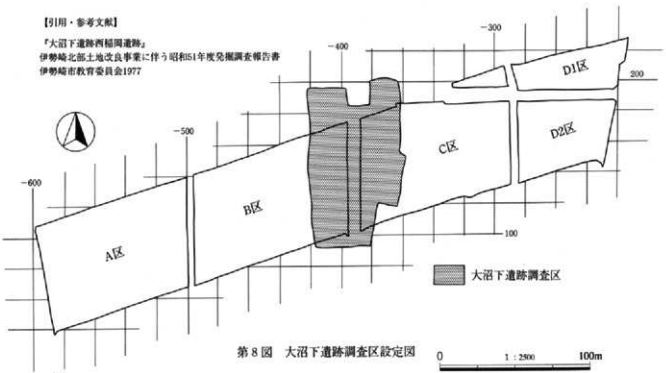
Ⅰ　遺跡の概要

大沼下遺跡は、伊勢崎市教育委員会が昭和52（1977）年２月８日から３月12日まで発掘調査を実施した。調査報告書は『大沼下遺跡西福岡遺跡』として伊勢崎市教育委員会より報告されている。発掘調査の原因は伊勢崎北部土地改良事業である。発掘調査終了後土地改良事業が実施され、微高地は削平され、低地は盛土されて、現在の平坦な地形になっている。

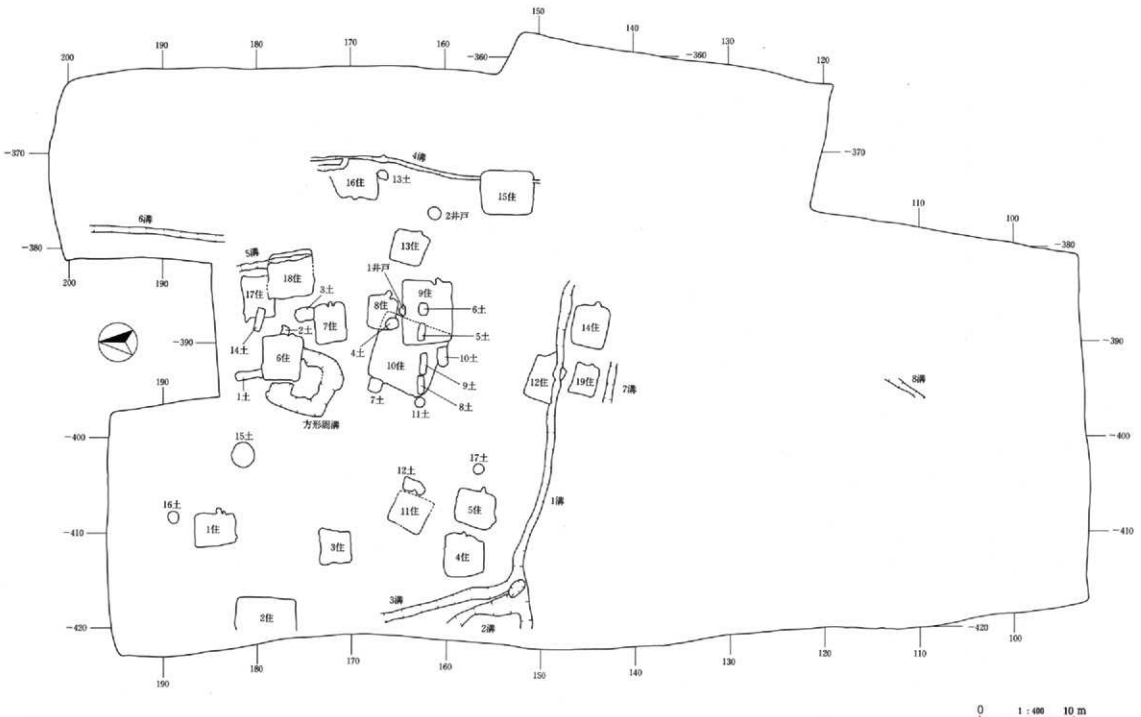
大沼下遺跡は波志江沼の西側から南に伸びるローム台地上で、西は緩く傾斜して低地に、東から南にかけては急激に傾斜し、波志江沼から続く深い低地となる。波志江中屋敷東遺跡のＢ区からＣ区のローム台地が大沼下遺跡の発掘調査区にあたる。この発掘調査区は南北100ｍ、東西60ｍの6,000㎡で、土地改良事業で土砂の移動により削平される部分が発掘調査の対象となった。10ｍグリッドを設定し、表土を重機により掘削した。今回の報告で、グリッド名称は波志江中屋敷東遺跡のグリッドに変更して使用している。表土は現在の耕作土で、調査区の2/3にあたる西側は表土が薄く10㎝程で遺構確認面のローム面に達する。東側部分は表土が西側と同様であるが、表土とロームの間に20㎝程黒色粘質土があり、この黒色粘質土を遺構確認面として発掘調査を行った。

発掘調査で、住居跡19軒、溝８条、方形周溝状遺構１基、土坑16基、井戸２基等を確認した。19軒の住居跡の時期別の内訳は古墳時代前期６軒、奈良時代７軒、平安時代４軒、不明２軒である。

なお、発掘調査における発掘調査資料および出土遺物は伊勢崎市教育委員会が保管している。



第８図　大沼下遺跡調査区設定図



第９図　大沼下遺跡全体図

Ⅱ　住居

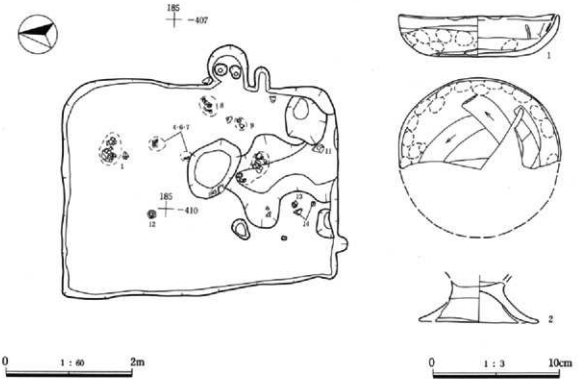
大沼下遺跡１号住居（第10・11図、ＰＬ２・13）

遺構　Ｂ区北側のローム台地、180-405G付近で確認された。住居の形状は、南北方向に長軸をとる長方形で、長軸4.32m、短軸3.40mである。壁高は西壁から北壁で９～18cmで、南壁は攪乱がひどい。床面は固く踏み固められている。住居中央の楕円形のピットは深さ20cm、このピットから竈まで断続的に焼土の密集する部分が確認された。竈は東壁やや南寄りに設置され、燃焼部に並列する２つのピットが確認された。竈内は焼土や灰で充塡されていた。南東のコーナー付近で不整形な方形の貯蔵穴が確認された。貯蔵穴の深さは25cmほどである。重複する遺構はない。床面積は12.92㎡であった。

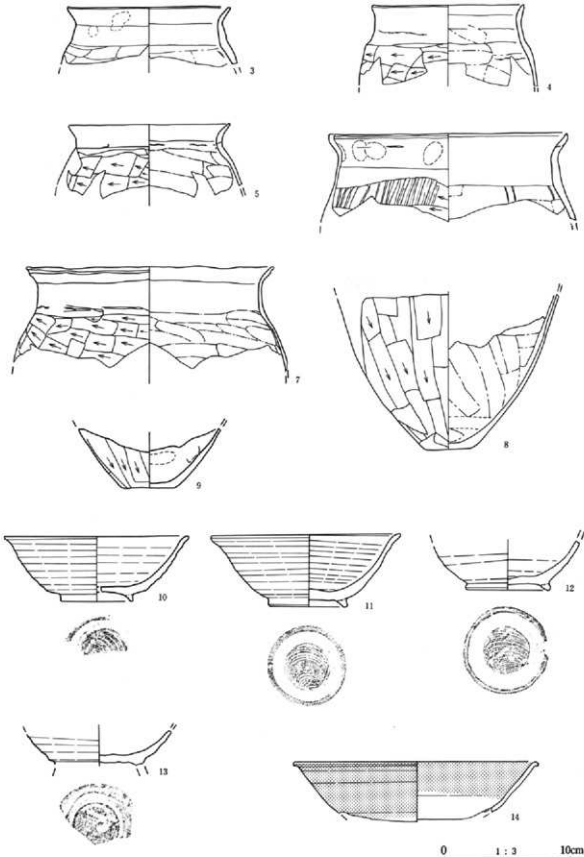
遺物　１～９・11～14は床面からの出土で、10は覆土中の出土である。竈前を中心に住居の南東半分に集中している。３～９は土師器甕である。３～７は口縁部から胴部で口縁部の断面形は、「コ」の字状である。８・９は土師器甕の胴下半から底部で上から下に篦削りが施される。時期は９世紀後半と思われる。１は土師器坏である。体部に指頭圧痕、底部は篦削り。９世紀後半である。10～13は須恵器椀で、轆轤右回転成形で、回転糸切り後高台貼付がなされる。９世紀後半と思われる。14は灰釉陶器椀で底部を欠損する。内外面ともやや緑色味のある釉が施され、見込み部には刷毛塗りの痕跡がみられる。９世紀中頃と思われる。

図示した遺物以外に出土遺物は土師器・須恵器等336点である。内訳は土師器甕263点、土師器坏40点、土師器高坏１点、須恵器甕２点、須恵器坏・椀29点、陶器１点である。土師器甕に「Ｓ」字状口縁台付甕の破片４点、９世紀代と思われる台付甕の台部破片２点が含まれる。

出土遺物等から住居の時期は、平安時代９世紀後半と考えられる。



第10図　大沼下遺跡１号住居跡・出土遺物(1)



第11図　大沼下遺跡1号住居跡出土遺物(2)

表6　大沼下遺跡1号住居跡出土遺物観察表

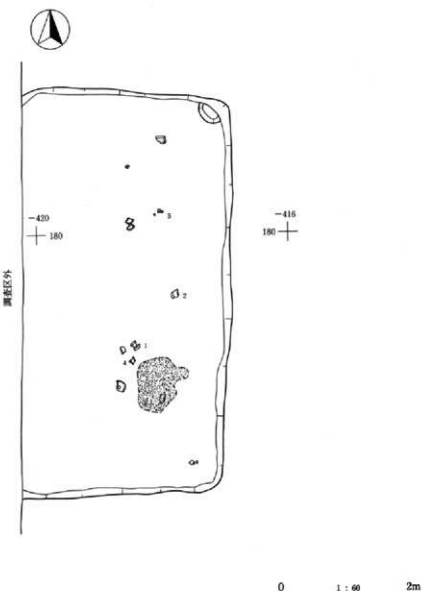
No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量　目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 坏	1住No 3	①12.6 ③ 3.1	口縁部やや外傾。内面体部～外面口縁部横撫で。外面指頭押さえ。内面底部撫で。内面体部に跳状工具の木口の痕跡。	①細かい砂粒に白色粒を含む ②橙(7.5YR6/6)	口縁部～底部1/2 平底 9世紀後半
2	土師器 台付甕	1住 床面一括	②(9.4) ③(3.2)	脚端部が水平に近く反る。内外面横撫で。	①細かい砂粒を含む ②橙(5YR6/6)	脚部1/2のみ
3	土師器 甕	1住 床面一括	①(12.8) ②(4.5)	口縁部は頸部から中程まで直線的に内傾し、中程から外反する。口縁部内外面指押さえ後横撫で。胴部外面箆削り。胴部内面箆撫で。頸部の器肉は厚い。「コ」の字状口縁。	①細かい砂粒に白色粒を含む ②にぶい橙(5YR6/6)	口縁部～胴上部 1/4 9世紀後半
4	土師器 甕	1住 No 4－1	①(12.0) ②(6.4)	口縁部外面横撫で。胴部外面横方向の箆削り。口縁部内面口唇部横撫で、胴部まで箆撫で(箆調整)。「コ」の字状口縁。	①細かい砂粒を含む ②明赤褐(2.5YR5/6)	口縁部～胴部1/4 9世紀後半
5	土師器 甕	1住 床面一括	①(12.6) ③(4.7)	口縁部は頸部から中程まで直立し、外反気味に立ち上る。頸部の器肉は厚い。頸部内外面に接合の痕跡がみられる。頸部外面に1条棒状工具による撫で。胴部外面箆削り。口縁部内外面横撫で。胴部内面箆撫で。「コ」の字状口縁。	①細かい砂粒に白色粒を含む ②にぶい褐(5YR5/6)	口縁部～胴上部 1/3 9世紀後半
6	土師器 甕	1住No 4 床面一括	①(18.8) ③(6.9)	口縁部と頸部の境界が不明瞭。頸部から中程まで直線的に内傾し、中程から外反して立ち上がる。口唇部外面に1条の沈線。口縁部内外面横撫で。胴部外面箆削り。胴部内面箆撫で。頸部の器肉は厚い。「コ」の字状口縁。	①細かい砂粒に2㎜の小石を含む ②にぶい褐(7.5YR5/3)	口縁部～胴上部 1/4 9世紀後半
7	土師器 甕	1住No 4	①(19.4) ③(8.0)	口縁部外面横撫で、口唇部直下1条の沈線。頸部指押さえ後横撫で、頸部直下の胴部箆削り時に頸部に箆の先端があたり掻き跡がみえる。胴部外面箆削り。胴部内面箆撫で。口縁部内面横撫で。頸部が直線的に立ち上がり口縁部が外傾する。	①僅かに細かい砂粒を含む ②にぶい黄褐(10YR5/3)	口縁部～胴上部 1/4 9世紀後半
8	土師器 甕	1住No 5	②　3.8 ③(12.2)	胴部外面縦方向の箆削り。胴部内面斜め方向の箆撫で。底部付近は横方向の箆撫で。	①細かい砂粒に白色粒を含む ②橙(7.5YR6/6)	胴部下半1/2～底部。 9世紀後半
9	土師器 甕	1住No 7	②(4.2) ③(4.2)	胴部～底部外面箆削り。胴部内面箆撫でと指撫で。	①細かい砂粒を含む ②明褐(7.5YR5/6)	底部～胴下部3/4 9世紀後半
10	須恵器 椀	1住一括	①(14.5) ②(5.6) ③(5.2)	轆轤右回転成形。口縁部外反。底部回転糸切り後高台貼付。撫台のための指撫で。外面轆轤目残る。内面回転箆成形か。	①細かい白色粒を含む ②橙(5YR6/6)	口縁～底部1/2 9世紀後半
11	須恵器 椀	1住No 9	①(14.8) ②　6.3 ③　5.7	轆轤右回転成形。口縁部外反。外面に轆轤目残る。底部回転糸切り後、高台貼付後撫で。	①3㎜程の小石・細かい白色粒と黒色粒含む ②灰(5Y6/1)	口縁部1/2欠損 9世紀後半
12	須恵器 椀	1住No 1	②　6.5 ③(3.9)	轆轤右回転成形。回転糸切り後高台貼付。高台貼付後撫で。内外面に撫しを施す。	①5㎜程の小石と細かい白色粒を含む ②オリーブ黒(5Y3/1)	口縁部欠損 9世紀後半
13	須恵器 椀	1住No11	②(7.0) ③(3.6)	轆轤右回転成形。回転糸切り後高台貼付。高台剥落。	①2㎜程の砂粒、白色粒含まる ②にぶい橙(7.5YR7/4)	口唇部～体部上半欠損。底部1/3 9世紀後半
14	灰釉陶器 椀	1住No12	①18.8 ③(4.7)	轆轤成形。体部は丸味を帯びて立ち上がる。口唇部は水平より下がり気味に外側に捉く発出する。釉薬は見込み部に刷毛塗りの痕跡がみられる。	①極めて細かい粘土に僅かに砂粒を含む ②オリーブ灰(10Y6/2)	口縁部～体部下半2/3。底部欠損 9世紀中頃

大沼下遺跡2号住居（第12・13図、ＰＬ２・13）

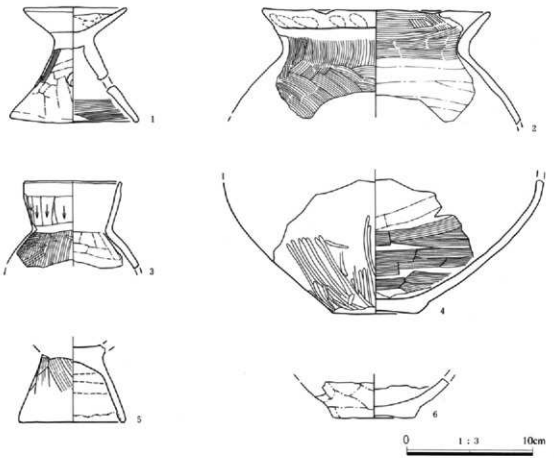
遺構　Ｂ区ローム台地の北側、175-415G付近で確認された。住居の西側半分が調査区外のため未調査で全体の形状等は不明確であるが、南北方向に長軸をとる長方形と推定される。長軸6.50ｍ、短軸3.35ｍ以上で、壁高16～27㎝である。床面は、固く踏み固められている。南東隅近くで、焼土及び炭化物が確認された。炉の可能性が考えられる。覆没土は住居中央付近で、床面から２㎝程上に８㎝程の厚さでAs-Cがレンズ状に堆積していた。土層断面図が掲載できないが、As-Cは１次堆積というより２次堆積の可能性が強いものと思われる。調査した床面積は18.59㎡であった。

遺物　住居の東側から比較的多く出土した。１～５は床面より出土。６は覆土中の出土である。２・４は土師器甕である。２は口縁部から胴上半の破片で口縁部外面に指頭圧痕が、内面に横方向の木口状工具の撫でが、外面頸部から胴部は木口状工具の撫で、内面は横方向の箆状工具の撫でが施される。４は底部付近の破片で外面に縦方向の箆磨き、内面木口状工具の撫でが施される。２・４とも４世紀前半と考えられる。３は土師器坩で胴下半部を欠損する。口縁部外面に縦方向の撫で、胴外面に縦方向を主体とする箆磨きが施される。４世紀前半と思われる。５は土師器台付甕の台部である。下端部内面折り返しや天井部に砂を塗り込む特徴から「Ｓ」字状口縁台付甕と考えられ、４世紀前半のものと推定される。１は土師器器台で脚部1/2を欠損する。脚部に透孔が３個と推定される。４世紀前半と思われる。６は土師器甕の底部で、底部外面中央部が窪み、ドーナツ状である。４世紀前半と思われる。図示した遺物の他に土師器が26点出土している。内訳は土師器甕24点、高坏２点である。土師器甕に「Ｓ」字状口縁台付甕の破片４点が含まれる。

As-Cの堆積を２次堆積と考えることと出土遺物等から本住居は、４世紀前半と思われる。



第12図　大沼下遺跡２号住居跡



第13図　大沼下遺跡２号住居跡出土遺物

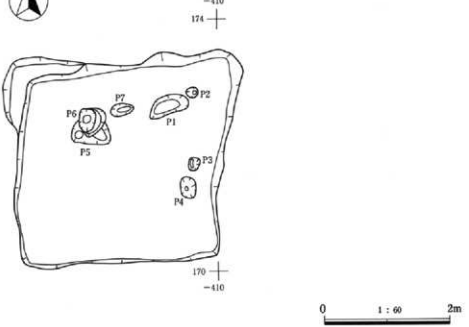
表７　大沼下遺跡２号住居跡出土遺物観察表

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 器台	２住No４	① 8.1 ② 10.0 ③ 9.0	器受け部口縁部内外面横撫で、内面指撫で。連結部横撫で。脚部外面水口状工具による撫で、下端部横撫で。内面上部指撫で、下部水口状工具による横方向の撫で。透孔３個あり。	①細かい砂粒に黒色粒を含む ②にぶい黄橙 (10YR7/4)	脚部1/2欠損 ４世紀前半
2	土師器 甕	２住No５	①(18.0) ③(8.5)	口縁部外面粘土積み上げの痕跡、指押さえ後横撫で。胴部外面縦・斜め方向の水口状工具による撫で。口縁部内面水口状工具による横方向の撫で。胴部内面荒撫で。	①細かい砂粒を含む ②橙(7.5YR7/6)	口縁部～胴上部 1/4 ４世紀前半
3	土師器 壺	２住一括	①(7.2) ③(6.7)	口縁部やや内湾する。口縁部内外面横撫で。口縁部外面縦方向の弱い荒削りあるいは、荒撫で。頸部に１条棒状工具による撫で。胴部外面縦方向後横方向の荒磨き。胴部内面荒撫で。	①細かい砂粒に白色粒・黒色粒を含む ②橙(5YR6/6)	口縁部～胴上部 1/3 ４世紀前半
4	土師器 甕	２住No３	② 6.6 ③(10.5)	胴部外面縦方向の荒磨き。胴部内面水口状工具による横方向の撫で。底部付近は縦方向の撫で。	①やや粗い砂粒に白色粒を含む ②にぶい黄橙 (10YR7/4)	胴部下半～底部 ４世紀前半
5	土師器 台付甕	２住No７	② 8.4 ③(5.5)	下端部内側に折り返し。直線的に外側に開くことから「Ｓ」字状口縁台付甕の台部と推定する。外面横水口状工具による横目。下部は横撫で。内面天井部砂粒を塗り込でいる。横方向の指撫で。	①やや粗い砂粒を含む ②浅黄(2.5Y7/3)	台部のみ ４世紀前半
6	土師器 甕	２住覆土	② 6.4 ③(3.0)	底部外面の中央部が窪む。(ドーナツ状底部) 外面胴部弱い荒削り。内面の整形は不明瞭であるが強での可能性。	①細かい砂粒と白色粒をやや多く含む ②にぶい黄橙 (10YR6/4)	底部～胴部 ４世紀前半

大沼下遺跡３号住居（第14図、ＰＬ３）

遺構　Ｂ区ローム台地、170-410G付近で確認された。住居の形状は不整形な方形で、長軸3.15ｍ、短軸3.05ｍ、壁高10～15㎝ほどである。北西隅が階段状になっているが他の遺構との重複の可能性が考えられる。竈、貯蔵穴等の施設は確認できなかった。ピットは７基確認できた。Ｐ６は床面から56㎝ほど掘り込まれていた。他のピットは６～15㎝ほどである。床面積は9.20㎡であった。

遺物　図示しなかったが土師器80点が出土している。内訳は土師器甕75点、土師器高坏１点、須恵器甕１点、陶器２点、石１点であった。土師器甕に「Ｓ」字状口縁台付甕の破片５点が含まれる。



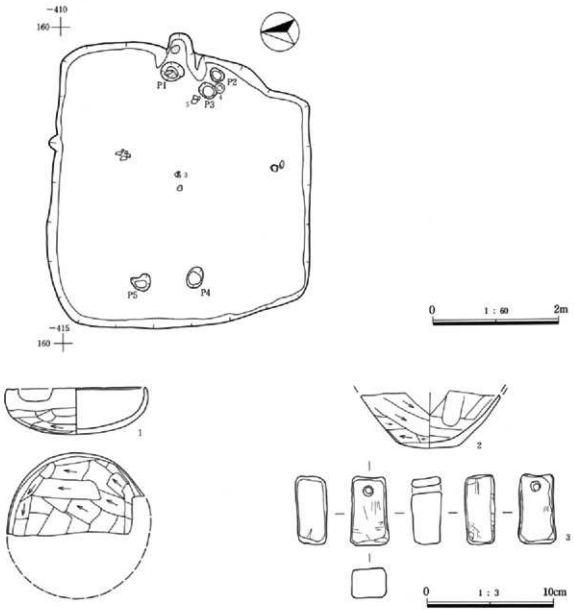
第14図　大沼下遺跡３号住居跡

大沼下遺跡4号住居（第15・16図、ＰＬ３・４・14）

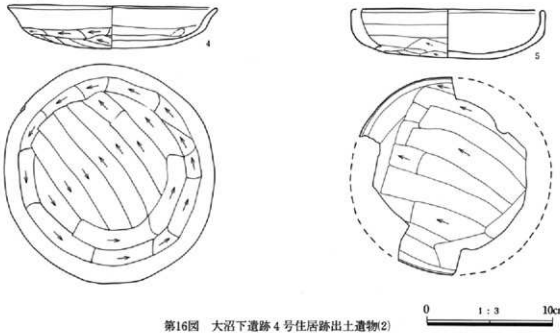
遺構　Ｂ区ローム台地、155-410G付近で確認された。住居の形状は不整形な方形で、長軸4.55ｍ、短軸4.15ｍで、壁高22～49㎝である。竈は東壁中央に設置され、貯蔵穴等の施設は確認できない。床面積は14.14㎡であった。

遺物　竈付近を中心に出土している。１・２以外は床面出土である。１・４・５は土師器坏で底部は篦削り、体部は調整痕が不明瞭である。いずれも８世紀前半と思われる。３は砥石で住居中央で出土した。上端部に径７㎜の孔があけられている。木口以外の４面に使用による擦痕がみられる。石材は砥沢石である。２は土師器甕の胴下部から底部で外面に篦削りの痕跡がみられる。図示した遺物の他に173点が出土している。内訳は土師器甕123点、土師器坏23点、高坏３点である。

出土遺物等から本住居の時期は、奈良時代８世紀前半と思われる。



第15図　大沼下遺跡４号住居跡・出土遺物(1)



第16図　大沼下遺跡４号住居跡出土遺物(2)

表８　大沼下遺跡４号住居跡出土遺物観察表

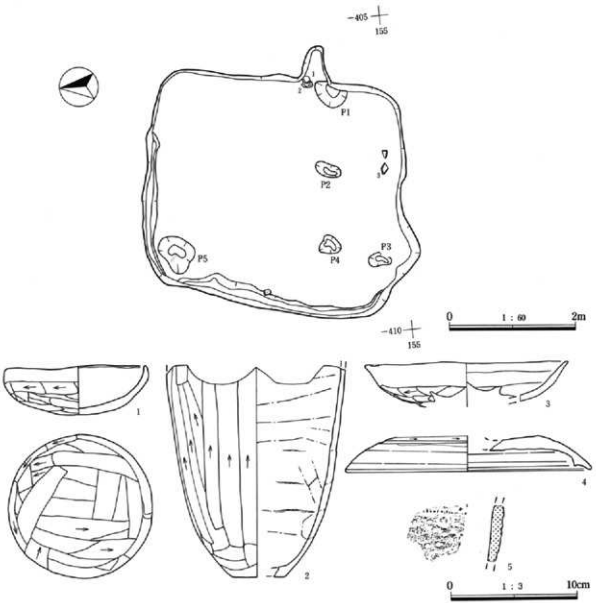
No	種器	型種	出土遺構出土層位	量(cm)	目	成・整形技法の特徴		①粘土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器	坏	４住 覆一括	①(11.1) ③ 3.6		口縁部はやや内湾する。口縁部内外面横撫で。内面体部横撫で。内面底部撫で。外面体部～底部篦削り。		①やや砂粒・白色粒を多く含む ②内面　橙(5YR6/6) 外面　オリーブ黒(5Y3/1)	口縁～底部1/2 ８世紀前半
2	土師器	甕	４住一括	② 4.5 ③(4.4)		胴部外面横～斜め方向の篦削り。底部外面篦削り。内面胴下部横方向の撫で。その上部は縦方向の撫で。		①細かい砂粒に白色粒を含む ②明褐(7.5Y5/6)	底部～胴下半のみ ８世紀前半
3	石器	砥石	４住No４ 付近床面	④ 5.5 ⑥ 2.3	⑤ 2.7	正面・両側面・裏面の４面が使用面である。上部に径７mmの孔があけられている。			砥沢石
4	土師器	坏	４住No１	① 16.6 ③ 3.3		口縁部は外反する。口縁部内外面と体部内外面横撫で。底部外面篦削り。底部内面指頭押さえ後撫で。		①３mm程の小石と細かい砂粒に白色粒・黒色粒を含む ②橙(5YR6/6)	完形 ８世紀前半
5	土師器	坏	４住No２・床面直上・覆土・カマド覆土	① 15.4 ③ 3.7		口縁部直立。内面底部撫で、体部～口縁横撫で。外面口縁横撫で。体部～底部篦削り。		①３mm程の小石と細かい白色粒を含む ②橙(7.5YR6/6)	口縁部1/4 ８世紀前半

大沼下遺跡５号住居（第17図、ＰＬ４・14）

遺構　Ｂ区ローム台地、４号住居の東側、155-405Gで確認された。形状は方形で長軸4.05ｍ、短軸3.60ｍで、壁高は９～24cmで南壁が浅い。竈は東壁やや南寄りに設置されている。貯蔵穴等の施設は確認されなかった。周溝は北壁と西壁で確認された。床面積は13.42㎡であった。

遺物　竈の中と南壁付近で出土している。４以外は床面出土である。１・３は土師器坏である。１は体部から底部にかけて丸味をおびる。１・３とも８世紀前半と思われる。２は土師器甕で胴上半部を欠損する。縦方向に長い篦削りが特徴である。内面に輪積みの痕跡がみられる。４は須恵器の蓋で、内面に返しが摘み出されている。摘みは欠損。７世紀末～８世紀初めと思われる。５は縄文土器でフジツボ状の貼付文に円形の竹管状の刺突文が施される。前期二ツ木式と思われる。図示した遺物以外に212点の出土遺物があった。内訳は土師器甕154点、土師器坏56点、高坏１点、石１点である。

本住居は出土遺物等から奈良時代８世紀前半と思われる。



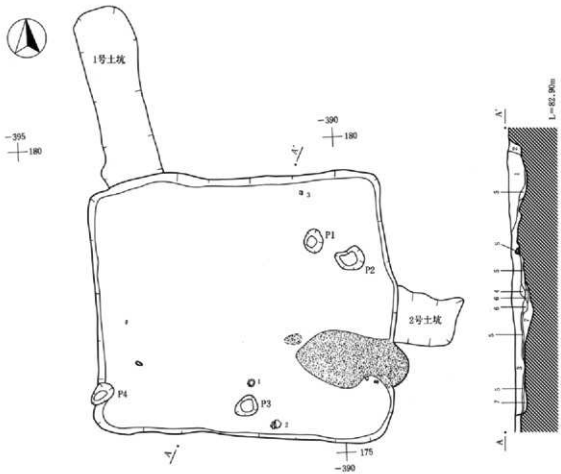
第17図　大沼下遺跡5号住居跡・出土遺物

表9　大沼下遺跡5号住居跡出土遺物観察表

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 坏	5住No 1	① 11.2 ③ 3.7	口縁部やや内傾する。口縁部外面横撫で。体部～底部箆削り。内面体部～底部横撫で。	①白色粒と少量の3㎜程の小石を含む　②橙(5YR6/6)	完形 8世紀前半
2	土師器 甕	5住No 2	②(4.1) ③(16.5)	胴部外面縦方向の箆削り。底部付近横方向の箆削り。内面横方向の指撫で。輪積みの痕跡がみられる。	①粗い砂粒を多く含み、石英、白色・黒色粒を含む ②橙(5YR6/6)	底部～胴部下半 1/2
3	土師器 坏	5住No 4	①(16.0) ③(3.1)	口縁部やや外反する。口縁部内外面横撫で。底部丸底で、内面撫で。外面箆削り。箆削りの痕跡不明瞭。	①細かい砂粒と白色粒・黒色粒を含む ②橙(5YR6/6)	口縁部～底部1/4 8世紀前半
4	須恵器 蓋	5住一括	②(2.8) ③(19.2)	右回転轆轤成形。天井部は右回転箆削り。逆しは摘み出しで小さく鋭い。	①細かい砂粒に3㎜程の小石を含む　②褐灰(10YR5/1)	摘み部欠損 7世紀末～8世紀初め
5	縄文 深鉢	5住覆土		フジツボ状の貼付文に円形の刺突の他、竹管の刺突文がみられる。	①胎土に繊維を含む ②にぶい黄橙(10YR5/3)	深鉢胴上部破片 縄文時代前期二ツ木式

大沼下遺跡６号住居（第18・19図、ＰＬ５・14）

遺構　Ｂ区ローム台地、175-390Gで確認された。南西部で方形周溝遺構、北壁で１号土坑、東壁で２号土坑と重複する。方形周溝遺構が６号住居より古い。１・２号土坑が６号住居より新しい。形状は方形で、長軸4.80ｍ、短軸4.10ｍで、壁高は９～16㎝である。西壁の壁高が低く、北・東・南の壁高が高い。竈は確認されていないが、東壁南寄りで焼土を確認している。この部分に竈が設置された可能性が考えられる。貯蔵穴等の施設は確認されなかった。床面積は17.69㎡であった。



６号住居
1．黒褐色砂質土層　多量のロームブロックを混入し、又軽石もかなり含んでいる。
2．暗褐色砂質土層　ロームブロックを少量混入し、軽石も見られる。
3．黒色砂質土層　ローム小ブロックを含み、軽石も見られる。
4．黒褐色砂質土層　ローム粒、炭化粒、軽石を混入。
5．暗黒褐色砂質土層　少量のローム粒と軽石を含む。
6．暗黒褐色砂質土層　ローム大ブロックを混入し、軽石も含む。
7．褐色ローム土層　黒色土を少量含む。

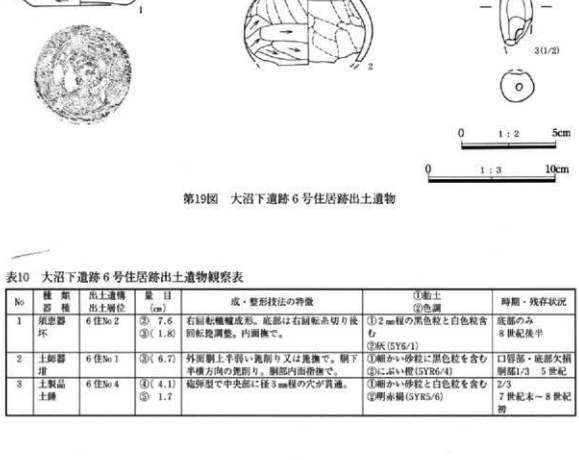
0　1：60　2m

第18図　大沼下遺跡６号住居跡

遺物　床面からの遺物出土は多くなく住居全体に僅かに出土している。1～3は床面出土である。1は須恵器坏の底部で回転糸切り後、体部下端部から底部にかけて回転篦調整が施されている。8世紀後半と思われる。2は土師器坩で胴下半から底部を欠損する。胴最大径付近に横方向の篦削りが施される。内面は篦撫でと思われる。5世紀の所産と思われるが、方形周溝状遺構と重複する部分からの出土であり、本来は本住居に伴うものではない可能性も考えられる。3は土錘で一部欠損する。

図示した遺物の他に50点出土している。内訳は土師器甕28点、土師器坏16点、須恵器甕1点、須恵器坏・椀4点、陶器1点である。土師器甕に本住居の時期に相当する台付甕の台部破片が1点含まれる。

本住居は出土遺物から奈良時代8世紀後半と考えられる。



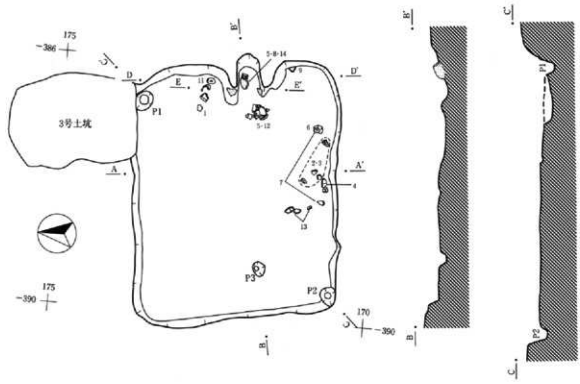
第19図　大沼下遺跡6号住居跡出土遺物

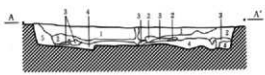
表10　大沼下遺跡6号住居跡出土遺物観察表

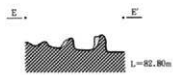
No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	須恵器 坏	6住No 2	③ 7.6 ④(1.8)	右回転横幅成形。底部は右回転糸切り後回転篦調整。内面撫で。	①2㎜程の黒色粒を含む ②灰(5Y6/1)	底部のみ 8世紀後半
2	土師器 坩	6住No 1	③(6.7)	外面胴上半弱い篦削り又は篦撫で。胴下半横方向の篦削り。胴部内面指撫で。	①細かい砂粒に黒色粒を含む ②にぶい橙(5YR6/4)	口唇部・底部欠損 胴部1/3　5世紀
3	土製品 土錘	6住No 4	④(4.1) ⑤ 1.7	砲弾型で中央部に径3㎜程の穴が貫通。	①細かい砂粒と白色粒を含む ②明赤褐(5YR5/6)	2/3 7世紀末～8世紀初

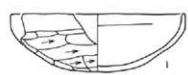
大沼下遺跡7号住居（第20～22図、ＰＬ５・６・14・15）

遺構　Ｂ・Ｃ区の境界のローム台地、170-385Gで確認された。北壁で3号土坑と重複する。3号土坑が7号住居より新しい。住居の形状は、東西方向に長軸をとる長方形で、長軸4.15ｍ、短軸3.30ｍで、壁高は17～30㎝である。北東側の壁高が高く、北西側の壁高が低い。竈は東壁中央に設置されている。右袖の残存状況は悪いが、両袖に石を芯材として使用している。ピットが3基確認された。北東隅と南西隅でＰ１とＰ２が対になるように確認された。柱穴の可能性が考えられる。ピットの深さは、Ｐ１が18㎝、Ｐ２が14㎝、Ｐ３が12㎝である。床面積は11.16㎡であった。





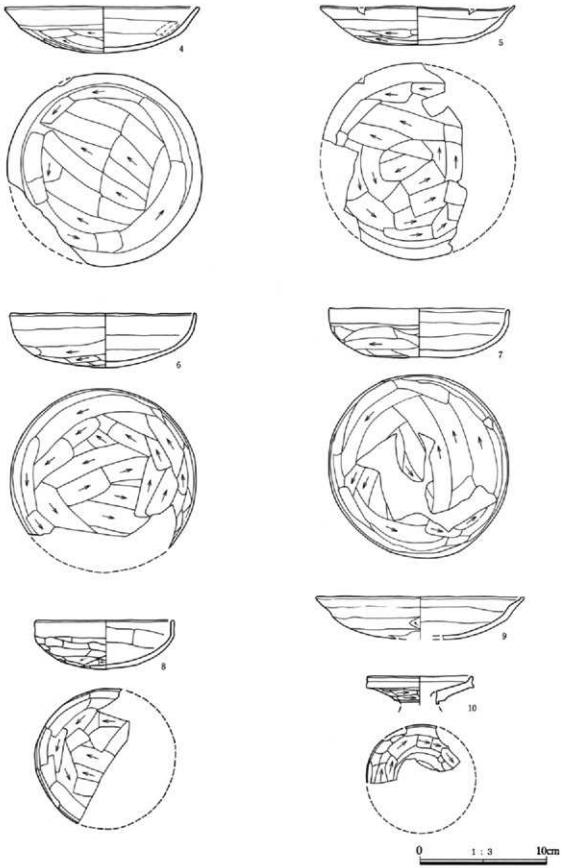




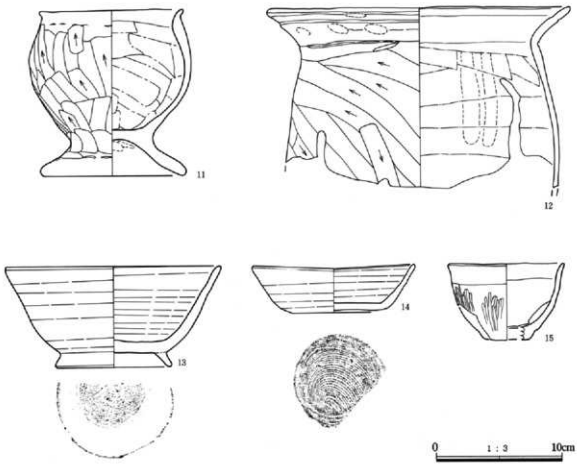
7号住居

1．暗褐色砂質土層　軽石粒と焼土粒と炭化粒を含む。
2．黒褐色砂質土層　軽石粒と焼土粒と炭化粒を含む。
3．暗褐色砂質土層　多量のロームを含み又軽石も見られる。
4．褐色ローム土層　黒色のブロックが少し見られ、軽石も少量含む。
5．暗褐色砂質土層　1層とほぼ同様であるが、ローム粒を含む。

第20図　大沼下遺跡7号住居跡出土遺物(1)



第21図　大沼下遺跡7号住居跡出土遺物(2)



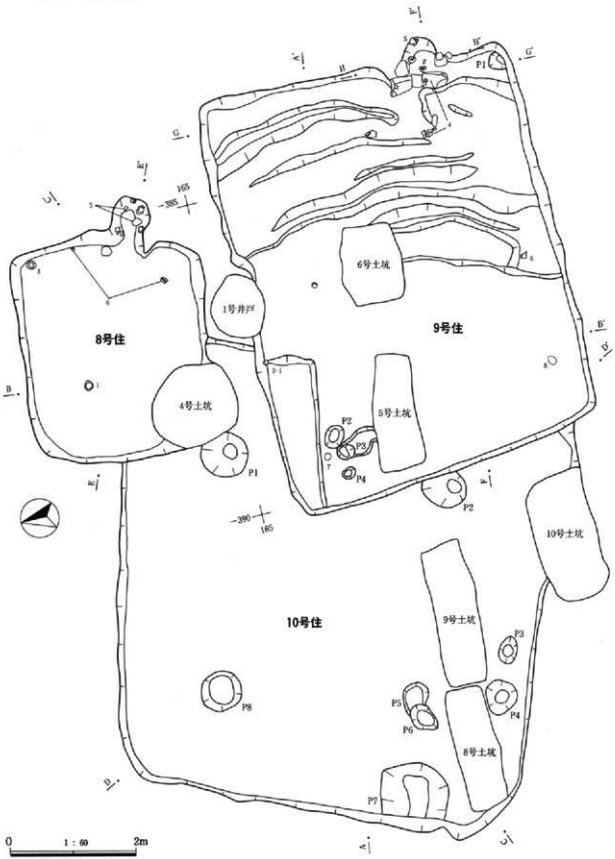
第22図　大沼下遺跡7号住居跡出土遺物(3)

遺物　竈付近から南壁付近にかけての床面から遺物が多く出土している。1～9は土師器坏で、1・2・8は底部が丸底気味で、口縁部は直立する。3～5・9は体部と底部の境界に僅かに稜を有し、口縁は外反気味に立ち上がる。底部から体部に篦削りを施す。8世紀前半と思われる。6・7は底部がやや平底気味で口縁部が直立する。8世紀中頃と思われる。13・14は須恵器椀で13は篦起こし後高台貼付である。14は底部回転糸切り後、底部周辺部を回転篦調整がおこなわれている。8世紀中頃と思われる。12は土師器甕で口縁部から胴上半である。頸部の断面形は「く」の字状で、胴上部は斜め方向の篦削りである。8世紀前半と思われる。11は台付甕で台部の一部を欠損する。胴部外面下から上に縦方向の篦削りである。台部は扁平で厚ぼったい。10は土師器器台の器受け部で脚部を欠損する。7号住居覆土中破片と波志江中屋敷東遺跡4号溝の破片と接合する。4世紀と思われる。15は掘方調査時の出土である。土師器小型鉢で底部を欠損する。胴外面に丁寧な篦磨きが施される。4世紀と思われる。15は本住居に伴う遺物とは考えられない。図示した遺物の他に167点の遺物が出土している。内訳は土師器甕118点、土師器坏45点、土師器高坏1点、土師器器台1点、須恵器坏1点、陶器1点である。

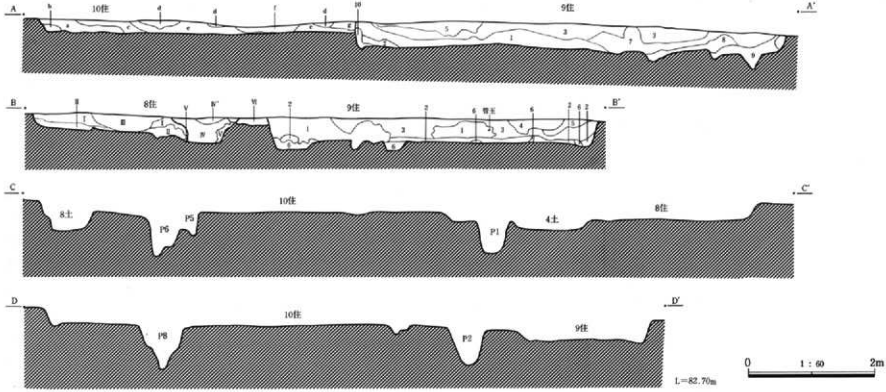
本住居は出土遺物等から奈良時代8世紀前半から中頃と考えられる。

表11　大沼下遺跡７号住居跡出土遺物観察表

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①粘土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 坏	７住No12	①(13.6) ③　4.6	口縁部直立。内面体部下半～底部撫で。体部上半～口縁部横撫で。外面口縁部横撫で。体部下半～底部篦削り。	①細かい黒色粒・白色粒と砂粒を含む ②橙(7.5YR7/6)	口縁部1/6～底部1/3 ８世紀前半
2	土師器 坏	７住No５	①　11.8 ③　3.4	口縁部直立。口縁部内外面横撫で。底部内面撫で。外面底部～体部篦削り。内外面口縁部に漆塗りの痕跡。	①細かい砂粒・白色粒を含む ②橙(5YR6/6)	口縁部～底部の一部欠損 ８世紀前半
3	土師器 坏	７住No５	①(15.6) ③　3.0	口縁外端、内外面横撫で。外面体部～底部篦削り。内面体部～底部撫で。	①細かい砂粒と僅かに３mm程の小石を含む ②橙(5YR6/8)	口縁～底部1/4 ８世紀前半
4	土師器 坏	７住No４	①　15.2 ③　3.6	口縁部と底部の境界にゆるい稜を有する。底部は丸底で、外面篦削り、内面撫で。指押さえの痕跡。口縁部内外面横撫で。口縁部外反。	①２mm程の砂粒と細かい白色粒を含む ②橙(7.5YR7/6)	口縁部一部欠損 ８世紀前半
5	土師器 坏	７住No８・９	①　15.5 ③　3.1	口縁部外反。口縁部内外面横撫で。外面体部～底部篦削り。内面底部撫で。	①細かい砂粒・黒色・白色粒を含む。砂粒を多く含む　②橙(7.5YR6/6)	口縁部1/2～底部2/3 ８世紀前半
6	土師器 坏	７住No６	①　14.2 ③　4.2	口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部内外面横撫で。外面底部篦削り。内面底部撫で。	①細かい砂粒と白色粒を含む ②にぶい橙(5YR6/4)	口縁部1/4欠損 ８世紀中頃
7	土師器 坏	７住No２・６・続土下・N１－E１G	①　14.2 ③　4.2	口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部内外面横撫で。外面底部篦削り。内面底部撫で。	①細かい砂粒と白色・黒色粒を含む ②にぶい橙(5YR6/6)	底部一部欠損 ８世紀中頃
8	土師器 坏	７住No９ N１－E１G	①(10.9) ③　3.8	口縁部直立、内外面横撫で。外面体部～底部篦削り。内面体部横撫で。内面底部撫で。	①細かい砂粒と僅かに２mm程の小石を含む ②橙(5YR6/6)	口縁～底部1/2 ８世紀前半
9	土師器 坏	７住No７	①(16.4) ③(3.3)	底部は丸底で、口縁部は外反する。口縁部内外面横撫で。底部外面篦削り。篦削りの痕跡は不明瞭。底部内面撫で。	①細かい砂粒を含む ②橙(7.5YR7/6)	口縁部～底部1/3 ８世紀前半
10	土師器 器台	７住覆土 流志江中屋敷東遺跡４溝No３	①(8.2) ③(2.2)	外面体部横方向の篦削り。内面撫で。口唇部外面重で面取りを施す。	①やや粗い砂粒を含む ②にぶい橙(7.5YR7/4)	器受け部1/3 ４世紀
11	土師器 台付甕	７住No10	①　11.2 ②　11.0 ③　13.0	口縁部内外面横撫で。外面頸部に胴部篦削り時の篦があたった跡がみられる。連結部篦削り。台部外面篦撫で後横撫で。内面横撫で、上部は指撫で。胴部内面篦撫で。	①やや粗い砂粒に白色粒を含む ②灰黄褐(10YR4/2)	台部下端僅かに欠損
12	土師器 甕	７住No８	①　24.0 ③(14.2)	口縁部外面指押さえ後横撫で。胴部外面篦削り。頸部外面に胴部篦削り時の篦があたった痕跡がみられる。口縁部内面横撫で。胴部内面縦方向の指撫で後横方向の篦撫で。頸部から口縁部が外反気味に立ち上がる。	①細かい砂粒に白色・黒色粒を含む ②橙(2.5YR6/8)	口縁部～胴上部2/3 ８世紀前半
13	須恵器 椀	７住No１	①(17.0) ②(9.0) ③　7.9	轆轤右回転成形。口縁部は外傾する。底部の切り離し技法は蹴起こしか。切り離し後高台貼付。内面に轆轤目が目立つ。	①細かい砂粒に３mm程の小石を含む ②灰白(2.5Y7/1)	口縁部1/4～底部1/2 ８世紀中頃
14	須恵器 椀	７住No９	①(12.6) ②　7.2 ③　3.7	轆轤右回転。回転糸切り後周辺回転篦削り。体部下端回転篦削り。口縁は底部から直線的で外傾する。	①２mm程の白色粒が目立つ。微細な黒色粒を含む ②灰(5Y6/1)	口縁1/3～底部2/3 ８世紀中頃
15	土師器 小型鉢	７住掘り方	①(9.1) ②(3.5) ③　6.0	口縁部内外面強い横撫で。外面胴部縦方向の幅２mm程の篦磨き。内面底部～胴部撫で。	①細かい砂粒と白色粒を少量含む ②浅黄(2.5Y7/3)	口縁1/4～底部僅かに残存 ４世紀



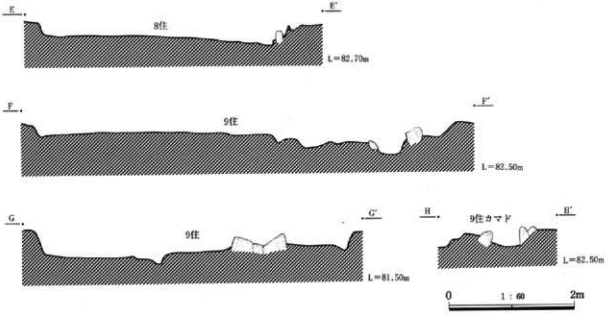
第23図　大沼下遺跡８号・９号・10号住居跡



8．9．10号住居

a．黒褐色砂質土層　　軽石粒を多く含み、ローム粒も少量含む。
b．黒褐色砂質土層　　aとほぼ同様であるが、ローム大ブロックを含む。
c．暗褐色砂質土層　　軽石粒、ローム粒を含む。
d．暗黒褐色砂質土層　軽石粒を多く含み、炭化粒を少量含む。
e．暗褐色砂質土層　　軽石粒を多量に含み炭化粒、焼土粒、ローム粒を含む。
f．黒褐色砂質土層　　軽石粒を多量に含みローム小ブロックを含む。
g．暗褐色砂質土層　　軽石大粒とローム粒を含む。
1．暗黒褐色砂質土層　軽石粒を多量に含み炭化粒、ローム粒を少量含む。
2．黒色砂質土層　　軽石粒、ローム粒、炭化粒を含む。
3．暗褐色砂質土層　　軽石粒、炭化粒、ローム粒を含む。
4．黒褐色砂質土層　　ローム大ブロックを含み、軽石粒、軽石(1cm)、焼土粒を含む。
5．黒褐色砂質土層　　軽石（1cm）、軽石粒、焼土粒、ローム粒を含む。
6．褐色ローム土層　　黒色土を混入。
7．黒褐色砂質土層　　ローム粒、軽石粒、焼土粒、炭化粒を含む。
8．暗黒褐色砂質土層　焼土粒を多量に含み炭化粒、軽石粒、ローム小ブロックを含む。
9．暗黒褐色砂質土層　8とほぼ同様であるがローム小ブロックを多く含む。
10．暗褐色砂質土層　　ローム粒を多量に含み軽石粒も含む。
10'　焼土粒を含む。
Ⅰ．暗褐色砂質土層　　ローム小ブロックと軽石粒を多く含む。
Ⅱ．黒褐色砂質土層　　ローム粒、軽石粒を含む。
Ⅲ．淡黒褐色砂質土層　ローム粒、軽石粒を多く含みローム小ブロックも少量含む。
Ⅳ．黒褐色砂質土層　　ローム小ブロックを多量に含み軽石粒も含む。
Ⅳ'　ローム小ブロックも少量含む。
Ⅴ．褐色ローム土層
Ⅵ．暗褐色砂質土層　　軽石粒を多く含む。

第24図　大沼下遺跡8号・9号・10号住居跡セクション、エレベーション



第25図　大沼下遺跡8号・9号住居跡エレベーション

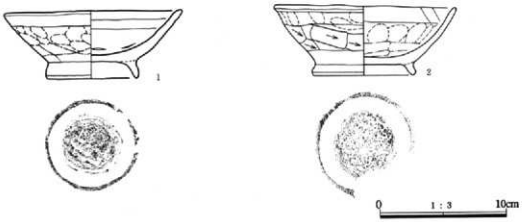
大沼下遺跡8号住居（第23～27図、ＰＬ６・15）

遺構　Ｂ・Ｃ区境界のローム台地、165-385Gで確認された。南西部で10号住居と4号土坑と重複する。10号住居が古く、4号土坑が新しい。住居の形状は方形で、長軸3.70m、短軸3.00mで、壁高は15～29cmである。竈は東壁南寄りに設置されている。貯蔵穴等の施設は確認されなかった。床面積は8.34m²であった。

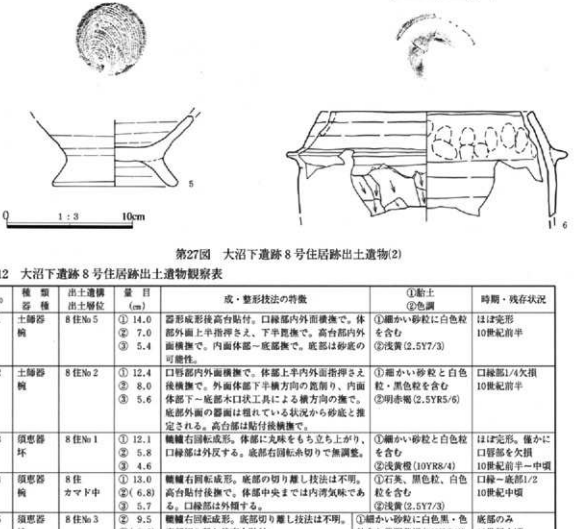
遺物　竈内及び竈周辺に遺物が出土している。1・2は土師器椀で高台が付く。体部に篦削り、指頭圧痕がみられる。器形は須恵器椀に類似する。2は底部が粗れていて砂底と思われる。2点とも10世紀前半と思われる。4・5は須恵器椀で右回転糸切成形である。底部切り離し技法は不明である。高台が付く。10世紀中頃と思われる。3は須恵器坏で右回転糸切成形、底部回転糸切りで無調整である。10世紀前半～中頃と思われる。6は土師器羽釜で口縁部が内湾し、胴部外面に縦方向の篦削りが施される。10世紀中頃と思われる。

図示した遺物の他に9点の遺物が出土している。内訳は土師器甕6点、土師器羽釜3点である。羽釜の破片は6と同一個体の可能性があるが接合しなかった。

本住居跡は出土遺物等から平安時代10世紀前半と考える。



第26図　大沼下遺跡8号住居跡出土遺物(1)



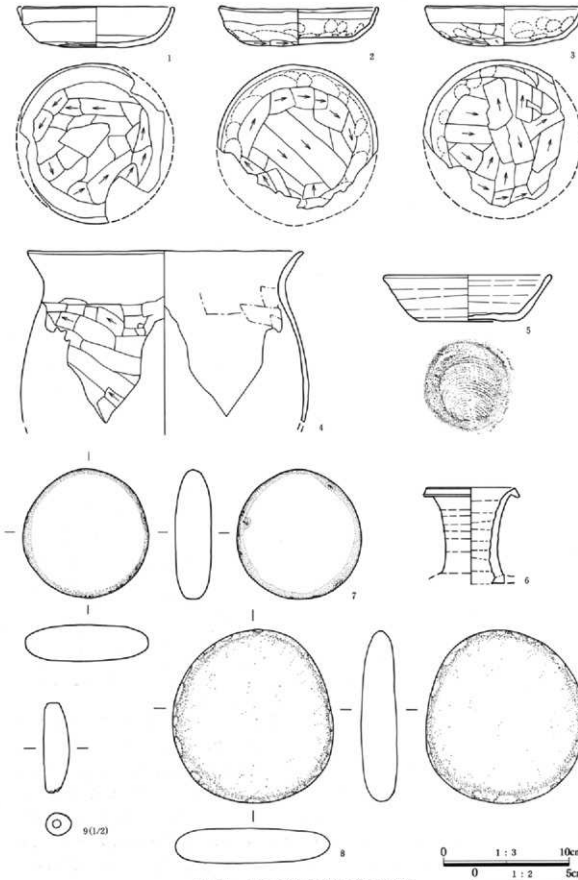
第27図　大沼下遺跡8号住居跡出土遺物(2)

表12　大沼下遺跡8号住居跡出土遺物観察表

№	種類 器種	出土遺構 出土層位	量　目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 椀	8住№5	① 14.0 ② 7.0 ③ 5.4	器形成形後高台貼付。口縁部内外面横撫で。体部外面上半指押さえ、下半箆撫で。高台部内外面横撫で。内面体部～底部撫で。底部は砂底の可能性。	①細かい砂粒に白色粒を含む ②浅黄(2.5Y7/3)	ほぼ完形 10世紀前半
2	土師器 椀	8住№2	① 12.4 ② 8.0 ③ 5.6	口唇部内外面横撫で。体部上半内外面指押さえ後横撫で。外面体部下半横方向の箆削り、内面体部下～底部木口状工具による横方向の撫で。底部外面の器面は粗れている状況から砂底と推定される。高台部は貼付後横撫で。	①細かい砂粒と白色粒・黒色粒を含む ②明赤褐(2.5YR5/6)	口縁部1/4欠損 10世紀前半
3	須恵器 坏	8住№1	① 12.1 ② 5.8 ③ 4.6	轆轤右回転成形。体部に丸味をもち立ち上がり、口縁部は外反する。底部右回転糸切りで無調整。	①細かい砂粒と白色粒を含む ②浅黄橙(10YR8/4)	ほぼ完形。僅かに口唇部を欠損 10世紀前半～中頃
4	須恵器 椀	8住 カマド中	① 13.0 ②(6.8) ③ 5.7	轆轤右回転成形。底部の切り離し技法は不明。高台貼付後撫で。体部中央までは内湾気味である。口縁部は外頻する。	①石英、黒色粒、白色粒を含む ②浅黄(2.5Y7/3)	口縁～底部1/2 10世紀中頃
5	須恵器 椀	8住№3	② 9.5 ③(5.2)	轆轤右回転成形。底部切り離し技法は不明。底部切り離し後高台貼付。	①細かい砂粒に白色黒・色粒含む②明黄褐(10YR7/6)	底部のみ 10世紀中頃
6	土師器 羽釜	8住№4	①(16.8) ③(8.7)	口縁部内湾する。口縁部内外面指押さえ後強い横撫で。羽は胴部成形後貼り付け、高さ1.2cm程である。外面胴部縦方向の箆削り。内面胴部横撫で。	①細かい砂粒に白色粒を含む ②橙(7.5YR4/6)	口縁～胴部1/4 10世紀中頃

大沼下遺跡9号住居（第23～25・28図、ＰＬ６・15・16）

遺構　Ｂ・Ｃ区境界のローム台地、160-385Gで確認された。西側で10号住居と住居中央から北西部にかけて1号井戸、５・６号土坑と重複する。10号住居が9号住居より古く、1号井戸・５・６号土坑が9号住居より新しい。住居の形状は、東西方向に長軸をとる長方形で、長軸6.60m、短軸5.13mで、壁高は23～49cmである。南壁は34～49cmで残存状態が良好であった。竈は東壁南寄りに構築され、両袖には安山岩質の自然石を立て、手前に凝灰岩の切石が割れた状況で確認された。この凝灰岩の切石は、両袖の安山岩質の自然石の上に乗っていたものと思われ、鳥居状の焚口を有するものと考えられる。貯蔵穴等の施設は確認されなかった。床面は中央部から東側にかけて、溝状の凹凸がみられる。後世の攪乱が住居に伴うものか不明である。床面積は30.46㎡であった。



第28図　大沼下遺跡9号住居跡出土遺物

遺物　竈周辺、北壁下、南壁下で遺物が出土している。1～3は土師器坏で底面は平底になっている。底面は篦削り、体部は指撫で・指頭押さえで整形している。口唇部は丸味をおびて内屈する。9世紀前半と思われる。4は土師器甕で頸部断面形が「コ」の字状に近い状態である。胴部外面の篦削りは斜め方向である。9世紀前半と思われる。5は竈より出土している。須恵器坏で、轆轤右回転成形で、回転糸切り後周辺篦調整である。8世紀中頃と思われる。6は須恵器長頸壺の頸部～口縁部である。口唇部は下方に鋭く突出する。外面に自然釉がみられる。9世紀前半と思われる。9は土錘で覆土中の出土である。7・8は扁平な川原石で側縁部に敲打痕がみられる。石材は2点とも粗粒輝石安山岩である。

図示した遺物の他に179点の遺物が出土している。内訳は土師器甕112点、土師器坏51点、土師器高坏4点、須恵器甕1点、須恵器坏・椀8点、須恵器蓋2点、石1点である。

本住居跡は遺物等から平安時代9世紀前半と考えられる。

表13　大沼下遺跡9号住居跡出土遺物観察表

No	種器	期種	出土遺構 出土層位	量 (cm)	成・整形技法の特徴		①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 坏		9住No 6 1－E 1 G	① 12.3 ② 3.2	口縁部外損。内面口縁～体部横撫で。内面底部撫で。外面口縁横撫で。外面体部～底部篦削り。		①細かい砂粒と白色粒を含む ②橙(5YR6/6)	口縁部・底部一部欠損 9世紀前半
2	土師器 坏		9住一括	① 12.6 ② 2.9	口縁部外損し、口唇部丸味を帯びて内屈する。口縁部内外面横撫で。内面体部指押さえ後横方向の撫で。底部内面撫で。外面体部指押さえ、底部篦削り。		①細かい砂粒を含む ②橙(7.5YR6/6)	口縁部1/2欠損 9世紀前半
3	土師器 坏		9住No 6	①(12.4) ③ 3.1	口縁部外損し、口唇部内側に屈曲する。口縁部内外面横撫で。内面体部～底部指押さえ後撫で。外面体部指押さえ、外面底部篦削り。		①細かい砂粒を含む ②明褐(7.5YR5/6)	口縁1/3欠損 9世紀前半
4	土師器 甕		9住No 2 ・3	①(21.8) ③(13.5)	頸部がやや長く直線的になっている。口縁部内外面横撫で、胴部外面篦削り。胴部内面不明瞭であるが篦撫でと思われる。		①細かい砂粒を多く含む ②にぶい褐 (7.5YR5/4)	口縁1/3～胴部上半1/6 9世紀前半
5	須恵器 坏		9住No10	①(13.2) ②(7.6) ③ 3.6	轆轤右回転。回転糸切り後周辺回転篦削り。口縁は底部から直線的で外損する。7住No14と同一の製作技術。		①石英、微細の白色粒を含む ②灰黄(2.5Y6/2)	口縁1/4～底部2/3 8世紀中頃
6	須恵器 長頸壺		9住No 4	① 6.8 ③(7.6)	轆轤右回転成形。内面轆轤目が目立つ。口縁部は内側に丸味を帯びて外反気味に立ち上がる。口唇部は下方に鋭く突出する。外面に自然釉がみられる。		①細かい砂粒に白色粒を含む ②黄灰(2.5Y6/1)	口縁1/2 胴部～底部欠損 9世紀前半
7	石製品 磨石(敲石)		9住No 7	④ 10.2 ⑤ 2.8 ⑥ 2.9	右側縁部に敲打痕が多くみられるが、側縁部全域に敲打痕がみられる。			粗粒輝石安山岩
8	石製品 磨石(敲石)		9住No 8	④ 13.7 ⑤ 12.5 ⑥ 2.8	右側縁部が直線的になっている。この部分に敲打痕が多くみられる。敲打痕はほぼ全側縁部にもみられる。			粗粒輝石安山岩
9	土製品 土錘		9住 南北ベルト	④ 4.7 ⑤ 1.4	成形時の撫でがみられる。径4㎜の穴が貫通している。		①細かい粘土で砂粒はみられない②にぶい橙(7.5YR6/4)	ほぼ完形

大沼下遺跡10号住居（第23・24図、PL 6）

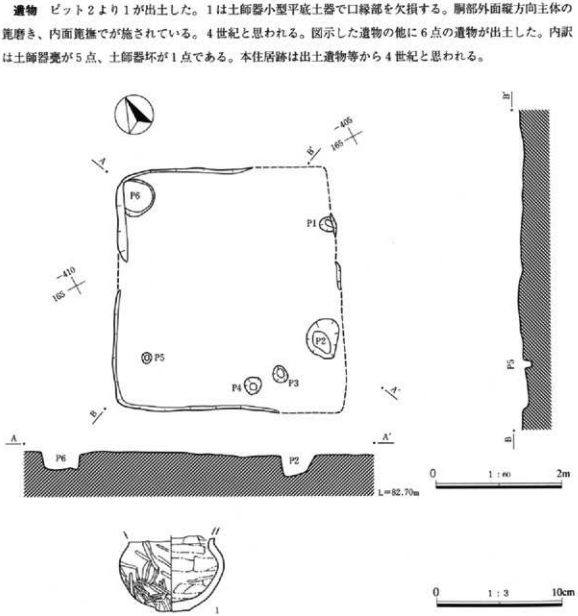
遺構　B・C区境界のローム台地、160-390Gで確認された。東壁で9号住居と北東隅で8号住居と重複する。8・9号住居が10号住居より新しい。南壁とその付近で8・9・10号土坑と北東隅で4号土坑と重複する。重複する土坑が10号住より新しい。住居の形状は方形で、長軸7.30m、短軸6.73mで、壁高は22cm前後である。ピットは8基確認された。その内柱穴と思われるものは4本で、P 1・P 2・P 6・P 8である。ピットの深さは、P 1が69cm、P 2が59cm、P 6が66cm、P 8が73cmである。他のピットは25cm前後である。竈は、9号住居との重複で壊されたのか、確認できなかった。床面積は45.58㎡と推定される。

遺物　明確に本住居に伴う出土遺物はなかった。

大沼下遺跡11号住居（第29図、ＰＬ７・16）

遺構　Ｂ区ローム台地で、５号住居の北側、160~405Gで確認された。住居の形状は東壁が不明瞭であるが、方形と推定される。長軸3.80ｍ、短軸3.50ｍで、壁高は３～10cmである。ピット６基が確認された。南西隅と北東隅のＰ２、Ｐ６が平面形も大きく、深さも深いので柱穴の可能性が考えられる。ピットの深さは、Ｐ１が13cm、Ｐ２が32cm、Ｐ３が10cm、Ｐ４が22cm、Ｐ５が15cm、Ｐ６が22cmである。炉跡と思われる焼土は確認できなかった。また周溝等も確認できなかった。床面積は12.84㎡と推定される。

遺物　ピット２より１が出土した。１は土師器小型平底土器で口縁部を欠損する。胴部外面縦方向主体の箆磨き、内面箆撫でが施されている。４世紀と思われる。図示した遺物の他に６点の遺物が出土した。内訳は土師器甕が５点、土師器坏が１点である。本住居跡は出土遺物等から４世紀と思われる。



第29図　大沼下遺跡11号住居跡・出土遺物

表14　大沼下遺跡11号住居跡出土遺物観察表

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 埦 (小型平底土器)	11住東ピット	② 2.6 ③(5.7)	胴部外面箆調整後箆磨き。 内面横方向の箆撫で。	①細かい砂粒に黒色粒と２mm程の小石を含む ②にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部欠損 胴部上半2/3欠損 ４世紀

大沼下遺跡12号住居（第30・31図、ＰＬ７・16・17）

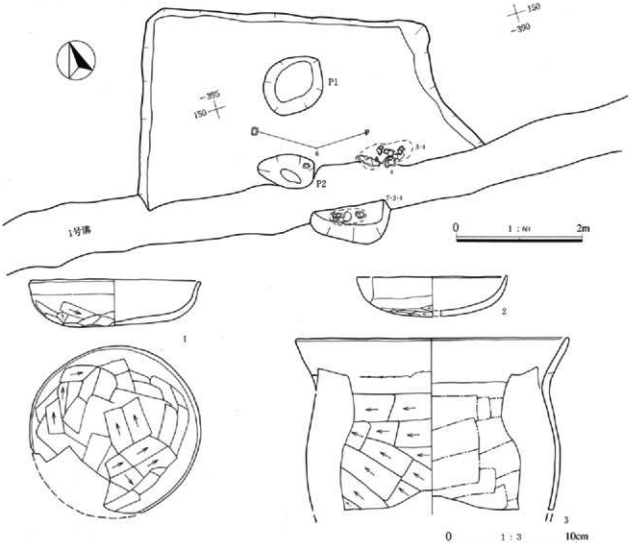
遺構　Ｂ・Ｃ区境界のローム台地、145-390Gで確認された。住居の南側で１号溝と重複し、１号溝が新しい。１号溝と重複のため、南西隅は確認できない。南東隅が確認できただけであるが、住居の形状は、東西方向に長軸をとる長方形と推定できる。長軸4.51ｍ、短軸3.02ｍで、壁高は21～39㎝である。竈・貯蔵穴は確認できなかった。柱穴は２本柱穴で、Ｐ１・Ｐ２である。Ｐ１は19㎝、Ｐ２は25㎝の深さである。

床面積は12.08㎡と推定される。

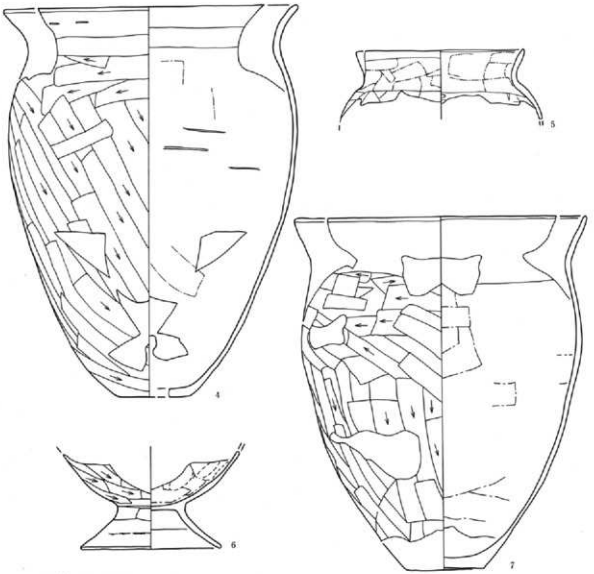
遺物　住居の南東部に遺物が集中して出土した。３・４・７は土師器甕で頸部の断面形が「く」の字から「コ」の字に移行する段階で、４は「コ」の字に近い状況である。胴部外面は篦削りで口縁部に近い所は横方向で胴最大径付近から下部は斜め方向の篦削りである。８世紀末～９世紀初めである。５は土師器小型甕。６は土師器台付甕で胴上半を欠損する。胴部外面篦削りで、器肉は薄い。９世紀初めと思われる。１・２は土師器坏で８世紀末～９世紀初めである。

図示した遺物の他に193点の遺物が出土した。内訳は土師器甕163点、土師器坏26点、土師器器台１点、須恵器甕１点、須恵器蓋１点、陶器１点である。

本住居跡は出土遺物等から平安時代８世紀末～９世紀初めと考えられる。



第30図　大沼下遺跡12号住居跡・出土遺物(1)



第31図　大沼下遺跡12号住居跡出土遺物(2)

表15　大沼下遺跡12号住居跡出土遺物観察表(1)

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 坏	12住No 1	①(13.5) ③ 3.6	口縁はやや外傾。内面体部～外面口縁部まで横撫で。内面底部撫で。外面体部～底部箆削り。	3 mm程の小石・細かい白色粒と黒色粒を含む ②にぶい橙(5YR6/4)	口縁～底部3/4 8 世紀末～ 9 世紀初め
2	土師器 坏	12住覆土	①(11.8) ③(3.1)	口縁部僅かに外傾。口縁部内外面横撫で。外面体部～底部箆削り。内面体部～底部撫で。	①細かい砂粒と白色粒を含む ②にぶい橙(7.5YR5/4)	口縁～底部1/4 8 世紀末～ 9 世紀初め
3	土師器 甕	12住No 2 ・3	①(21.6) ③(13.6)	口縁部内外面横撫で。胴部外面斜め～横方向の箆削り、胴部内面斜め方向の箆撫で。口縁部外面に粘土の積み上げの痕跡。	①細かい砂粒に黒色・白色粒を含む ②明赤褐(2.5YR5/6)	口縁～胴部上半1/3 8 世紀末～9 世紀初め
4	土師器 甕	12住No 1・ 2・覆土	① 23.3 ② 5.8 ③ 30.8	口縁部内外面横撫で。胴部外面斜め方向の箆削り、頸部近くは横方向の箆削り。内面箆撫で。	①細かい砂粒に黒色・白色粒を含む ②明赤褐(2.5YR5/6)	口縁部1/3～底部 8 世紀末～ 9 世紀初め
5	土師器 小型甕	12住No 2	①(13.0) ③(5.5)	器面が粗れていて成形技法がわかりにくい。口縁部内外面箆撫で後横撫で。胴部外面箆削り。内面箆撫で。	①細かい砂粒を含む ②明赤褐(5YR5/6)	口縁部1/6～胴部3/4 9 世紀初め

表16　大沼下遺跡12号住居跡出土遺物観察表(2)

No	種類器種	出土遺構出土層位	量 目(cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
6	土師器台付甕	12住No 4	②(11.0) ③ 7.7	胴部外面施削り。胴部内面指押さえ後施撫で。底部付近は指撫で。台部内外面横撫で。	①細かい砂粒を含む ②明赤褐(5YR6/4)	胴部下～台部1/2 9世紀初め
7	土師器甕	12住No 3・覆土	①(23.0) ② 6.0 ③ 27.7	口縁部外面指押さえ後横撫で。胴部外面頸部付近は横方向、胴中・下部は斜め・縦方向の施削り、胴部内面施撫で。	①細かい砂粒に２㎜程の小石を含む ②明赤褐(2.5YR5/6)	口縁部1/6～胴部～底部1/2 8世紀末～９世紀初め

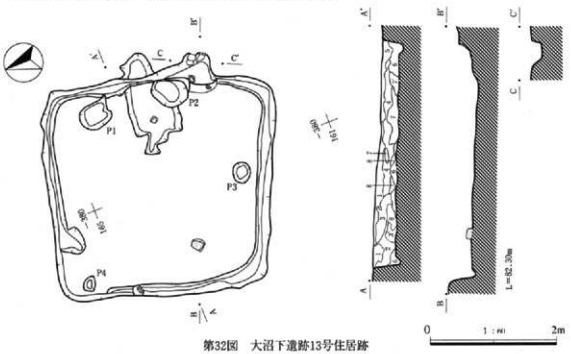
大沼下遺跡13号住居（第32・33図、ＰＬ８・17）

遺構　Ｃ区ローム台地、160-380Gで確認された。住居の形状は方形で、長軸3.71ｍ、短軸3.38ｍ、壁高は23～39㎝である。竈は東壁南寄りに構築されている。全体によく焼けて赤化している。燃焼部から煙道部に変わる地点で土師器甕が敷きつめられたように出土した。さらに東壁中央部に、竈の痕跡と思われる落込みが確認できる。東壁中央の竈が古く、東壁南寄りに竈を作り替えたと考える。ピットは４基確認できた。東壁近くのＰ１、Ｐ２は平面形が大きく、窪み状である。Ｐ３は11㎝、Ｐ４は９㎝の深さである。貯蔵穴は確認されなかった。周溝は竈付近と北西隅で途切れる以外ははほぼ全周する。床面積は10.79㎡であった。

遺物　東壁の竈付近で遺物の出土が多くみられる。１・２は土師器坏である。１は底部篦削りで平底気味である。体部調整が不明瞭である。２は底部篦削りで体部調整は指頭押さえが施される。２がやや古い様相で８世紀後半である。１は覆土中の出土で、８世紀末～９世紀初めと考えられる。３は須恵器坏の底部破片で、覆土中の出土である。右回転轆轤成形で、底部切り離しは篦起こしで、篦起こし後底部外周から体部下端篦調整がなされている。８世紀後半と思われる。４は土師器甕で口縁部～胴部上半を欠損する。胴が張り球形に近い形状である。胴部外面は横から斜め方向の篦削りが施される。８世紀後半と思われる。５は覆土中の出土である。櫛式の壺型土器の胴部破片で櫛描の波状文が施される。

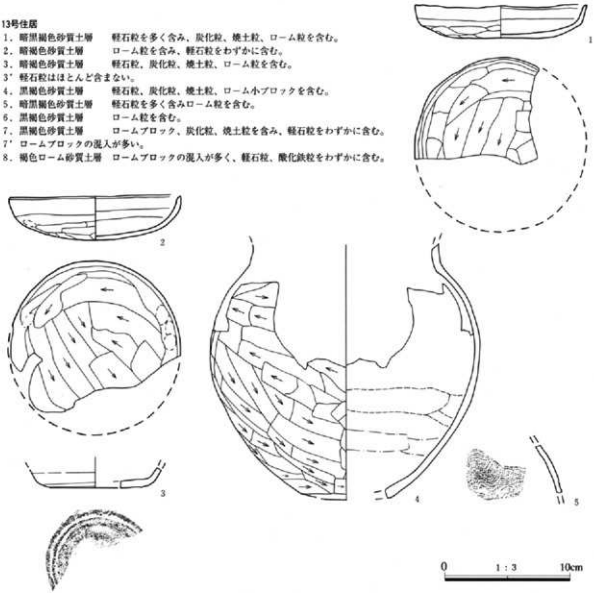
図示した遺物の他に230点の遺物が出土している。内訳は土師器甕165点、土師器坏62点、須恵器坏１点、陶器２点である。

本住居跡は出土遺物等から奈良時代８世紀後半と考えられる。



第32図　大沼下遺跡13号住居跡

13号住居
1．暗黒褐色砂質土層　　軽石粒を多く含み、炭化粒、焼土粒、ローム粒を含む。
2．暗褐色砂質土層　　ローム粒を含み、軽石粒をわずかに含む。
3．暗褐色砂質土層　　軽石粒、炭化粒、焼土粒、ローム粒を含む。
3'　軽石粒はほとんど含まない。
4．黒褐色砂質土層　　軽石粒、炭化粒、焼土粒、ローム小ブロックを含む。
5．暗黒褐色砂質土層　　軽石粒を多く含みローム粒を含む。
6．黒褐色砂質土層　　ローム粒を含む。
7．黒褐色砂質土層　　ロームブロック、炭化粒、焼土粒を含み、軽石粒をわずかに含む。
7'　ロームブロックの混入が多い。
8．褐色ローム砂質土層　ロームブロックの混入が多く、軽石粒、酸化鉄粒をわずかに含む。



第33図　大沼下遺跡13号住居跡出土遺物

表17　大沼下遺跡13号住居跡出土遺物観察表

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量　目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 坏	13住一括	①(13.6) ③　2.6	口縁部やや外傾。口縁部内外面横撫で。底部内面撫で。底部外面撫削り。	①細かい砂粒と白色・黒色粒を含む ②橙(5YR6/6)	口縁部～底部1/4 8世紀末～9世紀初め
2	土師器 坏	13住№2・ 14住覆土	①　13.6 ③　3.5	口縁部やや外傾。口縁部内外面横撫で。体部～底部内面撫で。体部外面指押さえ・指撫で。底部外面撫削り。	①細かい砂粒を含む ②にぶい赤褐(5YR5/4)	口縁部1/2～底部 8世紀後半
3	須恵器 坏	13住覆土	②(　8.4) ③(　2.1)	右回転轆轤成形。底部切離し技法は篦起こし。篦起こし後底部篦調整。	①細かい白色粒を含む ②灰白(5Y7/2)	底部～体部下半1/3 8世紀後半
4	土師器 甕	13住№1・ カマド内一括	②　7.4 ③(19.9)	口縁部内外面横撫で。胴部～底部外面篦削り。上部は横方向、中位～下部は斜め方向、底部近くで横方向の篦削り。胴部内面下部は篦撫で。中位～上部は指撫で。	①やや粗めの砂粒に白色粒を含む ②明褐(7.5YR5/6)	底部一部欠損胴上半～口縁部欠損 8世紀後半
5	弥生 壺	13住覆土		胴部最大径付近よりやや上位の破片。外面櫛描の波状が施される。	①細かい砂粒に白色粒を含む②にぶい褐(7.5YR5/3)	胴部破片 櫛式

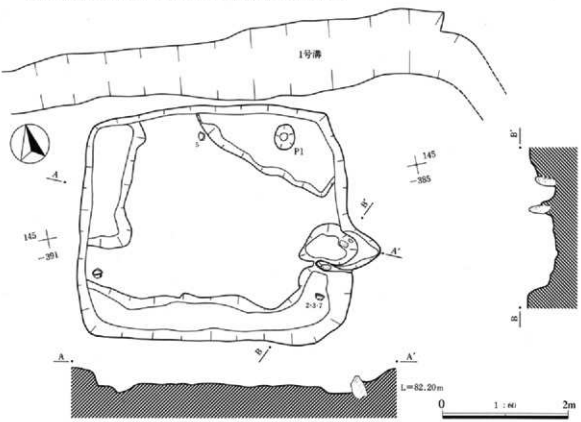
大沼下遺跡14号住居（第34・35図、ＰＬ９・17・18）

遺構　Ｃ区ローム台地、１号溝の南、140-385Gで確認された。住居の形状は方形で、長軸4.30ｍ、短軸3.75ｍで、壁高は24～53cmである。南側の壁の残存状態がよい。竈は東壁やや南寄りに構築されている。右袖に自然石を立て、袖の心材にしている。燃焼部の中央部に自然石を用いて、支脚として使用したものと推定される。燃焼部から焚き口部を床面より掘り下げて竈を構築している。北東隅付近でピットが１基確認された。ピットの深さは12cm程である。床面積は12.60㎡であった。

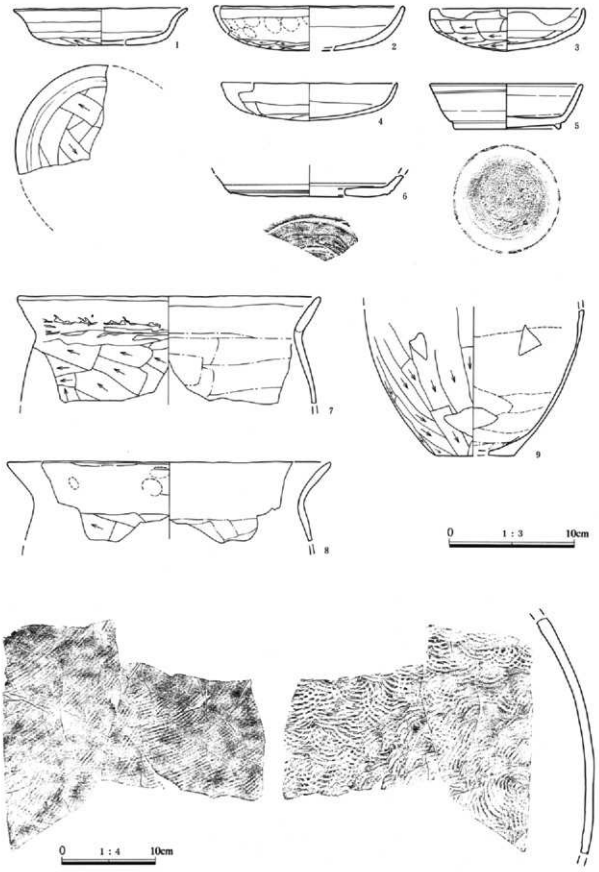
遺物　住居の中央部より壁近くで遺物が出土している。特に南東隅付近から多く出土している。１～４は土師器坏で、１・４は覆土中の出土で他は床面出土である。２・４は底部篦削りでやや丸底気味である。体部調整は、２に指頭押さえがみられるが、４は不明瞭である。３は底部丸底で、２・４よりやや古い様相である。１・２・４は８世紀後半、３は８世紀前半と思われる。７～９は土師器甕でいづれも覆土中の出土である。７は口縁部に胴部篦削り時の篦の先端部があたった痕跡がみられる。７・８の頸部の断面形は「く」の字状である。８世紀後半と思われる。５・６は須恵器坏で５は床面から、６は覆土中の出土である。５は左回転轆轤成形で、底部切り離しは篦起こしである。篦起こし後篦調整で、高台を貼付けている。体部は直線的で外傾する。８世紀前半と思われる。６は覆土中の出土で底部破片である。底部は回転篦調整で高台を削りだしている。８世紀前半と思われる。10は須恵器大甕の胴部破片で外面平行叩き目、内面同心円状の当て目がみられる。８世紀前半と思われる。

図示した遺物の他に177点の遺物が出土している。内訳は土師器甕140点、土師器坏30点、須恵器甕２点、須恵器坏２点、陶器１点、石１点、不明１点である。

本住居跡は出土遺物等から奈良時代８世紀後半と考えられる。



第34図　大沼下遺跡14号住居跡



第35図　大沼下遺跡14号住居跡出土遺物

表18　大沼下遺跡14号住居跡出土遺物観察表

No	種類器種	期	出土遺構出土層位	量	目(cm)	成・整形技法の特徴	①胎土②色調	時期・残存状況
1	土師器坏	14住覆土		①(13.8)②(2.9)		口縁部外反する。口縁部内外面横撫で。底部内面撫で。底部外面篦削り。	①細かい砂粒と白色・黒色粒を含む②にぶい黄橙(10YR6/3)	口縁部～底部1/4 8世紀後半
2	土師器坏	14住No４		①(14.9)③(3.5)		口縁部外開。口縁部内外面横撫で。底部内面撫で。体部外面指押さえ。底部外面篦削り。	①細かい砂粒に白色粒を含む②にぶい褐(7.5Y5/3)	口縁部～底部1/4 8世紀後半
3	土師器坏	14住No４・覆土		①(12.2)③3.4		口縁部直立、内外面横撫で。体部～底部外面篦削り、体部内面横撫で。底部内面撫で。	①細かい砂粒を含む②橙(7.5YR6/6)	口縁～底部1/4 口縁僅かに残存 8世紀前半
4	土師器坏	14住覆土		①(14.0)③3.0		口縁部外開。口縁部内外面横撫で。内面底部撫で。外面底部不明瞭な篦削り。	①白色・黒色粒と細かい砂粒を含む。砂っぽい②橙(5YR6/6)	口縁部1/4 8世紀前半
5	須恵器坏	14住No２		①12.0②8.4③3.6		左回転轆轤成形。体部～口縁部は直線的で外開する。底部切り離し技法は篦起こしで、左回転の篦削りで調整。高台貼付接接合のための撫で。	①細かい砂粒と白色粒を含む②橙(5YR6/6)	口縁部1/3欠損 8世紀前半
6	須恵器坏	14住覆土		②(13.0)③(1.6)		底部回転篦削り。僅かであるが高台を削りだしている。	①細かい粘土　②内 灰白(7.5Y8/1) 外灰(10Y4/1)	底部1/3 8世紀前半
7	土師器甕	14住No４		①(23.6)③(8.4)		口縁部は「く」の字状に屈曲する。口縁部外面に接合の痕跡がみられる。口縁部内外面指押さえ後横撫で。胴部外面篦削り。頸部付近の篦削り時に口縁部に篦があたった痕跡がある。胴部内面篦撫で。	①細かい砂粒を多く含む②明赤褐(5YR5/6)	口縁～胴部上1/4 8世紀後半
8	土師器甕	14住覆土		①(25.4)③(6.2)		口縁部は「く」の字状に外反し立ち上がる。口縁部～頸部外面指押さえ後横撫で。口縁部内面横撫で。胴部外面篦削り。胴部内面横撫で。	①細かい砂粒に白色・黒色粒を含む②橙(5YR6/6)	口縁部～頸部1/6 8世紀後半
9	土師器甕	14住覆土		②(11.6)③(6.4)		胴部外面篦削り。胴部内面指撫で、底部付近は篦撫で。	①やや多めの細かい砂粒を含む②にぶい赤褐(5YR5/4)	底部～胴下半1/2 8世紀後半
10	須恵器大甕	14住一括		外面平行叩き目、内面同心円状の当て目。			②灰白(2.5Y7/1)	胴部破片 8世紀前半

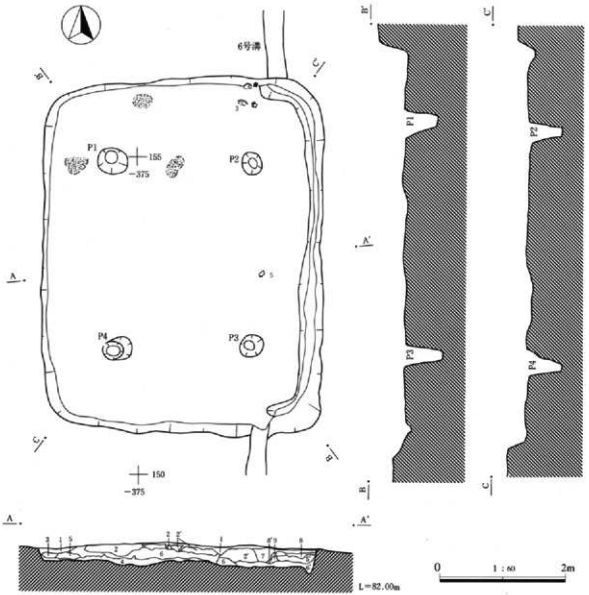
大沼下遺跡15号住居（第36・37図、ＰＬ10・18）

遺構　Ｃ区ローム台地、150-370Ｇで確認された。東側部分で６号溝と重複し、15号住居が古い。６号溝の掘り込みが浅いため、15号住居の床面は壊されずに残っていた。住居の形状は、南北方向に長軸をとる長方形で、長軸5.60m、短軸4.45mで、壁高は15～47cmである。壁高は東壁と南壁が低く、西壁と北壁が高い。周溝は東壁下のみ確認された。波志江中屋敷東遺跡の発掘調査時、本住居を再確認した。周溝と柱穴のみの確認であった。この時周溝は全周するように確認された。おそらく周溝は全周するものと思われる。柱穴は４本確認され、Ｐ１が53cm、Ｐ２が54cm、Ｐ３が62cm、Ｐ４が55cmの深さである。北西隅付近で３ヶ所焼土を確認した。炉と判断しかねる状況である。床面積は20.64㎡であった。

遺物　北壁近くで床面から遺物が出土している。また覆土中より縄文土器破片の出土が目立つ。１は土師器坏で、覆土中の出土である。口縁部下に稜を持つ。７世紀頃と思われる。２・３は土師器で「Ｓ」字状口縁台付甕である。２は台部で、下端部が内側に折り返されている。３は口縁部から胴下半部で、やや厚手の作りである。口唇部は鋭く摘み出されている。やや胴が張り、球形に近い形である。接合はしないが２と３は同一個体の可能性がある。４世紀前半と思われる。４～６は覆土中の出土で櫛式土器の遮の胴部破片および頸部破片で、櫛状工具による波状文が施される。７～14は８を除いて覆土中の出土である。いずれも胎土に繊維を含む。７は片口注口を持つ深鉢形土器の注口部である。口唇部直下にループ文を施す。８は深鉢の胴部破片で、半截竹管による平行沈線を地文として、フジツボ状の貼り付けが施される。縄文時代前期二ツ木式と思われる。９は０段多条のＲＬとＬＲ縄文を羽状に施す。10～12はループ文が施される。12～14も０段多条のＬＲ縄文を施す。羽状になる可能性がある。いずれも縄文時代前期関山式である。

図示した遺物の他に17点の遺物が出土している。内訳は土師器甕16点、土師器高坏１点である。土師器甕には「S」字状口縁台付甕破片３点が含まれる。

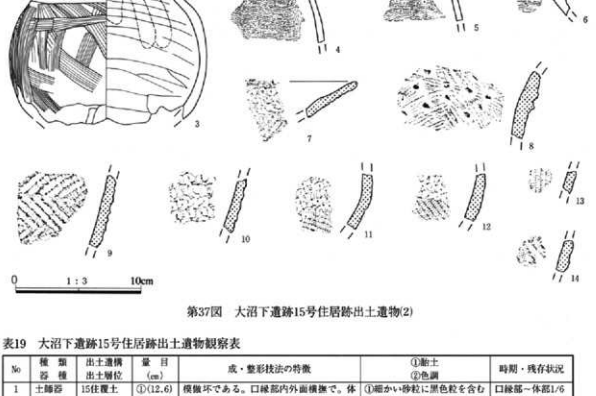
本住居跡は出土遺物等から４世紀前半と思われる。



15号住居

1．黒褐色砂質土層　　軽石を少量、ローム粒少量含む。
2．暗褐色砂質土層　　軽石を少量（1層より多い）、ローム粒を少量含む。
2′ 軽石を多量に含む。
3．褐色砂質土層　　軽石を多量に含み、ロームブロックを含む。
4．暗黒褐色砂質土層　軽石少量、ロームブロックを少量含む。
5．黒色砂質土層　　ロームブロックを含む。
5′ 黒色土がやや減り、ロームブロックが増す。
6．暗褐色ローム土層　本住居の第一次覆土でロームブロックを多量に含みやや粘質もある。
6′ ロームの量少ない。
7．暗黒褐色砂質土層　非常に粒子が細かくしまりがよい、軽石、焼土粒を少量含む。
8．茶褐色土層　　軽石、焼土粒をやや多く含む。
8′ しまりが弱く、ロームの量が多い。
9．暗黒褐色土層　　粒子が細かく、軽石はほとんど含まない、ローム分を多少含む。

第36図　大沼下遺跡15号住居跡出土遺物(1)



第37図　大沼下遺跡15号住居跡出土遺物(2)

表19　大沼下遺跡15号住居跡出土遺物観察表

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 坏	15住覆土	①(12.6) ③(2.6)	横撫坏である。口縁部内外面横撫で。体部内外面撫で。口縁部と体部の境界に稜を持つ。	①細かい砂粒に黒色粒を含む ②にぶい黄(2.5Y6/3)	口縁部～体部1/6 7世紀
2	土師器 台付甕	15住№1	②8.0 ③(5.2)	外面連結部木口状工具による撫で、横目が顕著木口状工具による撫で。下端部横撫で。内面下端部折り返し後横撫で。木口状工具による撫で。	①細かい砂粒に波気色・黒色粒を含む ②橙(5YR6/6)	台部のみ3/4 4世紀前半
3	土師器 台付甕	15住№1	①13.0 ③(11.2)	やや厚手の作りである。1段目が水平に近い状態まで開く。口縁部内外面横撫で。外面頸部木口状工具の撫で後横撫で。頸部の凹部に撫でができずに木口状工具の撫でが残る。胴部外面胴下部からの木口状工具の撫で、頸部から木口状工具の撫で、胴上部木口状工具の横方向の撫で。胴内面下部は横方向の撫撫で、上部は縦方向の指撫で後横方向の撫撫で。	①細かい砂粒に白色・黒色粒を含む　②にぶい赤褐(2.5YR5/4)	胴下部～台部欠損 4世紀前半
4	弥生 壺	15住覆土		外面に櫛状工具で横線と波状文を施す。 15号住№5・6と同一個体か？	①細かい砂粒に白色・黒色粒を含む　②にぶい赤褐(2.5YR5/4)	胴部破片 樽式
5	弥生 壺	15住覆土		外面に櫛状工具で横線と波状文を施す。 15号住№4・6と同一個体か？	①細かい砂粒に白色粒を含む ②明赤褐(2.5YR5/6)	胴部破片 樽式
6	弥生 壺	15住覆土		外面に櫛状工具で横線が施される。 15号住№4・5と同一個体か？	①細かい砂粒に白色粒を含む ②明赤褐(2.5YR5/6)	頸部破片 樽式
7	縄文 深鉢	15住覆土		0段多条のＲＬ縄文で、口唇部直下にループ文を施している。	①繊維を含む ②暗褐(10YR3/3)	片口注口部片 縄文前期関山式
8	縄文 深鉢	15住№2		平截竹管による平行沈線文を施した後にフジッボ状の貼付を施す。	①繊維を含む ②にぶい黄褐(10YR6/6)	胴部破片 縄文前期関山式
9	縄文 深鉢	15住覆土		0段多条のＲＬとＬＲ縄文を用いて羽状に縄文を施す。	①繊維を含む ②にぶい黄橙(10YR6/4)	胴部破片 縄文前期関山式
10	縄文 深鉢	15住覆土		4回以上重ねてループ文を施す。	①繊維を含む ②橙(7.5YR6/6)	胴部破片 縄文前期関山式
11	縄文 深鉢	15住覆土		内湾する頂点部分を境に下半の節が不明瞭であるが0段多条のＲＬ縄文を施し、上半がループ文を施す。下半は羽状縄文になると思われる。	①繊維を含む ②にぶい褐(7.5YR5/4)	胴部破片 縄文前期関山式
12	縄文 深鉢	15住覆土		下半に0段多条のＲＬ縄文を施し、上半にループ文を施す。下半は羽状縄文になると思われる。	①繊維を含む ②褐(7.5YR4/6)	胴部破片 縄文前期関山式
13	縄文 深鉢	15住覆土		小片のため不明瞭であるが、0段多条のＬＲ縄文を施す。	①繊維を含む ②褐(7.5YR4/4)	胴部破片 縄文前期関山式
14	縄文 深鉢	15住覆土		表面の摩滅が著しく、不明瞭であるが0段多条のＬＲ縄文を施す。	①繊維を含む ②灰褐(7.5YR5/2)	胴部破片 縄文前期関山式

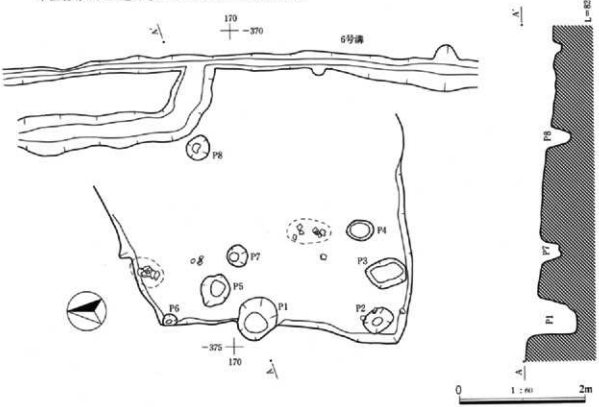
大沼下遺跡16号住居（第38・39図、ＰＬ10・18）

遺構　Ｃ区北のローム台地東端で低地との境界付近、165-370Gで確認された。東壁は低地部への傾斜のため確認できなかった。おそらく地山として暗褐色土中に床面を構築していたものと推定される。この暗褐色土は縄文時代前期の関山式土器を包含する土である。西壁や南壁・北壁の西側はローム層で確認できた。住居の形状は、南北方向に長軸をとる長方形と推定され、長軸4.25ｍ、壁高は５～17cmである。床面は西から東に傾斜しているが、本来は水平であったと考えられる。炉や周溝等は確認できなかった。ピットは８基で西側で多く確認できた。ピットの深さはＰ１が16cm、Ｐ２が17cm、Ｐ３が６cm、Ｐ４が17cm、Ｐ５が３cm、Ｐ６が12cm、Ｐ７が30cm、Ｐ８が35cmである。住居の柱穴にあたるものはＰ４・Ｐ７・Ｐ８が考えられる。東側に６号溝がある。６号溝が新しい。床面積は12.05㎡と推定される。

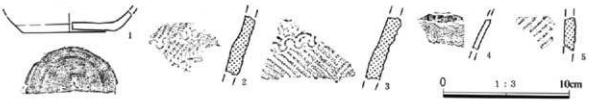
遺物　床面出土のNo１・No２・No３は図示できなかったが土師器壺の胴部破片である。No２の中に１点高坏の破片が含まれていた。高坏は坏部底部から脚部で、坏部底部は直線的で水平になる。内外面とも丁寧な篦磨きが施されている。５世紀前半と思われる。１は須恵器坏の底部破片で覆土中の出土である。右回転轆轤成形である。底部切り離し技法は不明である。切り離し後右回転篦調整を施している。胎土に海綿骨針を含む。８世紀前半と思われる。４は覆土中の出土である。櫛式土器の壺の口縁部破片で、口唇部（折り返し部）を欠損する。櫛状工具により波状文が施される。２・３・５は覆土中の出土で、深鉢形土器の胴部破片で胎土に繊維を含む。縄文時代前期関山式である。２・３は０段多条のＲＬとＬＲの羽状縄文施文後にコンパス文が施される。５は０段多条のＬＲ縄文を施す。小片のため羽状縄文になるか不明である。

図示した遺物の他に217点出土している。内訳は土師器甕167点、「Ｓ」字状口縁台付甕13点、土師器坏21点、土師器高坏８点、須恵器甕３点、須恵器蓋１点、須恵器坏３点、陶器１点である。

本住居跡は出土遺物等から５世紀前半と思われる。



第38図　大沼下遺跡16号住居跡



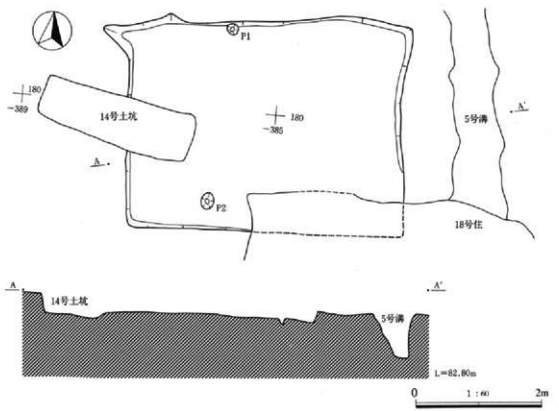
第39図　大沼下遺跡16号住居跡出土遺物

表20　大沼下遺跡16号住居跡出土遺物観察表

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量 目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	須恵器 坏	16住覆土	③(7.2) ③(1.5)	右回転轆轤成形。施起こし後右回転篦調整。内面撫で。	①白色粒と海綿骨針を含む ②灰(10YS/1)	底部1/2 8世紀前半
2	縄文 深鉢	16住覆土	0	段多条のLR縄文と欠損で不明であるが縄文を羽状に施文後、半截竹管によるコンパス文が施される。	①繊維を含む ②にぶい黄(2.5Y6/3)	胴部破片 縄文前期関山式
3	縄文 深鉢	16住覆土	0	段多条LR縄文を羽状に施文後コンパス文を施す。	①繊維を含む ②にぶい黄橙(10YR6/3)	胴部破片 縄文前期関山式
4	弥生 壺	16住覆土		破片上部に粘土を貼り付けた接合の痕跡がみられる。櫛描波状文が施される。	①細かい砂粒に白色粒を含む ②灰黄褐(10YR6/3)	口縁部破片 櫛式
5	縄文 深鉢	16住覆土	0	段多条のLR縄文を施す。	①繊維を含む ②にぶい黄橙(10YR7/4)	胴部破片 縄文前期関山式

大沼下遺跡17号住居（第40図、ＰＬ11）

遺構　Ｂ・Ｃ区境界のローム台地で、175-380Gで確認された。南東部で18号住居と、西壁付近で14号土坑と重複する。17号住居は18号住居より掘り込みが浅いため、発掘調査では18号住居との重複部分で17号住居



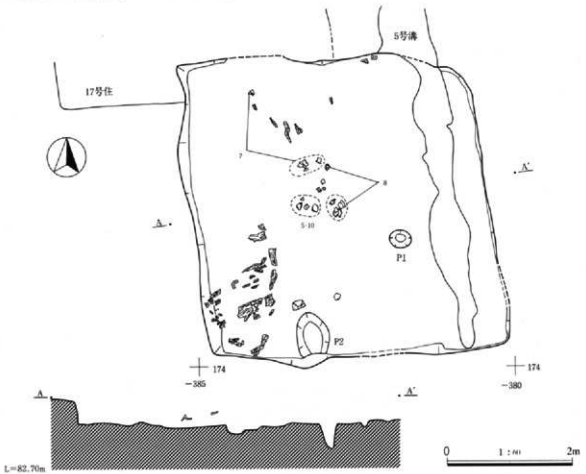
第40図　大沼下遺跡17号住居跡

の床面は確認できなかった。遺構同士の重複では新旧関係は不明であるが、遺物等の状況から判断すると、17号住居は18号住居より新しい。17号住居は14号土坑より古い。14号土坑は近現代と思われる。住居の形状は、東西方向に長軸をとる長方形で、長軸4.35ｍ、短軸3.33ｍで、壁高は15～33㎝で西側が高い。ピットは２基、北壁際と南壁近くで確認できた。ピットの深さはＰ１が13㎝、Ｐ２が16㎝で、柱穴か不明である。周溝や竈等は確認できなかった。床面積は13.65㎡であった。

遺物　図示し得なかったが、236点の遺物が出土している。内訳は土師器甕133点、「Ｓ」字状口縁台付甕６点、土師器坏85点、土師器高坏２点、須恵器甕１点、須恵器坏蓋７点、石１点、不明１点である。時期を決定するに明確な遺物はないが８世紀と思われる。

大沼下遺跡18号住居（第41～43図、ＰＬ11・18・19）

遺構　Ｂ・Ｃ区境界のローム台地、175-380Ｇで確認された。北西部で17号住居と東側で５号溝と重複する。18号住居は17号住居と５号溝より古い。５号溝は18号住居の床面より深く掘り込まれていた。18号住居は、17号住居より、床面がわずかに低いため、平面の形状が確認できた。平面の形状はやや不整形な方形で、長軸4.78ｍ、短軸4.73ｍで、壁高は11～40㎝で、西側が高く、東側が低い。ピットは住居中央やや南東寄りと南壁に接して確認された。ピットの深さは、Ｐ１が16㎝、Ｐ２が30㎝である。住居の南西隅付近と中央から北西隅付近で炭化した木材が確認された。消失住居の可能性が考えられる。周溝・炉・柱穴等の施設は確認できなかった。床面積は20.91㎡であった。

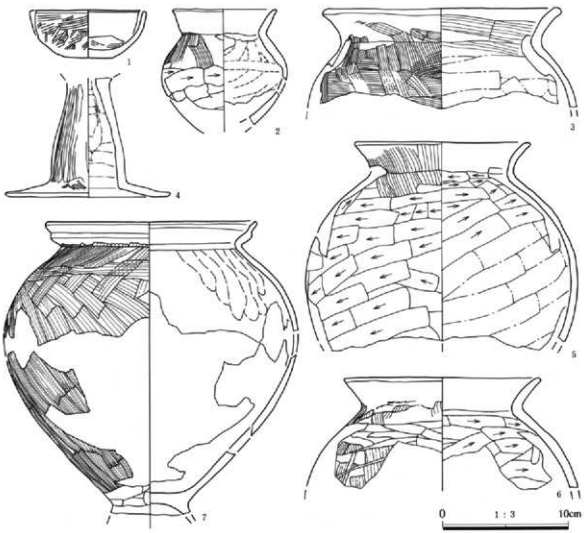


第41図　大沼下遺跡18号住居跡

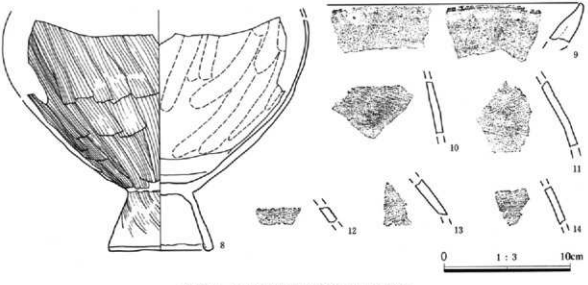
遺物　床面および床面近くから遺物が出土している。1は土師器坏で床面からの出土である。体部外面篦削りあるいは篦撫で後器面全体を丁寧に篦磨きされている。4世紀と思われる。2は土師器坩で覆土中の出土である。胴上半に木口状工具による縦方向撫で、胴下半は横方向の篦削りが施されている。4は土師器高坏の脚部で、坏部を欠損する。覆土中の出土である。外面赤色塗彩されている。脚部下端が急激に外側に開く。5世紀中頃と思われる。5は土師器甕で床面から出土した破片と17号住居覆土から出土の破片が接合した。口縁部～頸部外面に木口状工具による撫で、胴部外面に横から斜め方向の篦削りが施される。胴が張り球形に近い器形である。4世紀と思われる。3・6は土師器甕で胴下半部を欠損する。頸部から胴部の外面は木口状工具による撫でが施され、やや胴が張る器形である。いづれも4世紀と思われる。7・8は住居中央から北側にかけて出土した。いづれも「S」字状口縁台付甕である。7は台部と胴部中央を欠損する。口縁部内面に1条の沈線がまわる。8は胴上半を欠損する。いづれも胴が張り、球形に近い形態である。

図示した遺物の他に381点の遺物が出土している。内訳は土師器甕266点、土師器坏82点、土師器高坏17点、須恵器甕4点、須恵器坏・椀8点、須恵器蓋2点、石1点、不明1点である。土師器甕には「S」字状口縁台付甕36点が含まれる。

本住居跡は出土遺物等から4世紀と考えられる。



第42図　大沼下遺跡18号住居跡出土遺物(1)



第43図　大沼下遺跡18号住居跡出土遺物(2)

表21　大沼下遺跡18号住居跡出土遺物観察表(1)

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①粘土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 坏	18住床面	①(9.0) ②4.0 ③3.7	外面体部～口縁部篦調整後、全面に横方向主体の篦磨き。内面指撫で後、外面よりやや雑な篦磨き。	①細かい砂粒に白色・黒色粒を含む ②褐(7.5YR4/3)	口縁部1/4～底部4世紀
2	土師器 壺	18住一括	①8.0 ③(9.1) 胴最大径10.0	口縁部内外面横撫で。外面頸部～胴上半縦方向の木口状工具による撫で。胴下半横方向の篦削り。内面胴部下半斜め方向、胴部最大径付近横方向、上半縦方向の指撫で。	①細かい砂粒に、雲母白色粒を含む ②褐灰(10YR4/1)	底部欠損・胴部1/2欠損5世紀
3	土師器 甕	18住覆土	①(18.0) ③(7.9)	口縁上部が外反する。口縁部～胴部外面木口状工具による撫で。口縁部～頸部内面木口状工具による横方向の撫で。胴部内面篦撫で。	①やや粗い砂粒を含む ②褐灰(10YR4/1)	口縁部～胴部1/2 4世紀
4	土師器 高坏	18住覆土	①(13.0) ③(9.0)	脚の裾部が水平近くに開く。外面縦方向の篦磨き。 内面横方向の篦撫で。	①細かい砂粒に黒色粒を含む ②赤褐(2.5YR4/6)	脚部のみ1/2 5世紀中頃
5	土師器 甕	17住覆土 18住No 6	①(13.8) ③(15.7)	口縁部外面木口状工具の縦方向の撫で後横撫で。頸部下木口状工具の撫で後胴部外面と一連の横方向の篦削り。口縁部内面横撫で。頸部～胴部内面最大径より上部は横方向篦削り。下半は横方向の篦撫で。	①細かい砂粒に2mm程の砂粒、石英白色粒を含む ②にぶい黄褐(10YR5/3)	口縁部1/3～胴部1/3 底部欠損 4世紀
6	土師器 甕	18住一括	①(15.4) ③(8.8)	口縁部外面横撫で。頸部～胴部外面木口状工具の縦方向の撫で後横方向の篦削り。口縁部内面横方向の木口状工具の撫で後横撫で。胴部内面横方向の篦撫で、あるいは篦削り。	①細かい砂粒に石英黒色粒を含む ②にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部1/3～胴部上半1/3 4世紀
7	土師器 台付甕	18住No 1・2・覆土	①(16.4) ③(22.6)	あまり胴が張らない器形。底部付近は横方向の篦撫で。底部～口縁部方向に櫛状工具による櫛目後、頸部から底部方向に硬毛後、頸部よりやや下位に横方向の櫛目を施す。口縁部内外面横撫で。頸部内面篦撫で。胴部内面上部縦方向の指撫で。台部内面指撫で、天井部やや粗めの砂粒を塗り込んでいる。	①やや粗めの砂粒に白色・黒色粒を含む ②褐(10YR3/2)	口縁部～胴部1/2 台部下半欠損 4世紀
8	土師器 台付甕	18住No 3・5	②8.0 ③(18.5)	台部下端部折り返し、外面連結部より下方に櫛目、内面縦方向の指撫で、天井部にやや粗めの砂粒を塗り込んでいる。胴部外面連結部より口縁部方向に櫛目。内面下部は横方向の指撫で、上部は縦方向の指撫で。	①やや粗めの砂粒に白色・黒色粒を含む ②にぶい黄橙(7.5YR7/4)	胴下半～台部4世紀
9	弥生 壺	18住覆土		折り返し口縁。外面櫛状工具の波状文。内面縦方向に直線的な櫛状工具による櫛目。赤彩。	①細かい砂粒に3mm程の小石を含む②にぶい黄橙(10YR6/3)	口縁部破片
10	弥生 壺	18住No 6		破片外面上部に櫛状工具による波状文。下部は丁寧さか。赤彩。	①細かい砂粒に白色・黒色粒を含む　②明赤褐(5YR5/6)	胴部破片
11	弥生 壺	18住覆土		破片外面上部2/3ほどに櫛状工具による波状文が施されている。赤彩。	①細かい砂粒に黒色粒を含む ②にぶい黄(2.5Y6/3)	胴部破片

表22　大沼下遺跡18号住居跡出土遺物観察(2)

No	種類器種	出土遺構出土層位	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
12	弥生壺	18住覆土	櫛状工具による波状文。	①細かい砂粒に白色・黒色粒を含む ②にぶい黄橙(10YR6/4)	胴部破片 甕式
13	弥生壺	18住覆土	櫛状工具による波状文。	①細かい砂粒に黒色・白色粒を含む ②浅黄(2.5Y7/3)	胴部破片 甕式
14	弥生壺	18住覆土	外面に櫛状工具による波状文と横線文が施される。15号住No４・５・６と同一個体の可能性。赤彩。	①細かい砂粒に白色・黒色粒を含む ②にぶい黄橙(10YR6/4)	胴部破片

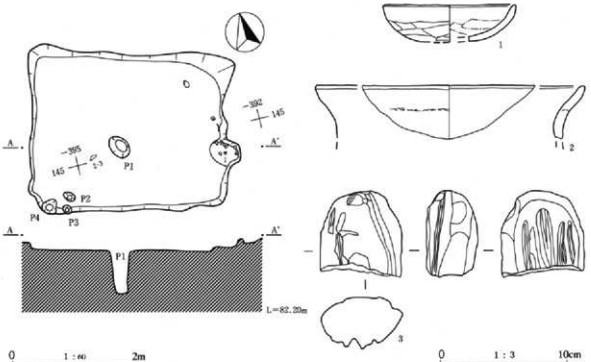
大沼下遺跡19号住居（第44図、ＰＬ11・19）

遺構　Ｂ・Ｃ区境界のローム台地で、140-390Gで確認された。北には１号溝が東西に確認された。住居の形状は、東西方向に長軸をとる長方形で、長軸3.15ｍ、短軸2.15ｍである。壁高は４～20㎝で、北壁が低い。竈は東壁中央やや南寄りに構築されている。燃焼部のみの確認で、両袖は残存していない。周溝・貯蔵穴等の施設は確認できなかった。中央部にＰ１が確認され、床面からの深さ67㎝であり、１本柱とも考えられる。南西隅で３基のピット（Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４）が確認されているが、住居の柱穴の可能性は低いと思われる。床面積は6.58㎡であった。

遺物　竈付近に遺物が集中して出土している。１は竈内より出土している。土師器坏で底部を欠損する。底部から体部にかけて箆削りが施され、底部は丸底気味である。８世紀前半と思われる。２は住居中央付近の床面から出土した。土師器甕の口縁部から頸部破片で口縁の形状は「く」の字状である。８世紀前半と思われる。３は２と重なって出土した。スコリア質安山岩製の砥石である。楕円形であったと思われるが半分程を欠損する。表裏に研磨による溝が縦方向に刻まれている。側縁部にも研磨溝が刻まれ使用されている。

図示した遺物の他に110点出土している。内訳は土師器甕92点、土師器坏17点、陶器１点である。

本住居跡は出土遺物等から奈良時代８世紀前半と考えられる。



第44図　大沼下遺跡19号住居跡・出土遺物

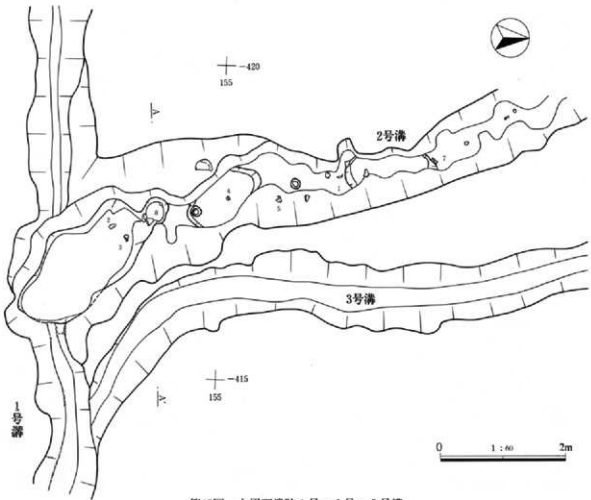
表23　大沼下遺跡19号住居跡出土遺物観察表

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 坏	19住№５	①(10.4) ③(2.9)	口縁部外傾。口縁外面横撫で。底部外面箆削り。箆削りの痕跡不明瞭。内面は箆状工具による横方向の撫で。	①細かい砂粒に白色・黒色粒を含む ②橙(7.5YR6/6)	口縁部～底部1/4 ８世紀前半
2	土師器 甕	19住№１	①(21.2) ③(4.2)	外面指押さえ後横撫で。輪積みの痕跡がみられる。内面横撫で。口縁部は頸部から外反し、口唇部近くでやや内湾する。	①細かい砂粒を含む ②橙(5YR6/6)	口縁部1/8 ８世紀前半
3	石製品 砥石	19住№１	④(6.4)　⑤　6.5 ⑥　4.0	正面右側縁部近くに溝状になった使用痕、裏面に６条の溝条の使用痕がみられる。		1/2 スコリア質安山岩

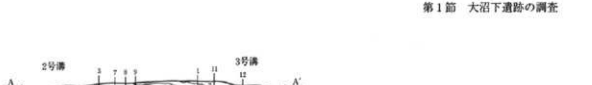
Ⅲ　溝

大沼下遺跡１号溝（第45・47図、ＰＬ19）

遺構　調査区のほぼ中央、150-415G～145-380Gで確認された。ほぼ東西方向の走向で、確認された全長は37ｍ、上幅40～120cm、底幅10～32cm、深さ43～55cmである。西端は調査区外に延びる。調査区西端150-415Gで２・３号溝と重複する。さらに調査区のほぼ中央145-390Gで12号住居と重複する。12号住居土層断面で新旧関係を確認した。１号溝が新しく、12号住居が古い。12号住居の時期は８世紀後半から９世紀初めと考えられることから、12号住居より新しい時期である。



第45図　大沼下遺跡１号・２号・３号溝



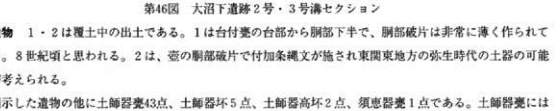
２号溝・３号溝

1．黒褐色土層　かなりしまっている。
2．黒色土層　浮石（As-C）を多く含む。
2'．黒色土層浮石（As-C）の含有量が多い。
3．茶褐色土層　黒褐色土と黄褐色土の混土層。
4．砂層　砂利に白色粒が混じっている。
5．黒褐色土層　かなり砂質を含んでおり比較的やわらかい。
6．茶褐色土層　成分は５層とほとんど同じであるが色調がやや異なる。
7．茶褐色土層　砂利分が多い。
8．茶褐色土層　砂利分含まず。黒色土に近い。
9．茶褐色土層　黒色土に近い。
10．茶褐色土層　浮石（As-C）を多く含む。
11．茶褐色土層　浮石（As-C）の含有量が少ない。
12．黄褐色土層　地山ロームの崩落土。

第46図　大沼下遺跡２号・３号溝セクション

遺物　１・２は覆土中の出土である。１は台付甕の台部から胴部下半で、胴部破片は非常に薄く作られている。８世紀頃と思われる。２は、壺の胴部破片で付加条縄文が施され東関東地方の弥生時代の土器の可能性が考えられる。

図示した遺物の他に土師器甕43点、土師器坏５点、土師器高坏２点、須恵器甕１点である。土師器甕には「S」字状口縁台付甕の破片３点を含む。



第47図　大沼下遺跡１号溝出土遺物

表24　大沼下遺跡１号溝出土遺物観察表

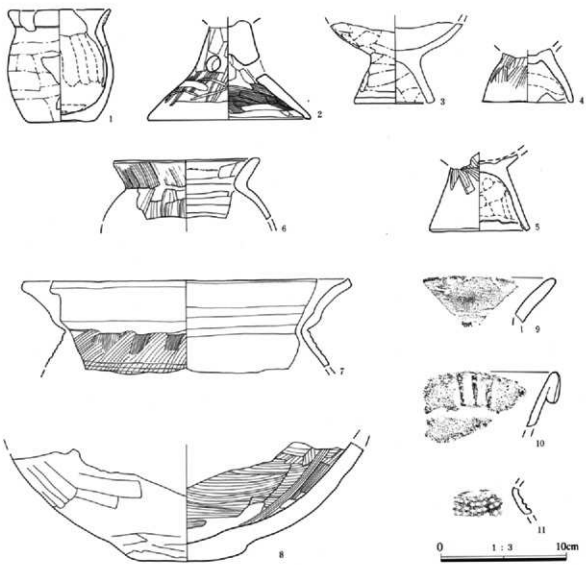
No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 台付甕	１溝一括 第１トレンチ	②(11.6) ③(9.3)	胴部外面不明瞭であるが荒削りの可能性。台部上は縦方向の荒削り。下部内外面は強い横撫で。内面上部は荒撫で。胴部内面荒撫での可能性。	①細かい砂粒に白色・黒色粒を含む ②浅黄(2.5Y7/4)	胴部下～台部1/2 ８世紀
2	弥生 壺	１溝覆土		外面に横と斜めに付加条縄文を施す。胴部最大径付近の破片と推定される。	①細かい砂粒を含む ②橙(7.5YR4/3)	胴部破片　弥生時代後期十王台式か二軒屋式

大沼下遺跡２号溝（第45・46・48図、ＰＬ19・20）

遺構　調査区の西側、155-415G～150-415Gで確認された。南北の走向で、確認された全長は8.6m、北側調査区外に延びる。上幅70～210cm、底幅14～65cm、深さ31～84cmである。１号溝・３号溝と重複する。出土遺物から１号溝より２号溝は古い。３号溝と関係は土層断面により、３号溝より２号溝が古い。埋没土は中層から底層に砂利を多く含む。砂利の大きさ等は不明である。底面は凹凸がみられる。遺物の出土が底層付近で多い。埋没土や溝の底面の状態、遺物の出土状況が、波志江中屋敷東遺跡１号溝と酷似する。同時期の溝で洪水層（波志江中屋敷東遺跡基本土層Ⅵ層）で埋没したと考えられる。

遺物　1は土師器小型甕である。3号溝の覆土中の遺物と接合した。口縁部は折り返し口縁である。2は土師器高坏の脚部である。3カ所に円形の透孔がみられる。外面に縦方向を主体とする篦磨きがみられる。3・4は土師器台付甕の台部である。単口縁台付甕と推定される。5は「S」字状口縁台付甕の台部である。台部下端が内側に折り返しがみられることや形状等から推定される。6～8は土師器甕である。6は口縁部破片で、波志江中屋敷東遺跡1号溝の出土遺物と接合した。7は口縁部破片で口径の推定値は30.4cmで大型の甕が推定される。頸部から胴部に櫛状工具による櫛目が深く施される。口縁部の形状等から「山陰型」甕と思われる。8は甕の底部で、波志江中屋敷東遺跡1号溝覆土中の破片と接合した。胴部内面に木口状工具による撫でが施される。9～11は弥生土器の壺である。9は口縁部破片で、外面に赤色が施され、縦方向に櫛状工具による櫛目がみられる。10は口縁部破片で折り返し口縁である。折り返し部に粘土紐の貼り付けが3条1単位で施される。11は頸部から胴上部破片で、外面に竹管状工具による円形刺突文が施される。

図示した遺物以外に77点の遺物が出土している。内訳は土師器甕67点、その内「S」字状口縁台付甕の破片が10点含まれる。土師器高坏か坏7点、須恵器甕2点、石1点が出土している。



第48図　大沼下遺跡2号溝出土遺物

表25　大沼下遺跡２号溝出土遺物観察表

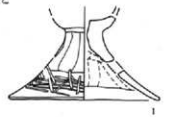
No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 小型壺	2溝No 6 3溝ベルト南	① 8.0 ② 5.3 ③ 8.8	折り返し口縁。口縁部内外面横撫で。胴部外面箆削り又は箆撫でで調整している。内面底部は横方向の指撫で。胴部縦方向の指撫で。	①やや粗い砂粒に白色・赤色粒を含む ②にぶい黄橙(10YR6/4)	ほぼ完形 口縁部・胴部一部欠損
2	土師器 高坏	2溝No13	①12.8 ③(7.8)	3個の有孔。外面縦方向主体の箆状工具の木口による磨き。上部縦方向の弱い箆削り又は箆撫で。下端部横撫で。内面上部木口状工具による縦方向の撫で。下半部横方向の撫で。下端部横撫で。	①細かい砂粒に石英・黒色粒・白色粒を含む ②にぶい黄橙(10YR6/4)	脚部のみ 下端部僅かに欠損
3	土師器 台付甕	2溝No12	② 6.0 ③ 6.0	胴部～台部外面箆撫で又は木口状工具の撫で。台下端部横方向の箆又は木口状工具の撫で。台部内面木口状工具の撫で。胴部内面箆撫での可能性。外部は撫での前に指頭押さえで成形している。単口縁の台付甕と推定される。	①細かい砂粒に石英・黒色粒を含む ②にぶい赤褐(5YR5/4)	台部全存 台部～胴下部1/3
4	土師器 台付甕	2溝No 9	② 7.2 ③(3.8)	台部はやや内湾する。外面木口状工具による縦方向の撫で。内面横方向の指撫で。台部下端は上から押しつけたように平担である。	①細かい砂粒に白色粒を含む ②明褐(7.5YR5/6)	単口縁台付甕の台部と推定
5	土師器 台付甕	2溝No 8	② 8.0 ③(6.0)	台下端部が内側に折り返されている。台上部に木口状工具による撫で。内面縦方向の指撫で後斜め方向の指撫で。台の天井部に砂粒を塗り込んでいる。	①砂粒に石英・白色・黒色粒を含む ②にぶい黄橙(10YR7/3)	「S」字状口縁台付甕の台部と推定。台部のみ
6	土師器 甕	西溝(2溝) No16・18・19 ・中屋敷東1溝覆土	① 11.4 ③(4.6)	外面頸部～口縁部にかけて縦方向の木口状工具による撫で。胴部外面頸部縦方向の木口状工具による撫で。胴部内面指または木口状工具による撫で。口縁部内面木口状工具による撫で後横撫で。	①細かい砂粒に2㎜程の石英・黒色粒・白色粒を含む ③橙(5YR6/6)	波志江中屋敷東1号溝No62と同じ 頸部下欠損
7	土師器 甕	2溝No 4	①(30.4) ②(7.1)	口縁部が2段構成で1段目が外傾し、2段目が延びて外反する。内外面横撫で。口唇部端部面取り。胴部外面やや粗めの櫛状工具の櫛目後潰の工具により頸部付近を縦方向に櫛目を施す。最後に横位にやや粗めの櫛状工具の櫛目が施される。胴部内面縦方向の指撫で後横方向の撫で。	①やや粗い砂粒に白色・黒色粒を含む ②橙(7.5YR7/6)	口縁部～胴上部1/8 山陰型
8	土師器 甕	2溝No11 中屋敷東C区1溝覆土	② 9.0 ③(9.4)	胴部外面不明瞭であるが、箆撫で調整。胴部内面木口状工具による横方向主体の撫で。	①3㎜程の小石に石英・黒色・白色粒を含む ②にぶい黄橙(10YR7/4)	胴下半～底部のみ
9	弥生 壺	西溝(2溝) 一括		外面横撫で後縦方向の櫛状工具による櫛目が施される。内面横撫で。外面に赤彩が施される。	①細かい砂粒を含む ②淡黄(2.5Y8/4)	口縁部破片
10	弥生 壺	西溝(2溝) 一括		折り返し口縁で3条の貼付が施される。内外面とも箆面が粗れていて整形の跡は不明。	①やや粗い砂粒を多量に含む　②橙(7.5YR6/8)	口縁部破片
11	弥生 壺	2溝覆土		胴部外面に竹管による円形の刺突文が施される。	①細かい砂粒を含む ②明黄褐(10YR7/6)	頸部～胴部破片 櫛式

大沼下遺跡３号溝（第45・46・49図、ＰＬ20）

遺構　調査区の西側、165-415G～150-415Gで確認された。南北の走向で、確認された全長は15.5ｍで、北側は調査区外に延びる。上幅は50～130㎝、底幅は18～40㎝、深さ11～35㎝である。１号溝と２号溝と重複する。１号溝との関係は、出土遺物から３号溝は１号溝より古い。２号溝との関係は土層断面により、２号溝より３号溝が新しい。

遺物　１は土師器の器台である。器受け部を欠損する。透孔は２個確認できるが間隔等から３個あるものと思われる。

図示した遺物以外に87点の遺物が出土している。内訳は土師器甕85点、その内「Ｓ」字状口縁台付甕の破片10点を含む。土師器高坏１点、須恵器坏１点が出土している。



第49図　大沼下遺跡３号溝出土遺物

表26　大沼下遺跡３号溝出土遺物観察表

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量　目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 器台	３溝ベルト 北	②(13.8) ③(6.8)	径1.2mの有孔２個で間隔等から３個と推定される。外面脚上部縦方向の箆削り、下半部横方向を主体とした箆磨き、下端部は横撫で。内面は縦方向の指撫で下端部は横撫で。	①細かい砂粒と白色粒を含む ②におい黄橙 (10YR7/4)	器受け部底～脚部1/3

大沼下遺跡４号溝（第９図）

遺構　調査区の東側、170-370G～150-370Gで確認された。南北の走向で、確認された全長は18.8ｍで、南北方向ともさらに延びるものと思われる。上幅は20～40cm程で、深さが確認できた所で26cmであった。16号住居の東側、170-370Gで２条の溝が合流する。15号住居と不明瞭であるが16号住居と重複する。15号住居・16号住居より４号溝が新しい。

遺物　図示し得なかったが、38点の遺物が出土している。内訳は土師器甕18点、土師器坏13点、高坏１点、須恵器坏３点、陶器３点が出土した。８世紀から９世紀の遺物が多い。

大沼下遺跡５号溝（第９図）

遺構　調査区の中央北寄り、180-380G～170-370Gで確認された。南北の走向で、確認された全長は8.0ｍで、南北方向ともさらに延びるものと思われる。上幅40～90cm、深さ40～70cmである。18号住居と重複する。18号住居の土層断面により、５号溝が新しい。

遺物　出土遺物はなかった。

大沼下遺跡６号溝（第９図）

遺構　調査区の北側、195-375G～180-375Gで確認された。南北の走向で、確認された全長は14.8ｍで、南北方向ともさらに延びるものと思われる。上幅65～80cmである。

遺物　出土遺物はなかった。

大沼下遺跡７号溝（第９図）

遺構　調査区の中央、19号住居の南に位置し、140-395G～140-390Gで確認された。東西の走向で、確認された全長は4.5ｍで、東西方向ともさらに延びるものと思われる。上幅70～90cmである。

遺物　出土遺物はなかった。

大沼下遺跡８号溝（第９図）

遺構　調査区の南側、110-390Gで確認された。北東～南西の走向で、確認された全長は3.8ｍで、南北方向ともさらに延びるものと思われる。上幅は60～90cmである。

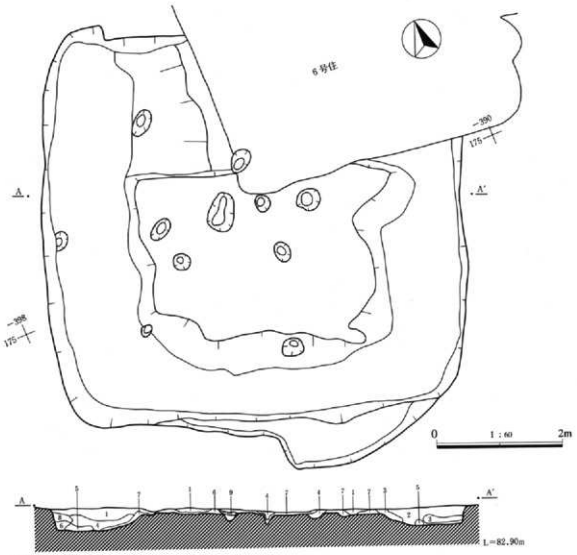
遺物　出土遺物はなかった。

大沼下遺跡方形周溝遺構（第50図、ＰＬ12・20）

遺構　調査区中央北寄り、170-390G～175-390Gで、６号住居と重複して確認された。６号住居との関係は、６号住居が新しく、方形周溝遺構が古い。外側の方形部は長さ6.2～6.6ｍで、内側は長方形で南北は2.6ｍ、東西は3.5ｍである。周溝部分は深さ25～35cmである。写真や土層断面等の調査記録を確認すると竪穴住居の可能

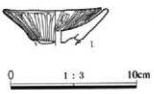
性が考えられる。竪穴住居の掘方で中央部を浅く掘り、周辺部を深く掘った状態の可能性が考えられる。

遺物　1は土師器の器台である。脚部を欠損し、器受け部のみである。内外面とも縦方向の篦磨きが施される。図示した遺物以外に出土遺物はなかった。



方形周溝遺構

1．黒褐色砂質土層　多量のロームブロックを混入し、また浮石もかなり含んでいる。
2．暗褐色砂質土層　ロームブロックを少量混入し浮石も見られる。
3．黒色砂質土層　ローム小ブロックを含み浮石も見られる。
4．黒褐色砂質土層　ローム粒、炭化粒、浮石を混入。
5．暗黒褐色砂質土層　少量のローム粒と浮石粒を含む。
6．暗黒褐色砂質土層　ローム大ブロックを混入し浮石粒も含む
7．褐色ローム土層　黒色土を少量含む。
8．暗黒褐色砂質土層　6層とほぼ同様だが浮石粒を多く含む。
9．焼土



第50図　大沼下遺跡方形周溝遺構・出土遺物

表27　大沼下遺跡方形周溝遺構出土遺物観察表

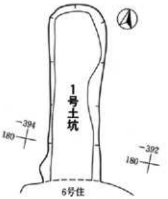
No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 器台	方形周溝 No 1	① 7.8 ③(2.6)	直線的に外傾し立ち上がる。内外面とも篦状工具による縦方向（放射状）の篦磨き。	①細かい砂粒と白色粒含む ②にぶい黄褐(10YR7/4)	器受け部 2/3

Ⅳ　土坑

大沼下遺跡1号土坑（第51図）

遺構　調査区の北側、180-390Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸2.8m、短軸0.8m、深さ13cmである。長軸方位はN－9°－Wである。6号住居の北側で重複する。1号土坑は6号住居より新しい。

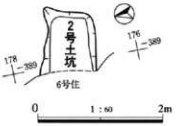
遺物　出土遺物はなかった。



大沼下遺跡2号土坑（第51図）

遺構　調査区の北側、175-385Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸0.92m、短軸0.81m、深さ17cmである。長軸方位はN－7°－Eである。6号住居の東側で重複する。2号土坑は6号住居より新しい。

遺物　出土遺物はなかった。



第51図　大沼下遺跡1号・2号土坑

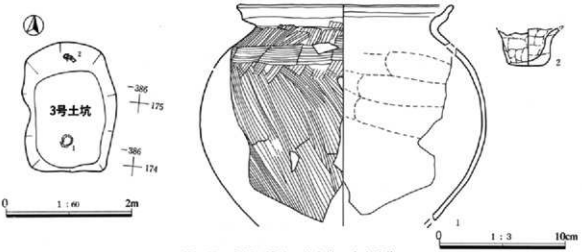
大沼下遺跡3号土坑（第52図、PL15）

遺構　調査区の北寄り、170-385Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸2.05m、短軸1.4m、深さ100cmである。長軸方位はN－9°－Wである。7号住居の北側で重複する。3号土坑と7号住居の関係は調査時においては不明であった。出土遺物の関係から3号土坑は7号住居より古いと思われる。

遺物　1は「S」字状口縁台付甕で胴下半から台部を欠損する。口唇部に弱い面取りがみられ、胴部は球形である。4世紀の初めと思われる。2は手捏である。口唇部の一部を欠損する。

図示した遺物の他に97点の遺物が出土している。7号住居と明確に分離できなかったため、7号住居の遺物が混在する可能性が考えられる。内訳は土師器甕56点、土師器坏13点、土師器高坏8点、土師器器台4点、須恵器坏1点、須恵器坏蓋1点、陶器1点、磁器1点である。

3号土坑は出土遺物等から古墳時代初頭4世紀前半と考えられる。



第52図　大沼下遺跡3号土坑・出土遺物

表28　大沼下遺跡3号土坑出土遺物観察表

No	種　類 器　種	出土遺構 出土層位	量　目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 台付甕	7住No15	① 16.8 ③(17.0)	胴部外面台部から口縁部方向に箆状工具による箆目、頸部から胴部方向の箆目後、頸部よりやや下位に横位に箆目を施す。口唇部に弱い面取りがなされる。口縁部内外面横撫で。胴部内面胴下部縦方向の指撫で、胴上部横方向の指撫で。	①細かい砂粒に黒色粒を含む ②浅黄橙(10YR8/3)	口縁部～胴部下半1/2 4世紀前半
2	土師器 手捏	7住 No16－2	② 3.0 ③(3.0)	手捏である。内外面に指押さえ・指撫での跡がみられる。底部の形は不整形な五角形である。口縁部は外反する。	①細かい砂粒に白色・黒色粒を含む ②にぶい黄(2.5YR6/3)	口唇部のみ欠損

大沼下遺跡4号土坑（第53図）

遺構　調査区の中央、165-385Gで確認された。平面形は円形で、規模は長軸1.4m、短軸1.22m、深さ32cmである。長軸方位はN－7°－Eである。8号住居の南西隅で、8号住居と10号住居の重複する部分で、重複する。4号土坑が重複する住居より新しい。

遺物　出土遺物はなかった。

大沼下遺跡5号土坑（第53図）

遺構　調査区の中央、160-385Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸1.82m、短軸0.7m、深さ16cmである。長軸方位はN－85°－Wである。9号住居と10号住居の重複する部分で、重複する。5号土坑が重複する住居より新しい。

遺物　出土遺物はなかった。

大沼下遺跡6号土坑（第53図）

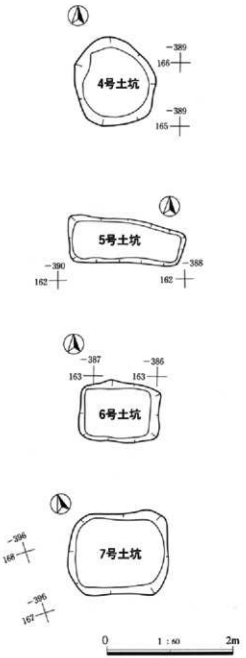
遺構　調査区の中央、160-385Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸1.28m、短軸0.94m、深さ18cmである。長軸方位はN－88°－Wである。9号住居のほぼ中央で重複する。6号土坑は9号住居より新しい。

遺物　出土遺物はなかった。

大沼下遺跡7号土坑（第53図）

遺構　調査区の中央、165-395Gで確認された。平面形は方形で、規模は長軸1.58m、短軸1.3m、深さ28cmである。長軸方位はN－73°－Wである。10号住居の北西隅で重複する。7号土坑は10号住居より新しい。

遺物　出土遺物はなかった。



第53図　大沼下遺跡4号～7号土坑

大沼下遺跡８号土坑（第54図）

遺構　調査区の中央、160-390Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸2.0m、短軸0.68m、深さ26cmである。長軸方位はN－89°－Wである。10号住居南西隅で重複する。８号土坑は10号住居より新しい。

遺物　出土遺物はなかった。

大沼下遺跡９号土坑（第54図）

遺構　調査区の中央、160-390Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸2.22m、短軸0.7m、深さ34cmである。長軸方位はN－91°－Eである。10号住居中央南寄りで重複する。９号土坑は10号住居より新しい。８号土坑に隣接し、規模もほぼ同様である。

遺物　出土遺物はなかった。

大沼下遺跡10号土坑（第54図）

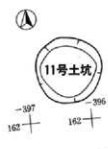
遺構　調査区の中央、160-390Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸2.03m、短軸1.0m、深さ32cmである。長軸方位はN－88°－Eである。10号住居の南壁で重複する。10号土坑は10号住居より新しい。

遺物　出土遺物はなかった。

大沼下遺跡11号土坑（第54図）

遺構　調査区の中央、160-395Gで、10号住居南西隅に近接して確認された。平面形は円形で、規模は長軸1.04m、短軸1.01m、深さ103cmである。長軸方位はN－４°－Eである。他の遺構との重複はない。

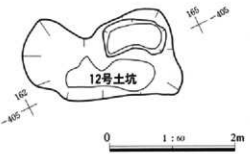
遺物　出土遺物はなかった。



大沼下遺跡12号土坑（第54図）

遺構　調査区の中央西寄り、155-410Gで、11号住居の東で確認された。平面形は不整形な長方形で、規模は長軸2.38m、短軸1.3m、深さ66cmである。長軸方位はN－21°－Eである。11号住居の東壁が不明瞭であるため、12号土坑と重複している可能性もある。

遺物　出土遺物はなかった。



第54図　大沼下遺跡８号～12号土坑

大沼下遺跡13号土坑（第55図）

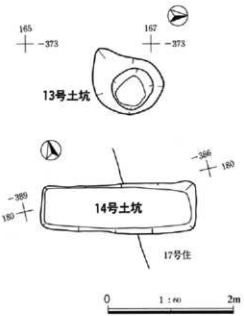
遺構　調査区の中央東寄り、165-370Gで、16号住居の南に近接して確認された。平面形は方形あるいは円形で、規模は長軸0.9m、短軸1.1m、深さ109cmである。長軸方位はN－1°－Wである。他の遺構との重複はない。

遺物　出土遺物はなかった。

大沼下遺跡14号土坑（第55図）

遺構　調査区の北側、180-385Gで確認された。平面形は長方形で、規模は長軸2.49m、短軸0.79m、深さ38cmである。長軸方位はN－21°－Eである。17号住居西壁で重複する。14号土坑は17号住居より新しい。

遺物　出土遺物はなかった。



第55図　大沼下遺跡13号・14号土坑

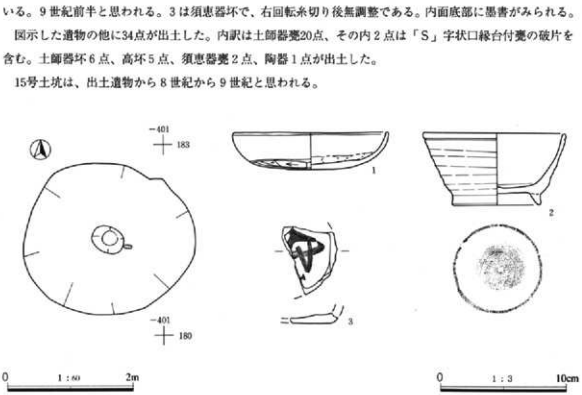
大沼下遺跡15号土坑（円形大型ピット）（第56図、PL20）

遺構　調査区の中央北側、180-400Gで確認された。「大沼下遺跡西稲岡遺跡」の報告で円形大型ピットとされていたものである。平面形は円形で、規模は長軸2.72m、短軸2.4m、深さ130cmである。断面形は擂鉢状で、底面が小さい。長軸方位はN－6°－Wである。他の遺構との重複はない。

遺物　1は土師器坏で、丸底気味で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。8世紀後半と思われる。2・3は須恵器坏・椀である。2は、口縁部から体部が直線的で外傾する。底部は右回転糸切り後高台を貼り付けている。9世紀前半と思われる。3は須恵器坏で、右回転糸切り後無調整である。内面底部に墨書がみられる。

図示した遺物の他に34点が出土した。内訳は土師器甕20点、その内2点は「S」字状口縁台付甕の破片を含む。土師器坏6点、高坏5点、須恵器甕2点、陶器1点が出土した。

15号土坑は、出土遺物から8世紀から9世紀と思われる。



第56図　大沼下遺跡15号土坑・出土遺物

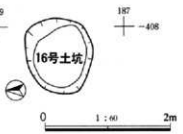
表29　大沼下遺跡15号土坑出土遺物観察表

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量　目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 坏	W1－N2G 内ピット一括	①(12.4) ③　2.9	口縁部は外傾する。口縁部～体部内外面横撫で。外面底部篦削り。内面底部指押さえ後横方向の撫で。内面の器面は粗れている。	①細かい砂粒と白色粒を含む ②橙(5YR6/6)	口縁部～底部1/3 8世紀後半
2	須恵器 椀	W1－N2G 内ピット一括	①(11.2) ②　7.0 ③　5.8	右回転轆轤成形。体部～口縁部は直線的で外傾する。体部外面に轆轤目が残る。底部は右回転糸切りで、高台を貼り付ける。	①細かい白色粒を含む ②にぶい黄橙(10YR5/4)	口縁部1/4、底部ほぼ完全に残存 9世紀前半
3	須恵器 坏	W1－N2G 内ピット	轆轤右回転整形。右回転糸切り無調整内面に「仲」かの墨書が施される。		①海綿骨針・細かい砂粒を含む ②にぶい黄(2.5Y6/3)	底部破片 墨書あり

大沼下遺跡16号土坑（第57図）

遺構　調査区の北側、180-405Gで確認された。平面形は不整形な楕円形で、規模は長軸1.25m、短軸1.15m、深さ52cmである。長軸方位はN－62°－Eである。他の遺構との重複はない。

遺物　図示し得なかったが須恵器甕4点が出土した。



第57図　大沼下遺跡16号土坑

大沼下遺跡17号土坑

遺構　調査区の中央西寄り、155-400Gで確認された。平面形は円形で、規模は長軸1.2m、短軸1.1m、深さは不明である。長軸方位はやや西に傾いている。他の遺構との重複はない。

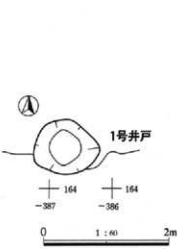
遺物　出土遺物はなかった。

V　井戸

大沼下遺跡1号井戸（第58図）

遺構　調査区の中央、160-390Gで、9号住居の北壁で重複して確認された。平面形は円形で、規模は長軸0.98m、短軸0.88m、深さ193cmである。長軸方位はN－59°－Wである。ローム台地上であり、どの土層まで掘り込んであるか不明である。素掘りである。

遺物　出土遺物はなかった。



第58図　大沼下遺跡1号井戸

大沼下遺跡2号井戸

遺構　調査区の中央、160-345Gで確認された。平面形は円形で、規模は径1.3m前後で、深さ150cm程である。ローム台地の縁辺にあたる位置で、どの層まで掘り込んであるか不明である。

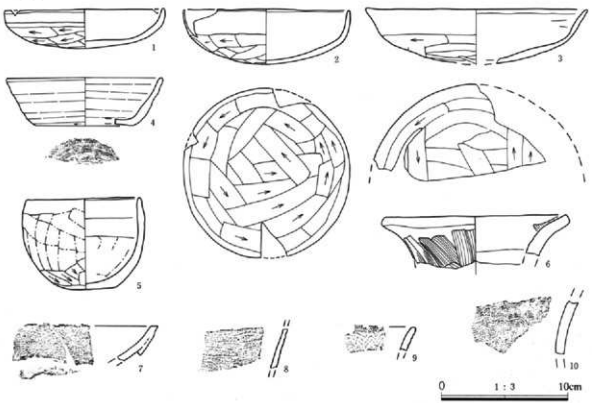
遺物　出土遺物はなかった。

Ⅵ　大沼下遺跡遺構外出土遺物（PL20）

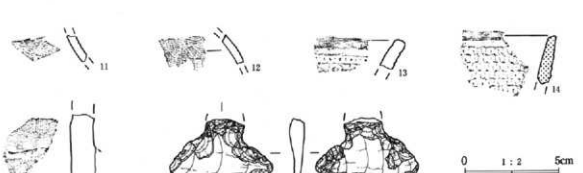
ここで掲載する遺物は、表土掘削時や遺構確認時に出土した遺物と明確に遺構に伴わない遺物である。

1～3は土師器坏である。1は波志江中屋敷東遺跡4号溝の覆土中出土の破片と接合した。やや丸底気味で、口縁部はやや外傾する。8世紀後半である。2は底部が丸底で、口縁部が直立する。8世紀後半である。3は底部が丸底で、口縁部がやや外反する。8世紀前半である。4は須恵器坏で、底部周辺部を右回転篦削りで調整している。体部から口縁部が直線的で外傾する。8世紀後半である。5は土師器の鉢である。体部から口縁部は内湾し、口縁部はほぼ直立する。体部外面は下半が篦削り、上半が指撫でで整形している。4世紀である。6は土師器の壺の口縁部である。口唇部の上端部に面取りが施される。内外面に木口状工具による撫での痕跡がみられる。4世紀である。15は円筒埴輪の破片で、突帯が剥落している。外面に縦方向の刷毛目、内面に指撫での痕跡がみられる。7～12は弥生土器の壺および甕である。7は口縁部破片である。折り返し口縁で、折り返し部に網目状撚糸文が施される。口唇部は面取りされている。南関東地方の前野町式に類似する。8は胴部破片で、外面に付加条縄文が施される。東関東地方の十王台式と思われる。9～12は櫛式である。9は口縁部破片で、口唇部直下に櫛状工具による波状文が施される。10は口縁部下の破片で、11・12は胴部破片である。櫛状工具による波状文が施される。13・14は縄文土器の深鉢である。13は口縁部破片で半裁竹管による連続刺突文が施される。縄文時代前期諸磯式である。14は口縁部破片で口唇部直下からループ文を施す。縄文時代前期関山式である。16は横長の石匙である。黒色頁岩製で、摘み部分を欠損する。

図示した遺物の他に、868点が出土した。内訳は土師器甕567点、「S」字状口縁台付甕71点、土師器坏95点、土師器高坏29点、土師器器台5点、須恵器甕16点、須恵器坏22点、陶器11点、磁器1点、石3点が出土している。



第59図　大沼下遺跡遺構外出土遺物(1)



第60図　大沼下遺跡遺構外出土遺物(2)

表30　大沼下遺跡遺構外出土遺物観察表

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量　目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 坏	ローム直上・中 屋敷案4溝覆土	①(12.6) ③　3.1	口縁部やや外傾。口縁部内外面横撫で。底部外面箆削り。底部内面撫で。	①細かい砂粒と白色・黒色粒を含む　②橙(5YR6/8)	口縁部～底部3/4 8世紀後半
2	土師器 坏	第4トレンチ 番外2	①(13.0) ③　4.3	口縁直立。内面口縁～体部横撫で。底部内面撫で。体部～底部箆削り。	①微細な黒色粒・白色粒を含む ②にぶい橙(5YR7/4)	口縁部1/4、体部～底部一部欠損 8世紀後半
3	土師器 坏	不明	①(17.4) ③(　4.3)	口縁部やや外反。口縁内外面横撫で。内面底部撫で。外面底部箆削り。	①細かい砂粒と白色粒含む ②橙(7.5YR6/6)	口縁部～底部1/4 8世紀前半
4	須恵器 坏	N1－E1G	①(12.2) ②(　7.6) ③　3.8	轆轤右回転成形。体部～口縁は直線的で外傾する。内外面に轆轤目が残る。底部切り離し技法は不明。周辺部右回転箆削りで調整。	①2mm程の白色粒と細かい砂粒を含む ②オリーブ灰(5GY6/1)	口縁部～底部1/3 8世紀後半
5	土師器 鉢	第1トレンチ No1	①　9.1 ③　7.2	口縁部内外面横撫で。胴部～底部外面箆削り。底部～胴部中央付近まで箆撫で。胴部中央より上部は横方向の指撫で。	①砂粒を多く、白色粒を含む ②浅黄(2.5Y7/3)	ほぼ完形 4世紀
6	土師器 壺	第1トレンチ No3	①(14.2) ③(　3.2)	口唇部上端面取り。内外面本口状工具の撫で後横撫で。	①やや粗い砂粒に白色粒を含む　②にぶい赤褐(5YR4/3)	口縁部1/4 4世紀
7	弥生 壺	N1－E1G		折り返し口縁で、外面の折り返し部に網目状撚糸文が施される。口唇部は面取りされている。内面は横方向の箆磨きが施されている。	①細かい砂粒を含む ②橙(7.5YR6/6)	口縁部破片 前野町式類似
8	弥生 壺	N1－E1G		胴部最大径よりやや下位の破片である。外面に付加状縄文が施される。	①細かい砂粒を含む ②黄褐(2.5Y5/3)	胴部破片　弥生時代後期十王台式
9	弥生 壺	N1－E1G		外面波状文が施され、内面横撫で。	①細かい砂粒に白色粒を含む　②浅黄橙(7.5YR8/6)	口縁部破片　弥生時代後期樽式
10	弥生 壺	ローム直上		外面櫛描波状文が施される。	①細かい砂粒に白色粒を含む②にぶい黄橙(10YR6/3)	口縁～頸部破片 後期樽式
11	弥生 甕	N2－E2G		外面に櫛状工具による波状文を施す。波状文の施される最下部と思われる。	①細かい砂粒に黒色粒を含む②明黄褐(10YR6/6)	胴上部破片
12	弥生 甕	第1トレンチ		破片外面上部に櫛描波状文が施されている。胴部最大径よりやや上部破片。	①細かい砂粒に白色粒を含む ②内にぶい橙(7.5YR6/4)外褐灰(10YR4/1)	胴部破片 樽式
13	縄文 深鉢	N1－E1G		半截竹管による連続刺突文、その下に円形刺突文が施される。	①やや粗い砂粒を含む ②浅黄(2.5Y7/4)	口縁部破片 縄文前期
14	縄文 深鉢	ローム直上 一括		外面縄文を施す。口唇部の形態は面取りを施す。	①繊維を含む ②にぶい黄橙(10YR6/4)	口縁部破片 縄文前期関山式
15	土製品 埴輪	第9トレンチ 一括		外面縦方向の刷毛目後突帯貼り付け後指撫で。突帯は刺殖。内面指撫で。	②橙(7.5YR6/6)	円筒埴輪破片
16	石器 石匙	18住北ローム直上	④　3.4　⑤　5.5 ⑥　0.8	刃部を細かい剥離で調整している。横長石匙である。		摘み部一部欠損 珪質頁岩(黒色頁岩)

第２節　波志江中屋敷東遺跡の近世の調査

第１面として低地部ではAs-B（Ⅱ層）下の調査を、台地部ではローム層上面の調査を行った。昭和50年代初めの土地改良でローム台地は削られ、低地は削られたローム層で埋められ、平坦な地形になっていた。この節で報告する遺構・遺物はAs-B（Ⅱ層）より上位の層から掘り込まれたものである。遺構は溝３条、土坑６基である。

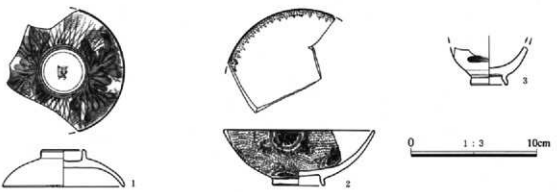
Ⅰ　溝

６号溝（第61・62図、ＰＬ21・47）

遺構　Ｃ区中央南側低地の115-345G～135-340Gにかけて確認された。南北の走向（Ｎ－13°－Ｅ）で、西側に緩く弧状になり、南側は調査区外に続く。北側は底面までの深さが徐々に浅くなる。北側は掘り込みが浅く、調査時の確認面まで達していなかったものと考えられる。確認された全長は22.1ｍで、上幅70～260㎝、底幅15～90㎝、深さ38～46㎝である。底面は北から南に傾斜している。時期は、出土遺物から18世紀～19世紀後半と考えられる。

遺物　１～３は磁器である。１は碗の蓋である。２は碗で外面および内面の文様は型紙刷絵で施文されている。１・２は19世紀後半である。３は小碗か猪口で高台がつく。18世紀と思われる。

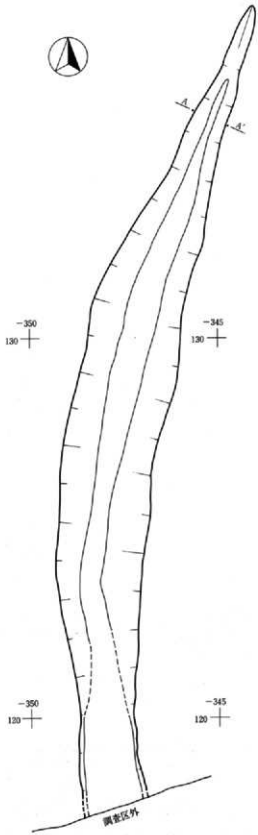
図示した遺物の他に26点が出土した。磁器７点で、碗などである。時期は18世紀と19世紀後半と思われる。陶器２点で鉢と碗である。鉢は18世紀、碗は19世紀である。軟質陶器２点で、19世紀で器種は不明である。瓦２点でいずれも近代瓦である。石は２点で１点は19～20世紀の石板である。土師器10点で、９世紀と思われる坏の破片がみられる。須恵器の甕２点で、時期は不明である。

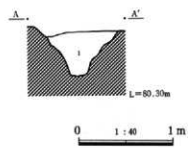


第61図　６号溝出土遺物

表31　６号溝出土遺物観察表

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量　目 (cm)	成・整形技法の特徴	時期・残存状況
1	磁器 蓋	Ｃ区６溝	① 3.6 ② 9.5 ③ 2.9	外面にベロ藍で花文を描く。瀬戸。	口縁部1/2 19世紀後半
2	磁器 碗	Ｃ区６溝	①(12.0)②(4.2) ③ 4.4	型紙刷絵。外面にベロ藍。内外面施文は桜花文を中心とする。瀬戸。	底部～口縁部1/3 19世紀後半
3	磁器 小碗又は猪口	Ｃ区６溝	② 3.0 ③(2.9)	高台。内外面に青みがかかった透明釉。呉須で施文。肥前系。	底部のみ 18世紀





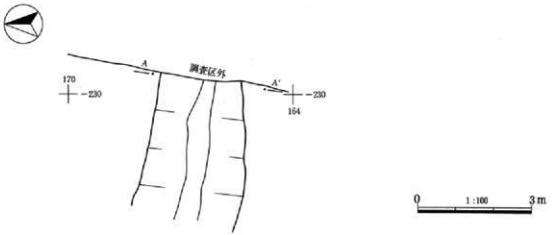
6号溝
1：褐灰色土
土のしまりはあまりなく、粘性はややある。
赤褐色のひびわれあり。

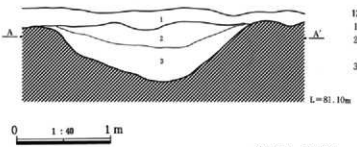
第62図　6号溝

12号溝（第63図）

遺構　Ｄ－２区の東端のローム台地上の165-225Gではほぼ東西の走向（Ｎ－80°－Ｗ）で確認された。このローム台地は伊勢山遺跡から続くもので、東から西に傾斜し、本遺跡の低地に続く。12号溝もこのローム台地の地形に沿って造られたもので、西側は不明で、東側は調査区外に続く。確認された全長は3.7mである。上幅220～280cm、底幅35～60cm、深さ49～58cmである。埋没土はＡs-Ｂの混土層をわずかに含む土で自然埋没土である。底面は東から西に傾斜している。

遺物　出土遺物はなかった。





12号溝
1：表土　昭和50年代の圃場整備以後の表土。
2：褐色土　かたくしまっている。径１mmのパミス（褐色～白色）をごくわずか含む。
3：黄褐色土　かたくしまっている。径１mmのパミス（褐色～白色）をごくわずか含む。ローム粒、径５－10mmのロームブロック少し含む。

第63図　12号溝

13号溝（第64～69図、ＰＬ21・47～49）

遺構　Ａ区中央北側～東端で、115-560G～080-500Gにかけて確認された。115-560G～115-505Gは東西走向（Ｎ－85°－Ｅ）で、115-505Gではほぼ直角に曲がり、南北走向（Ｎ－12°－Ｗ）に向きを変える。確認された全長は92.4mで、東西走向部分54.9m、南北走向部分37.5mである。上幅35～185cm、底幅15～115cm、深さ40cm前後である。底面の傾斜は西～東、北～南に傾斜している。東西走向部分で溝の壁面に木杭の痕跡が確認された。平面図（第64図）・印が木杭の痕跡が確認された位置である。１列づつ両壁面にみられる。南北走向部分の北端部と中央付近では木杭が確認された。その内の４点は下端部を尖らせている。埋没土の状況から水が流れていた痕跡がうかがえる。埋没土と出土遺物の関係から17世紀～20世紀初めまで使われていたものと考えられる。

遺物　１～17・45は磁器である。９・14は17世紀の肥前系の皿である。１～３・８・10・12・15は18世紀の肥前系である。１は碗で、外面に上絵で赤彩、金彩が施される。２・３は小碗である。８は蕎麦猪口である。10は皿で、内面に蛇の目の重ね焼きの痕跡がみられる。11・12・15は徳利である。４～７は19世紀前半の肥前系である。７は碗である。５・６は湯呑みで、６は外面に臨海図が施文されている。４は小碗で草文が施文されている。

13・16・17は中国製の磁器である。13は青磁の碗の体部破片で、鎬施文である。産地は龍泉窯で、13～14世紀である。16は青白磁の碗の底部で、鎬施文である。12～13世紀である。17は白磁の皿か碗の体部破片である。11～14世紀と思われる。45は皿で中国青磁の可能性がある。

18～44・46～49は陶器である。23・38は16～17世紀で、美濃産である。23は皿で、内外面に志野釉が施され、高台は削り出しである。38は変形向付で、外面と口縁部内面に鉄絵が施され、文様は桃山風である。19・20・22は17世紀の皿で、高台は削り出しである。産地は瀬戸・美濃である。24は口縁部の大半を欠損するが、菊皿で17世紀の美濃産である。36は瓶甕で、外面に鉄絵で草文が描かれる。17世紀で瀬戸産である。39は擂鉢で内外面に鉄釉が施され、17～18世紀の美濃産である。26・29は18世紀、瀬戸・美濃産である。25・27・28・30・31・34は陶胎染付碗である。18世紀肥前系である。33・37陶胎染付の徳利で、18世紀肥前系と思われる。32は京焼系の碗で、18世紀である。42は唐津系の浅鉢で、内面に印文が施される。18世紀である。41・44は常滑産の擂鉢で、44は17～18世紀で、41は19世紀である。47は灯火皿で18～19世紀で常滑産である。43は信楽産の擂鉢で17～18世紀である。

18・21・40・46・48・49は陶器で産地不明である。49は油壺と思われ、17～18世紀である。46は浅鉢で17～19世紀である。18・21・40・48はいずれも18～19世紀である。18は灯火皿、21は乗燭、40は大鉢、48は土瓶の注口部である。

50～56は軟質陶器である。51～54は焙烙で、18世紀後半、小泉焼きと思われる。55は羽釜で、17～18世紀、小泉焼きの可能性が考えられる。56は火起しで、底部に穿孔の痕跡がみられる。19～20世紀、小泉焼である。57・58は瓦で、桟瓦である。19～20世紀である。

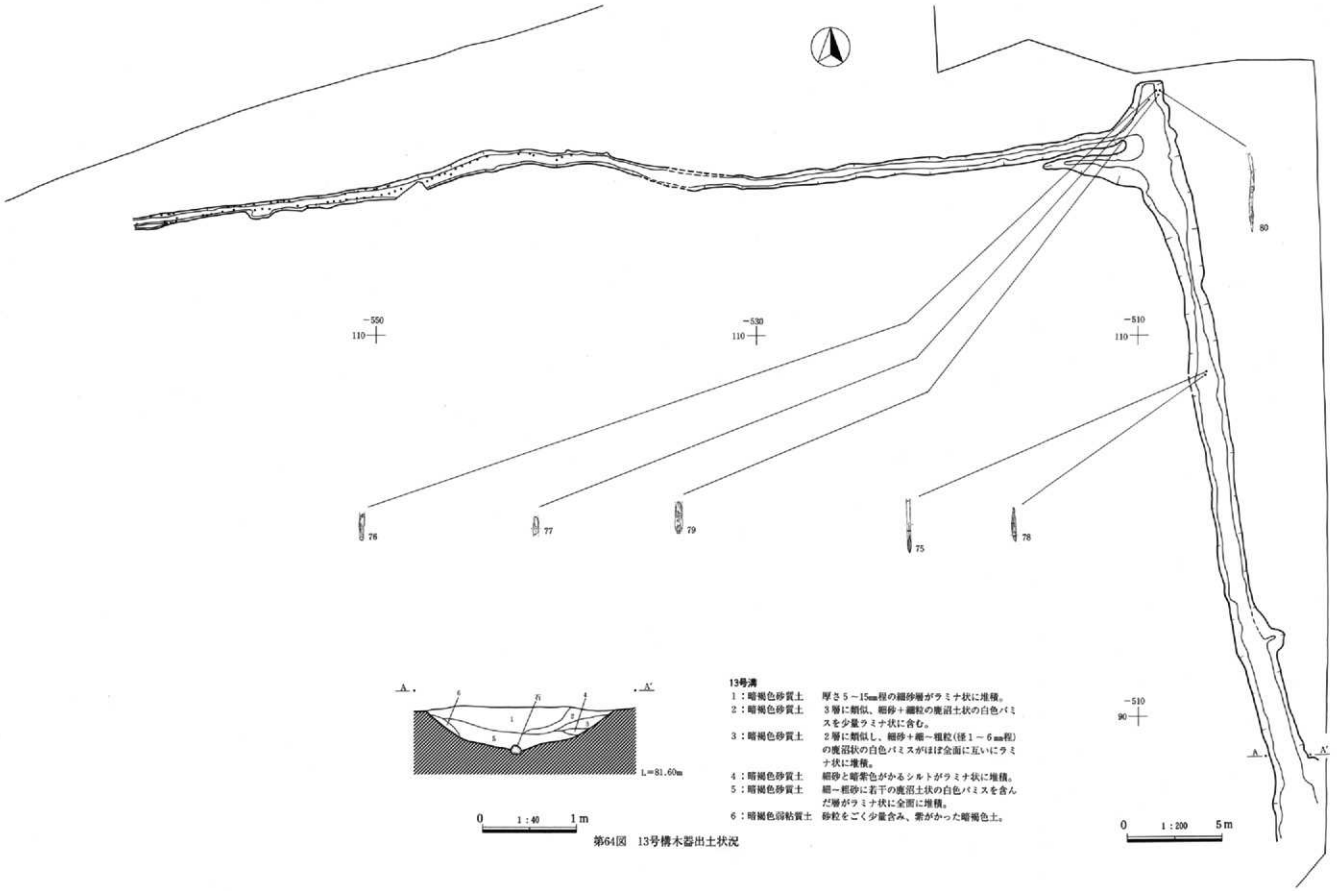
50は中世軟質陶器の火鉢で、15世紀である。60は土師質土器の皿の底部で、14～15世紀である。59は灰釉陶器の碗で、９～10世紀である。61・62は埴輪で、円筒埴輪の破片である。

63・64は緑色片岩で、板碑の破片の周囲を打ちかき円形にしようとしている。65～70は砥石である。いずれも手持ち砥で中砥級である。68は凝灰岩で、他は砥沢石である。

74は煙管の雁首である。薄い板金部を側部で鑞継している。71・72は古銭である。71は「開元通宝」である。72は遺存状態が良好で、「寛永通宝」で、字銘が細く、背文字に「文」が書かれている。73は鉄砲玉で、１条の接合痕がみられる。より未使用に近い状態のものである。

75・77～80は木製品で杭である。先端部を加工して、尖らせている。76は板材である。

図示した遺物以外に366点が出土した。磁器は84点で、３点が肥前系の17世紀後半で、碗１点・皿１点・小碗１点である。38点は18世紀の肥前系で、碗１点・小碗32点・蕎麦猪口１点・皿４点である。18世紀後半のものが多い傾向にある。５点は19世紀前半の肥前系で、小碗３点・碗１点・猪口１点である。肥前系以外の19世紀の磁器は19点で、碗11点・小碗６点・皿２点である。明治印判や銅板転写のものがみられる。20世紀の磁器は猪口２点・小碗３点・碗２点・蓋１点・クリーム瓶１点・不明１点である。中国製磁器は青磁２点で、龍泉窯系で時期は13～14世紀である。陶胎染付は７点で18世紀の碗である。陶器は76点で瀬戸・美濃の皿・碗・擂鉢・甕・壺等である。時期は16～18世紀である。唐津系の18世紀の碗が１点ある。他に地方



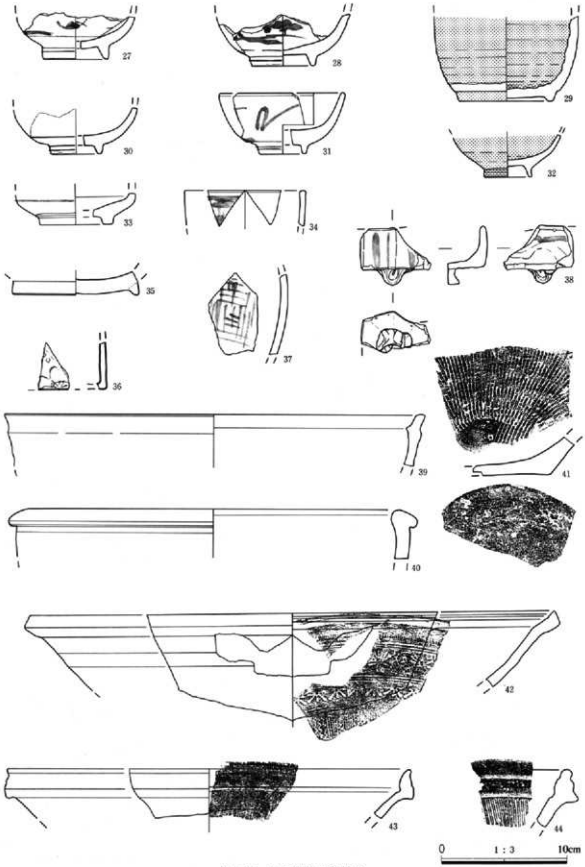
13号溝

1：暗褐色砂質土	厚さ5～15cm程の細砂層がラミナ状に堆積。
2：暗褐色砂質土	3層に類似、細砂＋細粒の腐泥土状の白色パミスを少量ラミナ状に含む。
3：暗褐色砂質土	2層に類似し、細砂＋細～粗粒(径1～6mm程)の腐泥状の白色パミスがほぼ全面に互いにラミナ状に堆積。
4：暗褐色砂質土	細砂と暗紫色がかるシルトがラミナ状に堆積。
5：暗褐色砂質土	細～粗砂に若干の腐泥土状の白色パミスを含んだ層がラミナ状に全面に堆積。
6：暗褐色弱粘質土	砂粒をごく少量含み、紫がかった暗褐色土。

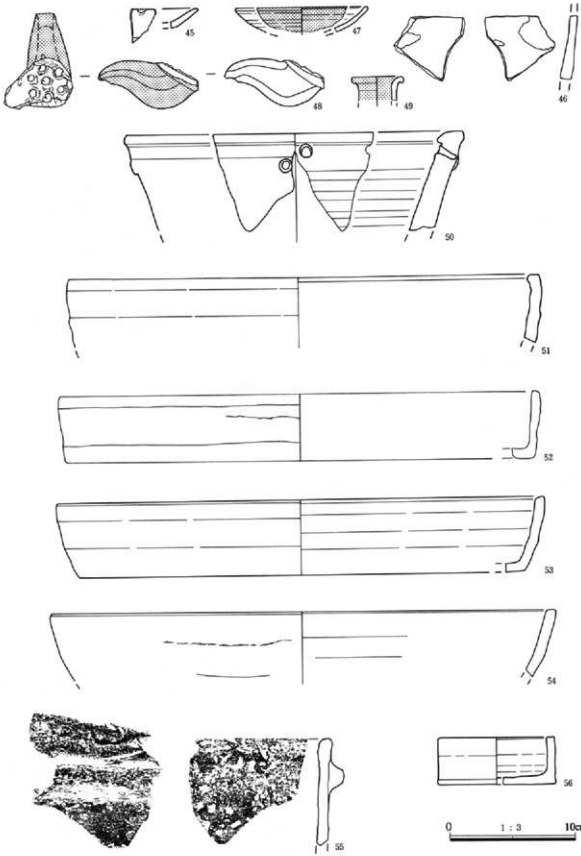
第64図　13号構木器出土状況

窯産が17点で、碗３点・徳利６点・皿４点・香炉１点・小甕２点・急須１点で、18～19世紀である。軟質陶器は37点で、18～19世紀の内耳25点、他は器種不明である。瓦は６点でいづれも近代瓦である。中世陶器は７点で、いづれも甕である。産地は渥美と常滑である。灰釉陶器３点で10世紀の椀である。須恵器は26点で甕12点、９～10世紀の坏２点、８世紀の蓋１点、８世紀の台付長頸瓶２点、瓶１点である。埴輪は１点で円筒埴輪と思われる。土師器は73点で４～９世紀の甕・坏等である。磁器61点、陶器133点、軟質陶器57点、土師器甕65点、土師器坏27点、須恵器甕11点、須恵器坏２点、瓦９点が出土した。

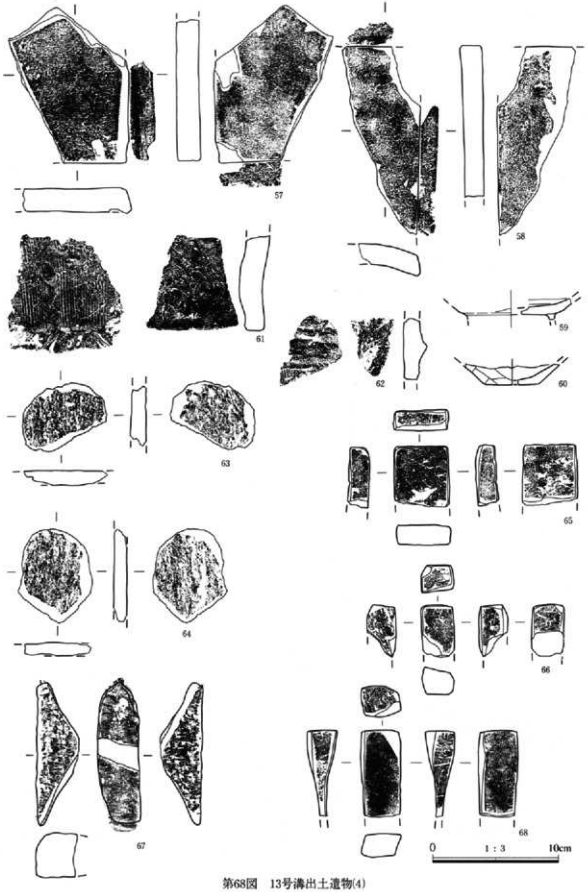
第65図　13号溝出土遺物(1)



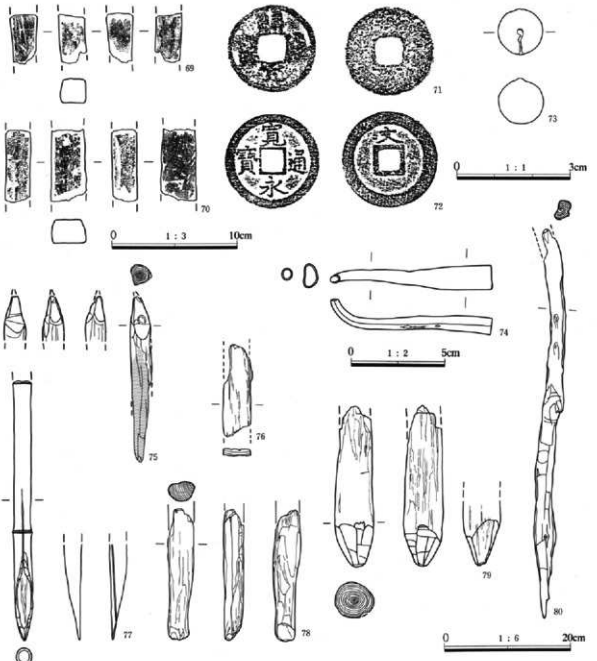
第66図　13号溝出土遺物(2)



第67図　13号溝出土遺物(3)



第68図　13号溝出土遺物(4)



第69図　13号溝出土遺物(5)

表32　13号溝出土遺物観察表(1)

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	時期・残存状況
1	磁器 碗	A区13溝	①(10.0) ②(3.5)	内外面に白磁釉。外面に呉須による丸文、赤彩丸文、金彩。内面の使用痕跡はほとんどなし。肥前系。	口縁部破片1/6～胴部 18世紀後半～19世紀前半
2	磁器 小碗	A区13溝	①(7.0)②(3.0) ③　3.4	高台端部を除き白磁釉を施釉。外面に菅文様らしき呉須施文あり。	底部1/2～口縁部 18世紀
3	磁器 小碗	A区13溝	①(7.2)②(2.8) ③　3.4	染付。高台端部を除き透明釉を施釉。外面に植物文呉須施文あり。肥前系。	底部1/2～口縁部1/4 18世紀
4	磁器 小碗	A区13溝	②(4.2) ③(2.7)	染付。高台端部を除き白磁釉。草文を呉須施文。肥前系。	底部1/6 19世紀前半
5	磁器 湯呑み	A区13溝	①(6.6) ③(5.0)	内外面に白磁釉。呉須施文あり。肥前系。	口縁部1/8～胴部 19世紀前半

表33　13号溝出土遺物観察表(2)

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	時期・残存状況
6	磁器 湯呑み	A区13溝	①　6.5 ②　3.1 ③　5.6	高台端部を除き白磁釉。外面に臨海図を呉須施文。肥前系。	底部－口縁部1/2 19世紀前半
7	磁器 碗	A区13溝	②(3.6) ③(2.2)	染付。高台端部を除き白磁釉。氷裂文を呉須施文。肥前系。	底部1/4 19世紀前半
8	磁器 菊皮猪口	A区13溝	①(8.9)②(6.0) ③　6.4	高台端部を除き、白磁釉。外面に草花文を呉須で施釉。肥前系。	底部－口縁部約1/6 18世紀後半
9	磁器 皿	A区13溝	②(4.8) ③(1.6)	染付。内外面に、淡青色磁色の釉。外面下半露胎、内面に呉須施文あり。肥前系。	底部1/3 17世紀後半
10	磁器 皿	A区13溝	②　4.8 ③(2.0)	白磁皿。内面に蛇目、重ね焼き痕あり。外面上方と内面にやや青みがかる。白磁釉あり。肥前系。	底部のみ 18世紀前半
11	磁器 小徳利	A区13溝	①　2.4 ③(4.1)	染付。外面上方に白磁釉、呉須で施文。肥前系。	底部－頸部1/2 18世紀
12	磁器 徳利	A区13溝	③(3.7)	染付。中型の徳利。外面と内面の一部に白磁釉。外面に呉須施文あり。肥前系。	頸部1/3 18世紀
13	磁器 青磁碗	A区13溝	③(3.0)	鎬手蓮弁文。釉薬は薄く、発色は半緑色で良。胎土は淡灰色。龍泉窯。	胴部破片 13～14世紀
14	磁器 皿	A区現代溝	②(5.4) ③(1.2)	高台端部を除き、白磁釉。内面に呉須施文あり。高台に砂付着あり。肥前。	底部1/4 17世紀
15	磁器 徳利か	A区13溝	③(3.7)	染付。大徳利か。内外面に白磁釉。外面に輪違文を呉須で施文。肥前系。	胴部破片 18世紀
16	磁器 青白磁碗	A区13溝	②(4.4) ③(1.9)	産地中国。鎬手蓮弁文碗で青白磁。内外面施釉。発色は良好。胎土は淡灰色。	底部1/3 12～13世紀
17	磁器 白磁皿か碗	A区13溝	③(1.6)	内外面に施釉。胎土は淡灰色。	胴部破片 11～14世紀
18	陶器 灯火皿	A区13溝	②(7.6) ③(1.8)	磁器質。内面に透明釉。外面に回転篦削り。産地不明。	底部1/4 18～19世紀
19	陶器 皿	A区13溝	①(16.2)②(12.4) ③　3.8	外面下半を除き、淡い飴釉を施釉。内面に重ね焼き痕あり。外面下方は回転篦削り。高台は削り出し。瀬戸・美濃。	底部－口縁部約1/6 17世紀
20	陶器 皿	A区13溝	①(13.0)②(7.2) ③　2.8	外面下半を除き、淡い飴釉を施釉。内面に重ね焼き痕あり。外面下方は回転篦削り。高台は削り出し。瀬戸・美濃。	底部－口縁部1/4 17世紀
21	陶器 瓶類	A区13溝	②　4.2 ③(2.9)	内面と外面底部付近を除き透明釉。底面に轆轤右回転の糸切りあり。産地不明。	底部のみ 18～19世紀
22	陶器 皿	A区13溝	①(11.6)②(7.4) ③　2.7	高台内面を除き淡黄灰色の透明釉。内面に鉄釉。体部外面高台削り出し。瀬戸・美濃。	底部－口唇部1/6 17世紀
23	陶器 皿	A区13溝	②(7.4) ③(1.6)	外面高台内側をのぞき志野釉。外面下方と高台に回転篦削り。高台は削り出し。美濃。	底部1/6 16～17世紀
24	陶器 菊皿	A区13溝	①(14.0)②(6.0) ③　3.1	外面上方から内面に淡黄色の長石釉。内面に緑色釉を施釉。内外面に菊花施文。内面にトチン痕あり。美濃	底部1/2口唇部1花弁分 17世紀
25	陶器 碗	A区13溝	①(10.4)②　4.7 ③　6.7	高台端部の鉄足状を除き、淡青緑色釉を施釉する。内外面に貫入がみられる。外面に呉須に依る施文あり。肥前系。	底部1/2－口縁1/4 18世紀
26	陶器 碗	A区13溝	①(11.4) ③(6.4)	内外面に飴釉。口縁部付近にコバルトを含む白土掛け。外面下半回転篦削り。瀬戸・美濃。	口唇部1/6～胴部 18世紀後半
27	陶器 碗	A区13溝	②　5.2 ③(3.8)	陶胎染付。高台端部の鉄足状を除き、淡青緑色釉を施釉する。内外面に貫入がみられる。外面に呉須に依る施文あり。高台端部に砂付着。肥前系。	底部のみ1/2 18世紀
28	陶器 碗	A区13溝	②　5.0 ③(4.0)	陶胎染付。高台端部の鉄足状を除き、淡青緑色釉を施釉する。内外面に貫入がみられる。外面に呉須による施文あり。肥前系。	底部のみ 18世紀
29	陶器 徳利	A区13溝	②　7.6 ③(6.7)	内面と外面に刷毛掛けの淡褐釉。外面上方に飴釉。面下方は回転篦削り。内面に轆轤目。瀬戸・美濃。	外底部1/2 18世紀
30	陶器 碗	A区13溝	②　4.0 ③(3.6)	陶胎染付。高台端部の鉄足状を除き、淡青緑色釉を施釉する。内外面に貫入がみられる。外面に呉須による施文あり。肥前系。	底部のみ1/3 18世紀

表34　13号溝出土遺物観察表(3)

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
31	陶器 碗	A区13溝	①(9.8)②(3.6) ③ 4.8	陶胎染付。高台端部を除き、白磁釉を施釉。外面に呉須施文あり。肥前系。		底部～口縁部1/4 18世紀
32	陶器 碗	A区13溝	② 3.7 ③(3.3)	高台部を除き、半透明（白灰釉）の施文あり。体部上方が複雑にかける。京焼系。		底部のみ 18世紀
33	陶器 徳利か	A区13溝	②(5.8) ③(2.4)	陶胎染付。内面と高台部を除き、白磁釉。外面に染付施文。高台端部は鉄足状に酸化。肥前系。		底部1/4 18世紀
34	陶器 碗	A区13溝	①(9.6) ③(2.8)	陶胎染付。内外面に白磁釉、外面に染付施文あり。肥前系。		口縁部1/6 18世紀
35	灰釉陶器 台付瓶	A区13溝	②(10.0) ③(1.8)	台付瓶で、高台内面はなめらかで、使用摩耗。内面はざらつく。彼として転用か。東海地方からの搬入物。		底部1/3 中世
36	陶器 瓶類	A区13溝	③(3.7)	内外面に淡黄緑色の長石釉。外面に草花文の鉄絵あり。瀬戸。		底部～胴部の小片。 17世紀
37	陶器 徳利	A区13溝	③(6.3)	陶胎染付。外面に白磁釉。肥前系か。		胴部破片 18世紀
38	陶器 変形向付	A区13溝	③ 4.6	全面に半透明の長石釉。外面と内面口縁部に鉄絵施文あり。文様は桃山風。美濃。		口縁部～底部1/2 16～17世紀
39	陶器 擂鉢	A区13溝	①(33.6) ③(4.1)	内面口唇部下に断面三角形の隆帯が施される。内外面に鉄釉。美濃。端部は使用摩耗あり。		口縁部破片 17～18世紀
40	陶器 大鉢	A区13溝	①(32.2) ③(3.8)	口縁部片で、口縁部外面に丸縁を設ける。内外面に長石釉。産地不明。		口唇部のみ 18～19世紀
41	陶器 擂鉢	A区13溝	③(2.9)	内面に8条の卸し目。使用摩耗あり。全体に被熱痕がみられる。常滑。		底部破片1/4 19世紀
42	陶器 浅鉢	A区13溝	①(41.4) ③(8.5)	内面に印文による施文と、白土掛かあり胎土は赤褐色。唐津。		口縁1/6 18世紀
43	陶器 擂鉢	A区13溝	①(32.0) ③(3.8)	内面に7条の卸し目。内外面に淡い鉄釉。口縁部摩耗。信楽。		口縁部 17～18世紀
44	陶器 擂鉢	A区現代溝	③(4.5)	内面に5＋α条の卸し目。内外面に鉄釉。常滑。		口縁部 17～18世紀
45	磁器 皿	A区13溝	①(4.5)	中国製青磁の可能性。		口唇部～底部
46	陶器 浅鉢	A区13溝	③(5.0)	内外面に長石釉。産地不明。		胴部破片 17～19世紀
47	陶器 灯火皿	A区13溝	①(10.6) ③(1.9)	内外面に鉄釉あり。外面下方回転篦削り。内面にトチンもしくは重焼き痕。口縁部摩耗。常滑。		口唇部1/6。内側の返し部分剥落か。 18～19世紀
48	陶器 土瓶	A区13溝	注口部で、内面側に7つのこし穴あり。外面に淡黄緑色の施釉。産地不明。			18世紀末～19世紀
49	陶器 油壺か	A区13溝	① 4.2 ③(1.8)	口縁部片で内外面に灰釉。産地不明。		口縁部1/2 17～18世紀
50	軟質陶器 火鉢	A区13溝	①(27.0)②(7.0) ③(8.4)	輪幅成形。内外面に焼しがかる。内面側から未通の穿孔があり。器内は厚手。	③明黄褐(10YR6/6)	口縁部破片 15世紀
51	軟質陶器 焙烙	A区13溝	①(27.0) ③(5.3)	輪幅成形。割れ口は外面のみ焼され3層。外面に接合と煤あり。小泉焼き。	②黄灰(2.5Y4/1)	口縁部 18世紀後半
52	軟質陶器 焙烙	A区13溝	①(26.2)②(25.4) ③ 5.3	輪幅成形。外面に接合痕。底面に型肌痕。小泉焼き。	②黄褐(10YR5/8)	口縁部～底部破片 18世紀後半
53	軟質陶器 焙烙	A区13溝	①(38.4)②(35.2) ③ 5.9	輪幅成形。全体に酸化気味。外面に接合痕。側面に型肌痕。小泉焼き。	③浅黄橙(10YR8/3)	口縁部～底部破片 18世紀後半
54	軟質陶器 焙烙	A区13溝	①(40.0) ③(5.3)	全体に酸化気味。外面に接合痕あり。小泉焼き。	③浅黄橙(10YR8/3)	口縁部～胴部破片 18世紀後半
55	軟質陶器 羽釜か	A区13溝	③(18.5)	口唇部下に1条の隆帯が施される。芯から外面まで黒灰色で黒色焼しの5層状態。口縁、鍔とも摩耗。内面ハゼ多い。小泉焼き か。	②暗青灰(5PB4/1)	口縁部破片 17～18世紀
56	軟質陶器 火起し	A区13溝	①(9.2)②(9.2) ③(3.7)	全体に酸化気味。底部に穿孔あり内面被熱による硅化状態あり。小泉焼き。	②暗赤褐(5YR5/8)	底部～口唇部1/3 19～20世紀

表35　13号溝出土遺物観察表(4)

No	種　類 器　種	出土遺構 出土層位	量　目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
57	瓦 桟瓦か	A区13溝	④(12.2) ⑥　1.9	割れ口は内面が灰色、表面が黒色漁し。凹面がなめらかで雲母粒がある。凸面の肌が粗れている。銀瓦。	②灰(N5/)	近代瓦 19～20世紀
58	瓦 桟瓦	A区13溝	④(14.8) ⑥　1.8	割れ口は全体に漁し凹面は粗雑。凸面はなめらかで雲母粒あり。銀瓦。	②灰(N4/0)	耳部 19世紀以降
59	灰釉陶器 椀	A区13溝	③(　1.6)	内面に擦輪痕あり。割れ口は摩耗が多い。		底部1/4。高台部下端欠損。9～10世紀
60	土師質土器 皿	A区13溝	③(　4.1) ③(　1.6)	底面に糸切痕。全体に微化気味。内面に煤痕。薄作り。割れ口消耗。県内製。	②にぶい黄橙 (10YR7/3)	口縁部欠損。 体部～底部1/3 14～15世紀
61	埴輪 円筒	A区13溝	円筒埴輪の底部片。外面縦方向の刷毛目。 内面斜め方向の指撫で、下端部指押さえ。		②淡黄(2.5Y8/3)	底部破片 6世紀
62	埴輪 円筒・朝顔か	A区13溝	外面刷毛後突帯貼付、突帯貼付のための指撫で。 内面指撫で。		②橙(5YR6/6)	突帯部 6世紀
63	板碑 円形加工石	A区13溝	④　5.4 ⑤　6.8 ⑥　1.2 ⑦　62g	旧時は板碑であったと思われる。周囲を打ち欠き形状を整える。円形にはなっていないものの、製作目的は円形に加工することと思われる。		緑色片岩
64	板碑 円形加工石	A区13溝	④　7.4 ⑤　5.3 ⑥　1.1 ⑦　65g	旧時は板碑であったと思われる。周囲を打ち欠き形状を整える。		緑色片岩
65	砥石 手持ち砥	A区13溝	④　4.8 ⑤　4.4 ⑥　1.5 ⑦　60g	研磨は小口1、裏面を除く4面。中砥粒、片小口旧時欠損。砥沢砥。		砥沢石
66	砥石 手持ち砥	A区13溝	④(　4.1)⑤　2.5 ⑥　2.1 ⑦　27g	研磨は表面のみ。小口、側部の使用は不明瞭。片小口旧時欠損。砥沢砥。		砥沢石 1/2欠損
67	砥石 中砥砥	A区13溝	④(11.3)⑤(　3.3) ⑥(　3.4)⑦ 131g	使用は表面で、側部は浅く摩耗。裏面、両側部に削り目。形状は刃付砥。砥沢砥。		砥沢石
68	砥石 手持ち砥	A区13溝	④(　6.8)⑤　3.1 ⑥　1.8 ⑦　57g	研磨は表・裏で側面の使用は浅い。小口は削面。片小口旧時欠損。小日向砥か。		流紋岩
69	砥石 手持ち砥	A区13溝	④　3.8 ⑤　2.0 ⑥　1.9 ⑦　25g	研磨は表・裏面と片側部の3面。片側部は削面。両小口は旧時欠損。		砥沢石
70	砥石 手持ち砥	A区13溝	④　5.7 ⑤　2.8 ⑥　1.9 ⑦　49g	研磨は表面と片側面。裏面と片側面は削面。両小口は旧時欠損。		砥沢石
71	古銭 開元通宝	A区13溝	径 2.35 ⑥ 0.12 ⑦ 4g	銭主材。全体に消耗しているが、地金は遺存。		
72	古銭 寛永通宝	A区13溝	径 2.5　⑥ 0.15 ⑦ 4g	銭主材。全体に消耗していないが、名が細い。背文字「文」。表面研磨不明瞭。遺存良好。		
73	金属器 鉄疱玉	A区13溝	径 1.2　⑥　1.2 ⑦ 9.86g	表面に微化の鉛白状塗あり。一条の接合面あり。部分的に想れた箇所がある。形状はより未使用に近いか。		鉛主材
74	金属器 煙管	A区13溝	④ 8.5　⑥　0.5 ⑦ 5g	銭主材。雁首部で厚い板金を、側面で縫継。		雁首 羅宇欠損　17～18世紀

表36　13号溝出土木器観察表

No	種　類	出土遺構 出土層位	木取り 樹種	加工・形状等の特徴	備　考 (長×幅×厚)
75	杭	A区13溝 №63 W63-2	コナラ属クヌギ節	細い丸太材を使用し、下部は端部で、4面を斜めに削り、先端を尖らせる。先端部を欠損する。上部は端部欠損でさらに上に伸びる。上部は炭化している。	259×32×30 S＝1/6
76	板材	A区13溝 №91 W91-2	板目 ヒノキ	上部・下部とも端部欠損で、さらに両方向に伸びる。表裏面の加工の痕跡は不明。他に接合しない破片1片がある。	143×44×11 S＝1/6
77	杭	A区13溝木杭列№61W61-2	竹	下部は端部で、節の下3cm程の所から斜めに切断している。切断は6回以上行っている。上部は端部欠損で、さらに上に伸びる。	L=406、φ27 S＝1/6
78	杭	A区13溝 №89W89-2	マツ属複維管束亜属	上部は端部欠損で、さらに上方に伸びる。下部は端部で、裏面から表面にかけて斜めに切断し、先端を尖らせる。	205×40×30 S＝1/6
79	杭	A区13溝木杭列№93W93-2	マツ属複維管束亜属	丸太材を使用し、上部は端部欠損で、さらに上に伸びる。下部は端部で斜めに上から側芯にかけて6面の削りで先端を尖らせる。	251×62×56 S＝1/6
80	杭	A区13溝 W88-2	クリ	上部は端部欠損で、さらに上方に伸びる。下部は端部で左側面、表面、右側を削って先端を尖らせる。下半部の表面、左側面に幅15mm前後の削りがみられる。	610×30×29 S＝1/6

Ⅱ　土坑

2号土坑（第70図、ＰＬ22）

遺構　Ｃ区170-350G～175-350Gにかけて確認された。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸139㎝、短軸84㎝、深さ38㎝である。長軸方位はＮ－６°－Ｅである。底面は平坦である。埋没土は、黒色粘質土を主体にAs-Bブロック、Hr-FAブロックを含む土で、人為的である。時期はAs-B降下以後である。

遺物　図示し得なかったが、土師器坏５点が出土した。

3号土坑（第70図）

遺構　Ｃ区170-350Gで確認された。平面形は円形で、規模は長軸86㎝、短軸73㎝、深さ20㎝である。長軸方位はＮ－12°－Ｗである。底面は半球状で底面から壁にかけて丸味がある。埋没土は、黒色粘質土主体にAs-Bブロックを含む土で、人為的である。時期はAs-B降下以後である。

遺物　出土遺物はなかった。

4号土坑（第70図、ＰＬ22）

遺構　Ｃ区125-340Gで確認された。平面形は不正形な楕円形で、規模は長軸175㎝、短軸118㎝、深さ31㎝である。長軸方位はＮ－22°－Ｅである。底面は細かい凹凸がみられ、西壁も凹凸がみられる。埋没土はAs-Bブロック、Hr-FAブロックを含む土で、人為的である。時期はAs-B降下以後である。

遺物　出土遺物はなかった。

5号土坑（第70図、ＰＬ22）

遺構　Ｃ区170-295G～170-300Gにかけて確認された。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸161㎝、短軸80㎝、深さ39㎝である。長軸方位は、Ｎ－85°－Ｅである。底面は凹凸がみられ、東側の壁は傾斜が強く、西側の壁は外側に開き気味に立ち上がる。北側半分の下端線が破線なのは、調査工程の都合で推定線である。埋没土は、As-Bブロック、Hr-FAブロック、黒色土ブロックの混土で人為的である。時期はAs-B降下以後である。

遺物　図示し得なかったが、土師器甕２点、土師器坏１点、須恵器甕２点が出土した。

6号土坑（第70図、ＰＬ22）

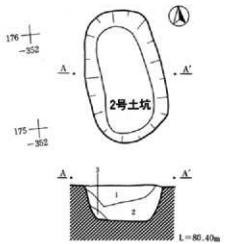
遺構　Ｃ区165-295Gで確認された。西側半分は土層観察用のトレンチで不明である。平面形は隅丸長方形であると推定される。規模は長軸47㎝、短軸73㎝、深さ25㎝である。長軸方位はＮ－90°である。底面は平坦である。埋没土は人為的である。時期はAs-B降下以後である。

遺物　出土遺物はなかった。

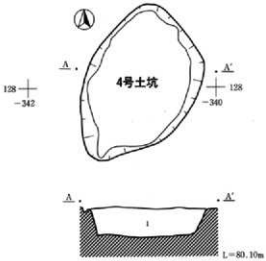
8号土坑（第70図、ＰＬ22）

遺構　Ｃ区155-345Gで確認された。平面形は不正形な隅丸長方形である。規模は長軸230㎝、短軸87㎝、深さ37㎝である。長軸方位はＮ－９°－Ｅである。底面は北側で凹凸がみられる。壁は緩やかに外に開き気味に立ち上がる。埋没土は人為的である。時期はAs-B降下以後である。

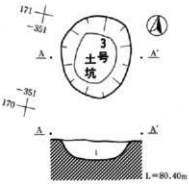
遺物　図示し得なかったが、陶器1点、土師器甕6点、土師器坏1点、須恵器甕1点が出土した。



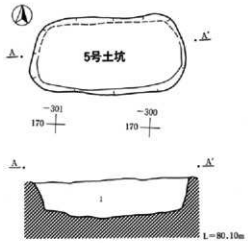
2号土坑
1：暗黒色土　As-Bを含み、As-Bアッシュのブロックを含む。他は黒色粘質土。
2：暗黒色土　Hr-FAのブロックを含み、他は粘質の黒色土。
3：灰褐色土　砂質の層。



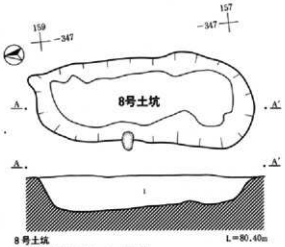
4号土坑
1：暗褐色土　暗褐色土に黒色土ブロック・Hr-FAブロック・As-Bブロック・As-Bアッシュの混土。



3号土坑
1：暗黒色土　As-Bを含み、As-Bアッシュのブロックを含む。他は黒色粘質土。



5号土坑
1：暗褐色土　暗褐色土に黒色土ブロック・Hr-FAブロック・As-Bブロック・As-Bアッシュの混土。



8号土坑
1：黒色粘質土ブロック・Hr-FAブロック・As-Bブロック・As-Bアッシュブロックの混土。

0　1:40　1m

第70図　2号～6号・8号土坑

Ⅲ　1面遺構外出土遺物（第71～76図、ＰＬ23・49～51）

表土掘削時や層位確認のためのトレンチ調査時に出土した遺物と１面調査時に明確に遺構に伴わない遺物をここで掲載する。

１～８は磁器である。18世紀の肥前系は１～３が碗で、４が小碗で、５が湯呑みである。19世紀前半の肥前系は６～８で湯呑みである。７・８は接合はしないが同一個体と思われる。

９～16は中国製磁器である。９～14は青磁碗で、いずれも龍泉窯系である。９～11は鎬施文で13世紀である。13は鎬施文で14世紀である。12は劃文連弁文が施され14世紀である。14は高台部のみで、円形に打ち欠く加工品の可能性が考えられる。13～14世紀である。16は袋物と思われ、龍泉窯系青磁か伊万里青磁か不明である。13～16世紀である。15は皿で、内外面に透明釉が施され、15世紀である。

17～26は陶器である。17は碗で陶胎染付である。18世紀前半の肥前系である。23は卸皿の体部破片で内面に卸目がみられる。産地は瀬戸・美濃で15世紀である。20は皿の口縁部破片で口縁部内外面に灰釉が施され、他は無釉である。産地は瀬戸・美濃で16世紀である。21は浅鉢で、高台は削り出し高台、瀬戸・美濃で17世紀である。18は碗で、天目釉と鉄釉が施され、瀬戸で17～18世紀である。19は碗で内面に飴釉が施され、美濃で18世紀である。25・26は産地が常滑である。26は焼き締めの擂鉢、17世紀である。25は灯火皿で18世紀である。22・24は産地不明である。22は浅鉢の体部破片で、18世紀である。24は鉢で内外面透明釉を施釉する。18～19世紀である。

27～30は軟質陶器である。29・30は焙烙で小泉焼きである。29は19世紀前半、30は19世紀後半である。28は鉢で産地不明で17世紀の可能性が考えられる。27は火鉢で、外面に格状格子が施され、小泉焼きで、18世紀である。

34～37は瓦である。34・35は近代瓦で、19～20世紀である。34は軒瓦で文様面に唐草文が施される。35は熨斗瓦と思われ、曲がりがなく平坦である。36・37は平瓦の破片で、裏面に砂が付着し、小口面に篦削りの痕跡がみられ、中世瓦である。

31～33は中世焼き締め陶器である。31は鉢で、内外面に撫でがみられ、内面に自然釉がかかる。産地は常滑で13～14世紀である。32は外面に叩き目、自然釉がかかり、内面に指頭圧痕がみられる。産地は瀬美で13～14世紀である。

38・39は中世軟質陶器の鉢で、38は県外からの搬入、39は県内産の可能性がある。いずれも14世紀である。40・41は土師質土器の皿である。40は底面糸切りで、内外面に轆轤目がみられる。13世紀または17世紀と思われる。41は底部切り離し不明であるが、板状圧痕がみられ、14世紀と思われる。

43～45は煙管の吸口である。小型で側面に鎹継がみられる。43・45は羅字が残存する。42は鉾で、折り曲げ、片側を切断してある。鉾を再利用していると思われる。46～50は古銭である。46～48は「寛永通宝」である。49は一銭銅貨で「昭和12年」と印されている。50は「天聖元宝」で、初鋳は1023年で、北宋の時である。

51～53は砥石である。51・52は手持ち砥で、中砥である。53は仕上砥で置砥と思われる。

54～58は須恵器である。54は坏で、底部回転糸切り後外周篦削りである。56は椀で、高台を貼り付けている。58は坏蓋の摘み部分である。やや瓦質で、薄作りである。県外からの搬入品と推定される。57は台付瓶で、台部から底部のみで、外面に自然釉がみられる。県外からの搬入品で８世紀である。55は長頸瓶の頸部で、内面に３段接合の痕跡がみえ、８世紀と思われる。

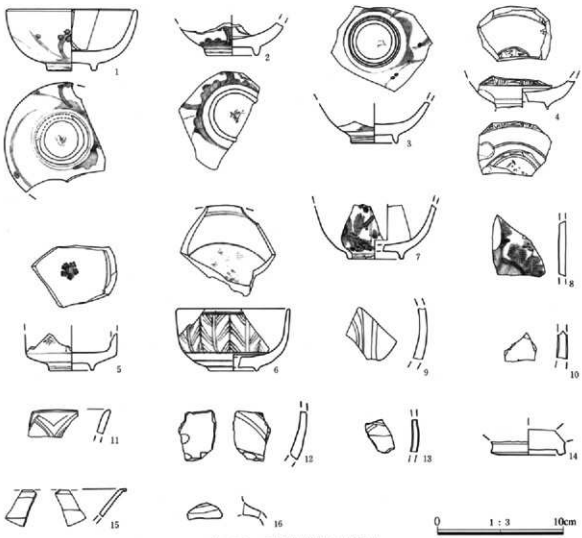
59～65は土師器である。59・60は坏で、59は８世紀、60は内斜口縁で５世紀である。61は甕で、内外面に木口状工具による撫でがみられ、５世紀である。62・63は台付甕で、62は「Ｓ」字状口縁で、４世紀である。

63は台部で、単口縁の台付甕で、４世紀である。65は壺の頸部破片でパレス型土器である。外面に赤彩が施されている。64は壺の口縁で、３本を１単位とした粘土紐が貼り付けられている。

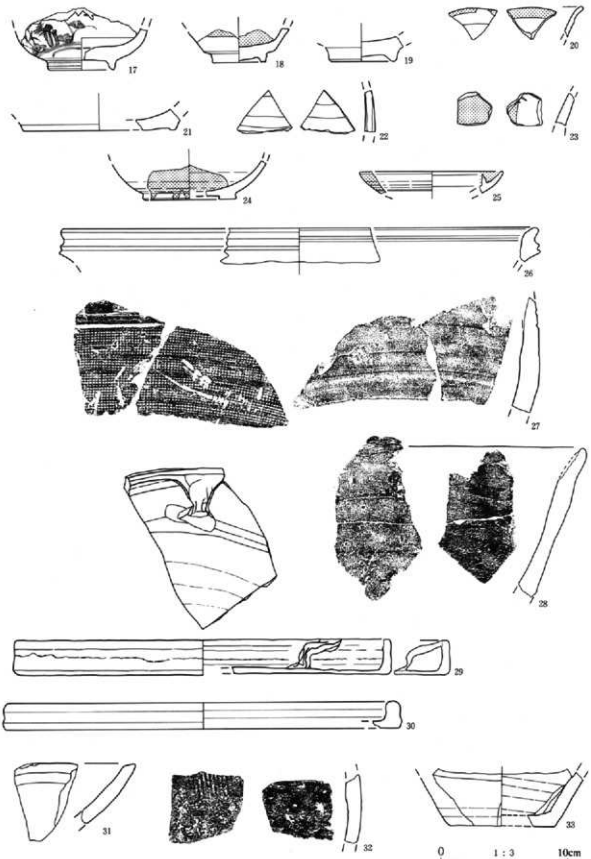
66～75は弥生時代末から古墳時代初頭の土器の壺の破片である。66～68・70～73は胴部から頸部破片で、簾状文と波状文が櫛状工具により施文されている。樽式土器である。69は赤彩が施される。74・75は壺の頸部破片で、東関東地方を中心に分布する十王台式土器と思われる。

76～80は縄文土器の深鉢である。76～79は縄文時代前期関山式である。76・77は口縁部破片で、76は０段多条のＬＲ縄文が施される。78は胴部破片で、０段多条のＲＬ縄文を施文後ループ文を施す。79は底部破片で、上げ底状になっている。80は縄文時代中期加曽利Ｅ式土器である。ＲＬの縄文を地文に棒状工具による沈線文で楕円区画が描かれる。81～86は縄文時代の石器である。81は打製石斧で基部を欠損する。82は加工痕のある剥片で、スクレイパーの可能性がある。83～85は磨石である。86は有茎尖頭器で先端部を欠損する。形状・製作技術などから草創期と考えられる。

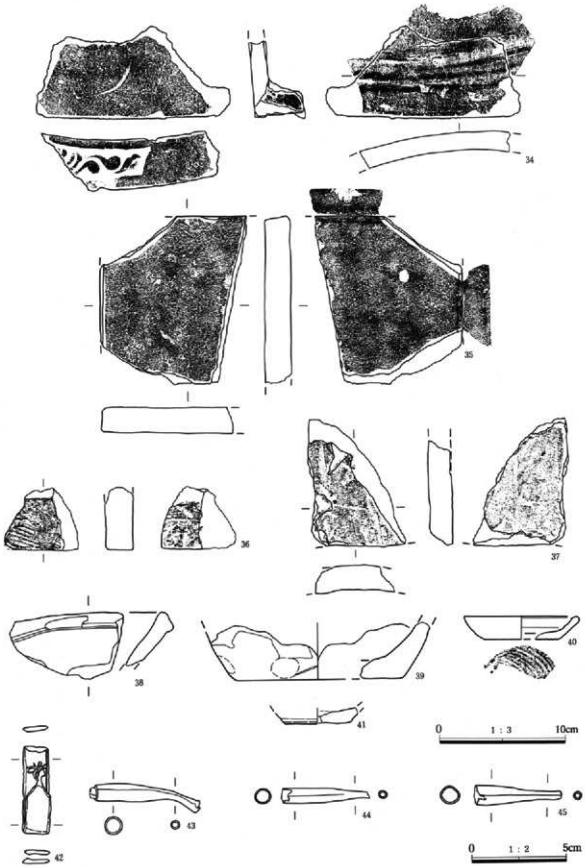
87～91は木製品である。87は桶等の底板である。一枚板を削って造り出している。88は板材で表面は平坦に整えられる。89は割材破片で、裏面は平坦に整えられる。90・91は杭である。90は自然木の下端部を斜めに切断して先端を尖らせる。91は角材を用いて、３面を斜めに削り先端を尖らせる。



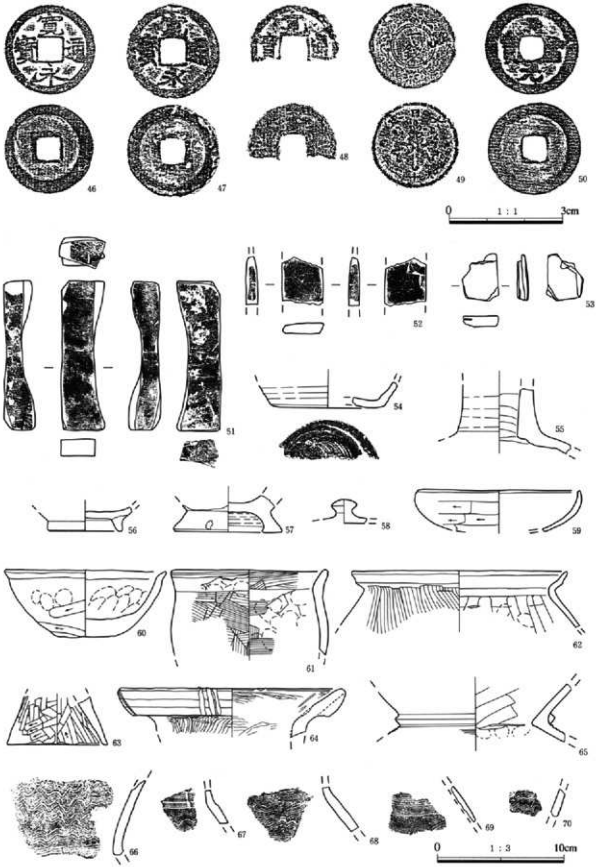
第71図　１面遺構外出土遺物(1)



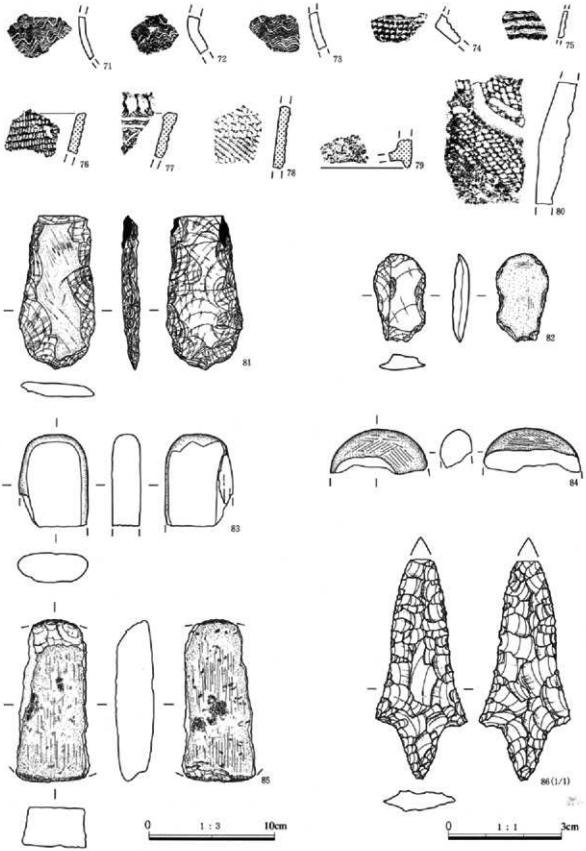
第72図　1面遺構外出土遺物(2)



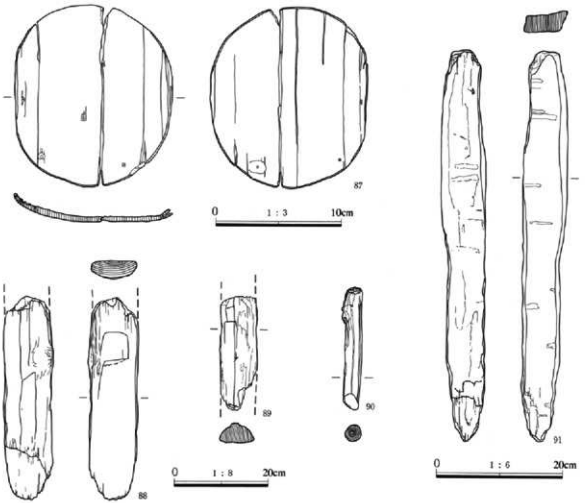
第73図　1面遺構外出土遺物(3)



第74図　1面遺構外出土遺物(4)



第75図　1面遺構外出土遺物(5)



第76図　1面遺構外出土遺物(6)

表37　1面遺構外出土遺物観察表(1)

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	磁器 碗	A区1面	①(10.5) ② 4.0 ③ 4.9	高台端部を除き白磁釉。外面に染付、草木文を描く。肥前系。		底部～口縁部1/4 18世紀後半
2	磁器 碗	A区東トレンチ	② 4.2 ③(2.6)	外面に貫入がみられる。高台端部をのぞき白磁釉。外面に染付、草木文を描く。肥前系。		底部1/2 18世紀後半
3	磁器 碗	A区1面	② 3.8 ③(3.3)	高台端部を除き白磁釉。外面に染付、草木文を描く。肥前系。		底部のみ 18世紀後半
4	磁器 小碗	A区東トレンチ	②(4.1) ③(2.5)	底面に焼継ぎの赤褐色の跡が4文字みられる。この破片には焼つぎの箇所はない。内外面に白磁釉。内外面に呉須で施文。肥前系。		底部1/4 高台下端部欠損 18世紀前半
5	磁器 湯呑み	C区表採	② 3.4 ③(2.9)	染付。高台端部を除き、内外面白磁釉。内面にコンニャク判、外面に施文あり。肥前系。		底部のみ 18世紀後半
6	磁器 湯呑み	A区2面	①(9.0)②(4.0) ③ 4.9	内外面に白磁釉。外面に矢羽を、内面に圏界線を呉須で施文。伊万里系。		底部1/4～口縁部1/6 18世紀末～19世紀初
7	磁器 湯呑み	A区南辺トレンチ	②(4.4) ③(4.3)	内外面に白磁釉。外面に染付施文。伊万里系。8と同一個体と思われる。		底部1/3 19世紀前半
8	磁器 湯呑み	A区1面 A区表採	③(4.8)	内外面に白磁釉。外面に染付施文。伊万里系。7と同一個体と思われる。		胴部破片 19世紀前半
9	磁器 青磁碗	A区1面	③(4.2)	鎬手連弁文。内外面に青磁釉。発色は青味がかるが暗い。龍泉窯系。		胴部破片 13世紀
10	磁器 青磁碗	A区2面	③(1.8)	鎬手連弁文。内外面に青磁釉、貫入あり。発色は青味がかるが暗い。龍泉窯系。		胴部破片 13世紀

表38　1面遺構外出土遺物観察表(2)

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
11	磁器 青磁碗	D2区	③(2.1)	鎬千速弁文。内外面に青磁釉。釉薬は薄いが、青色をおび、発色は良。胎土は淡灰色。龍泉窯系。		口縁部片 13世紀
12	磁器 青磁碗	C区表採	③(3.7)	外面劃文連弁文。釉は薄くオリーブ色でやや粗悪。内面に使用キズあり。龍泉窯系。		体部破片 14世紀
13	磁器 青磁碗	A区東トレンチ	③(2.7)	鎬千速弁文で、内外面に青磁釉。発色は悪い。龍泉窯系。		体部破片 14世紀
14	磁器 青磁碗	D2区表採	②　5.8 ③(2.1)	高台部を残し円形に打ち欠く円形加工の半欠品。内面、高台外面に施釉。釉は薄く暗い発色。胎土灰色。龍泉窯系。		底部のみ 13～14世紀
15	磁器 皿	C区表採	③(2.9)	口縁端部は外反。内・外面に薄い透明釉。口縁端部摩耗あり。中国。		口縁部破片 15世紀
16	磁器 袋物	A区南辺トレンチ	③(1.3)	外面に薄い青磁釉。内面は無釉。器種不明。龍泉窯系か伊万里青磁か不明。		胴部(肩部)破片 13～16世紀
17	陶器 絵染付	A区1面 A区表採	②　5.0 ③(4.9)	陶胎染付。高台端部に鉄釉。他は不明釉。外面に草文などを残須で施文。肥前系。		底部1/2～胴部 18世紀前半
18	陶器 碗	A区東トレンチ	②　4.2 ③(2.6)	削り出し高台。轆轤右回転。外面上方と内面に鉄釉。天釉を施釉。瀬戸。		底部のみ 17～18世紀
19	陶器 碗	A区1面	②　5.7 ③(1.9)	内面に鉛釉。底部は貼付高台。美濃。		底部のみ 18世紀
20	陶器 皿	C区表採	③(2.4)	口縁部の内外面に厚く灰釉がかかり、他は無釉。瀬戸・美濃。		口縁部破片 16世紀
21	陶器 浅鉢	A区表採	②(12.0) ③(1.6)	内面に灰釉。トチン痕あり。高台は削り出し。瀬戸・美濃。		底部1/6 17世紀
22	陶器 浅鉢	A区表採	③(3.5)	長石釉で体部片。産地不明。		体部破片 18世紀
23	陶器 卸皿	C区表採	③(2.6)	外面に轆轤目と灰釉あり。内面に卸目と部分的に灰釉がかかる。瀬戸・美濃。		体部破片 15世紀
24	陶器 鉢	C区表採	②(7.4) ③(2.8)	高台部を除き、内外面施釉。透明釉。産地不明。		底部1/4 18～19世紀
25	陶器 灯火皿	A区1面	①(11.4) ②(1.7)	内外面に鉄釉。常滑。		口容部の3/4 18世紀
26	陶器 擂鉢	A区1面	①(37.6) ③(2.7)	焼き締め陶器。外縁に3条の陰雷あり。口縁部摩耗が大。常滑。		口容部のみ 17世紀
27	軟質陶器 火鉢	A区表採	③(9.1)	割れ口は黒色、淡褐、外面煤しの5層状黒。外面絶状格子。小泉焼き。	③褐灰(10YR4/1)	胴部破片 18世紀
28	軟質陶器 鉢	A区1面	②(1.5) ③(12.4)	外面煤し。口縁部内外面横撫で。外面下方指の圧痕。産地不明。	②灰(N6/)	口縁部破片 17世紀か
29	軟質陶器 焙烙	A区東トレンチ	①(29.8)②(29.6) ③　2.8	底面に砂と型肌痕。口縁部内外面横撫で。外面煤し。産地不明。	②にぶい褐 (7.5YR6/3)	口縁部～底部破片 19世紀前半
30	軟質陶器 焙烙	A区1面	①(31.6)②(31.4) ③　2.1	底面に型肌あり。外面下方に煤し。小泉焼き。	②にぶい橙 (7.5YR7/4)	口縁部～底部 19世紀後半
31	焼締陶器 鉢	C区表採	③(6.1)	内外面撫であり。内面淡い自然釉かかる。割れ口少し消耗。内面摩耗微。常滑。	③内にぶい黄橙 (10YR7/2)外にぶい灰黄褐(10YR6/2)	口縁部破片 13～14世紀
32	焼締陶器 甕	A区1面	③(5.7)	外面平行叩き目。淡灰緑色の自然釉あり。内面は指頭の圧痕あり。瀬美系。	③灰黄(2.5Y6/2)	胴部破片 13～14世紀
33	陶器 壺	C区表採	②(8.4) ③(4.3)	耳面底付近と考えられ、内面指による整形痕。外面轆轤回転撫で。底面回転削り。轆轤方向不明瞭。		底部～胴部破片 15～16世紀以降
34	瓦 軒平	D2区表採	④(7.3) ⑥　1.3	桟瓦軒かど。文様面に唐草文あり。各面に雲母粒塗りの銀瓦光沢あり。	④灰オリーブ (5Y5/2)	19～20世紀
35	瓦 化粧瓦か	D2区表採	④(14.2) ⑥　2.0	熨斗瓦か。曲がりなしの平ら。表・裏に銀瓦光沢あり。	③灰(5Y6/1)	19～20世紀
36	瓦 平瓦	C区表採	④(5.0) ⑥　2.1	小口面悪削り。表・裏に糸切り条痕あり。裏面砂付着。軽い。	③灰(5Y6/1)	中世瓦
37	瓦 平瓦	C区表採	④(10.1) ⑥　1.8	小口面悪削り。表面に糸切り条痕、砂付着。裏面砂付着。軽い。	③灰黄褐(10YR5/3)	中世瓦

表39　１面遺構外出土遺物観察表(3)

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量　日 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
38	軟質陶器 鉢	A区１面	③(5.2)	表面は焼される。内・外面に小ハゼ多く、口縁部は摩耗する。県外～西国搬入。	②灰(N5/)	口縁部破片 14世紀
39	軟質陶器 鉢	C区表採	②(13.0) ③(4.3)	底面糸切り痕。内面使用摩耗。割れ口消耗大。強い燃しかかる。県内産。	②灰白(5Y7/1)	底部1/3～胴部 14世紀
40	土師質土器 皿	C区表採	①(9.0)②(6.0) ③　1.8	内外面轆轤目。底面は糸切り。割れ口消耗。	②明赤褐(5YR5/6)	底部～口縁部1/3 13世紀又は17世紀
41	土師質土器 皿	C区表採	②(5.2) ③(1.2)	内面底際に巻き込る。外面底部は切り離し不明ながら板状圧痕あり。県内産。	②にぶい黄橙 (10YR7/4)	底部1/4 14世紀
42	井 側主材	A区１面	①４.６ ②1.35 ③ 0.2 ④ 15	刀装具等の再加工品。折り曲げ、片側を切断。摩手。表面に花様の刻紋。		16～19世紀
43	金属器 煙管	B区表採	④　5.5 ⑦ 5g 径 0.95～0.6	銅主材。小型。羅宇残存。鑞付けあり。		吸口
44	金属器 煙管	A区１面	④(4.6)⑦ 4g 径 0.8～0.4	銅主材。小型。細竹羅宇残存。鑞付けあり。		吸口
45	金属器 煙管	D２区攪乱	③(4.6)⑦ 3g 径 1.1～0.5	銅主材。吸口部側部に鑞付けあり。内面に鑞の残存なし。		吸口 18～19世紀
46	古銭 寛永通宝	A区表採	④ 2.4　⑥ 0.13 ⑦ 2g	銅主材。「寛永通宝」字跡やや太い。		
47	古銭 寛永通宝	A区表採	④ 2.4　⑥ 0.1 ⑦ 2g	銅主材。「寛永通宝」字跡太い。		
48	古銭 寛永通宝	D２区表採	④ 2.3　⑥ 0.1 ⑦ 2g	銅主材。「寛□通宝」と読めるが半欠。文字はやや太い。遺存やや不良。		
49	古銭 一銭	A区表採	④ 2.3　⑥ 0.11 ⑦ 3g	銅主材。表「大日本帝国 昭和12年 桐文」「一銭、菊、唐草文」		
50	古銭 天聖元宝	A区表採	④ 2.45 ⑥ 0.12 ⑦ 3g	銅主材。「天聖元宝。初鋳は北宋1023年。		
51	砥石 手持砥	A区１面	④ 11.8 ⑤ 3.4 ⑥ 2.5　⑦112g	中砥上質。使用は裏を除く５面。裏面消痕。使用摩耗は右利き。小目砥か。		流紋岩
52	砥石 手持砥	B区表採	④(3.5)⑤ 3.3 ⑥ 0.8　⑦ 15g	両小口は、旧時欠損。中砥上質。小目向か。水上。		凝灰岩質
53	砥石 置き砥材	C区表採	④(3.7)⑤ 2.7 ⑥ 0.8　⑦ 12g	小口１。側面１、表面１の３面残存。使用は表面のみ。小口は節理面。側部に磨痕目あり。使用面は平滑で合わせを行っていたらしく傷痕。仕上砥、合せ砥であるため置き砥か。色調茶褐色味あり。模生砥石か。		頁岩
54	須恵器 坏	C区１面近 鉄水田No９	②(9.2) ③(1.9)	底部は回転糸切り後、外周箆削り。胎土に海綿骨針、微細の白色鉱物を含む。	②黒(2.5Y2/1)	底部1/2 ８世紀
55	須恵器 長頸瓶	C区表採	③(5.5)	内面に３段接合みえる。外面は弱いカキ目状の撫で。頸部内面に絞つくり痕。胎土は軽い。周辺地域で製作。	②灰オリーブ (5Y6/2)	頸部のみ ８世紀
56	須恵器 椀	D２区１面	②　5.7 ③(1.9)	高台貼付。糸切り痕不明。内面浅い轆轤目。側れ口消耗あり。	①微細白色鉱物含む ②にぶい黄橙 (10YR6/3)	底部1/2 10世紀後半
57	須恵器 台付瓶	C区No28	②　8.6 ③(2.8)	胴部との接合面は円形に打ち欠かれ、２次利用されている。台部とのくびれ部に稜痕なし。外面に自然釉。県外搬入。	①２mm程の砂粒含む ②オリーブ灰 (10Y4/2)	底部 ８世紀
58	須恵器 坏蓋	A区１面	③(1.9)	色は焼された瓦質。土は軽く土師質、薄造り。外面に回転糸痕。県外搬入～関西。	②暗オリーブ灰 (2.5G4/1)	蓋の摘み部分のみ ８世紀
59	土師器 坏	C区表採	①(12.8) ③(3.2)	口縁部外面～内面は撫で。外面胴・底部は箆削り。摩滅度。	②橙(5YR6/6)	底部～口縁部1/6 ８世紀
60	土師器 坏	D２区１面	①(12.6) ③　5.2	口特部は底縁的で外反する(内斜口縁)。外面底部箆削り、体部指頭押さえ指撫で。口部部内外面横撫で。体部内面指撫で後指頭押さえ。底部内面指撫で。	①３mm程の小石・砂粒を含む ②明褐灰 (7.5YR7/2)	口縁部1/3～底部

表40　1面遺構外出土遺物観察表(4)

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
61	土師器 甕	C区2面ローム	①(12.5) ③(6.7)	内面胴部指頭押さえ後横方向の撫撫で。口縁部横方向の本口状工具による撫で。外面頸部指頭押さえ後口縁部～頸部本口状工具による横方向の撫で、胴部斜め方向の撫で。	①細かい砂粒含む ②橙(7.5YR7/6)	口縁部1/8～胴部
62	土師器 台付甕	C区西台地	①(17.0) ③(4.9)	口縁部内外面横撫で。胴部外面頸部から縦方向の刷毛。胴部内面縦方向の指撫で、2段輪積みの痕跡。「S」字状口縁。	①砂粒を含む ②にぶい黄橙(10YR6/3)	口縁部1/4～胴部
63	土師器 台付甕	C区北側排水路	②8.0 ③(3.8)	外面は上部で縦方向、下部で横方向の撫撫で。内面は縦方向を主体にした撫撫で。単口縁。	①砂粒を含む ②にぶい橙(7.5YR6/4)	台部下半3/4
64	土師器 壺	C区No34・81	①(17.6) ③(4.0)	口縁部内面横方向の撫磨き後口唇部横撫で。口縁部外面折り返し部分横撫で後、3本1単位とした粘土紐を貼付けた痕跡。下半縦方向の撫磨き。	①密度細かく、若干3mm程の白色鉱物含む ②明褐(7.5YR5/6)	口縁部1/3
65	土師器 壺	C区 135-365G	③(3.5)	バレス型土器の頸部。 外面に赤彩（赤10YR4/6）を施す。	②赤褐(2.5YR4/6)	頸部破片
66	土師器 壺	C区1面近世水田No9	外面頸部に櫛状文を施文後、波状文を施す。 内面は横方向の撫磨き。	①白色鉱物含む ②にぶい黄橙(10YR5/3)	口縁部破片で口唇部欠損。樽式	
67	土師器 壺	C区表採	外面櫛状工具による櫛状文と波状文を施す。 内面に赤彩。	①細かい砂粒含む ②にぶい黄橙(10YR7/3)	頸部破片 樽式	
68	土師器 壺	C区中央ベルト	外面頸部の屈曲部に櫛状工具による櫛状文でその下部に櫛状工具による波状文。	①細かい砂粒含む ②にぶい黄橙(10YR7/4)	頸部破片 樽式	
69	土師器 壺	C区表採	外面櫛状工具で波状文を施す。C・D区4面水田No39・40・41・42と同一個体の可能性が考えられる。	①細かい砂粒含む ②明黄褐(10YR6/6)	胴部破片 外面赤彩(赤10R5/6)	
70	土師器 壺	C区1面	外面櫛状工具による波状文で上段の波状文は波が小さい。	①細かい砂粒含む ②橙(10YR7/3)	胴部破片 樽式	
71	土師器 壺	C区1面	外面櫛状工具による波状文を施す。内面撫撫で。	①細かい砂粒含む ②にぶい黄橙(10YR7/3)	頸部破片 樽式	
72	土師器 壺	C区表採	外面櫛状工具による波状文、頸部の屈曲部分に櫛状工具の擦き目。	①細かい砂粒含む ②にぶい黄橙(10YR7/3)	頸部破片 樽式	
73	土師器 壺	C区表採	外面櫛状工具による波状文が施される。	①細かい砂粒含む ②にぶい淡黄(2.5Y7/3)	胴部破片 樽式	
74	不明 壺	C区表採	粘土紐貼付状の文様が付けられている。弥生とすれば十王台か。	②明褐(7.5YR5/6)	頸部破片	
75	弥生 壺	B区1面	3条の単位の粘土紐貼付。破片下端部に櫛状工具による波状文が施される。	①密度細かい ②にぶい褐(7.5YR5/4)	頸部破片 十王台式	
76	縄文 深鉢	C区1面	0段多条のLR縄文を施文する。	①繊維を含む ②にぶい褐(7.5YR5/4)	口縁部破片 前期関山式	
77	縄文 深鉢	C区表採	口唇部に縦状の刻み目が施される。	①繊維を含む ②にぶい黄橙(10YR5/4)	口縁部破片 前期関山式	
78	縄文 深鉢	C区旧石器トレンチ	破片の上部はループ文を施文し、下半は0段多条のRL縄文を施文する。	①繊維を含む ②にぶい橙(7.5YR7/4)	胴部破片 前期関山式	
79	縄文 深鉢	C区旧石器トレンチ	底部は上げ底状になっている。胴部は摩滅して不明瞭であるが0段多条のRL縄文を施す。	①繊維を含む ②にぶい橙(7.5YR7/4)	底部破片 前期関山式	
80	縄文 深鉢	A区1面	RL縄文に棒状具による沈線で楕円区画を施す。	①径3mm前後の砂粒を含む	胴上部破片 中期加曽利E式	
81	石器 打製石斧	A区1面	①8.1 ⑤0.6 ⑥1.0 ⑦30g	短冊型。横長の巾広剥片を用い、表裏面とも側縁部分を加工する。刃部及び左右の側縁は使用による摩耗が著しい。	基部欠損 建質頁岩	
82	石器 加工痕剥片	C区表採	④6.9 ⑤4.0 ⑥1.2 ⑦40g	加工痕のある剥片でスクレイパーか。礫表皮を大きく残す巾広剥片を用いる。剥片端部を粗く加工する。	黒色頁岩	
83	石器 磨石	C区表採	④(7.2)⑤5.0 ⑥2.3 ⑦160g	長方形で下半部欠損。表面は平坦で使用による摩滅、上端部使用による摩滅がみられる。	下半部欠損 雲母石英片岩	
84	石器 磨石	C区台地部	④3.3 ⑤7.5 ⑥2.4 ⑦57g	焼けており、やや赤変。表裏両面使用による摩滅。	部分破片 デイサイト	
85	石器 磨石（敲石）	A区	④12.7 ⑤4.5 ⑥3.0 ⑦378g	上下両端に敲打痕がある。表裏両面使用による摩滅。表裏面に凹有り。	両側縁欠損 堆積輝石安山岩	
86	石器 有茎尖頭器	C区1面	④5.8 ⑤2.4 ⑥0.6 ⑦5.6g	柳刃形状で、基部は三角形状である。逆刺は大きく「ハ」の字状に開く。扁面の側縁形状。斜向押圧剥離に近い。	先端部欠損。亜細期チャート	

表41　１面遺構外出土木器観察表

No	種　類	出土遺構 出土層位	木取り 樹種	成・整形技法の特徴	備　考 (長×幅×厚)
87	板材 桶の底板	Ｄ１区１面 近世溝W600	柾目 ヒノキ属	１枚板から削りだしてつくる。調査時以降の保存で両端がめくりあがる。表裏に幅15mm前後の削りの痕跡がみられる。下部に径２mm程の孔が２ヶ所貫通している。	φ145、厚さ5 S＝1/3
88	板材	Ａ区１面 W708	ヒノキ科	下部は端部で、上部は端部を欠損する。表面は平坦で、幅15mm～20mmの削りがみられる。裏面はやや丸味があり、幅20mmの削りがみられる。上部から下部にかけて、除々に薄くなる。	210×49×19 S＝1/8
89	側材	Ｃ区北端側溝 W601	コナラ属クヌギ節	上部・下部とも端部欠損で、さらに両方向に伸びる。表面に幅25mm前後の削りの痕跡が不明瞭であるがみられる。裏面は平坦である。他に、同一個体と思われる破片が６片ある。	240×73×43 S＝1/8
90	杭	Ａ区 W602	クリ	自然木を利用し、表面から裏面にかけて切断し、片面のみで先端を尖らせる。上部は端部と思われる。上部でわずかに樹皮が残る。	L=192、φ26 S＝1/6
91	杭	Ｃ区４面木道南 端排水路中 W606	コナラ属コナラ節	４面とも平坦に整えられた角材を利用している。下部は端部で、表面と両側面の３面を削り、先端を尖らせる。上部は端部であるが、打撃や繊維の乱れは不明である。	615×70×35 S＝1/6

第３節　波志江中屋敷東遺跡の古代の調査

第１面としてＡ区・Ｂ区の低地、Ｃ区・Ｄ区の低地でAs-B（Ⅱ層）下の調査を実施した。また、Ｂ区・Ｃ区ローム台地、Ｄ１区・Ｄ２区のローム台地のローム上面を調査した。この節で報告する遺構・遺物はAs-B（Ⅱ層）より下位のものであり、遺構は、溝７条、土坑５基、井戸１基、ピット１基、水田である。

Ⅰ　溝

２号溝（15号溝）（第77図、ＰＬ23）

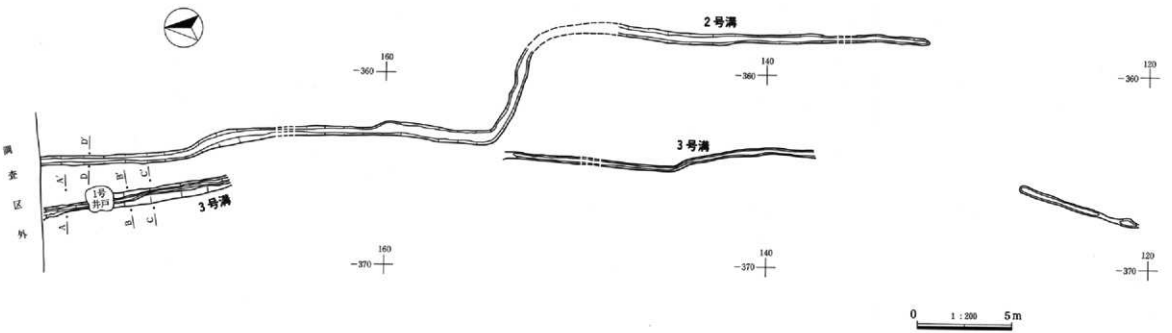
遺構　調査工程の都合でＣ区の北側部分を最後に調査した。最初に調査した部分を２号溝として調査し、北側の部分を15号溝として調査をおこなった。走向、断面の形状、埋没土、位置等から２号溝と15号溝は同一の溝であると判断して報告する。Ｃ区ローム台地の東端で、175-360G～130-355Gにかけて確認された。175-360G～150-360Gにかけて南北の走向（Ｎ－４°－Ｗ）で、150-360G～145-355Gにかけてクランク状に曲がり、145-355G～130-355Gにかけて南北の走向（Ｎ－２°－Ｗ）である。確認した全長は50.8ｍで、上幅20～80㎝、底幅10～55㎝、深さ12～15㎝である。溝の底面は北から南に傾斜している。埋没土は暗褐色土でAs-B・As-Cを含む土で、自然埋没であった。

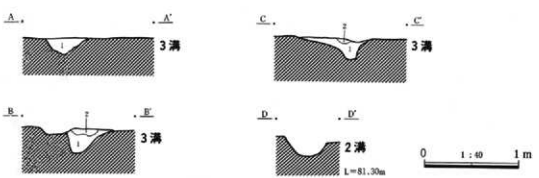
遺物　図示し得なかったが土師器甕５点、土師器坏１点、須恵器甕５点が出土している。

３号溝（17号溝）（第77図、ＰＬ23）

遺構　２号溝と同様に調査行程の都合でＣ区の北側部分を最後に調査し、北側部分を17号溝、最初に調査した部分を３号溝として調査をおこなった。走向、断面の形状、埋没土、位置等から３号溝と17号溝は同一の溝と判断して報告する。Ｃ区ローム台地の東側で、２号溝の西で併行するように南北の走向（Ｎ－10°－Ｗ）で確認された。165-365G～150-360Gと135-360G～125-365Gの２カ所で、不明瞭で確認できない部分もある。確認された全長は59.2ｍで、上幅15～50㎝、底幅５～20㎝、深さ６～24㎝である。溝の底面は北から南に傾斜している。１号井戸と重複する。平面プラン確認時において、３号溝は１号井戸より古いことを確認した。

遺物　図示し得なかったが土師器甕12点、須恵器坏１点が出土した。





3号溝
1：黒褐色土　黒褐色土主体、As-B・FAパミス（φ8mm前後）を少量含む。As-C含む。
2：褐色土　As-B多く含む。As-C含む。FAパミスを少し含む。

第77図　2号・3号溝

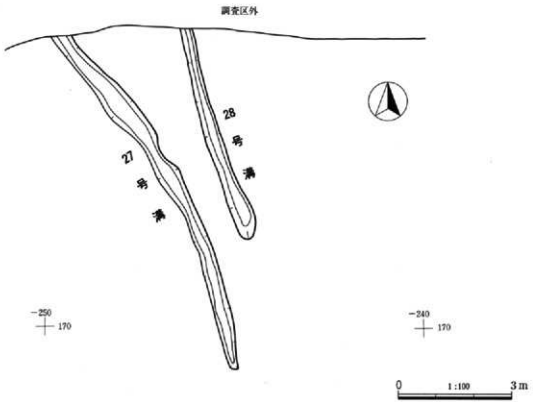
27号溝（第78図）

遺構　Ｄ２区ローム台地の西端、低地との境界付近175-245G～165-240Gで確認された。北側は調査区外に続く。東に張り出す緩い弧状で、走向はＮ－28°－Ｗである。確認された全長は10.2ｍで、上幅30～75㎝、底幅10～45㎝、深さ10～25㎝で、底面は北から南に傾斜する。Ｄ１区中央220-255G付近で２本併行する溝の西側の溝が27号溝と同一の溝の可能性が考えられる。確認された全長は9.8ｍである。

遺物　出土遺物はなかった。

28号溝（第78図）

遺構　Ｄ２区ローム台地の西端、175-245G～170-240Gで確認された。北側は調査区外に続く。走向はＮ－17°－Ｗである。確認された全長は5.8ｍで、上幅25～60㎝、底幅10～35㎝、深さ10㎝前後である。底面は北から南に傾斜する。27号溝同様にＤ１区中央220-255G付近で２本併行する溝の東側の溝が28号溝と同一の溝の可能性が考えられる。確認された全長は10.8ｍである。　**遺物**　出土遺物はなかった。

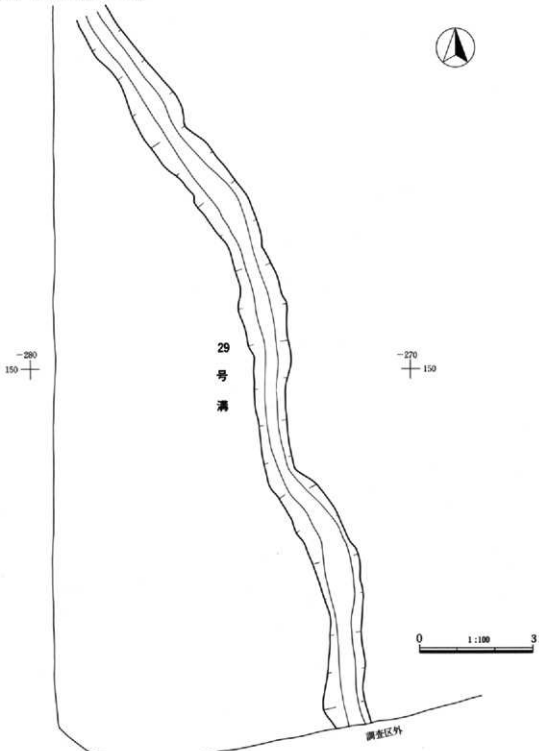


第78図　27号・28号溝

29号溝（第79図）

遺構　Ｄ２区低地の西端、155-275G～140-270Gで確認された。北側と南側は調査区外に続く。北側は調査区外に続くがＣ区では確認できなかった。直線的でなく、曲折しながら北から南に続く。確認された全長は20.7ｍで、上幅70～130㎝、底幅25～70㎝、深さ10㎝前後、底面は北から南に傾斜している。

遺物　出土遺物はなかった。



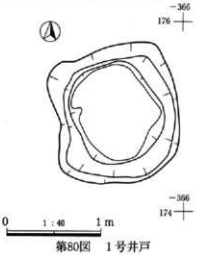
第79図　29号溝

Ⅱ　井戸

１号井戸（第80図、ＰＬ25）

遺構　Ｃ区ローム台地の東端で、175-365Gで確認された。平面形は方形で、長軸145㎝、短軸126㎝、深さ91㎝であった。長軸方位はＮ－12°－Ｗである。どの層位まで掘り込んでいたか不明である。埋没土は、大量のロームブロックと少量のAs-Cを含む土で、人為埋没か自然埋没か不明である。３号溝（17号溝）と重複する。１号井戸は３号溝（17号溝）より新しい。

遺物　出土遺物はなかった。



第80図　１号井戸

Ⅲ　土坑

１号土坑（第81図）

遺構　Ｂ区で確認された。調査行程の都合で土層断面の記録のみとなってしまった。深さ18㎝で暗褐色の砂質土で埋没していた。壁は緩やかに立ち上がる。時期は不明である。

遺物　出土遺物はなかった。

９号土坑（第81図、ＰＬ25）

遺構　Ｄ２区北東部ローム台地、170-240Gで確認された。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸92㎝、短軸50㎝、深さ26㎝である。長軸方位はＮ－38°－Ｅである。埋没土は人為的である。壁は南東側が急に立ち上がり、北西側が緩やかに立ち上がる。時期は、Hr-FA降下以後でAs-B降下以前である。

遺物　出土遺物はなかった。

10号土坑（第81図、ＰＬ25）

遺構　Ｄ２区北東部ローム台地、170-235Gで確認された。平面形は円形で、規模は長軸96㎝、短軸79㎝である。長軸方位はＮ－58°－Ｗである。深さ・断面の形状・埋没土は不明である。

遺物　出土遺物はなかった。

11号土坑（第81図、ＰＬ26）

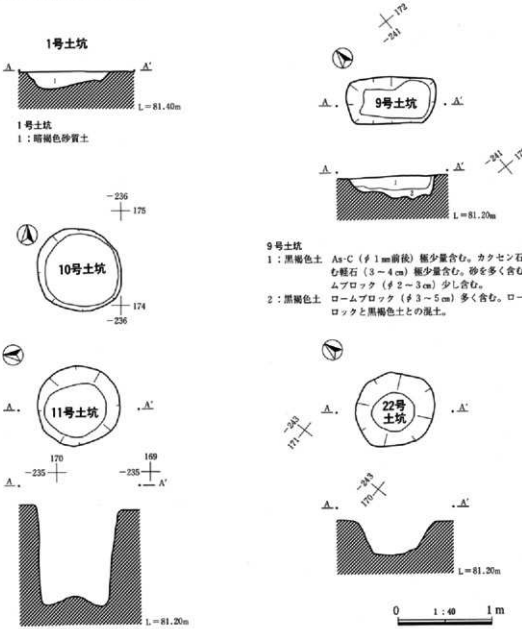
遺構　Ｄ２区ローム台地、165-230Gで確認された。平面形は円形で、径90㎝、深さ102㎝である。底面は中央部がやや高く、周辺が低い。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。埋没土は不明である。

遺物　出土遺物はなかった。

22号土坑（第81図）

遺構　Ｄ２区ローム台地、170-240Gで確認された。平面形は円形である。規模は、長軸83㎝、短軸75㎝、深さ36㎝である。壁は外に開き気味に立ち上がる。埋没土は不明である。

遺物　出土遺物はなかった。



第81図　１号・９号～11号・22号土坑

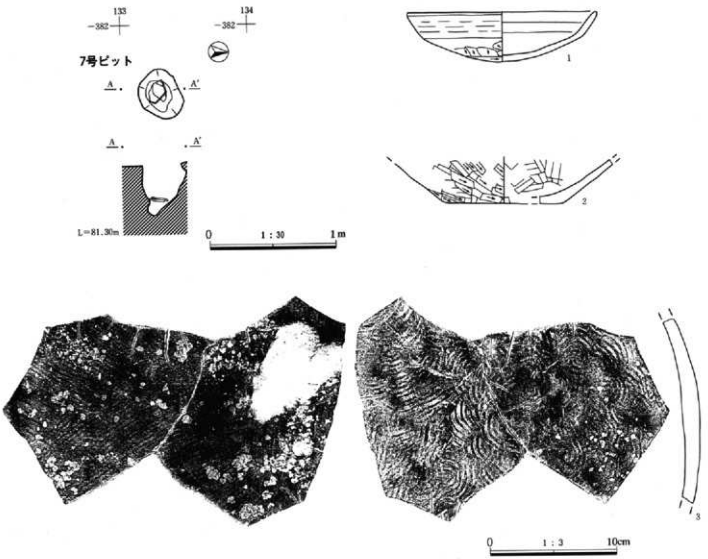
Ⅳ　ピット

7号ピット（第82図、ＰＬ26・52）

遺構　Ｃ区ローム台地、130-280Gで確認された。平面形は不整形な円形で、径35㎝前後、深さ40㎝である。周辺に関連するピット等は確認できなかった。底面近くに須恵器の大甕の胴部破片が置かれていた。

遺物　1は土師器坏で、胴部でやや屈曲し開き気味に口縁部が立ち上がる。口径15.2cm、器高4.0cmである。2は土師器甕の底部破片である。3は須恵器大甕の胴部破片で、外面叩き目、内面同心円状の当て目がみられる。

図示した遺物の他に土師器甕41点、土師器坏1点が出土している。



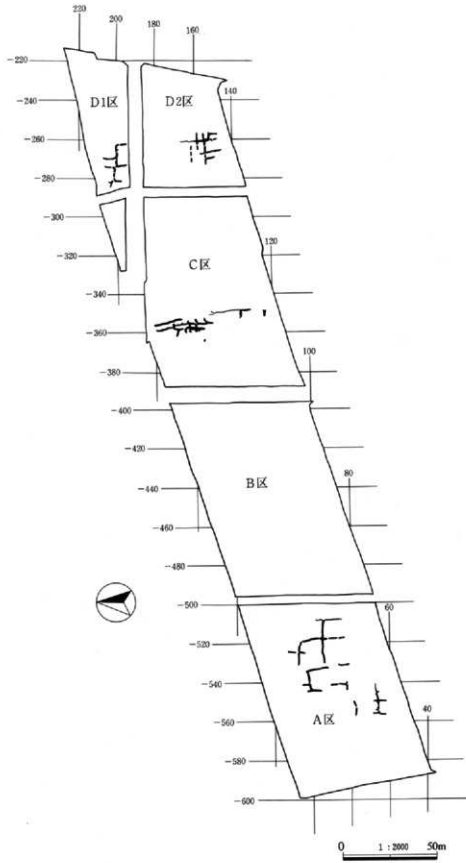
第82図　7号ピット・出土遺物

表42　7号ピット出土遺物観察表

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 坏	C区7ピット	①(15.0) ③ 3.9	口縁部内外面横撫で。胴部外面篦削り。内面指撫で。	①白色鉱物を含む ②にぶい橙 (7.5YR7/4)	底部ー口縁部1/8
2	土師器 甕	C区7ピット	②(9.2) ③(3.4)	外面胴部斜め方向の篦削り。内面胴部篦撫で。	①細かい砂粒を含む ②明赤褐(2.5YR5/6)	底部ー胴部1/2
3	須恵器 大甕	C区7ピット No1・No2	②(14.5)	内面に同心円当て目。外面に僅かに叩き目が残る。	②灰白(10Y8/1)	胴部破片

Ⅴ　水田（第83図）

A区・B区の低地とC区・D区の低地でAs-B（Ⅱ層）下の水田跡を確認した。A区・B区の低地はAs-B（Ⅱ層）の残存状態が悪くA区の一部で確認できただけで、B区では確認できなかった。C区・D区の低地では、低地中央部分を除き、ほぼ全面で水田を確認できた。As-B（Ⅱ層）の残存が良好で、一部ではAs-Bの軽石の上部に堆積しているアッシュ（灰）も確認できた。それぞれの地区の水田の状況を記す。水田計測表には主に水田の面積を記した。水田の面積は水田の畦の下端で囲まれた範囲を計測した。計測にはプラニメーターで３回計測し、その平均値を用いた。また、畦が不明瞭で確認できなかったものは、長軸と短軸を乗じて面積を表し、面積の数値の前に☆印で示した。長軸、短軸の数値の（　）は残存値を示す。

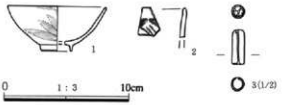


第83図　１面水田全体図

A区1面水田（第83～85図、PL52）

遺構　A区・B区の低地部分では、A区の中央から東側のみで確認できた。確認できた部分は比較的平坦であるが、東から西に僅かに傾斜している。畦畔で囲まれた区画の数は17枚である。その内明確に区画が判り、面積が計測できた区画は3枚である。その平均面積は75.69㎡である。A区西側部分がやや不明瞭であった。

遺物　1は磁器の小碗である。2は陶器の碗の口縁部破片で、緑色の上絵が描かれている。A区1面水田に伴うものとは考えられず、何らかにより混入したものと思われる。3は金属製品で、銅主材で軸先金具と推定される。



第84図　1面水田出土遺物

図示した遺物以外に22点が出土した。内訳は土師器甕9点、土師器坏10点、須恵器甕1点、磁器1点、軟質陶器1点である。

表43　A区1面水田出土遺物観察表

No.	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	時期・残存状況
1	磁器 小碗	A区B水田表採	①(7.8) ②(2.4) ③(3.5)	染付。ベロ藍で草木を描く。高台端部を除き白磁釉。	底部～口唇部1/3 19世紀後半
2	陶器 碗	A区B水田表採	③(2.3)	緑色の上絵。緑釉で外面に施文。内・外面に長石釉。京焼き系信楽。上絵付。	口縁部小片 19世紀
3	金属器 軸先金具	A区B水田	④ 1.8 径 0.7 ⑦ 3g	銅主材。板金を成形。尾部に四分割の面合わせあり、側部の継目は継ぎけせず僅かな隙間となる。おそらく棒先の飾り金具。	平安以前

C区1面水田（第84・86図、PL26）

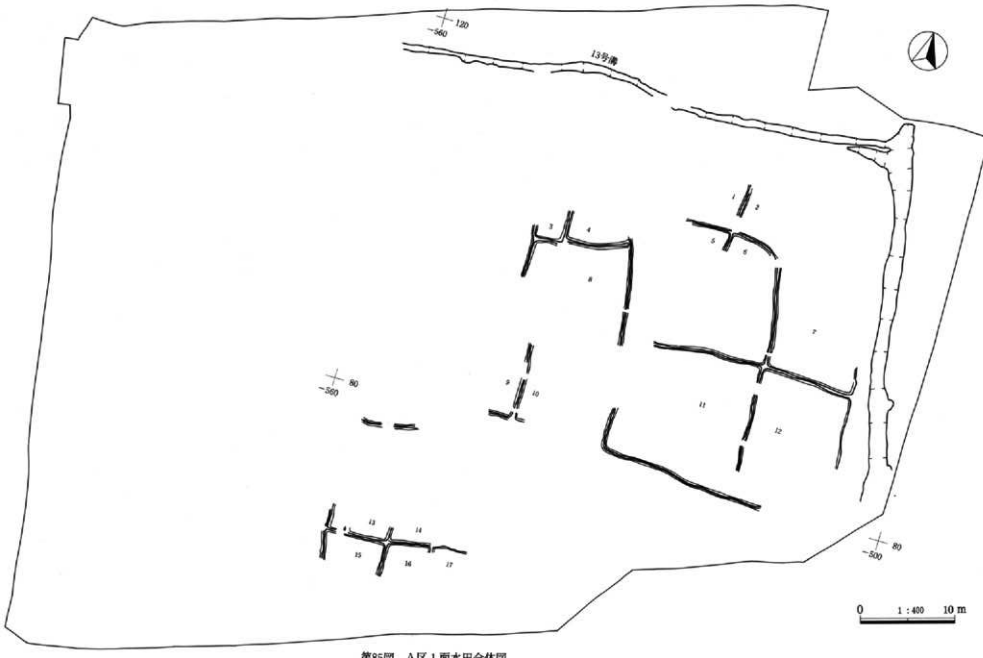
遺構　C区・D区の低地の西側でローム台地と低地の転換点付近の斜面部で確認された。斜面の傾斜は西～東に傾斜している。水田の区画は小さく、長軸方向を南北に有する。等高線に直交する方向は短く、等高線に平行する方向に長軸を取る。この地区の確認できた水田の区画数は16枚である。その内明確に区画が判り、面積が計測できた区画は6枚である。その平均面積は9.42㎡である。高低差が大きいため、面積の小さい水田を作っていたと考えられる。

遺物　明確にC区1面水田に伴う遺物はなかった。

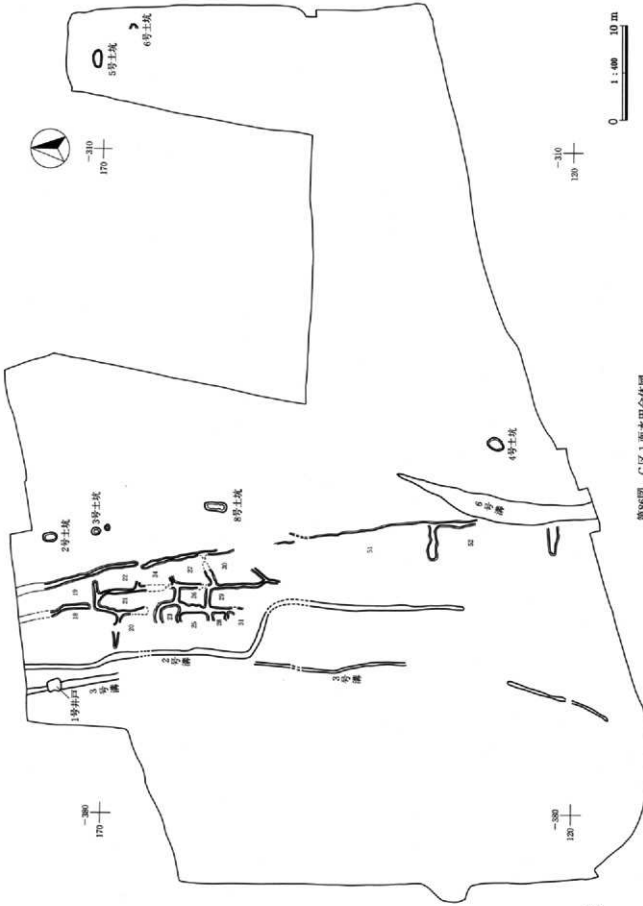
D1・2区1面水田（第83・87図、PL27）

遺構　C区・D区の低地の東側部分で確認した。水田が確認できた所は、東から西に緩く傾斜している。この地区の確認できた水田の区画数はD1区9枚、D2区10枚で、計19枚である。その内明確に区画が判り、面積が計測できた区画は1枚で、20.56㎡である。C区の水田に比べやや大きな区画である。C区に比べ高低差が少ないためと思われる。C区・D区の低地で水田が確認できなかった所は、沼状で常時水が溜まっていたと思われ、水田には適さない所であったと推定される。

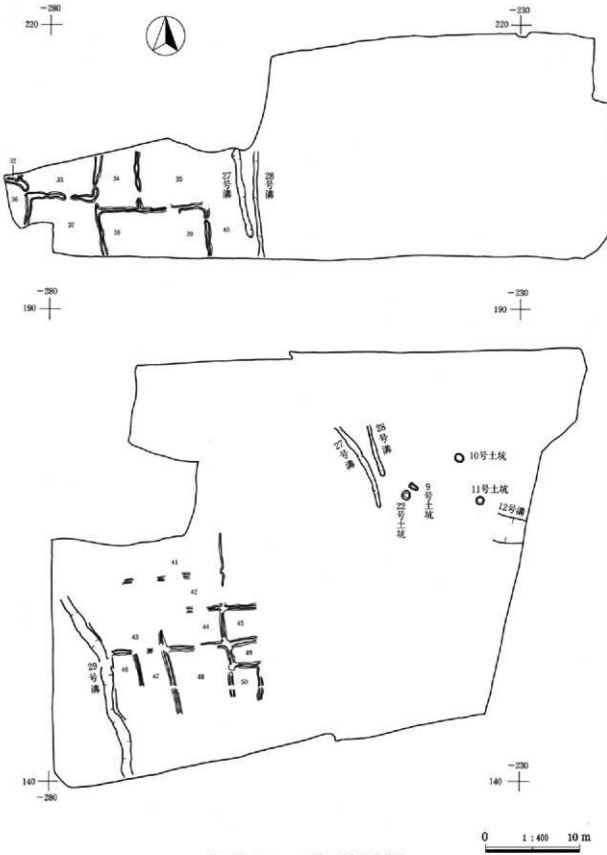
遺物　図示し得なかったが、瓦が7点出土している。瓦は水田に伴うものではないようである。



第85図　A区1面水田全体図



第86図　C区1面水田全体図



第87図　Ｄ１・Ｄ２区１面水田全体図

表44　１面（As-B下）水田計測表

水田No	面積(㎡)	長軸(m)	短軸(m)	長軸方位	備考	水田No	面積(㎡)	長軸(m)	短軸(m)	長軸方位	備考
1	—	(5.32)	(4.84)	N-7°-E	A区	27	9.28※	4.00	2.32	N-7°-E	C区
2	—	(5.40)	—	N-7°-E	*	28	(0.85)	(1.16)	0.72	N-2°-E	*
3	—	(3.44)	2.68	N-2°-E	*	29	(10.45)	5.72	1.93	N-5°-W	*
4	—	(2.88)	6.80	N-2°-E	*	30	16.07※	4.54	3.32	N-3°-W	*
5	—	(1.90)	(4.80)	N-7°-E	*	31	—	—	—	—	*
6	—	(1.96)	5.52	N-5°-E	*	32	—	—	—	—	D１区
7	—	(10.48)	9.16	N-11°-W	*	33	(21.88)	(3.84)	7.20	N-8°-E	*
8	—	(9.72)	10.60	N-10°-W	*	34	(22.89)	6.08	3.64	N-2°-W	*
9	—	(8.00)	(2.32)	N-3°-W	*	35	—	(7.04)	(6.48)	N-3°-W	*
10	—	(7.96)	(9.90)	N-4°-W	*	36	(6.13)	(3.56)	(1.92)	N-8°-E	*
11	183.28※	13.32	13.76	N-2°-W	*	37	(31.49)	(5.25)	6.76	N-7°-E	*
12	137.98※	14.08	9.80	N-3°-W	*	38	—	(4.60)	(7.12)	N-13°-W	*
13	70.80※	11.80	6.00	N-2°-E	*	39	(12.60※)	2.52	(5.00)	N-3°-W	*
14	—	—	(8.30)	—	*	40	—	(5.00)	—	N-4°-W	*
15	(19.97)	5.60	(3.40)	N-13°-W	*	41	—	—	—	N-2°-W	D２区
16	—	(4.60)	(4.20)	N-13°-W	*	42	—	—	—	—	*
17	—	(5.00)	(3.50)	N-5°-W	*	43	—	—	—	—	*
18	—	(6.72)	5.96	N-5°-E	C区	44	20.56	3.36	6.12	N-3°-W	*
19	(11.78)	(5.00)	2.08	N-17°-W	*	45	(10.52)	3.00	3.48	N-5°-W	*
20	—	(3.56)	4.00	N-6°-E	*	46	—	(3.56)	(2.48)	N-13°-W	*
21	11.88	8.00	1.72	N-7°-W	*	47	—	(3.60)	2.68	N-14°-W	*
22	8.74	4.20	2.08	N-7°-W	*	48	—	(7.08)	6.20	N-5°-W	*
23	(2.60)	1.40	(1.56)	N-11°-W	*	49	(5.46)	1.88	(2.84)	N-10°-W	*
24	6.20※	3.52	1.76	N-5°-W	*	50	—	(3.08)	2.80	N-5°-W	*
25	(2.38)	2.88	(0.84)	N-1°-W	*	51	—	—	—	—	C区
26	4.39	2.69	1.68	N-2°-E	*	52	—	11.80	—	—	*

＊面積の欄の※印の数字は長軸と短軸を乗じて面積を算出している。

第４節　波志江中屋敷東遺跡の古墳時代の調査

Ｃ区において第１面（As-B下）水田の耕土下で、Hr-FA（Ⅳ層）を確認した。Hr-FAは２～４㎝ほどの層厚であった。Ｃ区で、第２面としてHr-FA下を発掘調査した。その結果、水田等の遺構は確認できなかった。

Ａ区西側の低地とＣ区とＤ区にかけての低地でAs-C降下後、耕作土にAs-Cを含む水田が確認された。Ｃ区において確認された水田は、Ｂ区とＣ区にかけてのローム台地を通過して、Ｃ・Ｄ区の水田に水を引いていた。この水路の水源の川が氾濫し、洪水はこの水路を伝わり、Ｃ・Ｄ区の水田へ達した。その結果、水田の一部が洪水層に覆われた。洪水層下を第３面として発掘調査をおこなった。この水田を第３面洪水層下水田とする。さらにAs-Cを含む耕土を取り除き水田の基底面の調査を実施し、水田基底面を確認した。この水田基底面を第４面As-C混土下水田と呼称した。この節で報告する遺構は溝16条、土坑３基、ピット３基、水田である。

Ⅰ　溝

１号溝（第88～97図、ＰＬ28～31・52～58）

遺構　Ｂ区からＣ区のローム台地上で、140-410G－125-360Gにかけて確認された。130-375Gで11号溝と

分岐する。11号溝とは同時期と考える。ほぼ東西の走向（N－83°－W）である。確認された全長は43.3mで、上幅30～210cm、底幅５～160cm、深さ15～92cmである。底面・壁ともに凹凸が激しく、壁はえぐれる所もみられる。底面は西から東に傾斜している。埋没土は丸礫や川砂で短時間に埋没している。この埋没土が基本土層の洪水層（Ⅵ層）で、Ｃ区の低地はこの１号溝と11号溝を通して、洪水層が流れ込んで埋没している。大沼下遺跡２号溝と埋没土や溝の底面の状況などが類似する。出土遺物も数点であるが大沼下遺跡２号溝出土遺物と接合した。

遺物　本遺跡で遺構から出土した遺物は１号溝出土遺物が最も多い。また特徴として剥れ口や表面が摩滅しているものが多い。

１・２は土師器椀で、１は内斜口縁である。２は体部から口縁部が内湾する。３～９は土師器高坏の坏部である。４～８は坏部の口径が大きい。８・９は坏部の口縁部を欠損する。10～18は土師器高坏の脚部である。10・16を除いて円形の透孔がある。

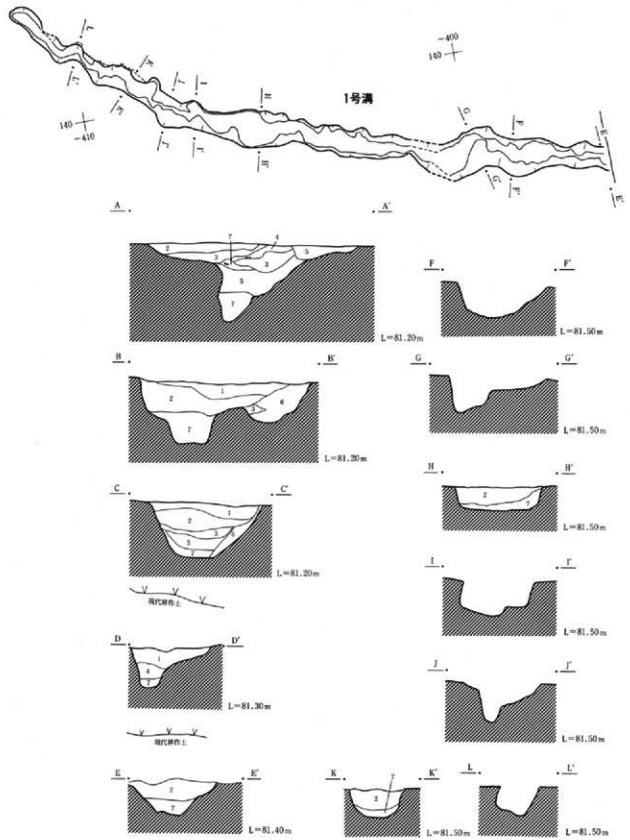
19～28は「Ｓ」字状口縁台付甕である。19～24は口縁部から胴部である。28は胴部上半のみである。25～27は脚部のみである。19・20は縦方向の刷毛後胴部最大径より上位に横方向の刷毛を施す。28は横方向の刷毛がみられない。25～27は脚部下端が内側にわずかに折り返されている。

29～37は単口縁台付甕である。29は口縁部に輪積みの痕跡がみられ、やや内湾気味に外傾する。刷毛は深く刻まれている。脚部下端は内側に折り返されている。単口縁であるが、「Ｓ」字状口縁台付甕の系統で考えられる土器である。30は小型台付甕で脚部を欠損する。口縁部は単口縁で小さくやや外反気味に立ち上がる。31は単口縁の小型台付甕と思われ、口縁部を欠損する。胴部上半外面は木口状工具による撫でが施され、胴部下半外面は箆状工具による撫でが施される。38は土師器鉢である。内外面とも丁寧な縦方向を主体にした箆磨きが施される。

39～41は土師器の小型土器で、手捏である。口唇部は指で摘み上げて成形している。そのため口唇部の形状が不整形である。

42～68・70～74・81・82・87・88・90・91は土師器甕である。42～65・67・68は甕の口縁部から胴部である。42は底部欠損で胴がやや張り、胴部内外面に箆削りが施される。45は底部欠損であるが、下端部がやや外側に広がる痕跡がみられ、台が付く可能性がある。口唇部は上端に面取りが施される。56・57は口縁部から胴上部で、内外面に木口状工具による撫でが施される。57は口唇部に面取りが施される。62は大沼下遺跡２号溝№６と接合した。66は底部と胴部欠損であるが、台付甕の可能性が考えられる。82は胴が張り、球胴で外面に丁寧な箆削りを施す。底部は中央付近がやや内側に入り込み、箆削りが施される。１号溝出土遺物の中では新しい様相を示す。洪水層で埋没した時期を特定する資料である。90・91は土師器甕の口縁部破片で受口状である。外面に櫛状工具による波状文が施される。

69・75～80・83～86・92～97・99は土師器壺である。69は口縁部と底部を欠損し、胴上部内外面に箆磨きが施される。75～80は底部から胴部で口縁部を欠損する。75・78は不明瞭であるが、箆削りが施される。76は不明瞭で箆削りは確認できないが指頭痕は確認できる。76・79は底部に木葉痕がみられる。83・84は口縁部から胴部である。83は頸部に削りが深く入り、段が付く。84は口唇部外側に面取りが施されている。92～96は土師器壺の口縁部で、折り返し口縁である。92は外面に箆磨きが施される。96は小破片で口径等不明瞭で甕の可能性も考えられる。97は土師器壺の口縁部で口唇から頸部に縦方向に粘土紐を貼り付けている。口唇部に面取りが施される。99は土師器装飾壺の頸部で、頸部下部に横位に１条の粘土紐を貼り付け、楕円形の刻みが施される。



1号溝

1　暗褐色土　酸化して暗赤褐色～黄褐色化している川砂を多く含む。粘土少量含む。

2　褐灰色土　酸化して暗赤褐色～黄褐色化した川砂と、褐灰色川砂主体に粘土ラミナ状に少量含む。As-C（φ1～5mm）含む。

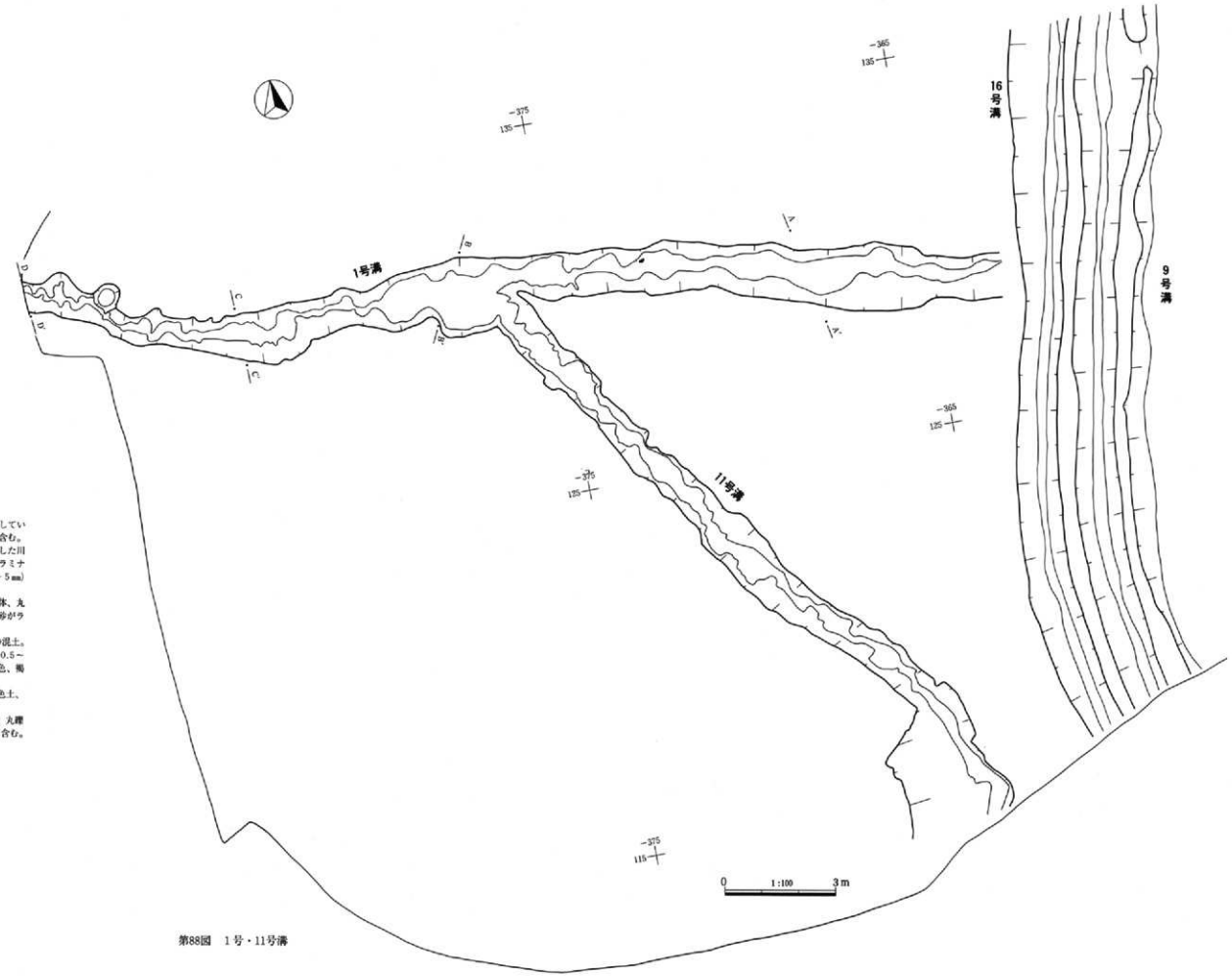
3　黒褐色土　丸礫（φ1～3cm）と川砂主体、丸礫は底部、その上に砂鉄、川砂がラミナ状に堆積。

4　暗褐色土　粘土多く含む、褐灰色川砂との混土。

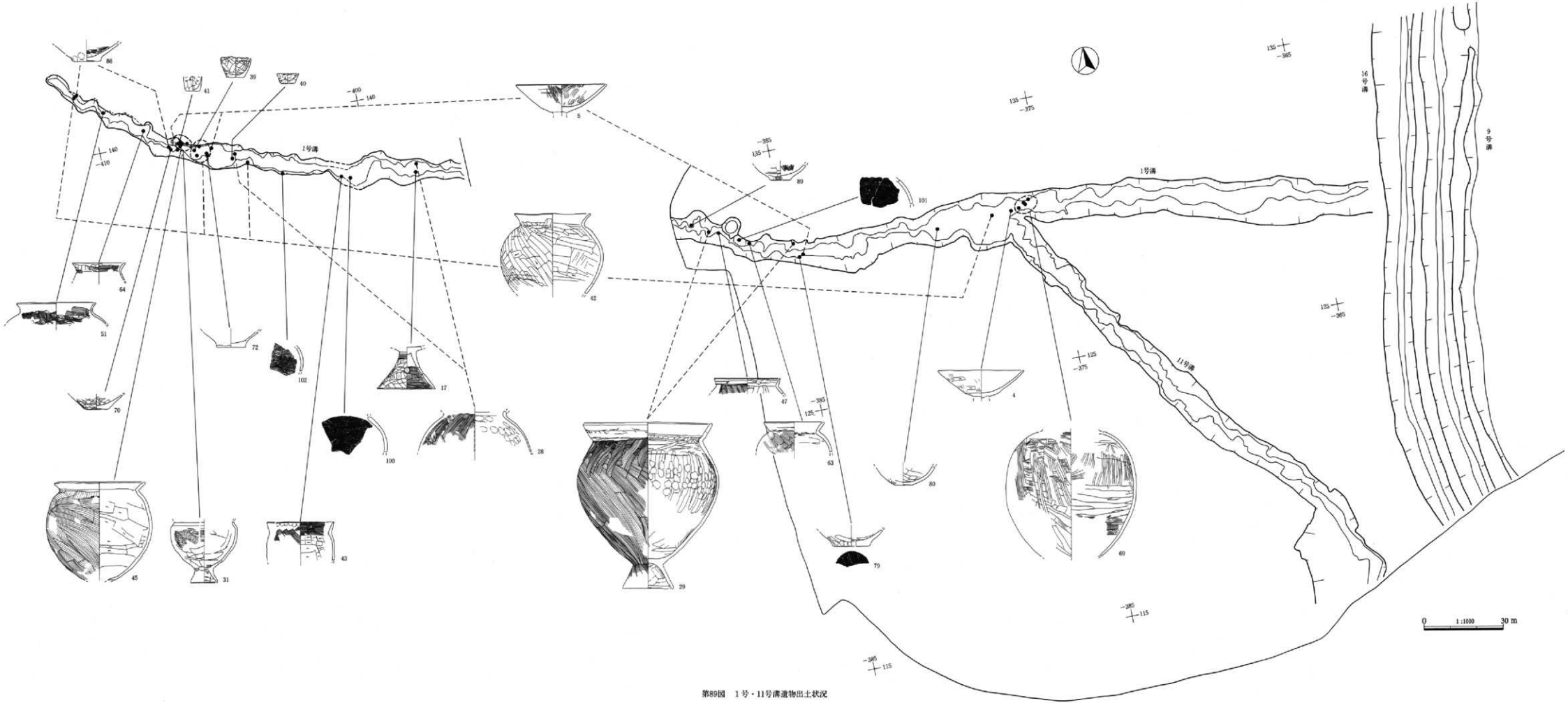
5　黄褐色土　黄橙色ロームブロック（φ0.5～3cm）含む。黄褐色、暗赤褐色、褐灰色川砂多く含む。

6　暗褐色土　黄橙色ロームと褐色土、暗褐色土、黒褐色粘質土の混土。

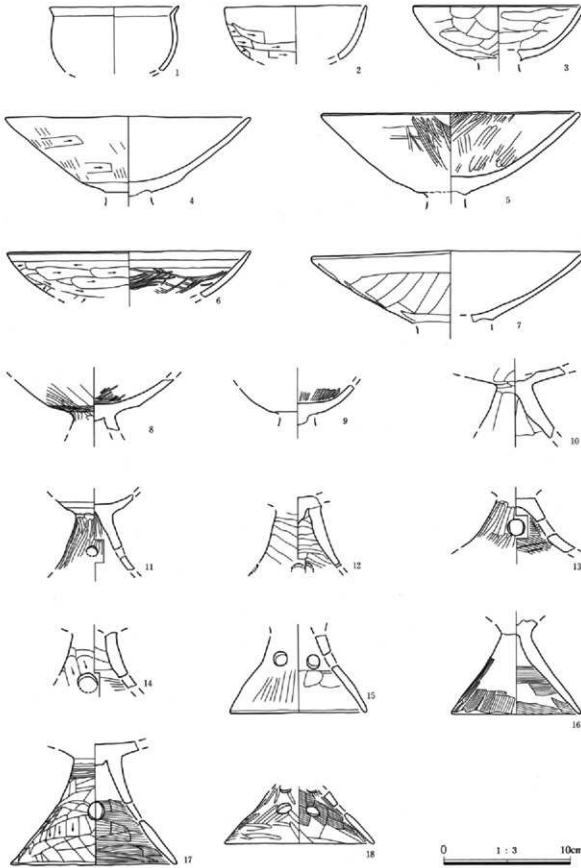
7　黒褐色土　赤褐色、黄褐色、褐灰色川砂、丸礫（φ1～5cm）主体、砂鉄多く含む。



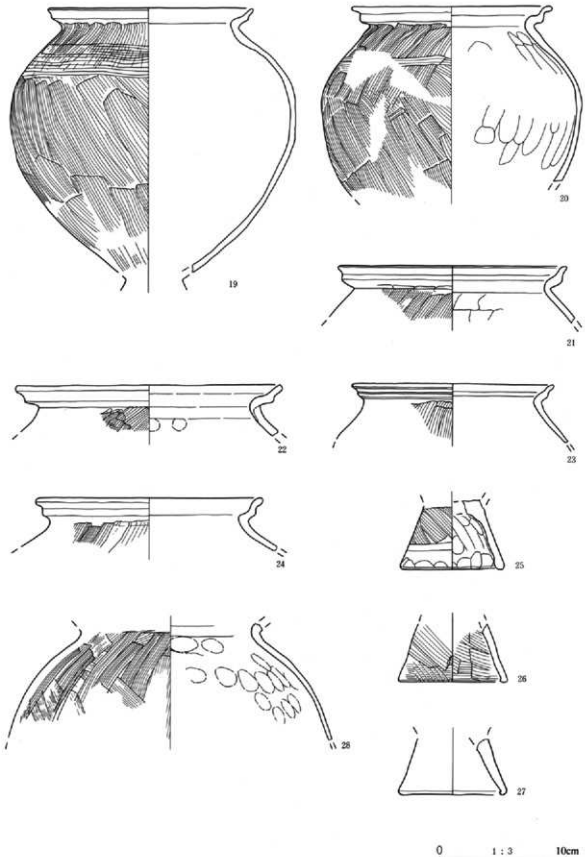
第88図　1号・11号溝



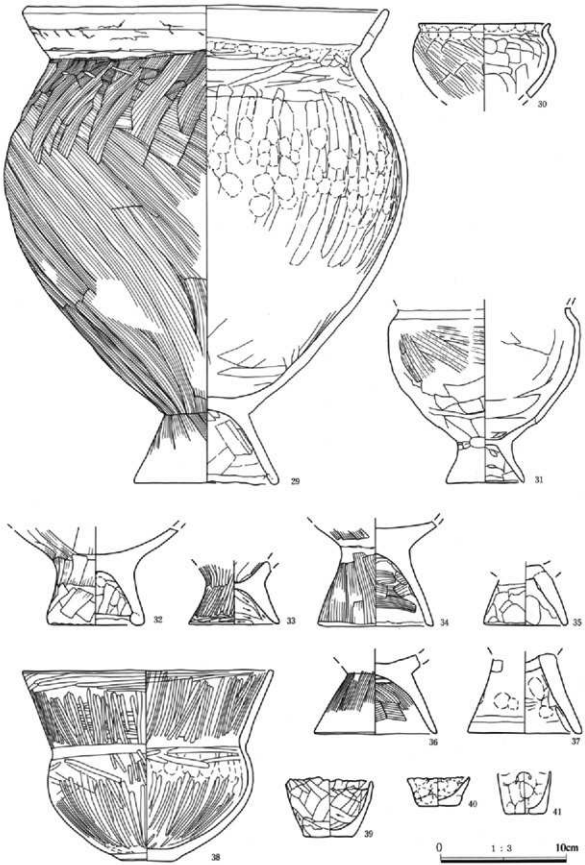
第89図　1号・11号溝遺物出土状況



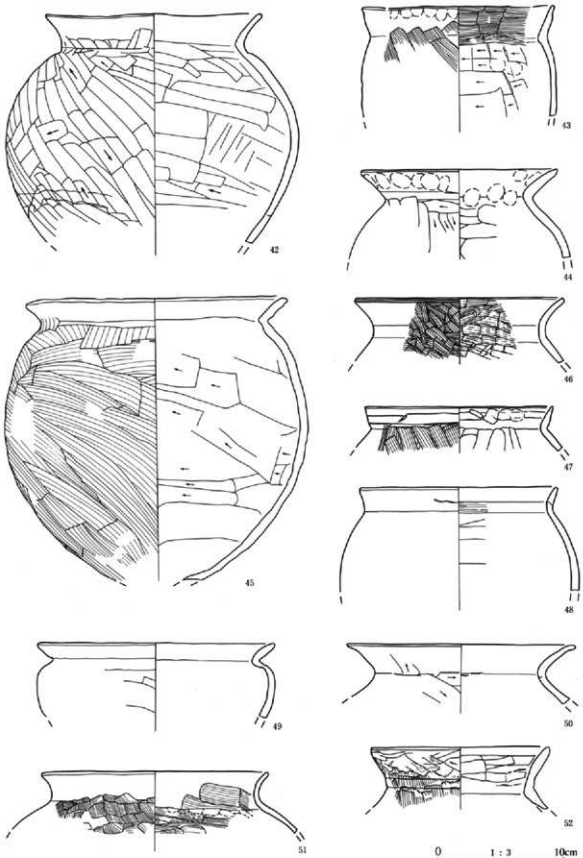
第90図　１号溝出土遺物(1)



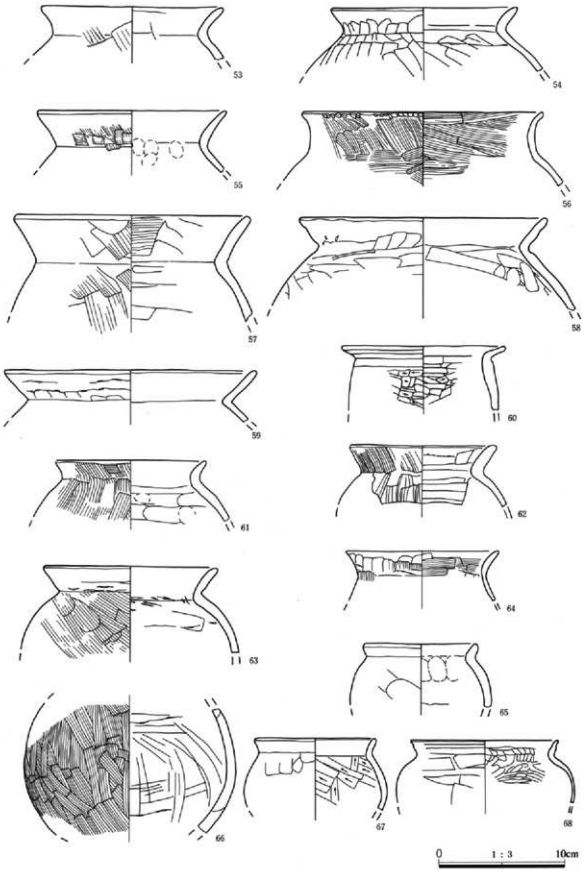
第91図　1号溝出土遺物(2)



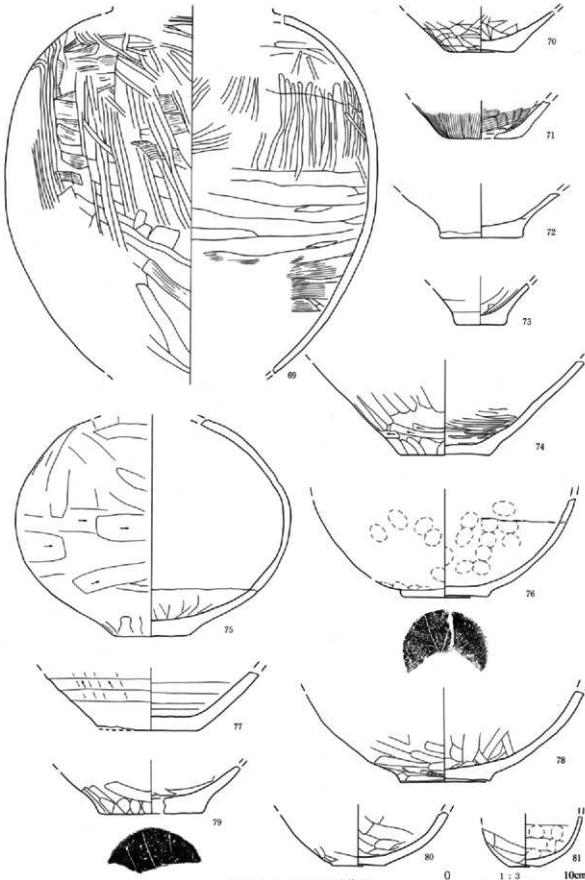
第92図　1号溝出土遺物(3)



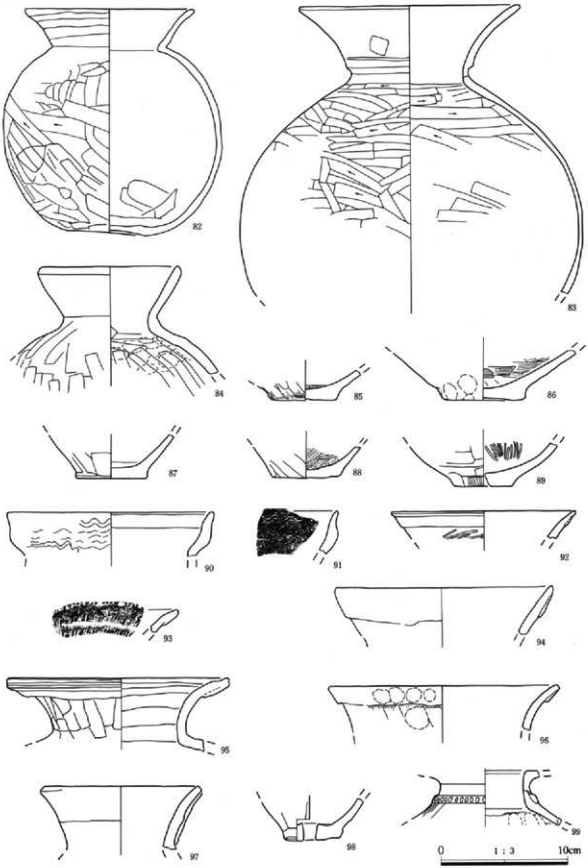
第93図　１号溝出土遺物(4)



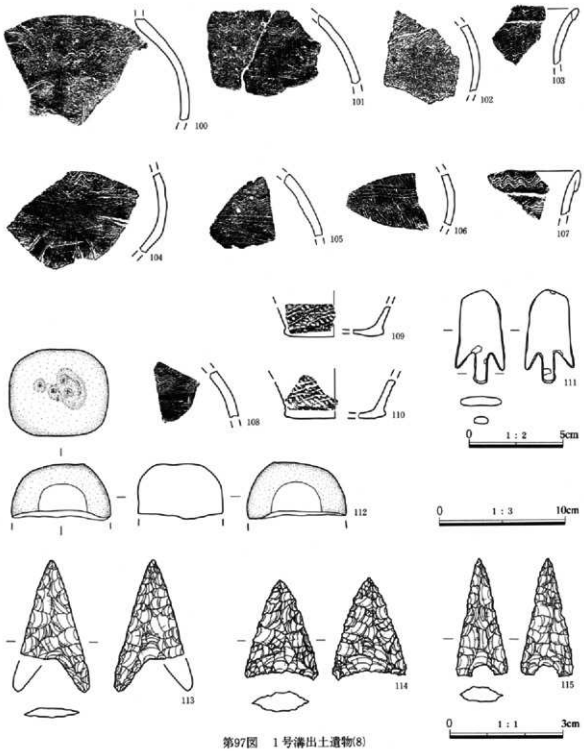
第94図　1号溝出土遺物(5)



第95図　1号溝出土遺物(6)



第96図　1号溝出土遺物(7)



第97図　1号溝出土遺物(8)

98は土師器甑である。底部に径1㎝程の円形の穴が開けられている。

100～110は弥生時代末から古墳時代初頭の土器である。101～105・107・108は椀式土器である。103・107は口縁部破片で、折り返し口縁である。106は南関東の影響と思われ、赤彩・格子目が施される。109・110は東関東を主体とする十王台式土器の底部である。111は鉄鏃である。112は磨石である。113～115は石鏃である。

図示した遺物以外に土師器甕1195点、土師器坏48点、縄文土器1点が出土した。

表45　1号溝出土遺物観察表(1)

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量 目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 椀	C区1溝	①(10.2) ②(5.1)	口唇部は外反する(内鈴口縁)。口唇部は横撫で。胴部外面は篦削り。	②橙(5YR6/6)	口縁部～胴部1/8
2	土師器 椀	C区1溝	①(11.2) ②(4.2)	外面体部横方向の篦削り後口縁部横撫で。内面体部横方向の指撫でか。口縁部横撫で。	①2㎜程の砂粒を含む ②にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部1/2～体部内外面摩滅
3	土師器 高坏	C区1溝	①(13.5) ②(4.3)	口縁部内外面横撫で。外面篦削り後筒撫で。内面篦撫で。	①3㎜程の鉱物含む ②灰白(10YR7/2)	坏部1/2
4	土師器 高坏	C区1溝 No7	①(19.4) ③(6.2)	外面篦削り後、櫛状工具の掻き目後、撫で。	①多量に砂粒含む ②明赤褐(5YR5/8)	坏部のみ
5	土師器 高坏	C区1溝 No19・21・38・56他	①(20.6) ③(6.7)	口縁部～体部外面横撫で後縦方向の筒磨き。内面口縁部～体部横撫で後縦方向の筒磨き。底面内面は指撫で。	①密度は細かく、2㎜程の小石、赤色粒含む ②浅黄橙(10YR8/3)	坏部1/3
6	土師器 高坏	C区1溝・3面・2面	①(19.4) ③(3.7)	外面横方向の篦削り。内面縦方向後、横方向の筒磨き。	①白色の粒子含む ②にぶい橙(5YR6/4)	坏部口縁1/3
7	土師器 高坏	C区1溝	① 21.6 ③(5.6)	口縁内外面横撫で。外面は篦削り後撫で。	②橙(5YR6/8)	坏部完形 脚部欠損
8	土師器 高坏	C区1溝	③(4.0)	内面放射状の筒磨き。外面筒撫で。	①2㎜程砂粒含む ②にぶい黄橙(10YR7/4)	坏部で口縁欠損
9	土師器 高坏	C区1溝	③(3.0)	内面放射状に筒磨き、外面筒撫削り後筒撫で。坏部下端に脚部の連結用の突出部あり。	①2㎜程の砂粒含む ②橙(7.5YR6/6)	坏部体部
10	土師器 高坏	C区1溝	③(5.5)	内面に絞り目、外面筒撫で。	①密度が細かい ②明黄褐(10YR7/6)	脚部と坏部の連結部分
11	土師器 高坏	C区1溝	③(6.0)	脚部内面絞り目。外面縦方向の筒磨き。脚部に透孔3個。	①砂粒を含む ②橙(2.5Y5/6)	坏部下半～脚部上半
12	土師器 高坏	C区1溝	②(5.5)	透孔3個で4個の可能性。内外面とも筒撫で。	①砂粒を含む ②橙(7.5YR7/6)	脚部上半
13	土師器 高坏	C区1溝・洪水層	③(4.3)	内面刷毛。外面縦方向の筒磨き。	①砂粒含む ②橙(5YR6/6)	脚部上半
14	土師器 高坏	C区1溝	③(4.5)	透孔4個。内面筒撫で。外面筒撫削り。	①砂粒を含む ②橙(7.5YR6/6)	脚部上半
15	土師器 高坏	C区1溝	②(10.6) ③(6.1)	外面縦方向の筒磨き。内面指頭押さえ。内外面下端部は横撫で。	①砂粒を含む ②にぶい黄橙(10YR7/4)	脚部1/3
16	土師器 高坏	C区1溝	②(10.2) ③(7.4)	外面は縦方向の刷毛。内面は横方向の刷毛。赤彩の可能性。	①密度が細かい ②淡赤橙(2.5YR7/4)	脚部 下端部は欠損
17	土師器 高坏	B区1溝 No83	①(13.2) ③(9.0)	外面坏底部筒磨き、連結部横方向の筒磨き、脚部縦方向主体の筒撫で。内面脚部と坏部の接合痕、脚部上半横方向指撫で、脚部下半横方向の木口状工具の撫で。	①2㎜程の砂粒含む ②にぶい黄橙(10YR7/4)	脚部1/3～坏底部透孔4個
18	土師器 高坏	C区1溝	② 12.0 ③(4.4)	外面下半は横方向、上半は縦方向の筒磨き。内面横～斜め刷毛。	①砂粒を含む ②浅黄橙(10YR8/3)	脚部1/2、透孔は円形で3個確認
19	土師器 台付甕	C区1溝	① 16.2 ②(20.8)	口縁部内外面横撫で。胴部外面頸部～肩部斜め刷毛。肩部に2条の横刷毛。脚部～肩部斜め刷毛。胴部内面縦方向指撫で。	①3㎜程の砂粒を含む ②にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部～胴部 脚部欠損 「S」字状口縁
20	土師器 台付甕	C区1溝・C区2面 No100	① 15.9 ②(16.0)	口縁部内外面横撫で。外面頸部から斜め刷毛。胴部最大径より上で横方向刷毛。脚部より胴部最大径付近に斜め刷毛。胴部内面指撫で。	①2㎜程の砂粒含む ②灰褐(7.5YR4/2)	口縁部～胴部 脚部欠損 「S」字状口縁
21	土師器 台付甕	C区1溝・斜面洪水層	①(18.2) ③(4.5)	口縁中程で段を有す。胴部外面頸部より斜め刷毛。胴部内面指撫で。	①砂粒を含む ②淡黄(2.5Y8/3)	口縁部～胴部1/4 「S」字状口縁
22	土師器 台付甕	C区1溝・斜面洪水層	①(21.0) ③(4.0)	口縁部外面段を有す。胴部外面頸部から斜め刷毛。内面指押さえ。	①2㎜程の小石含む ②明黄褐(10YR6/6)	口縁部～胴部 「S」字状口縁
23	土師器 台付甕	C区1溝	①(16.0) ③(4.5)	口縁内外面横撫で。胴部外面頸部から斜め刷毛。胴部内面指撫でか。	①密度は細かい ②にぶい黄橙(10YR5/3)	口縁部～胴部1/8 「S」字状口縁
24	土師器 台付甕	C区1溝	①(18.0) ③(4.1)	口縁部中程に段を有す。口縁部内外面横撫で。頸部より下刷毛。	①砂粒を含む ②灰白(2.5Y8/2)	口縁部～胴部1/4 「S」字状口縁
25	土師器 台付甕	C区1溝	② 8.0 ③(5.4)	外面連結部から斜め刷毛。下端部指頭押さえ。内面は縦方向の指撫で。	①砂粒を含む ②淡黄(2.5Y8/3)	脚部1/2

表46　1号溝出土遺物観察表(2)

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
26	土師器 台付甕	C区1溝	②(8.6) ③(4.6)	内面木口状工具による横方向の撫で。外面下端部木口状工具による横方向の撫で後、木口状工具による斜め方向の撫で。	①微細白色鉱物と細かい砂粒を含む ②にぶい黄褐(10YR5/4)	脚部下半1/3
27	土師器 台付甕	C区1溝	③(8.6) ②(4.4)	下端部内側につぶれる。内面指撫で。	①2mm程の鉱物を含む ②にぶい橙(7.5YR7/3)	脚部
28	土師器 台付甕	B区1溝 №48・84	②(9.2)	外面頸部から斜め方向の刷毛、胴部で胴下半からの斜め方向の刷毛。内面胴部指頭押さえ、頸部横方向の指撫で。	①細かい砂粒を多く含む ②にぶい黄橙(10YR7/3)	頸部～胴部 「S」字状口縁
29	土師器 台付甕	C区2面 №2・C区1溝	①(28.5) ②11.4 ③37.6	口縁部内外面横撫で。胴部外面頸部～肩部斜め刷毛。脚部～肩部斜め刷毛。胴部内面下半横方向と放射状の弱い刷毛。上半は縦方向の指撫でと指頭押さえ。脚部外面連結部～脚部中程に刷毛。脚部下端は横撫で。脚部内面は指撫で。下端部内側に折返している。	①2mm程の白色鉱物を含む ②明黄褐(10YR7/6)	ほぼ完形 口縁部を一部欠損
30	土師器 小型台付甕	C区1溝	①(10.2) ③(5.9)	内外面頸部～口唇部指頭押さえ。外面胴部斜め刷毛。内面胴部指撫で。	①白色鉱物を含む ②明黄褐(10YR6/6)	口縁部～胴部1/4
31	土師器 小型台付甕	B区1溝 №109・118	②6.2 ③(13.8)	外面口縁部横撫で、頸部～胴部最大径部縦方向の撫でと内面の木口状工具による撫で、下半は竟撫で、脚部指押さえ。内面口縁部横撫で、頸部～胴部最大径部横方向の竟撫で、下半は横方向の指撫で、脚部上部は横方向の指撫で、下半は横方向の竟撫で。胴部下半中央で上半部と下半部の接合の痕跡がみられる。	①2mm程の砂粒と微細白色鉱物含む ②灰褐(7.5YR4/2)	口縁部～脚部下端の大半と胴部1/2を欠損
32	土師器 台付甕	C区1溝	②7.5 ③(7.7)	下端部を内側に折り曲げている。外面刷毛、下端は竟削り。内面縦方向の指撫で。	①3mm程の小石を含む ②橙(7.5YR7/6)	脚部
33	土師器 台付甕	C区1溝	②7.2 ③(4.9)	内面縦方向、下端は横方向の指撫で。外面縦方向の竟磨き。	①3mm程の小石含む ②灰黄褐(10YR5/2)	脚部
34	土師器 台付甕	C区1溝	②(9.2) ③(8.3)	外面連結部から縦方向の刷毛。内面横方向の刷毛。指頭押さえ。	①砂粒を含む ②灰白(10YR8/2)	脚部
35	土師器 台付甕	C区1溝	②6.4 ③(4.7)	内外面とも指撫で。	①密度は細かい ②にぶい橙(7.5YR6/4)	脚部
36	土師器 台付甕	C区1溝	②(9.8) ③(6.2)	外面連結部から下端に刷毛。内面斜めの刷毛、下端は横刷毛。	①3mm程の砂粒含む ②にぶい黄橙(10YR7/4)	脚部1/2
37	土師器 台付甕	C区1溝	②9.0 ③(6.4)	外面に係かに指頭押さえの痕跡、内面竟削り後指頭押さえ。	①2mm程の砂粒含む ②橙(7.5YR6/6)	脚部
38	土師器 坩	C区2面 №79・47・1溝	①19.8 ②4.0 ③15.0	口縁部内外面縦方向の竟磨き。内面は横方向の刷毛後、口唇部内外面横方向の竟磨き。胴部内面縦方向の竟磨き。頸部内面指頭押さえ。胴部外面縦方向の竟磨き。	①密度は細かい ②浅黄(2.5Y7/3)	口縁部～底部1/2
39	土師器 小型土器	B区1溝 №31	①5.0 ③3.2 ③2.2	外面胴部竟撫で、口唇部指で摘み成形。内面底部指撫で、胴部縦方向の竟撫で後、横方向の指撫で。	①密度細かく、少量砂粒含む ②浅黄橙(10YR8/3)	ほぼ完形 口縁部一部欠損
40	土師器 小型土器	B区1溝 №46	①5.0 ②3.2 ③2.2	口縁部～体部内外面指頭押さえ。口唇部は指で摘み成形、そのため不整形である。	①微細白色鉱物を含む ②黒褐(10YR3/2)	ほぼ完形 口唇部～体部一部欠損
41	土師器 小型土器	B区1溝 №109	①(4.2) ②(3.0) ③3.1	口唇部は指で摘み成形し、そのため口唇部は不整形である。内外面とも指頭押さえ。手程ね。	①2mm程の白色鉱物含む ②褐(10YR4/4)	口縁部1/3～底部
42	土師器 甕	B区1溝 №32・33・35・50・C区1溝№9	①17.2 ③(18.1)	口縁部内外面横撫で。外面頸部木口状工具による押さえ、頸部から斜め方向の木口状工具による撫で、胴最大径付近で逆方向の撫で。胴下半で操合の痕跡として盛り上がりがみられる。内面胴下半横方向の竟撫で、上半は横方向の指撫で、頸部直下指撫でと木口状工具による撫で。	①2mm程の砂粒と5mm程の小石を含む ②橙(5YR6/6)	口縁～胴部3/4

表47　1号溝出土遺物観察表(3)

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量 (cm)	目	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
43	土師器 甕	B区1溝 №70	①(15.2) ③(8.7)		口縁部外面本口状工具の撫で後横撫で後口唇部指押さえ。胴部外面本口状工具の縦方向の撫で。口縁部内面本口状工具の横方向の撫で。胴部内面指頭押さえ後横方向の篦撫で。	①２㎜程の小石・砂粒含む ②にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部1/6～胴部
44	土師器 甕	C区1溝	①(15.6) ③(7.0)		口縁部内外面指頭押え後横撫で。胴部外面篦削り。内面指撫で。	①白色鉱物含む ②橙(7.5YR6/6)	口縁部～胴部1/2
45	土師器 甕	B区1溝 №24・109	①(20.8) ③(22.2)		口縁部内外面横撫で。外面頸部本口状工具による押さえが一部みられ、頸部下は縦方向・胴最大径付近まで横方向・胴下半は斜め方向の本口状工具による撫で。内面胴部中央やや下半で横方向の指撫で、他の部位は横方向の篦撫で。	①２㎜程の砂粒主体に一部５㎜程の小石を含む ②にぶい橙(5YR6/4)	口縁部1/3～胴部
46	土師器 甕	C区1溝	①(16.4) ③(5.1)		外面斜め方向の刷毛。口縁内面横方向刷毛。胴部篦撫で。口唇部刷毛後横撫で。	①密度は細かい ②にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部～胴部1/6
47	土師器 甕	C区1溝 №29	①(15.0) ③(3.6)		口縁部横撫で。外面頸部から胴部斜め刷毛。内面胴部指撫で、口縁指頭押さえ後横撫で。	①密度は細かい ②灰白(2.5Y8/2)	口縁部～胴部1/4
48	土師器 甕	C区1溝・ 斜面洪水層 ・洪水層	①(15.4) ③(8.2)		外面口縁部に輪積痕。内面頸部横方向の刷毛、胴部篦撫で。	①透明の鉱物含む ②にぶい黄橙(10YR5/4)	口縁部～胴部
49	土師器 甕	B区1溝	①(18.8) ③(5.8)		口縁部内外面横撫で。胴部内外面篦撫で。	①４㎜前後の砂粒を含む。 ②にぶい橙(2.5YR6/6)	口縁部～胴部破片
50	土師器 甕	C区1溝・ 木道付近	①(18.2) ③(4.6)		口縁部外面篦削り後横撫で。胴部篦削り。口縁内面横撫で。	①白色鉱物を含む ②灰褐(10YR5/2)	口縁部～胴部1/4
51	土師器 甕	B区1溝 №２	①(17.8) ③(4.8)		口縁部外面横撫で。胴部外面本口状工具による縦方向の撫で。口縁部内面本口状工具の横方向の撫で後横撫で。頸部内面指頭押さえ。胴部内面指頭押さえ後本口状工具の横撫で。	①細かい砂粒含む ②にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部1/4～胴部
52	土師器 甕	C区1溝	①(14.2) ③(4.9)		外面胴部刷毛、口縁部刷毛後横撫で。内面口縁篦撫で後横撫で。	①３㎜程の小石含む ②にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部1/3
53	土師器 甕	C区1溝	①(14.4) ③(4.1)		外面頸部刷毛。	①３㎜程の白色鉱物含む ②橙(7.5YR6/6)	口縁部～頸部
54	土師器 甕	C区1溝	① 14.5 ③(5.5)		外面頸部～胴部本口状工具の撫で後横撫で。胴部内面篦撫で。	①黒色・白色鉱物含む ②橙(7.5YR6/8)	口縁部～胴部
55	土師器 甕	C区1溝	①(15.0) ③(4.5)		口縁部外面斜め刷毛後横撫で。頸部本口状工具押さえ。内面指押さえ。	①砂粒を含む ②にぶい黄褐(10YR7/3)	口縁部
56	土師器 甕	C区1溝	①(19.2) ③(5.8)		口縁外面縦方向刷毛。口縁内面・胴部内外面横方向刷毛。口唇部に刻み。	①２㎜程の小石含む ②にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部～胴部1/3
57	土師器 甕	C区1溝	①(18.8) ③(8.3)		外面口縁～胴部刷毛。口縁部内面横方向刷毛。胴部篦撫で。	①３㎜程の小石含む ②にぶい黄褐(10YR4/3)	口縁部～胴部1/6
58	土師器 甕	C区1溝・ 表採・木道 付近	①(19.6) ③(7.2)		口縁内外面横撫で、胴部内外面本口状工具で横方向撫で。	①３㎜程の小石含む ②黒褐(5YR3/1)	口縁部～胴部1/2
59	土師器 甕	C区1溝	①(20.0) ③(3.7)		口縁外面に２段の輪積痕。口縁部内外面横撫で。	①３㎜程の小石含む ②灰褐(7.5YR4/2)	口縁部～胴部1/4
60	土師器 甕	C区1溝	①(13.0) ③(5.0)		胴部内外面篦削り。口縁部内外面横撫で。	①３㎜程の小石含む ②にぶい橙(5YR6/4)	口縁部～胴部1/4
61	土師器 甕	C区1溝	①(13.1) ③(4.8)		外面口縁部横方向の刷毛後胴部にかけて縦方向の刷毛。胴部内面横方向の指撫で。	①白色鉱物を含む ②明黄褐(10YR7/4)	口縁部～胴部1/3
62	土師器 甕	C区1溝・ 大沼下西溝 （２溝） №16・18・ 19	① 11.4 ③(4.6)		外面頸部～口縁部にかけて縦方向の本口状工具による撫で。胴部外面頸部縦方向の本口状工具による撫で。胴部内面指押さえ後本口状工具による撫で。口縁部内面本口状工具による撫で後横撫で。	①細かい砂粒に２㎜ほどの石英・黒色粒・白色粒を含む ②橙(5YR6/6)	大沼下２号溝№６と同一 頸部下欠損
63	土師器 甕	C区1溝 №25	① 13.5 ③(7.2)		口縁内外面横撫で。胴部外面頸部から斜め刷毛。内面篦撫で。	①砂粒を含む ②明褐(7.5YR5/6)	口縁部～胴部
64	土師器 甕	B区1溝 №11	①(12.0) ③(3.8)		外面口縁部指頭押さえで部形成形後横撫で。頸部本口状工具で縦方向の撫で、胴部頸部から斜め方向の本口状工具の撫で。内面口縁部指頭押さえ後横撫で、本口状工具の横方向撫で。	①３㎜程の小石と細かい砂粒含む ②にぶい赤褐(5YR5/4)	口縁部1/3～頸部

表48　1号溝出土遺物観察表(4)

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
65	土師器 甕	C区1溝	①(9.0) ②(4.0)	口縁部内面横撫で。胴部外面斜位刷り。内面頸部下指頭押さえ。	①5㎜程の小石を含む ②浅黄橙(10YR8/3)	口縁部～胴部1/4
66	土師器 甕	C区1溝	①(10.2)	外面縦方向の刷毛。内面横方向の撫でで後縦方向の撫でで。	①2㎜ほどの砂粒含む ②暗褐(7.5YR3/3)	胴部のみ
67	土師器 甕	C区1溝	①(9.4) ③(5.6)	口縁部内外面横撫で。外面頸部指押さえ。内面撫撫で。	①3㎜程の小石含む ②明赤褐(5YR5/6)	口縁部～胴部1/4
68	土師器 甕	C区1溝・ 斜面洪水層	①(11.6) ③(5.1)	口縁部中程で稜を持つ。外面刷毛。筒磨き。口唇部横撫で。	①小石を含む ②にぶい黄橙(10YR5/4)	口縁部～胴部1/4
69	土師器 壺	C区1溝・ 3面・2面 斜面部	最大径 29.5	外面磨毛後下半は撫撫で、上半は縦方向の筒磨き。内面下半は横方向の磨毛。上半は縦方向の筒磨き後胴最大径付近と頸部を指撫で。	①白色鉱物・砂粒を含む ②浅黄(2.5Y7/4)	胴部のみ C区1溝No1・4・5・6
70	土師器 甕	B区1溝 No18	② 5.8 ③(3.0)	外面胴部縦方向主体の撫撫で。内面撫撫で。	①3㎜程の小石・砂粒含む②明赤褐(5YR5/8)	底部～胴部
71	土師器 甕	C区1溝	②(6.2) ③(3.0)	外面底部から縦方向の刷毛。内面横方向の刷毛。	①3㎜程の小石含む ②明赤褐(5YR5/6)	底部～胴部1/2
72	土師器 甕	B区1溝 No35	② 6.6 ③(3.4)	内外面ともに摩滅が激しく整形不明。内面指撫での可能性。	①2㎜程の砂粒含む ②にぶい黄橙(10YR7/2)	底部～胴部
73	土師器 甕	C区1溝	② 3.6 ③(3.3)	外面横方向の指撫で。内面撫撫で。	①3㎜程の小石・砂粒を含む②橙(7.5YR7/6)	底部～胴部
74	土師器 甕	C区1溝・ B区1溝 No10	② 7.2 ③(4.8)	胴部外面底部付近木口状工具による押さえ。その直上は横方向の筒磨り。木口状工具による縦方向の撫で。内面底部付近は横方向の筒磨き。その上は筒撫で。	①2㎜程の白色鉱物を含む ②浅黄(2.5Y7/3)	底部～胴部
75	土師器 壺	C区1溝・ 水道洪水層 斜面部	② 6.0 ③(17.1)	胴部外面上半は縦方向・下半は横方向筒磨り。内面底部付近放射状に刷毛。	①3㎜程の小石を含む ②明赤褐(7.5YR5/6)	口縁部欠損 胴部ほぼ完形
76	土師器 壺	C区1溝	② 6.8 ③(7.7)	内外面指頭押さえによる器面調整。底面に木葉痕。	①白色鉱物を含む ②橙(2.5YR6/6)	底部～胴部
77	土師器 壺	C区1溝	② 8.0 ③(4.4)	胴部外面縦方向の筒削り後、横方向に指撫で。胴部内面指撫で。	①2㎜程の砂粒を含む ②浅黄(2.5Y7/3)	底部～胴部
78	土師器 壺	C区1溝	② 7.0 ③(7.0)	胴部外面横方向の筒削り。胴部内面横方向の撫撫で。	①白色鉱物を含む ②にぶい褐(7.5YR6/3)	底部～胴部
79	土師器 壺	C区1溝 No18	②(8.4) ③(3.4)	外面底部指頭押さえ、撫撫で。内面撫撫で。 底面に木葉痕。	①白色鉱物・砂粒含む ②にぶい橙(5YR7/4)	底部～胴部1/2
80	土師器 壺	C区1溝 No15	② 4.2 ③(4.2)	内外面撫撫で。	①砂粒を含む ②にぶい黄橙(10YR7/4)	底部～胴部
81	土師器 甕	C区1溝	② 2.5 ③(3.9)	外面横方向の撫撫で。内面指頭押さえと横方向の指撫で。	①砂粒を含む ②にぶい黄橙(10YR7/2)	底部～胴部
82	土師器 甕	C区1溝・ 3面	① 13.4 ② 6.2 ③ 17.6	口縁部内外面横撫で。胴部外面筒削り。胴部内面筒撫撫で。	①細かい砂粒と小石含む ②明赤褐(5YR5/6)	胴部一部欠損 ほぼ完形
83	土師器 壺	C区1溝・ 11溝	①(17.2) ③(22.7)	口縁内外面横撫で。胴部外面筒削り。内面撫撫で。	①2㎜程の砂粒含む ②明黄褐(10YR7/6)	口縁部～胴部1/3 B区1溝No72
84	土師器 壺	C区1溝	①(11.4) ②(8.5)	口唇部内外面横撫で。口縁～胴部外面縦方向の筒削り。口縁内面指撫で。胴部内面指頭押さえ後木口状工具による縦方向の撫で。	①5㎜程の小石を含む ②にぶい褐(7.5YR5/4)	口縁部～胴部1/3
85	土師器 壺	C区1溝	② 5.4 ③(2.3)	外面底部から縦方向の磨毛後指撫で。内面横方向の磨毛。	①白色鉱物を含む ②にぶい黄橙(10YR6/4)	底部～胴部
86	土師器 壺	B区1溝 No1・116	② 6.6 ③(4.0)	外面胴下端部指頭押さえ。内面横方向の刷毛。	①2㎜程の砂粒を含む ②浅黄橙(10YR8/3)	底部～胴部
87	土師器 甕	C区1溝	② 5.6 ③(3.5)	外面縦方向の筒削り。内面横方向の指撫で。	①5㎜程の小石含む ②にぶい黄橙(10YR7/3)	底部～胴部
88	土師器 甕	C区1溝	② 5.4 ③(2.5)	外面縦方向の筒撫で。内面横方向の刷毛。	①砂粒を含む ②橙(7.5YR7/6)	底部
89	土師器 壺	C区1溝 No34	②(4.6) ③(3.4)	外面横方向の筒撫で、底部は指頭押さえ、筒磨き。内面放射状に筒磨き。	①わずかに砂粒含む ②にぶい黄橙(10YR7/4)	底部～胴部1/4
90	土師器 甕	C区1溝	①(16.2) ③(3.4)	受口状の口縁で、外面に櫛状工具で波状文を施す。	①砂粒を含む ②にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部1/6

表49　1号溝出土遺物観察表(5)

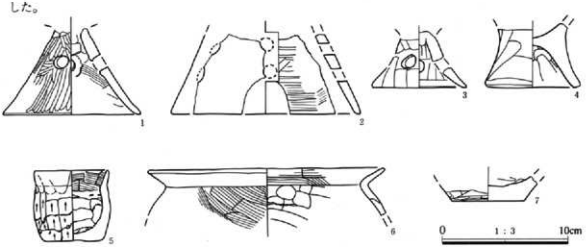
No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量 目 (cm)	成・整形技法の特徴	①粘土 ②色調	時期・残存状況
91	土師器 甕	C区1溝	③(3.4)	受口状の口縁で、外面に6＋α条の櫛状工具による波状文を施す。内面横撫で。	①砂粒を含む ②にぶい褐(7.5YR5/4)	口縁部
92	土師器 壺	C区1溝	①(14.6) ③(2.1)	折り返し口縁。口縁外面中程に稜。稜の下段は横方向の荒磨き。	①密度は細かい ②にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部
93	土師器 壺	C区1溝	③(1.6)	折り返し口縁で、口唇部上端に刻み目。折返部下端に2列の掻き目。	①3㎜程の砂粒含む ②にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部
94	土師器 壺	C区1溝	①(17.4) ③(3.6)	折り返し口縁。内外面の摩滅が激しい。	①多量に砂粒含む ③橙(5YR6/6)	口縁部破片
95	土師器 壺	C区1溝	③17.6 ③(5.7)	折り返し口縁、口唇部に1条の沈線、内面横撫で、外面縦方向鮑刷り。	①5㎜程の小石含む ③橙(7.5YR7/6)	口縁部～頸部
96	土師器 壺	C区1溝	①(18.4) ③(3.6)	折り返し口縁。折り返し部無で後指頭押さえ。刷毛後指頭押さえ。	①密度は細かい ②褐灰(10YR4/1)	口縁部破片
97	土師器 壺	C区1溝	①(12.8) ③(5.0)	成形後口唇部～頸部に断面三角形の粘土紐を貼付。	①密度は細かい ②淡黄(5YR/3)	口縁部1/6
98	土師器 甕	C区1溝	②4.5 ③(3.3)	底部中央に孔。内面指撫で。外面鮑削り。	①2㎜程の砂粒含む ②明赤褐(5YR5/8)	底部
99	土師器 壺	C区1溝	③(3.3)	内面頸部下に指頭押さえ。	①砂粒を含む ②橙(7.5YR7/6)	頸部破片
100	土師器 甕	B区1溝 No71	外面櫛状工具で波状文、下半は鮑撫でか。内面頸部は横方向の指撫で、胴部は横方向の鮑撫で。		①密度細かく、細かい砂粒をやや多く含む ③橙(7.5YR6/6)	頸部～胴部破片 樣式
101	土師器 甕	C区1溝 No28	外面櫛状工具で波状文を施す。		①細かい砂粒含む ③黒褐(10YR3/1)	胴部破片 樣式
102	土師器 甕	B区1溝 No57	外面上部櫛状工具で波状文、下部は横方向の鮑撫で。内面横方向の鮑撫で。		①密度細かく、砂粒含む ②橙(7.5YR7/6)	胴部破片 樣式
103	土師器 甕	C区1溝	③(4.4)	折り返し口縁。外面5＋α条の櫛状工具の波状文。	①砂粒を含む ②浅黄橙(10YR8/3)	口縁部破片 樣式
104	土師器 甕	C区1溝	外面櫛状工具で横方向の鮑磨き、上半部に櫛状工具による波状文を施す。内面は鮑撫で。		①密度は細かい ②にぶい黄橙(10YR6/4)	胴部最大径の部分 樣式
105	土師器 甕	C区1溝	外面横方向の鮑撫で後櫛状工具による波状文を施す。内面横方向の鮑撫で。		①2㎜程の砂粒含む ②にぶい橙(7.5YR5/4)	胴部破片 樣式
106	土師器 甕	C区1溝	外面縦方向の掻き目後斜め方向の掻き目後横方向の掻き目で格子目文様を施す。		①細かい砂粒を含む ②淡赤橙(2.5YR7/4)	胴部破片 赤彩
107	土師器 甕	C区1溝	③(3.8)	折り返し口縁で外面に櫛状工具による波状文を施す。内面は横撫で。	①細かい砂粒含む ③橙(7.5YR6/8)	口縁部破片 樣式
108	土師器 甕	C区1溝	外面横方向の鮑撫で後櫛状工具による波状文を施す。		①細かい砂粒を含む ③褐(7.5YR4/2)	胴部破片 樣式
109	弥生 甕	C区1溝	付加条縄文を胴部外面に施す。底部外面は摩滅しが不明。		①密度細かく、微細白色鉱物含む ③灰褐(7.5YR4/2)	底部破片 十王台式
110	弥生 甕	C区1溝	②(8.0) ③(3.0)	付加条縄文を胴部外面に施文する。	②にぶい黄橙(10Y5/4)	底部破片 十王台式
111	金属器 鉄鏃	B区1溝	④4.9 ⑤2.1 ⑥0.5 ⑦7g	平根。有柄、腹抉（わたくり）を有す。鏃尻の丸味をおびるのは旧態、鏃先端の丸味は旧態であるものの、酸化消耗の可能性がある。鏃はなく、肉質きはある。		4・5世紀
112	石器 敲石（磨石）	C区1溝	④(4.2)⑤7.8 ⑥7.8 ⑦348g	表裏中央部やや窪む。全体に使用のための摩滅がみられる。上端部に敲打痕がみられる。		上半部1/2 粗粒輝石安山岩
113	石器 石鏃	C区1溝	④3.4 ⑤1.8 ⑥0.3 ⑦1.14g	凹基無茎鏃。鏃縁の形状は直線的である。抉りは深い。調整加工は、器体全面に施す。		左逆し欠損 黒色安山岩
114	石器 石鏃	C区1溝	④2.6 ⑤1.9 ⑥0.5 ⑦2.01g	凹基無茎鏃。鏃縁の形状はやや膨らむ。抉りは浅い。調整加工は、器体全面で微細で丁寧である。		ほぼ完形 チャート
115	石器 石鏃	C区1溝	④3.2 ⑤1.3 ⑥0.4 ⑦1.21g	凹基無茎鏃。長さと幅の比が1：3弱で細長い形状で、鏃縁は直線的である。抉りは深く、逆しは棒状である。調整加工は、器体全面に施す。		ほぼ完形 黒色安山岩

11号溝（第88・89・98図、ＰＬ28・58）

遺構　Ｃ区ローム台地上で130-375Gで１号溝から分岐し、110-365Gで低地に達する。北西から南東（Ｎ－34°－Ｗ）の走向である。確認された全長は19.4ｍで、上幅70～280㎝、底幅10～80㎝、深さ19～44㎝である。底面は１号溝の分岐点から低地部に傾斜している。底面・壁は１号溝同様に凹凸やえぐれが激しい。埋没土も１号溝同様に丸礫や川砂（基本土層Ⅵ層）で短時間に埋没している。低地の洪水層は１号溝と11号溝を通して流れ込んだものと考えられる。

遺物　１～３は土師器高坏の脚部である。１・３は円形の透孔が１段付けられている。２は透孔が２段付けられている。４は土師器台付甕の脚部である。形状等から単口縁の台付甕と思われる。５は土師器小型甕で、胴部がやや張り、口縁部が外傾する。胴部外面に篦削りがみられる。６・７は土師器甕である。６は甕の口縁部から頸部で、外面頸部と内面口縁部に木口状工具による刷毛目状の痕跡がみられる。７は甕の底部破片である。

図示した遺物以外に土師器甕129点、土師器坏７点、須恵器坏１点、須恵器甕１点、縄文土器１点が出土した。



第98図　11号溝出土遺物

表50　11号溝出土遺物観察表

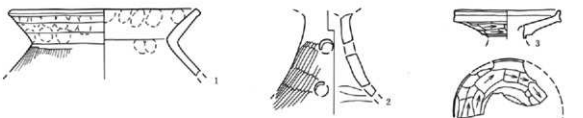
No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 高坏	Ｃ区11溝 覆土	②(10.8) ③(6.7)	透孔は１個が完全に、２個は痕跡。 外面篦磨き。内面篦撫で。	①密度が細かい ②橙(7.5YR6/6)	脚部1/3
2	土師器 高坏	Ｃ区11溝 覆土	②(15.0) ③(6.3)	透孔は縦方向１列に２個で４列８個の可能性。内面横方向の刷毛。	①３㎜程の砂粒含む ②灰黄(2.5Y7/2)	脚部
3	土師器 高坏	Ｃ区11溝 覆土	② 7.5 ③(4.4)	４個透孔。外面下端は篦削り。内面下端横撫で。	①白色鉱物含む ②灰白(2.5Y8/2)	脚部
4	土師器 台付甕	Ｃ区11溝	② 7.6 ③(5.0)	外面斜め方向の指撫で、下端は横撫で。 内面絞り目、指撫で。	①２㎜程の砂粒含む ②にぶい黄橙(10YR7/4)	脚部
5	土師器 小型甕	Ｃ区11溝 覆土	① 5.8 ② 4.7 ③ 5.5	口縁内外面指押さえ、内面横刷毛。胴部内面横方向の指撫で。胴部外面刷毛後指撫で。	①砂粒を含む ②明赤褐(5YR5/6)	口縁部～胴部一部欠損
6	土師器 甕	Ｃ区11溝 覆土	①(18.8) ②(5.0)	口縁外面横撫で、胴部外面頸部から斜め刷毛。内面口縁刷毛後撫で。	①白色鉱物含む ②にぶい橙(7.5YR6/4)	口縁部～胴部1/6 胴部内面指撫で
7	土師器 甕	Ｃ区11溝 覆土	② 5.6 ③(1.9)	内外面に僅かに刷毛が確認できる。	①砂粒を含む ②橙(5YR6/6)	底部

4号溝（第99・100図、ＰＬ24・52）

遺構　Ｃ区ローム台地の東側で、170-365G～135-365Gにかけて確認された。走向はほぼ南北（Ｎ－４°－Ｗ）である。確認された全長は38.2ｍで、上幅30～120㎝、底幅10～70㎝、深さ５～30㎝で、底面は北から南に傾斜する。溝の北端と南端は不明瞭で確認できなかったが、北・南にさらに続くものと考えられる。140-365Gで15号土坑と重複する。４号溝は15号土坑より新しい。

遺物　１は土師器甕の口縁部から頸部直下の胴部で、頸部の屈曲は強く、口縁部は外傾する。胴部外面は木口状工具による縦方向の撫でが施される。３は土師器器台の器受け部である。大沼下遺跡７号住居出土遺物No10と接合した。２は土師器高坏の脚部である。外面に縦方向の篦磨きが施される。４～11は弥生時代末から古墳時代初頭の土器である。４は口縁部破片で、折り返し口縁である。折り返し部外面に櫛状工具による波状文が施される。５・６は頸部または頸部近くの破片で、櫛状工具による廉状文を施し、その下部に櫛状工具による波状文が施される。７～11は頸部から胴部上半の破片で櫛状工具による波状文が施される。

図示した遺物の他に土師器甕86点、土師器坏２点、土師器高坏７点、須恵器甕１点、須恵器坏１点、縄文土器４点が出土している。土師器坏の２点の内１点は大沼下遺跡の遺構外出土遺物No１に接合した。



第99図　４号溝出土遺物

表51　４号溝出土遺物観察表(1)

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量 目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 甕	Ｃ区４溝	①(15.2) ③(５.3)	口縁部内外面指頭押さえ後横撫で。胴部外面木口状工具で縦方向の整形。内面頸部指頭押さえ、横方向の指撫で。	①砂粒を含む ②にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部～胴部
2	土師器 高坏	Ｃ区重機Ｃ混土・No103・Ｃ区４溝	③(７.7)	透孔の痕跡２段２個あり。外面縦方向の篦磨き。内面下半横方向の指撫で。	①赤色粒・微細白色鉱物を含む ②にぶい橙(7.5YR7/4)	脚部で下端部欠損
3	土師器 器台	Ｃ区４溝 No３ 大沼下７住覆土	①(８.2) ③(２.2)	外面体部横方向の施削り。内面撫で。口唇部下外面面で面取りを施す。	③灰黄(2.5Y7/2)	器台の器受け部 大沼下７住No10に同じ

表52　４号溝出土遺物観察表(2)

No	種　類 器　種	出土遺構 出土層位	量　目 (cm)	成・整形技法の特徴	①粘土 ②色調	時期・残存状況
4	土師器 小壺	Ｃ区４溝		折り返し口縁で外面折り返し部に櫛状工具による波状文を施す。内面は横撫で。	①細かい砂粒含む ②にぶい黄褐(10YR7/3)	口縁部破片 樽式
5	土師器 壺	Ｃ区４溝		外面櫛状工具による波状文が施される。	①密度は細かい ②にぶい黄橙(10YR6/4)	胴部破片 樽式
6	土師器 壺	Ｃ区４溝		外面に簾状文と波状文を施す。簾状文は２回横位に施す。内面撫撫で か。	①細かい砂粒含む ②にぶい黄橙(10YR7/3)	頸部破片 樽式
7	土師器 壺	Ｃ区重機４溝		外面上端に簾状文の一部が見られ、他は櫛状工具による波状文が施される。内面赤彩。	①細かい砂粒含む ②淡黄(2.5Y8/3)	頸部破片 樽式
8	土師器 壺	Ｃ区重機４溝		外面櫛状工具による波状文が施される。	①密度は細かい ②浅黄(2.5Y7/3)	胴部破片 樽式
9	土師器 壺	Ｃ区４溝		外面櫛状工具による簾状文と波状文が施される。	①細かい砂粒含む ②浅黄(2.5Y7/3)	頸部破片 樽式
10	土師器 壺	Ｃ区重機４溝		外面に櫛状工具による波状文を施す。内面見撫でか。	①細かい砂粒含む ②にぶい黄橙(10YR7/3)	頸部破片 樽式
11	土師器 壺	Ｃ区４溝		外面櫛状工具による波状文が施される。	①密度は細かい ②にぶい黄橙(10YR7/3)	胴部破片 樽式

５号溝（第100図、ＰＬ25）

遺構　Ｃ区ローム台地の東側で、４号溝の西側、155-365G～145-365Gにかけて南北（Ｎ－９°－Ｅ）の走向で確認された。確認された全長は9.8ｍで、上幅35～60cm、底幅10～35cm、深さ２～11cmで、底面は北から南に傾斜する。南側はさらに続くものと思われる。

遺物　図示し得なかったが縄文土器破片５点が出土している。縄文土器は胎土に繊維を含む。縄文時代前期関山式と思われる。

８号溝（第101図、ＰＬ31・32）

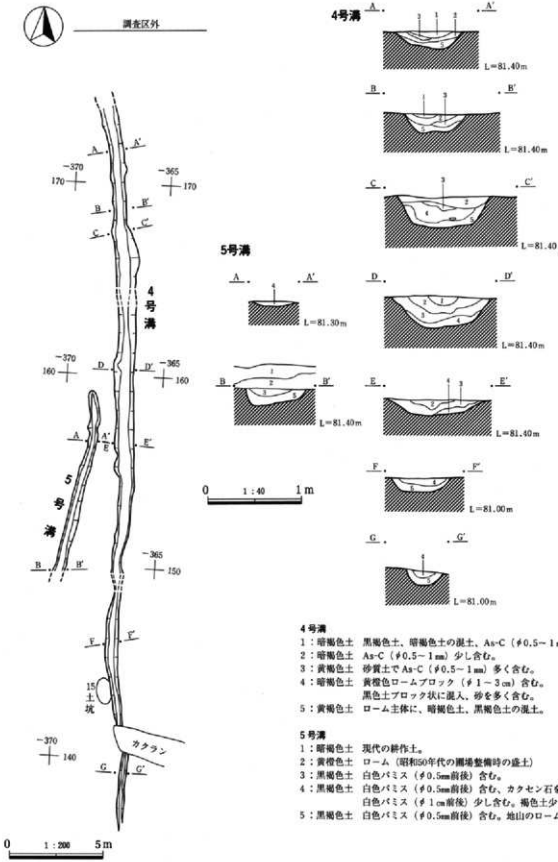
遺構　Ｄ２区ローム台地と低地の境界付近、180-260G～140-255Gにかけて確認された。等高線に沿うように東に張り出し弧状を呈する。北側で溝の両脇に畦畔を伴う。中央から南で、畦畔は確認できなかった。しかし、土層断面では畦畔が作られていることが確認できた。平面図で表せなかったが中央から南で２カ所水口状の施設が確認された。北と南は調査区外に続く。確認された全長は43.2ｍで、上幅40～145cm、底幅15～65cm、深さ25～32cmである。底面は北から南に傾斜している。埋没土は底面近くにAs-Ｃを多量に含んだ砂質土で、中層から上層にかけて、水田面上部の耕作土と同様の土であった。Ｄ１区で確認された７号溝と同一の溝の可能性がある。東にある18号溝と関連して、台地と低地（水田）を区画し、水田に送水する施設と考えられる。同様な施設に９・16号溝があり、９・16号溝が低地の西側で、８（７）・18（30）号溝が低地の東側にあたると考える。

遺物　土師器甕と思われる破片が出土していたが整理作業中に他の遺構出土遺物に紛れ混んでしまった。

７号溝（第101図、ＰＬ31・32）

遺構　Ｄ１区低地の東側、200-260G～195-260Gにかけて南北の走向（Ｎ－８°－Ｅ）で、西に張り出した緩い弧状で確認された。南側は調査区外に続く。確認された全長は4.5ｍで、上幅40～95cm、底幅20～70cm、深さ15～21cmである。北端で30号溝と接する。Ｄ２区で確認された８号溝と同一の可能性が考えられる。30号溝と同一の時期と考える。

遺物　出土遺物はなかった。



4号溝

1：暗褐色土　黒褐色土、暗褐色土の混土、As-C（φ0.5～1mm）多く含む。
2：暗褐色土　As-C（φ0.5～1mm）少し含む。
3：黄褐色土　砂質土でAs-C（φ0.5～1mm）多く含む。
4：暗褐色土　黄橙色ロームブロック（φ1～3cm）含む。
　　黒色土ブロック状に混入，砂を多く含む。
5：黄褐色土　ローム主体に、暗褐色土、黒褐色土の混土。

5号溝

1：暗褐色土　現代の耕作土。
2：黄橙色土　ローム（昭和50年代の圃場整備時の盛土）
3：黒褐色土　白色パミス（φ0.5mm前後）含む。
4：黒褐色土　白色パミス（φ0.5mm前後）含む、カクセン石を含む。
　　白色パミス（φ1cm前後）少し含む。褐色土少し混ざる。
5：黒褐色土　白色パミス（φ0.5mm前後）含む。地山のロームを多く混入。

第100図　4号・5号溝

18号溝（第101図、ＰＬ32）

遺構　Ｄ２区ローム台地と低地の境界付近、８号溝の東側で、180-255G～175-255Gにかけて確認された。北側は調査区外に続く。南側は不明瞭で確認できなかったが、８号溝に併行して調査区外まで続くものと考えられる。両端に畦畔は確認できなかった。確認された全長は9.1ｍで、上幅35～55㎝、底幅15～30㎝、深さ６～19㎝である。底面は、北から南に傾斜している。Ｄ１区で確認された30号溝と同一の溝の可能性が考えられる。８号溝と関連して、台地と低地（水田）を区画し、水田に送水する施設と考える。

遺物　図示し得なかったが土師器甕の破片が出土している。

30号溝（第101図、ＰＬ32）

遺構　Ｄ１区低地の東側、200-260G～195-260Gにかけて南北の走向（Ｎ－16°－Ｗ）で確認された。直線的で、北端で７号溝と接する。南側は調査区外に続く。確認された全長は4.7ｍで、上幅25～45㎝、底幅５～30㎝、深さ10㎝前後で、底面は北から南に傾斜している。Ｄ２区で確認された18号溝と同一の可能性が考えられる。18号溝と同一の時期と考える。

遺物　出土遺物はなかった。

10号溝

遺構　Ｄ１区の西端の低地の調査区北壁で、土層断面のみの確認になってしまった。確認した土層断面で、上幅45㎝、底幅40㎝、深さ12㎝ほどであった。埋没土は不明である。

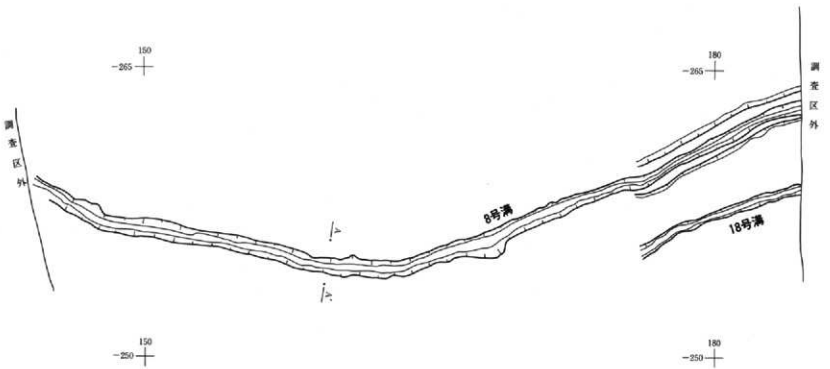
遺物　出土遺物はなかった。

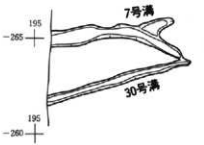
９号溝（第102～108図、ＰＬ32～34・58～62）

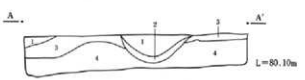
遺構　Ｃ区ローム台地と低地の境界付近、175-360G～115-360Gにかけて、等高線に沿うように確認された。南北の走向（Ｎ－６°－Ｅ）で、両側に畦畔を伴う。175-360G付近で、16号溝より分岐し、16号溝と併行する。西側の畦畔は16号溝の東側の畦畔と共用する。確認された全長は59.7ｍで、上幅100～180㎝、底幅15～85㎝、深さ25～30㎝である。底面は北から南に傾斜している。東側の畦畔は165-355G付近と130-355G付近で水口状に区切れている。埋没土は水田の耕作土に類似するＡs-Ｃを含む黒色土で大半が埋没している。大半が埋没し浅い溝となった所で、１号溝の埋没土と同じ洪水層（基本土層Ⅵ層）で完全に埋没したと考える。16号溝と関連して、台地と低地（水田）を区画し、水田に送水する施設と考えられる。１号溝・11号溝・９号溝と同一時期と考えられる。

遺物　発掘調査時において９号溝と16号溝の明確な区別がつかなかったため、９号溝と16号溝と分けられない遺物がある。明確に分けられない遺物は、９・16号溝出土遺物として扱い、報告は９・16号溝出土遺物として報告する。また、９号溝と16号溝の間の畦（盛土）から出土した遺物も９・16号溝出土遺物として報告する。

１～３・12は弥生時代末から古墳時代初頭の赤井戸式の壺である。１は口縁部と胴下半部を欠損する。頸部外面と胴部外面に篦磨き、頸部内面と胴部内面は篦撫でが施される。外面胴上部は３段にＬＲ縄文が横位に施文されている。２は頸部から口縁部で胴部は欠損する。折り返し口縁で、折り返し部にＬＲ縄文が施される。頸部内外面に篦撫でが施される。３は口縁部破片で、折り返し口縁である。折り返し部にＲＬ縄文が施されている。12は胴下半から底部で外面篦磨き、内面木口状工具による撫で刷毛状の痕跡が残る。４は台







8号溝

1．黒色土　粘性強い。植物遺体が多く混じっている。
　　水田面上層の土と同じ。
2．褐色土　砂質土。As-Cを非常に多く含む。
3．黒色土　粘性あり。As-C混土。畦畔の盛土
4．黒色土　粘土。(地山で水田基底面)

0　1：40　1m

0　1：200　5m

第101図　7号・8号・18号・30号溝

付甕の底部から台部で、胴部から口縁部を欠損する。口縁部は単口縁と思われる。内外面とも木口状工具による撫でが施される。

5は土師器小型甕で口縁部を欠損する。胴部中央が張り、球形である。口縁部はほぼ垂直かやや開き気味で立ち上がると思われる。胴部外面は篦削りが施される。7は底部から口縁部の一部分を欠損するが、ほぼ完形である。胴部が張り球胴である。胴部外面に篦磨きが施される。

6・8は土師器高坏の脚部である。6は裾部が水平近くに大きく広がる。外面篦磨きが施される。8は内外面に丁寧な篦磨きが施され、やや小型である。

9・10は弥生時代末から古墳時代初頭の橅式の壺の胴上部破片である。櫛状工具により波状文が施される。11は弥生時代後期東関東を主体とする十王台式の壺の破片である。外面に粘土紐の貼付が3条みられる。13・14は弥生時代後期東関東の土器の可能性が考えられる。壺の胴下半部の破片で、2本の撚糸の絡条体で施文している。13・14は接合しないが同一個体と思われる。

15は石鏃で左下端部をわずかに欠損するが、ほぼ完形である。石材はチャートである。

16～41は木器・木製品である。16は下端部が表面から裏面に斜めに削られ、先端が尖り、楔状になる。楔の可能性が考えられる。17は柾目板で、厚さは4㎜の薄板状である。18は上下とも端部不明で、上部が細くなることから杭の可能性が考えられる。19は割材で右側面が平坦に調整されている。20は両端部欠損で全体は不明であるが、板材または角材の可能性が考えられる。21・22は棒または農具の柄の可能性が考えられる。21は両端部を欠損で全体は不明であるが、分割材を使用し、側縁を丸く削って棒状にしている。22は上部は端部で下端部は欠損する。1/4分割材を使用し、側縁を丸く削って棒状にしている。27は尖棒で、上端部欠損で下端部は尖る。分割材を使用し、側縁を丸く削って棒状にしている。28は分割材を使用し、側面の角が面取りされている。下端部を欠損しているが農具の柄の可能性が高い。23は三又鍬の身部分で、基部と両端の刃先部分を欠損する。両端の刃に比べ、中央の刃の幅が狭い。24～26は板材である。24・25は部分的に炭化し、焼失している部分がある。26は表裏面とも平坦に調整されている。29～32は杭である。31は板状の割材を使用し、下端部を片側から削って尖らせている。32は分割材を角材状にし、下端部を片側から削り尖らせている。30は割材を使用し、下端部を片側から削り尖らせている。29は分割材を角材状にし、下端部を片側から削り尖らせる。33・35・38・40は割材を使用し、板状にし、幅が10㎝以下である。33は上端部を焼失する。35は上端部が突起状に削り出されている。38は両端部欠損である。40は上端部欠損である。34・36・37・39・41は角材である。37は両端部欠損で、角は面取りが施される。39は両端部欠損である。角材の対角線部分が裏面で、この部分で割れ剥がれたと思われる。41は上端部欠損で、表裏に加工の痕跡がみられる。34は上端部に上から力が加わったように繊維や木目が歪んでいる。杭の可能性が考えられる。36は両端部を焼失している。両端部から表面にかけて炭化している。

16号溝（第102・109～111図、PL34・35・36・62～64）

遺構　C区ローム台地と低地の境界付近、175-360G～115-360Gにかけて、等高線に沿うように確認された。9号溝の西側に併行する。16号溝の東側に9号溝と共用する畦畔がある。北側・南側ともに調査区外に続く。確認された全長は64.6mで、上幅75～180㎝、底幅5～55㎝、深さ4～16㎝である。底面は北から南に傾斜している。埋没土は9号溝と同様に、水田耕作土に類似したAs-Cを含む黒色土で大半が埋没している。大半が埋没し、浅い溝となったところで、1号溝同様の洪水層（基本土層Ⅵ層）で完全に埋没したと考える。9号溝と関連して、台地と低地（水田）を区画し、水田に送水する施設と考えられる。1号溝・11号溝・9

号溝と同一時期と考えられる。

遺物　42は石鏃で完形である。石材はチャートである。43は土師器壺の胴部下半から底部である。外面は丁寧な篦磨き、内面は木口状工具による撫で刷毛状の痕跡が残る。44は土師器壺の口縁部で頸部以下を欠損する。折り返し口縁で赤色塗彩されている。折り返し部に櫛状工具による縦方向の刷毛後に波状文、粘土紐の貼付が施される。口縁部内面に櫛状工具による刷毛が施される。

45～57は木製品・木材である。45は筒状の側板部分と思われる。両側縁は欠損である。上下の両端部の外面に端部から１㎝ほど黒漆のような黒色が彩色され、その中間部に赤色が彩色されていた。赤色は漆ではないと思われる。外面は縦方向の削り、内面は斜め方向の削りで、内外面とも丁寧な仕上げである。一応筒状木製品としたが、容器の可能性が考えられる。類例が全国で11例ほどある。46は又鍬あるいは又鋤の刃先部分である。右側縁が中央部に曲がっていることから右側の刃先と思われる。47は角材で両端部を欠損する。部分的に角は面取りが施される。48は棒状で、下端部と中央部分を欠損する。断面形は、上部が楕円形で下部が不整形な六角形である。49は板材で、下端部と左側面を欠損する。上端部中央に突起が削り出されている。上部と中央部に楕円形、方形の孔があけられている。50は叩き板で、土器製作時に使用するものである。１枚板から削り出して、羽子板状の形にしている。柄部は径15㎜、長さ158㎜ほどの棒状である。敲打部表面に木目にそって８条の溝が彫られている。さらに柄部に近い所で、木目に直交する１条の溝が彫られている。敲打部中央やや先端部付近に摩滅がみられる。51は用途不明である。上端部やや下部に削りが施され、上端部が弧状になっている。下端部は左から右に曲がり尖る。裏面は平坦である。52・53は角材状である。52は両端部が残存し、左側面に２カ所抉りがみられる。用途不明である。53は下端部は表裏が削られ先が尖る。用途は明確に判らないが掘棒の可能性が考えられる。54は板材で上端部を欠損する。下端部は左側の角が削られ、弧状になっている。中央やや上部、右側面が「コ」の字状に彫り込まれている。掘立柱建物の扉返しの可能性が考えられる。55・57は枕である。57は上端部欠損で、割材を使用し下端部の両側縁を削り尖らせる。55は角材を使用し、下端部の両側縁を削り尖らせ、枕にしている。56は板材で、下端部と右側面を欠損する。木口の角は丁寧に面取りが施される。

９・16号溝出土遺物（第112・113図、ＰＬ32・33・35・64・65）

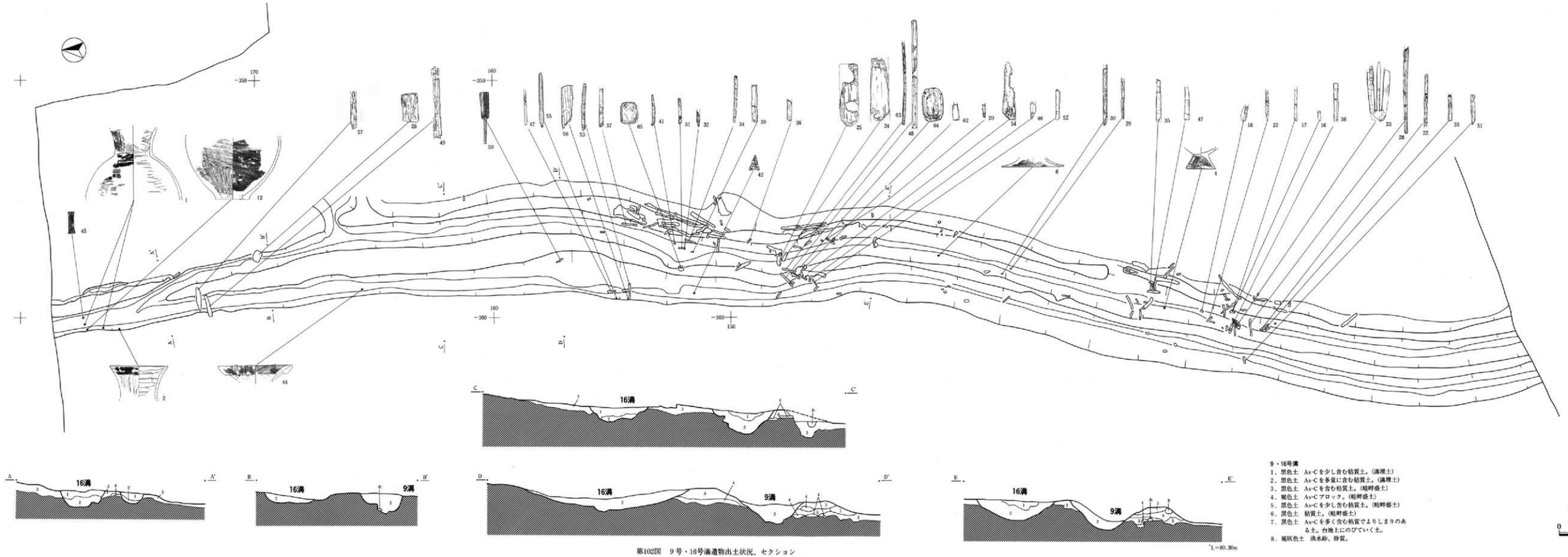
９号溝と16号溝の遺構調査当初、９号溝と16号溝が明確に分けられなかった。そのため９号溝出土遺物と16号溝出土遺物が混じってしまった。その混じってしまった遺物と９号溝と16号溝の間の畦（盛土）から出土した遺物をここで報告する。

58・59は弥生時代末から古墳時代初頭の土器である。58は赤井戸式の壺の胴部のみで、外面胴上部にわずかにＬＲ縄文が、その下位は篦磨きが施される。内面は上部が篦撫で、下部が木口状工具による撫で刷毛状の痕跡が残る。59は椀式土器の壺の口縁部破片で折り返し口縁である。折り返し部に波状文が施される。

60は注口土器の注口部で、接合部分から剥落している。縄文時代後期と思われる。

61～65は木材・木製品である。61は板材で、両端部を欠損する。幅が40㎜と狭い。62は角材で上端部を欠損する。上部は左側面が彫り込まれている。この彫り込まれている所で欠損している。63は角材で上端部を欠損する。建築部材の可能性がある。64は容器で皿と考える。ほぼ完形である。１枚板を彫り込んで皿としている。裏面は長軸方向に２列の脚が作られている。脚は平面形が長方形で、断面形は三角形または台形状に彫り残して脚部にしている。65は台または椅子と思われ、一枚板を使って作っている。ほぼ完形である。表面は縁より中央部がやや窪む。裏面は木口から３～６㎝彫り残して脚部を作っている。

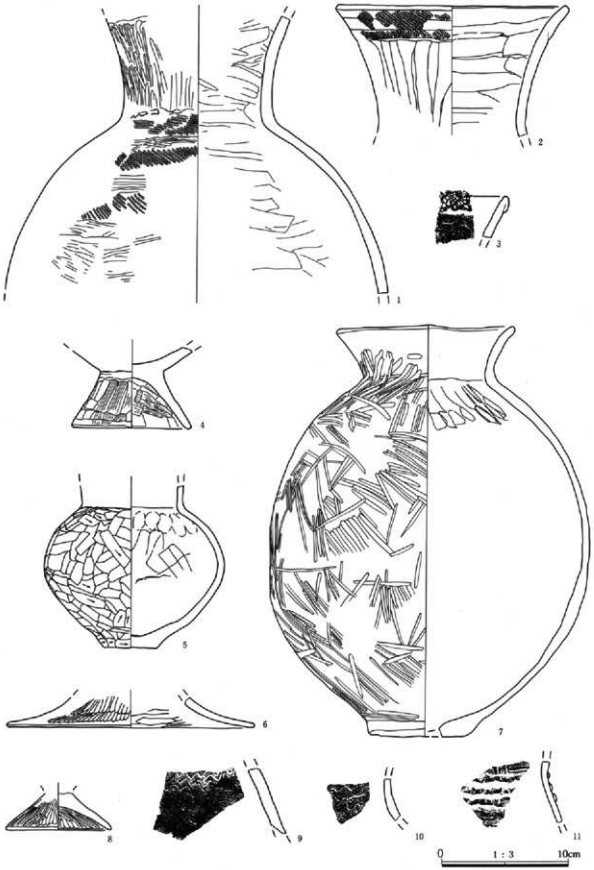
図示した遺物の他に土師器甕192点、土師器坏13点、縄文土器１点、須恵器甕３点が出土している。



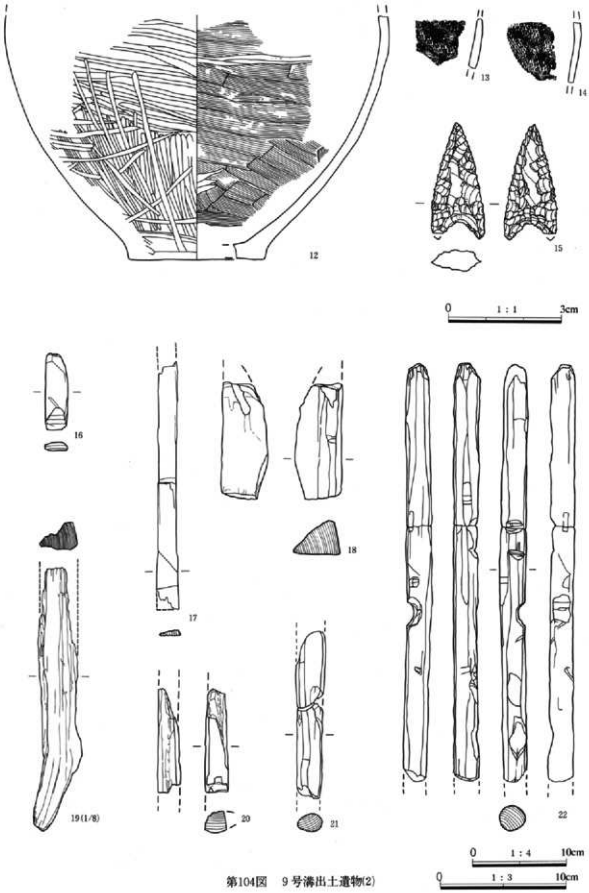
9・16号溝
1．黒色土　As-Cを少し含む粘質土。(溝埋土)
2．黒色土　As-Cを多量に含む粘質土。(溝埋土)
3．黒色土　As-Cを含む粘質土。(畦畔盛土)
4．褐色土　As-Cブロック。(畦畔盛土)
5．黒色土　As-Cを少し含む粘質土。(畦畔盛土)
6．黒色土　粘質土。(畦畔盛土)
7．黒色土　As-Cを多く含む粘質でよりしまりのある土。台地上にのびていく土。
8．褐灰色土　流水砂、砂質。

0　1:40　1m
0　1:100　3m

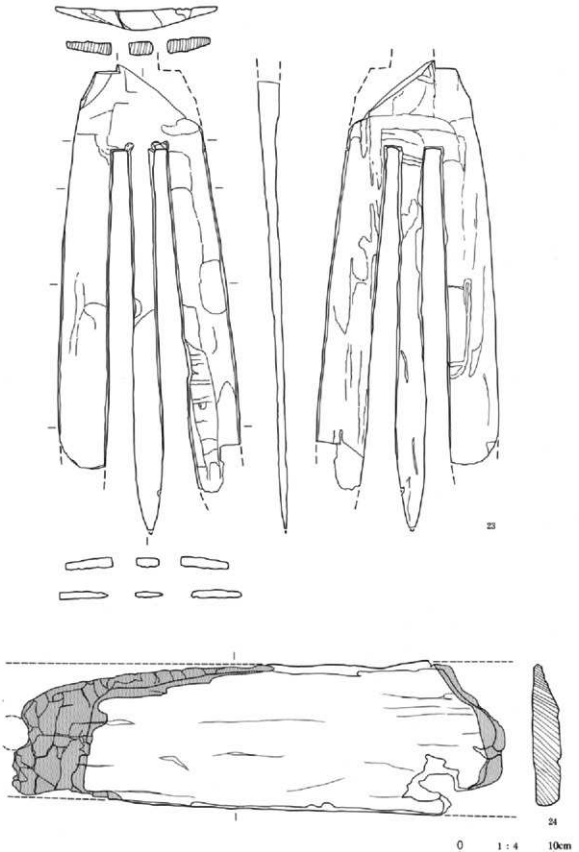
第102図　9号・16号溝遺物出土状況、セクション



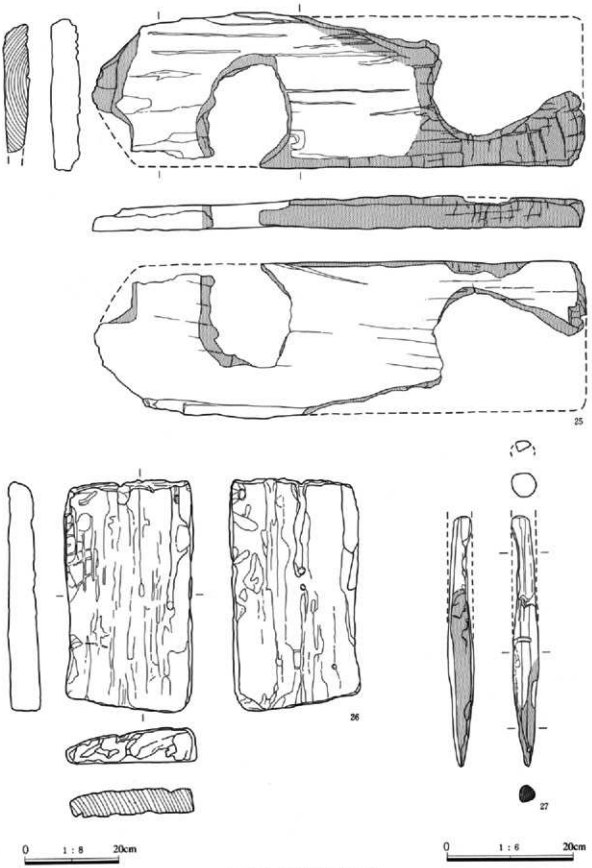
第103図　9号溝出土遺物(1)



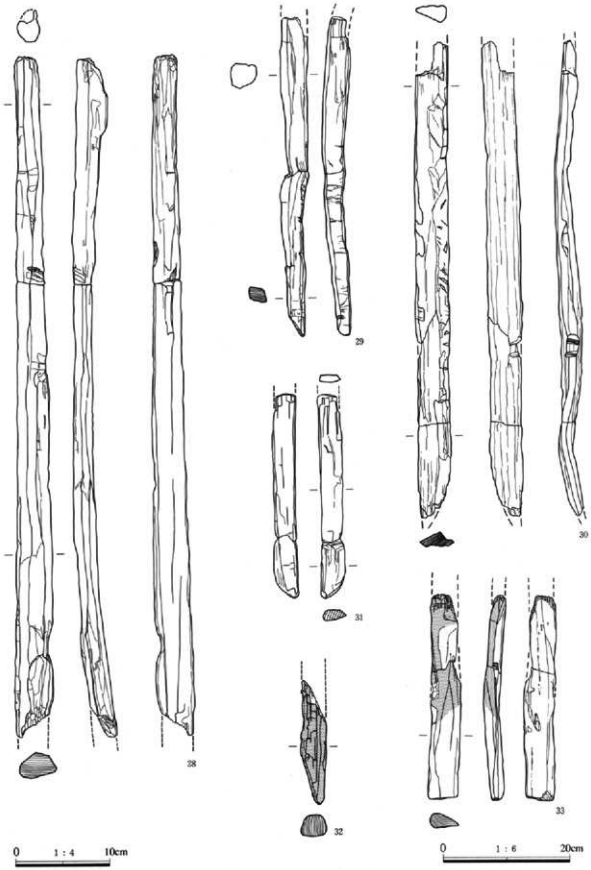
第104図　9号溝出土遺物(2)



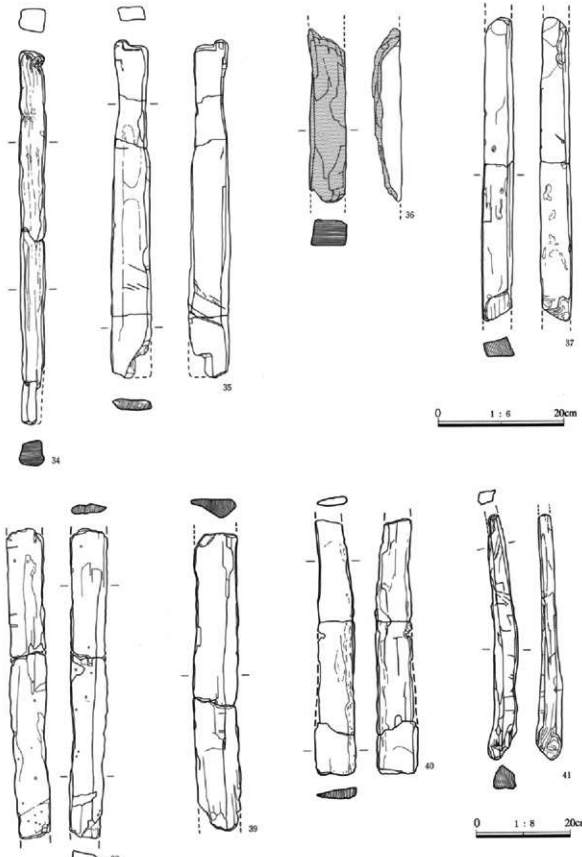
第105図　9号溝出土遺物(3)



第106図　９号溝出土遺物(4)



第107図　９号溝出土遺物(5)



第108図　9号溝出土遺物(6)

表52　9号溝出土遺物観察表

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 壺	C区9・16 溝重機下 No9・16・ 20・21・23	③(22.2)	口縁部～胴部内面横方向の箆撫で。口縁部外面縦方向の箆磨き。胴部は頸部から2cm程の幅で横に R L 縄文を施し、無文部は横方向の箆磨き。	①密度は細かく、若干3mm程の小石含む ②にぶい橙(7.5YR6/6)	口縁部～胴部 口唇部一部欠損
2	土師器 壺	C区重機 No28	①(18.3) ③(10.3)	外面折り返し部に横位 R L 縄文を施す。下部は縦方向の箆撫で。内面胴毛後横方向の箆撫で。	①密度は細かく、若干赤褐色粒含む ②にぶい黄橙(10YR6/4)	口縁部1/4 赤井戸式
3	土師器 壺	C区9溝	③(3.2)	折り返し口縁。折り返し部分に L R の縄文を施す。	①微細の白色鉱物含む ②橙(7.5YR6/1)	口縁部
4	土師器 台付甕	C区2面 No104	② 9.5 ③(6.4)	脚部外面縦方向の刷毛。内面下端横方向の刷毛、上半は斜め方向刷毛。	①砂粒を含む ②明灰褐(7.5YR7/2)	脚部～胴部
5	土師器 小型甕	C区重機 No8	② 4.2 ③(12.8)	外面口縁部整形不明、胴部斜め方向の箆撫で。内面口縁部横撫で、頸部直下指頭押さえ、胴部縦方向の撫撫で、胴部中頃～下半は斜め方向の箆撫で。	①砂粒と微細白色鉱物をやや多く含む ②にぶい黄橙(10YR5/4)	口縁部2/3と口唇部を欠損 器面が荒れている
6	土師器 高坏	C区2面 No87	②(19.6) ③(2.4)	外面縦方向の箆磨き、下端部は横撫で。内面横方向の指撫で。	①密度は細かい ②にぶい橙(5YR6/4)	脚部下半1/6
7	土師器 壺	C区2面 No2・9溝 ・洪水層	① 13.8 ② 7.7 ③ 32.4	口縁部内外面横撫で。外面口縁部下半一底部まで箆磨き。内面頸部下指頭押さえと指撫で。以下は箆撫で。	①3～5mm程の小石・砂粒を含む ②にぶい橙(10YR6/4)	ほぼ完形 口縁部と胴部一部欠損
8	土師器 高坏または蓋	C区9溝東 盛土	③(8.4) ③(2.9)	内外面とも放射状に箆磨き。下端部は内外面横撫で。	①密度は細かい ②暗赤褐(2.5YR3/4)	脚部または蓋1/3 坏部・摘み部分欠損
9	土師器 甕	C区9溝東 盛土	外面斜め方向の箆撫で後横状工具による波状文を施す。内面横方向の箆撫で。	外面斜め方向の箆撫で後横状工具による波状文を施す。内面横方向の箆撫で。	①細かい砂粒を含む ②暗灰褐(2.5Y4/2)	胴部破片 樽式
10	弥生 甕	C区9溝	外面櫛状工具による波状文を施す。	外面櫛状工具による波状文を施す。	①細かい砂粒含む ②にぶい黄褐(10YR4/3)	頸部破片 樽式
11	弥生 壺	C区9溝	3本の粘土紐を横位に貼付、表面を平坦にしている。下部に櫛状工具による波状文がみられる。	3本の粘土紐を横位に貼付、表面を平坦にしている。下部に櫛状工具による波状文がみられる。	①白色鉱物含む ②黒褐(2.5Y3/1)	頸部破片 十王台式
12	土師器 壺	C区9・16 溝重機下 No11・12・ 13・15・19	②(10.8) ③(19.3)	胴部外面箆磨き。下半は縦方向、上半は横方向。内面は横方向の刷毛、上端は横方向の箆撫で。	①密度は細かく、若干3mm程の小石含む ②橙(7.5YR6/6)	底部～胴部
13	弥生 壺	C区5溝	外面に2本の悪条による悪条作施文と思われる。内面撫で。14と同一個体の可能性。	外面に2本の悪条による悪条作施文と思われる。内面撫で。13と同一個体の可能性。	②黒褐(5YR3/1)	胴下部破片
14	弥生 壺	C区9溝	外面に2本の悪条による悪条作施文と思われる。内面撫で。13と同一個体の可能性。	外面に2本の悪条による悪条作施文と思われる。内面撫で。13と同一個体の可能性。	②灰褐(5YR4/2)	胴下部破片
15	石器 石鏃	C区9溝	④ 3.3 ⑤ 1.4 ⑥ 0.5 ⑦ 1.68g	凹基無茎鏃。側縁形状はやや膨らみを持つ。扶りは深い。調整加工は微細で丁寧だが、表裏面に1次剥離面を大きく残す。		チャート 左基しを欠損

表53　9号溝出土木器観察表(1)

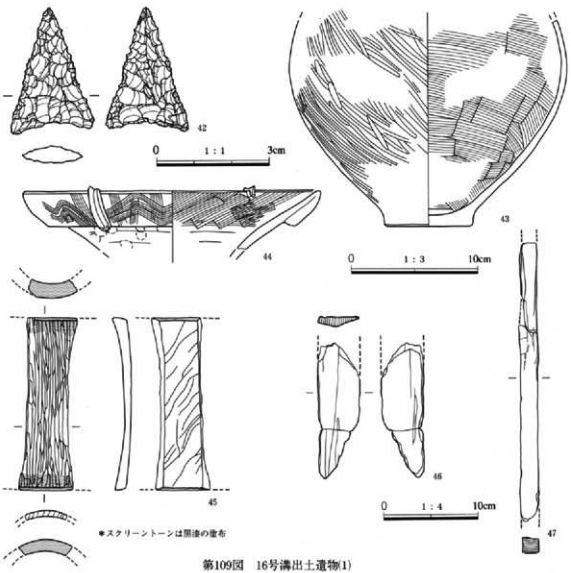
No	種類	出土遺構 出土層位	木取り 樹種	加工・形状等の特徴	備考 (長×幅×厚)
16	楔	C区9溝 W72-1	板目 カヤ	下部・上部とも端部である。下端部は表面から裏面にかけて斜めに削られている。上端部は両側面が丸味を持つ。表面はやや丸味がある。裏面は平坦である。角は面取りが施される。	61×18×6 S＝1/3
17	薄板状	C区9溝 W72-2 W72-3	柾目 カヤ	上部は端部欠損で、さらに上方に伸びる。下部は端部の大半を欠損するが、一部残存している。下端部は表面から裏面にかけて斜めに削られている。同様に中央部にも斜めに削られているが裏面にまで達していない。表裏とも木目が目立ち、木目にそって凹凸がみられる。	195×18×4 S＝1/3
18	不明木製品	C区9溝 W61-1	分割材 コナラ属クヌギ節	下部は切断か欠損か不明である。上部は端部欠損で、さらに上に伸びる。右側縁が薄く、弧状になって断面形は三角形である。表面に幅12mm前後の削りの痕跡がみられる。	121×49×35 S＝1/4
19	割材	C区9溝 W607	柾目 コナラ属クヌギ節	下部は端部と思われ、左に曲がる。上部は端部欠損で、さらに上方に伸びる。裏面と右側面は部分的に平坦に調整されているが工具の痕跡は不明である。他に同一個体と思われる破片が1点ある	550×83×58 S＝1/8

表54　９号溝出土木器観察表(2)

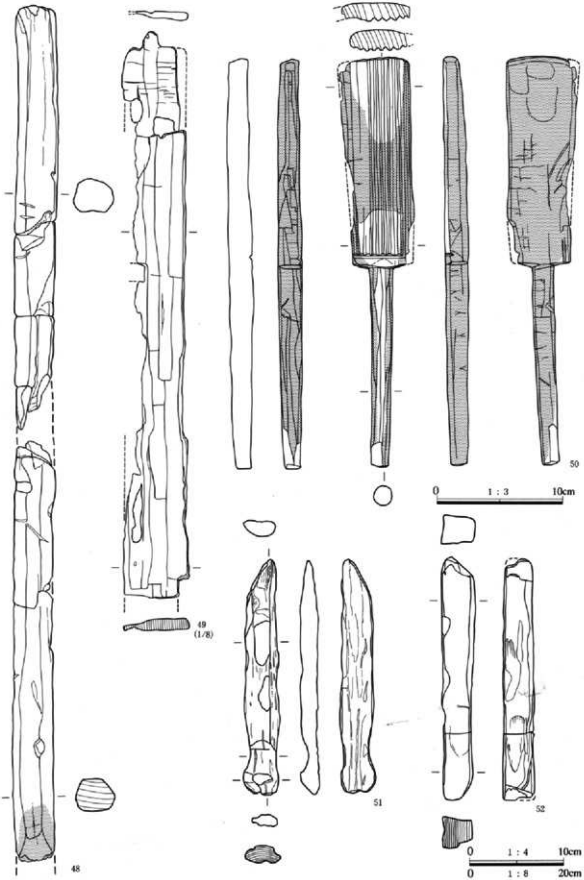
No	種　類	出土遺構 出土層位	木取り 樹種	加工・形状等の特徴	備　考 (長×幅×厚)
20	不明木製品	C区９溝 W248	板目 モミ属	上部、下部とも端部欠損で、さらに両方向に伸びる。左側面は、割れ口と思われ、さらに幅広くなると思われる。裏面が平坦で、表面はやや丸味を持つ。表裏面に削り等の痕跡は不明。表面に炭化がみられる。やや厚めの板材の可能性が考えられる。	109×24×24 S＝1/4
21	棒	C区９溝 W495-2	分割材 コナラ属コナラ節	上下とも端部欠損、両方向にさらに伸びる。表面に幅10mm前後の削りの痕跡がみられる。断面形は楕円形で下部が上部より太くなっている。農具の柄の可能性も考えられる。	83×31×18 103×31×19 S＝1/4
22	棒あるいは柄	C区９溝 W219	分割材 ムクロジ	上は端部で下はさらに伸びる。数カ所調査時の欠損がみられる。中央やや下部に径25mmの半円形の抉りがみられる。	L=438、φ25 S＝1/4
23	三叉鍬	C区９溝 W556	柾目板 コナラ属クヌギ節	鍬先端両端欠損。中央は僅かに先端部を欠損。鍬の基部右側調査時の欠損と思われる。柄部は欠損。基部裏面平坦で表面は中央が膨らむ。	470×192×21 S＝1/4
24	板材	C区９溝 W455	柾目 ケヤキ	上部・下部とも炭化し、両端部とも焼失したと思われる。上部に円形の孔の痕跡がみられる。下部が上部に比べ幅広である。裏面は平坦で、幅20mm前後の削りの痕跡がみられる。右側面が薄くなる。	521×148×28 S＝1/4
25	板材	C区９溝 W549	コナラ属クヌギ節	上部・下部とも端部である。上部右側面と下部左側面を欠損する。欠損は焼失と思われ、炭化している。下部やや中央よりで円形に孔状になっている部分も焼失と思われる。下部は両側面が斜めに削られ下端部が尖ると推定される。裏面に幅25mm前後の削りが不明瞭ながらみられる。	520×160×35 S＝1/4
26	板材	C区９溝 W574	柾目 コナラ属クヌギ節	上部、下部とも端部である。上部は表面から、下部は右側面と表面から切断している。右側面が厚く、左側面が薄い。表裏面とも平坦に調整している。工具の痕跡は不明であるが、幅30mm前後の削りと思われる。	490×275×72 S＝1/8
27	棒 尖棒	C区９溝 W399	ムクロジ	下部は端部で10cm程上位から細くなり、先が尖る。下端部は右側面の一部を除き炭化している。上部は端部を欠損し、さらに伸びる。断面形は不整形な円形である。表面に幅15mm程の削りの痕跡が不明瞭であるがみられる。	264×27×25 S＝1/4
28	棒	C区９溝 W84-1	コナラ属クヌギ節	角材又は角棒状で1/2～1/3程を欠損し、断面三角形状を呈す。角は面取りされ、割れ口の他は比較的丁寧に調整されている。	715×40×28 S＝1/4
29	杭	C区９溝 W230	コナラ属コナラ節	上部は端部欠損で、さらに上方に伸びる。下部は端部で、右側面から左側面に斜めに切断し、片面のみで先端部を尖らせる。全体に表面から裏面にゆるく歪がり、所々に裏面の木の繊維が歪んでいる。	500×44×39 S＝1/6
30	割材・杭	C区９溝 W231	コナラ属コナラ節	上部は端部欠損で、さらに上方に伸びる。下部は、端部に近い部分と思われる。厚さが薄くなり、右側面が斜めで先端部が尖る様子がみられる。杭として使用された可能性が考えられる。	747×53×35 S＝1/6
31	割材・杭	C区９溝 W531	コナラ属クヌギ節	下部は端部で、上部は端部欠損。下端部は右側面から左側面に斜めに切断し、先端部を尖らせる。表裏面に幅10mm前後の削りの痕跡がみられる。	319×38×15 S＝1/6
32	杭	C区９溝 W495-1	ムクロジ	右側面の一部を除き全面的に炭化している。下端部は裏面から左側面にかけて斜めに切断され先端部が尖る。焼失の可能性も考えられるが、端部と考える。上部は端部欠損で、さらに伸びる。表裏に幅10mm程の削りの痕跡がみられる。	194×40×32 S＝1/6
33	割材	C区９溝 W220	コナラ属コナラ節	下部は端部で、上部は焼失で端部欠損と思われる。表面と右側面上半が炭化している。	321×48×24 S＝1/6
34	角材	C区９溝 W294	コナラ属クヌギ節	上部・下部とも端部である。下端部の左側面を一部欠損する。上端部は上からの力が加わって、右側面が歪んでいる。断面形は四角形である。杭の可能性が考えられる。	582×40×39 S＝1/6
35	板材	C区９溝 W49	柾目 コナラ属クヌギ節	上部は端部で左側が突起状に突出している。左側面が弧状に削り込まれている。右側面も左側面同様に削りこまれ、この部分だけ他より細くなっている。下部は端部で、右側を一部欠損する。裏面に僅かに幅15mm前後の削りの痕跡がみられる。	530×63×20 S＝1/6
36	角材	C区９溝 W562	コナラ属コナラ節	表面、上部、下部に炭化がみられる。上部・下部とも端部を焼失している。さらに両方向に伸びる。裏面と右側面は平坦で、左側面はやや左にゆるく曲がる。削り等の痕跡は不明である。	273×57×45 S＝1/6

表55　9号溝出土木器観察表(3)

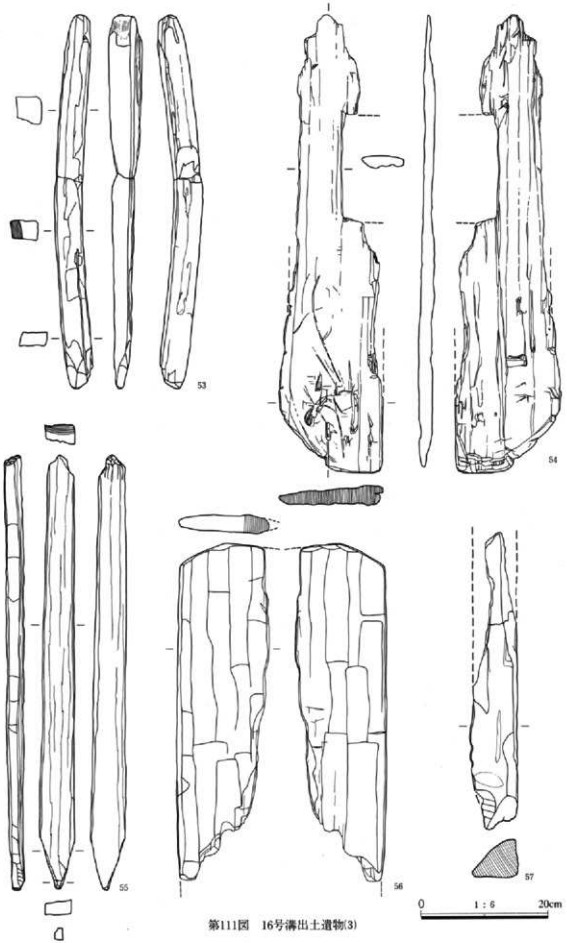
No	種　類	出土遺構 出土層位	木取り 樹種	加工・形状等の特徴	備　考 (長×幅×厚)
37	角材	C区9溝 W500	コナラ属クヌギ節	上部・下部とも端部欠損で、両方向に伸びる。上部に比べ下部は幅・厚さともやや大きい。角は面取りが施される。表裏・両側面とも平坦に調整されているが、工具の痕跡は不明瞭である。下部先端部が鋭状に細く削っている。	637×67×40 S＝1/8
38	板材	C区9溝 W558	柾目 コナラ属クヌギ節	上部下部とも端部欠損で、両方向に伸びる。下半が厚く、上半が薄くなっている。右側面が薄く、左側面が厚い。表裏面とも平坦に調整しているが、工具の痕跡は不明。	650×75×35 S＝1/8
39	角材	C区9溝 W295	コナラ属クヌギ節	上部・下部とも割れ口でさらに伸びる。下半は左側面が平坦に調整されている。上部は断面形が三角形状になる。表面は平坦に調整され、幅20mm程の削りの痕跡が僅かにみられる。角材の断片で、裏面で割れて分割されたものと思われる。	623×93×38 S＝1/8
40	板材	C区9溝 W47	柾目 コナラ属クヌギ節	下部は端部と思われる。上部は端部欠損で、さらに上方に伸びる。下部が幅広く、上部が狭い。表裏とも平坦である。裏面に幅20mm前後の削りの痕跡がみられる。	538×85×20 S＝1/8
41	角材	C区9溝 W293	コナラ属クヌギ節	上端部欠損でさらに伸びる。下部は端部である。上半は直線的であるが、下半は僅かに反る。角材で表裏面に20mm程の幅で加工痕がみられる。下端部は意図的に尖らせた痕跡はみられない。	512×52×55 S＝1/8



第109図　16号溝出土遺物1)



第110図　16号溝出土遺物(2)



第111図　16号溝出土遺物(3)

表56　16号溝出土遺物観察表

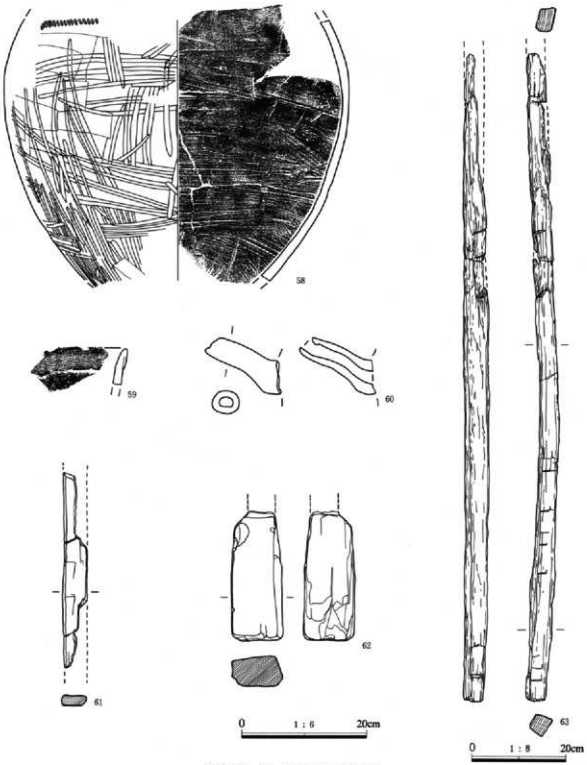
No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量 (cm)	目	成・整形技法の特徴		①粘土 ②色調	時期・残存状況
42	石器 石鏃	C区16溝No167	④ ⑥	3.3 ⑤ 2.1 0.4 ⑦ 1.38g	凹基無茎鏃。側縁形状は直線的である。抉りは浅い。 調整加工は微細で丁寧である。			ほぼ完形 チャート
43	土師器 甕	C区 9 溝西壁 土・16溝	② ③	6.6 (17.0)	胴部内面横方向の刷毛。胴部外面斜め方向の跡磨き。		①密度細かい ②黒褐(2.5Y3/1)	底部一胴部
44	土師器 壺	C区2面No120	① ③	(23.4) (4.6)	折り返し部分に縦の貼付。折り返し部分に縦方向の刷毛後波状文が施される。下半は横方向の指撫で。内面下半は指撫で。上半は横方向の刷毛後斜め方向刷毛を施す。		①白色鉱物を含む ②赤(10R4/6)	口縁部1/6。折り返し口縁で内外面赤彩。4面水田No37・38と同一個体の可能性

表57　16号溝出土木器観察表(1)

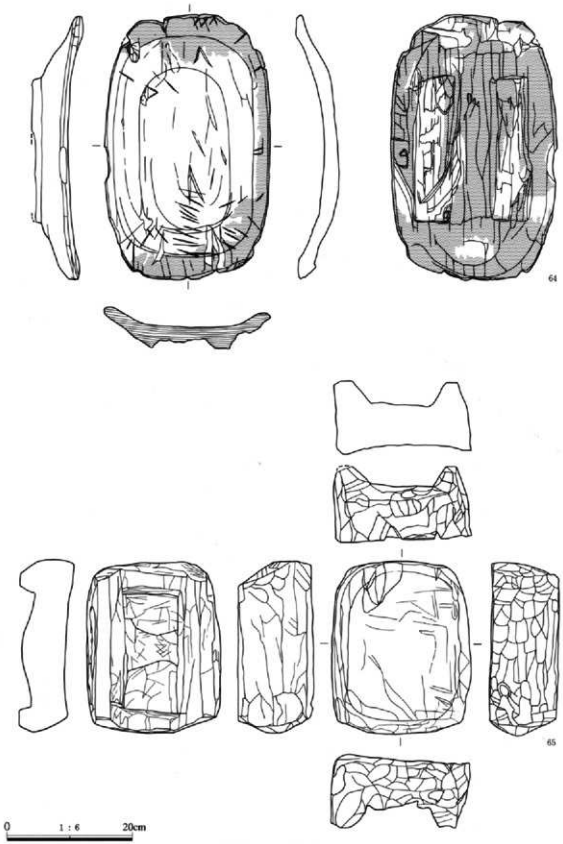
No	種類	出土遺構 出土層位	木取り 樹種	加工・形状等の特徴	備考 (長×幅×厚)
45	筒状木製品	C区16溝 W564	イヌガヤ	上部・下部とも端部で、両側を欠損する。端部は平坦であるが内側に傾斜する。表面に赤彩を施し、さらに表面上下1cm程から端部にかけて黒漆が塗られている。中央から端部にかけて外反する。外面縦方向に5mm幅の加工痕が、内面斜め方向の加工痕がみられる。筒状になると思われる。	136×46×5 下端部径88 上端部径82 S＝1/3
46	不明木製品 (又鍬・又鋤)	C区16溝 W245	柾目 コナラ属コナラ節	板状であり、右側面がゆるい曲線で、下端部が狭まる。上部は端部欠損で上方に伸びる。裏面は平坦で、表面は中央部が厚くなる。削り等の痕跡は不明。形状等から又鍬、鋤の身の右側刃先部の可能性が考えられる。	142×44×10 S＝1/4
47	角材	C区16溝 W538	コナラ属クヌギ節	上部・下部とも端部欠損で、さらに両方向に伸びる。断面形は四角形で、表裏・両側面とも平坦に調整されているが、工具の痕跡は不明瞭である。部分的に角は面取りが施される。	582×39×22 S＝1/4
48	棒	C区16溝 W517	ムクロジ	中央部分を欠損し、上半と下半に分かれる。上部は端部で、下部は炭化し、端部を焼失する。下半の断面形は不整形な六角形で、上半は角が面取りされ、楕円形である。幅20mm前後の削り。	884×42×35 S＝1/4
49	板材	C区16溝 W566	柾目 コナラ属コナラ節	上部は端部で、中央部分が30mm×40mmの突出がつくり出されている。下部は端部欠損で右側面が20mm程けずられている。表裏面に幅30mm前後の削りがみられる。左側面よりに3個40mm×20mmの楕円形の孔が、右側面よりに40mm×35mmの孔が1個あいている。	1183×138×26 S＝1/8
50	叩き板	C区16溝 W479	柾目 ヤマグワ	羽子板状に一枚板から削り出す。敲打部32mm、先端部57mm、基部48mm、柄部長8.158mm、径15mm。敲打部表面に断面三角形の溝が8条と基部に横1条の溝が彫られる。表面敲打部中央やや先端部付近の溝が摩滅している。表面と裏面の一部が炭化している。	322×55×17 S＝1/3
51	不明木製品 (有頭木製品)	C区16溝 W82	板目 モモ	上部・下部とも端部である。下端部は右側縁から斜めに削り、先端部が尖る。上端部と2cm程下の両側縁及び裏面を削り、丸くし、頭部を削り出している。	247×37×19 S＝1/4
52	不明木製品	C区16溝 W244	コナラ属クヌギ節	上部・下部とも端部で、一部欠損する。右側面から左側面にかけて曲線的となる。断面形は四角で、表裏面は平坦である。左側面に、2mm所半球状の抉りがみられる。	255×36×32 S＝1/4
53	角材	C区16溝 W547-1		上部・下部とも端部である。上部は角材状で、下部は薄くなり板状となる。下部は表面の両側の角が削られ、先がやや尖る。掘り棒の可能性も考えられる。	589×46×52 S＝1/6
54	板材 (建築部材)	C区16溝 W488	コナラ属コナラ節	一枚板から作り出している。下端部左側縁部は丸味があり、上端部中央から右端は直線的にさらに上部に伸びると推定される。両側縁部は直線的でさらに下方に伸びる。下端部、中央付近から両側縁部欠損。中央付近に「コ」の字状の彫り込みで、柱のあたる部分である。2枚同様の物を組み合わせた可能性。概立柱建物の本ズミ返しの可能性が考えられる。	723×168×33 S＝1/6
55	割材 枕	C区16溝 W537	柾目 コナラ属クヌギ節	割材の両側縁を削り角材にし、下端部両側縁を削り尖らせている。下端部先端は押しつぶされたように繊維が乱れ平坦になっている。上部の打撃面は不明瞭である。	684×55×28 S＝1/6
56	板材	C区16溝 W547-2	柾目 コナラ属コナラ節	下部は端部欠損で、さらに下方に伸びる。上部は端部で、木口の角は面取りが施される。右側面は割れ口で、さらに右側にも伸びる。表裏面とも、幅30－45mm程の削りがみられる。	572×144×30 S＝1/6

表58　16号溝出土木器観察表(2)

No	種　類	出土遺構 出土層位	木取り 樹種	加工・形状等の特徴	備　考 (長×幅×厚)
57	割材・杭	C区16溝 W567	コナラ属クヌギ節	上部は、中央付近から欠損で、さらに上方に伸びる。下部は端部で、右側面から斜めに切断し、先端を尖らせる。断面三角形の割材を使用して杭としている。工具の痕跡は不明。	465×72×60 S＝1/6



第112図　9・16号溝出土遺物(1)



第113図　９・16号溝出土遺物(2)

表59　９・16号溝出土遺物観察表

No	種　類 器　種	出土遺構 出土層位	量　目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
58	土師器 壺	C区９・16溝 C区重機下No17	胴部 最大径 27.4	外面刷毛後、跳ねき、肩部にＲＬ縄文を施す。内面下半横方向刷毛、上半横方向跳撫で。	①密度は細かく、若干３mm程の小石含む ②灰黄褐(10YR6/2)	胴部破片
59	土師器 壺	C区９・16溝	②(2.9)	折り返し口縁。折り返し部分に櫛状工具で波状文を施す。内面横撫で。	①白色鉱物を含む ②にぶい黄(2.5Y6/3)	口縁部
60	縄文 注口	C区９溝西盛土 As-C混土中		外面は磨かれている。接合部から剥離。先端が細く、元が太い。中の空洞部の形状は下が平坦で蒲鉾型である。	②にぶい黄橙 (10YR7/2)	後期 注口部のみ

表60　９・16号溝出土木器観察表

No	種　類	出土遺構 出土層位	木取り 樹種	加工・形状等の特徴	備　考 (長×幅×厚)
61	板材	C区９・16 溝間盛土W 603	板目 コナラ属クヌギ節	上部・下部とも端部欠損で、さらに両方向に伸びる。右側面は中央部分のみ残存で、他は欠損する。表面に幅15mm程の削りの痕跡が僅かにみられる。他に同一個体と思われる破片が４片ある。	310×40×17 Ｓ＝1/6
62	角材	C区９・16 溝 W535	コナラ属クヌギ節	下部は端部で、平坦に切断されている。上部は、左側面が内側に斜めに削られ、さらに上方に伸びると思われる。表裏両側面の加工の痕跡は不明。	203×80×49 Ｓ＝1/6
63	角材 (建築部材)	C区９・16 溝 W515	(クヌギ節)	下部は端部と思われる。上部は端部欠損でさらに伸びる。両側面は25mm程の幅で削りの痕跡がみられる。表裏面はやや荒れているが平坦に加工している。断面形はやや不整形な方形である。	1362×54×54 Ｓ＝1/8
64	脚付皿	C区９・16 溝 W534	クスノキ	１枚板を加工して作り出している。表面は彫り窪めてある。裏面は50×225×28mm程の脚を２つ削り出している。表面左上部と裏面右上部が炭化している。表裏とも器面が荒れている。	420×264×35 Ｓ＝1/6
65	脚付台	C区９・16 溝 W496	トチノキ	一木で削り込んで作っている。表面は、中央部分が縁より窪む。使用のための削り等の痕跡は不明。右側面、上面・下面は幅20mm前後の削りがみられる。裏面は両側面を幅20mm程を残して、30mm程削って脚としている。さらに中央部分から上下方向に20mm程削り込んで脚同様に上・下面の縁を削り残している。	211×273×121 Ｓ＝1/6

19号溝（第116図）

遺構　A区中央、090-570G～095-555Gにかけて確認された。東西の走向（N－80°－E）である。確認された全長は14.3m、上幅10～30cm、底幅10～20cm、深さ6cm前後である。底面は西から東に傾斜している。埋没土はHr-FAとAs-Cを含む黒色土である。23号溝と東側で重複する。23号溝より新しい。

遺物　出土遺物はなかった。

20号溝（第115・116図、PL35・36）

遺構　A区中央、090-550G～060-540Gにかけて確認された。南北の走向（N－21°－W）である。確認された全長は29.5mで、上幅30～70cm、底幅10～40cm、深さ8～14cmである。底面は、北から南に傾斜している。埋没土はHr-FAとAs-Cを含む黒色土である。

遺物　図示し得なかったが、土師器甕が1点出土した。

21号溝（第115・116図、PL35・36）

遺構　A区中央、090-550G～060-540Gにかけて確認された。23号溝の東端部から分岐し、南北の走向（N－25°－W）である。確認された全長は34.0mで、上幅30～80cm、底幅15～40cm、深さ7～14cmである。底面は北から南に傾斜している。23号溝と明確に分けることはできなかったが、21号溝の埋没土にHr-FAを含むことから、21号溝が新しいと考えられる。

遺物　図示し得なかったが、土師器甕が20点出土した。

22号溝（第115・116・117図、PL35・36）

遺構　A区中央、115-555G～065-535Gにかけて確認された。蛇行しながらも概ね南北の走向で、23号溝から分岐した2条の溝と合わさる。確認された全長は59.5mで、上幅30～170cm、底幅15～60cm、深さ13～24cmである。底面は北から南に傾斜している。23号溝と明確に分けることができなかったが、22号溝の埋没土にHr-FAを含むことから、22号溝が新しいと考えられる。

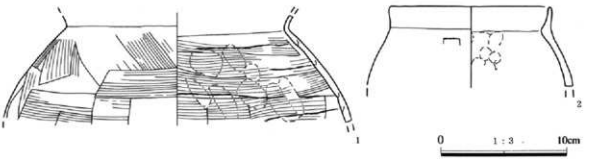
遺物　図示し得なかったが、土師器甕が22点出土した。

23号溝（第114・116図、PL65）

遺構　A区中央、080-580G～095-555Gにかけて確認された。東端部でやや幅広くなり、ほぼ直角に南に曲がり、21・22号溝に分流する。この分流するまでの東西走向（N－61°－E）部分を23号溝とする。さらに24号溝が東端部で北側から合流する。確認された全長は27.6mで、上幅90～320cm、底幅10～180cm、深さ5～12cmである。底面は西から東に傾斜している。埋没土は暗褐色から黒色土で粘性が強く、As-Cを含む土である。19号溝・21号溝・22号溝・24号溝と重複するが、重複する溝の中で一番古いと考えられる。

遺物　1・2は土師器甕の口縁部から胴部上半である。1は口唇部を欠損し、外面胴部に木口状工具による撫で刷毛状の痕跡がみられる。内面胴部は指撫で後、木口状工具による撫で、刷毛状の痕跡がみられる。2は口縁部がやや内湾する。内外面とも器面があれていて整形痕は不明瞭である。外面胴部は篦または木口状工具による撫で。内面胴部は指押さえが施される。

図示した他に土師器甕が2点出土した。



第114図　23号溝出土遺物

表61　23号溝出土遺物観察表

No	種類 器種	出土遺構 出土層位	量　目 (cm)	成・整形技法の特徴	①胎土 ②色調	時期・残存状況
1	土師器 甕	A区23溝№２・４・５・６・７	③(８.４)	外面胴部から斜め方向の刷毛、肩部横方向の刷毛。内面横方向の刷毛後、指頭押さえ。	①２mm程の砂粒含む ②灰黄褐(10YR6/2)	頸部～胴部(肩部) 1/3
2	土師器 壺	A区23溝	①(12.６) ③(６.２)	外面胴部本口状工具または長の縦方向の撫で。内面胴部指頭押さえ。内外面器面摩滅。	①２mm程の砂粒含む ②橙(5YR6/6)	口縁部1/8～胴部

24号溝（第117図、ＰＬ36）

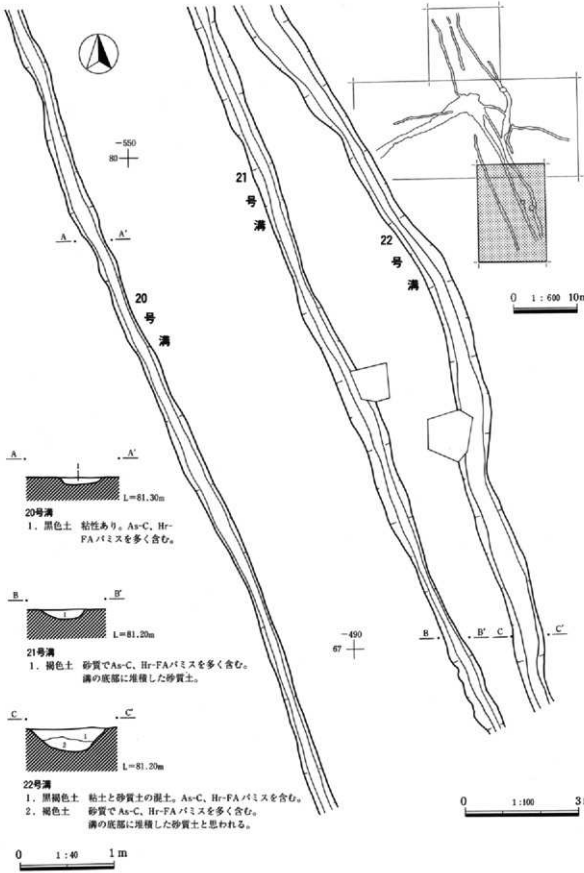
遺構　Ａ区中央、115-560G～100-555Gにかけて確認された。ほぼ南北の走向（Ｎ－18°－Ｗ）で、南端で23号溝東端部に合流する。確認された全長は19.６ｍで上幅30～60㎝、底幅10～35㎝、深さ20㎝前後である。底面は北から南に傾斜している。23号溝と明確に分けることができなかったが、24号溝の埋没土にHr-FAを含むことから、24号溝が新しいと考える。

遺物　出土遺物はなかった。

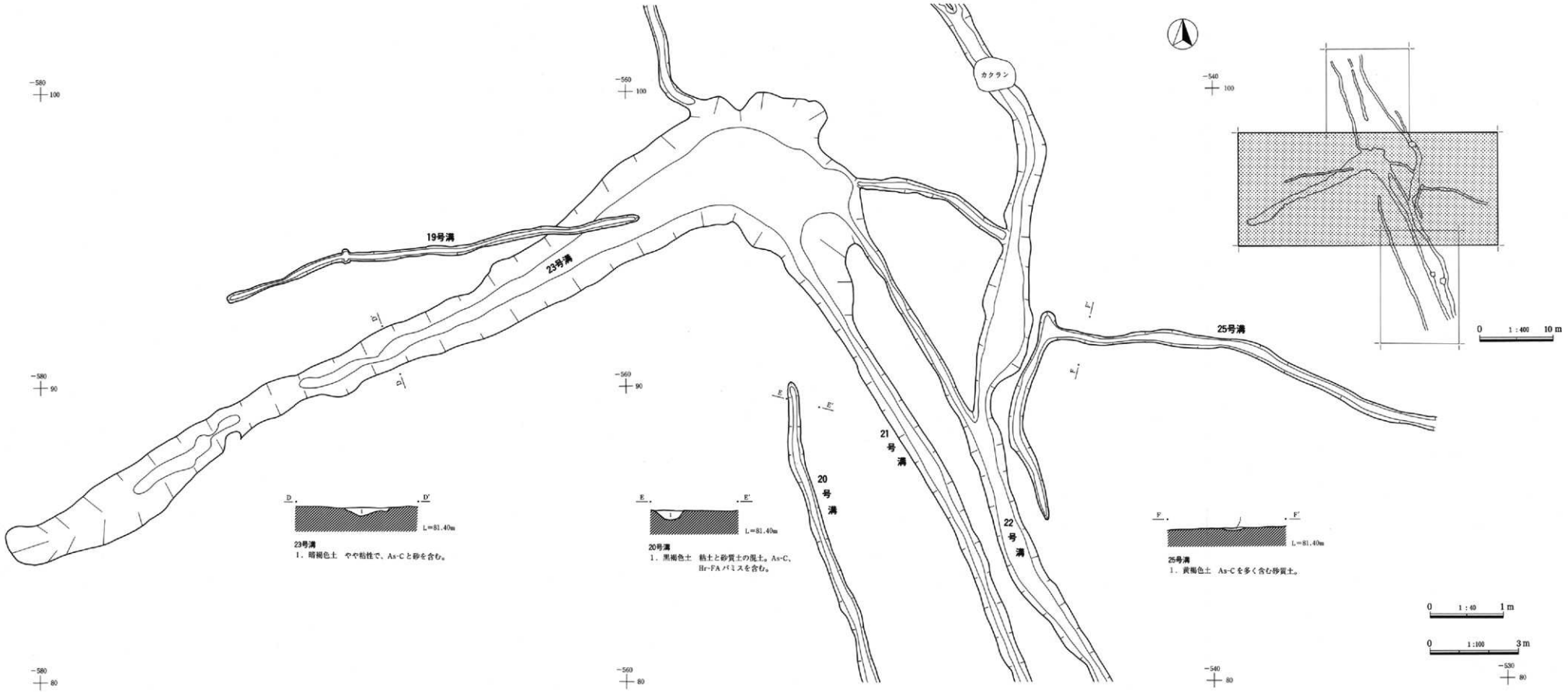
25号溝（第116図、ＰＬ36）

遺構　Ａ区中央、090-545G付近で「Ｌ」字状に曲がり、確認された。南北走向（Ｎ－２°－Ｅ）部分は090-545G～085-545Gで、東西走向（Ｎ－76°－Ｗ）部分は090-545G～085-530Gで確認された。確認された全長は20.８ｍで、上幅25～100㎝、底幅10～80㎝、深さ４～７㎝である。埋没土は黄褐色土でAs-Cを含む。重複する遺構はなかった。

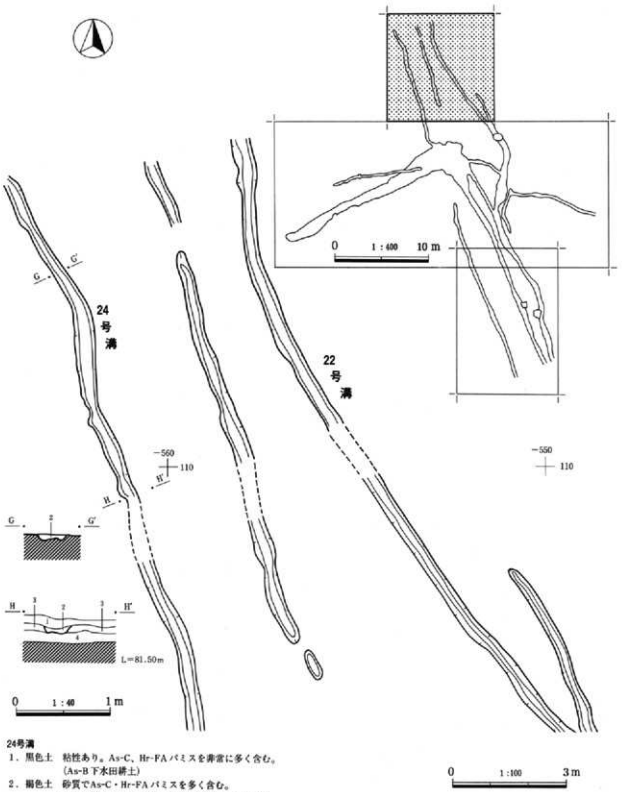
遺物　出土遺物はなかった。



第115図　19号～25号溝(1)



第116図　19号～25号溝(2)



24号溝
1．黒色土　粘性あり。As-C、Hr-FAパミスを非常に多く含む。
　　(As-B下水田耕土)
2．褐色土　砂質でAs-C・Hr-FAパミスを多く含む。
　　溝の底部に堆積した砂質土と思われる。(溝埋土)
3．黒色土　粘性あり。上層にAs-C、Hr-FAパミスを少量含む。
4．灰褐色土　シルト質土。

第117図　19号～25号溝(3)

Ⅱ　土坑

14号土坑（第118図）

遺構　Ｃ区ローム台地上で、150-375Gで確認された。東側の一部が４号溝と重複する。平面形は不整形の方形である。深さ16㎝で、底面は凹凸がみられる。東側の壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋没土は黒色土とロームの混土で人為的である。

遺物　出土遺物はなかった。

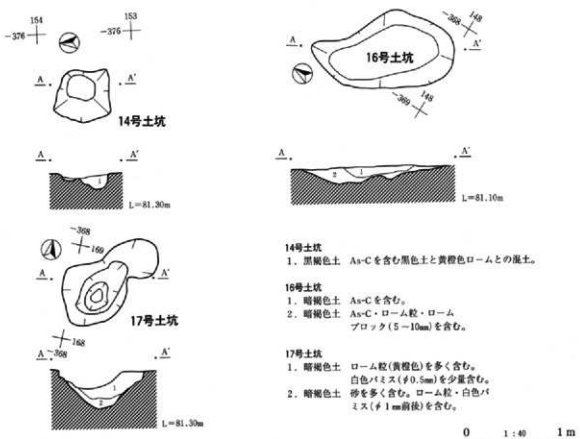
16号土坑（第118図、ＰＬ36）

遺構　Ｃ区ローム台地上で、145-365Gで確認された。平面形は不整形な楕円形である。規模は長軸150㎝、短軸82㎝、深さ16㎝である。長軸方位はＮ－31°－Ｗである。壁は緩やかに立ち上がる。

遺物　出土遺物はなかった。

17号土坑（第118図、ＰＬ36）

遺構　Ｃ区ローム台地上で、165-365Gで確認された。平面形は不整形な楕円形で、長軸119㎝、短軸78㎝、深さ40㎝である。長軸方位はＮ－35°－Ｅである。４号溝と重複し、４号溝より古い。埋没土は自然埋没と思われる。　**遺物**　出土遺物はなかった。



第118図　14号・16号・17号土坑

Ⅲ　ピット

1号ピット（第119図、ＰＬ37）

遺構　Ｃ区ローム台地、140-375Gで確認された。平面形は楕円形で長軸66㎝、短軸56㎝、深さ14㎝である。周辺に関連するピット等は確認できなかった。

遺物　出土遺物はなかった。

6号ピット（第119図、ＰＬ37）

遺構　Ｃ区ローム台地、140-370Gで確認された。平面形は円形で径38㎝である。周辺に関連するピット等は確認できなかった。

遺物　出土遺物はなかった。

8号ピット（第119図）

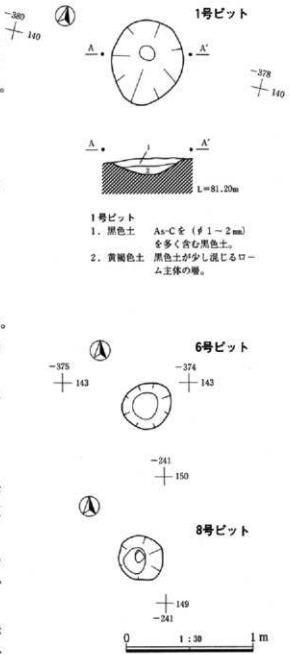
遺構　Ｄ２区ローム台地、140-240Gで確認された。平面形は円形で径34㎝、深さ８㎝である。周辺に関連するピット等は確認できなかった。

遺物　図示し得なかったが、軟質陶器１点が出土した。

Ⅳ　水田

第２面としてＣ区においてHr-FA（Ⅵ層）下の発掘調査をおこなった。Hr-FAが確認できたのはＣ区の低地部分のみ、他の地区では確認できなかった。層厚３㎝前後で部分的には確認できないところもあった。その結果、水田、溝等の遺構は確認できなかった。

第３面としてＣ区において洪水層（Ⅵ層）下の発掘調査をおこなった。洪水層は１号溝、11号溝を介して低地部に達したと推定する。洪水層の堆積は西側の１号溝、11号溝に近いところが厚く、東側が薄くなる状態で確認できた。洪水層下水田はＣ区とＤ１区・Ｄ２区で確認できた。洪水層下水田はAs-Cを含む黒色土を耕作土とする水田であった。確認された水田は48枚で、明確に区画が判り、面積が計測できた水田は11枚で、平均面積は8.74㎡である。



第119図　１号・６号・８号ピット

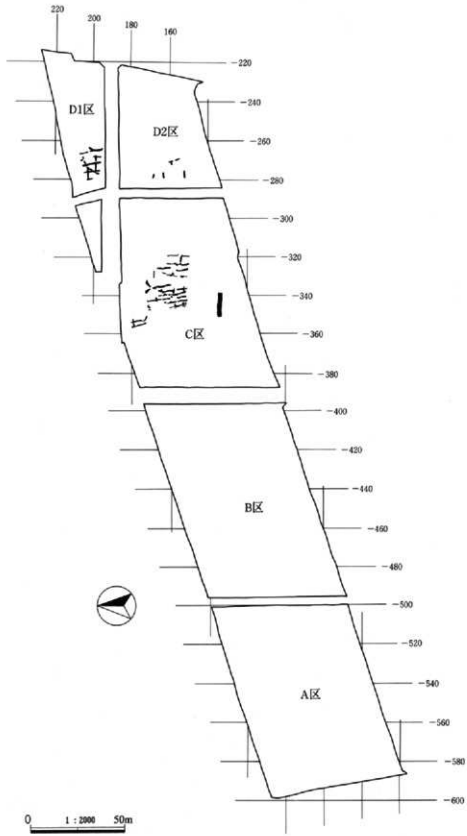
第４面としてＡ区・Ｃ区・Ｄ１区・Ｄ２区でAs-Cを含む黒色土（Ⅶ層）下の発掘調査をおこなった。発掘調査をおこなったそれぞれの地区でAs-Cを含む黒色土下の水田を確認した。この水田は洪水層に覆われたＣ区東からＤ区の西側にかけての低地では洪水層下の水田の基底面と考えられる。しかし、Ａ区西側の低地で確認できた水田は、Ｃ区・Ｄ区の低地の洪水層下水田と同一時期の

水田の基底面とは断定できない。A区の水田を覆っていた土はAs-CとHr-FAを含む黒色土である。耕作土がAs-CとHr-FAの混土であることから、Hr-FA降下以後の水田の基底面と考える。As-Cを含む黒色土下の水田の調査中にC区で畦畔の中から建築部材等の木製品・木器等が出土した。

C区３面水田

（第120・121図、ＰＬ37・38）

遺構　C区・D区の低地は、西側のローム台地と低地の境界部分に９・16号溝が掘られている。東側のローム台地と低地との境界に８・18号溝が西側と同様に掘られている。C区・D区の低地はこれらの溝にはさまれた低地である。C区・D区の低地は西側で洪水層が厚く堆積し、東側になるにしたがい



第120図　３面水田全体図

薄くなる堆積状況であった。この洪水層を除去し、水田を確認した。南西部で大畦（1号大畦）を確認した。ほぼ東西に延びるが、この3面洪水層下では東側は不明瞭で確認できなかった。確認された水田は31枚であり、区画が明確に判り、面積が計測できた水田は9枚で、その平均面積は8.12㎡である。

遺物　土師器甕、高坏、壺等が出土しているが、3面水田と4面水田の遺物を分けずに報告する。出土遺物はC区・D区4面水田で報告する。

D1・D2区3面水田（第120・122図、PL39・40）

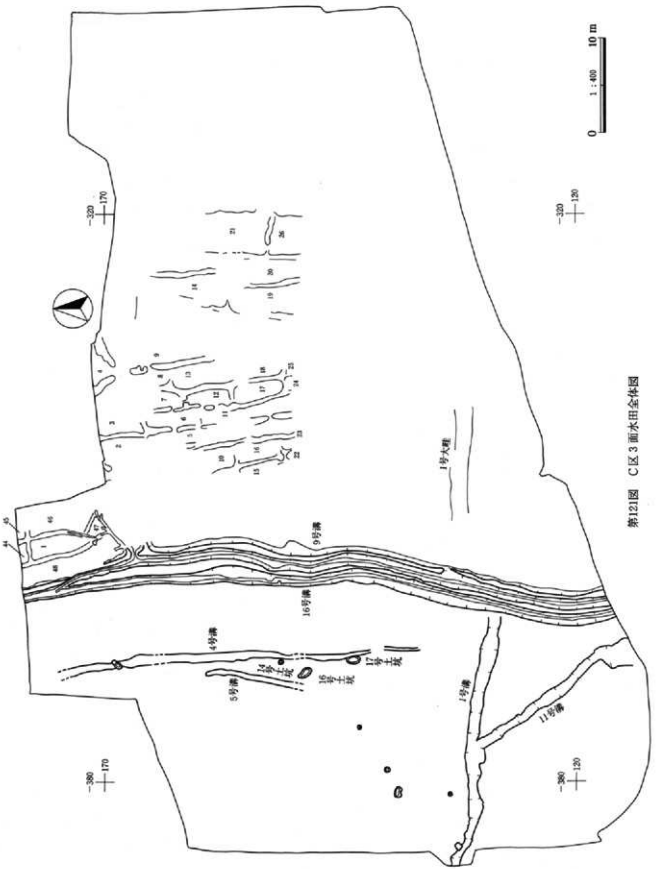
遺構　C区・D区の低地の東側部分にあたる。C区に比べ洪水層の堆積は薄く、D2区では水田を確認することが困難であった。D2区に比べ、D1区では明確に水田が確認できた。D1区で確認できた水田は13枚で、区画が判るものが2枚で、その平均面積は11.58㎡であった。D2区で確認できた水田は4枚で、区画が判り、面積が計測できた水田はなかった。

遺物　土師器甕、高坏、壺等が出土しているが、3面水田と4面水田の遺物を分けずに、C区・D区4面水田で報告する。

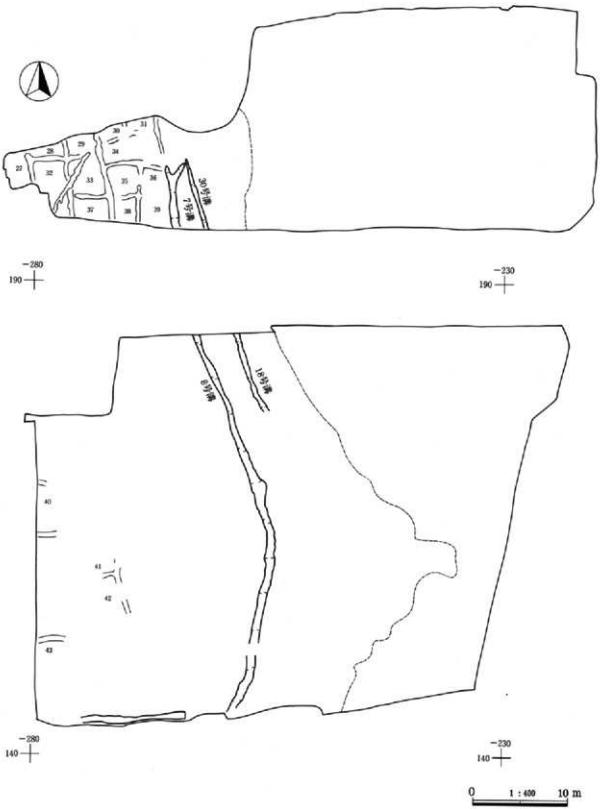
表62　3面（洪水層下）水田計測表

水田No.	面積(㎡)	長軸(m)	短軸(m)	長軸方位	備考	水田No.	面積(㎡)	長軸(m)	短軸(m)	長軸方位	備考
1	10.95	6.96	1.92	N-12°-W	C区	25	——	——	——	——	C区
2	——	4.68	——	N-5°-W	*	26	(13.36)	(3.44)	4.08	N-3°-W	〃
3	——	(4.64)	5.36	N-5°-W	*	27	——	(3.28)	(2.44)	N-14°-W	D1区
4	——	(2.08)	(4.00)	N-35°-W	*	28	——	(1.24)	3.56	N-7°-W	〃
5	——	(16.00)	1.72	N-6°-W	*	29	——	(1.84)	3.04	N-5°-W	〃
6	9.15*	5.58	1.64	N-6°-W	*	30	——	(1.28)	2.68	N-16°-W	〃
7	5.50*	3.20	1.72	N-6°-E	*	31	——	(1.20)	3.28	N-10°-W	〃
8	6.82*	4.16	1.64	N-3°-W	*	32	——	(5.96)	3.28	N-8°-W	〃
9	——	(7.40)	(3.44)	N-6°-W	*	33	13.74	3.96	3.52	N-12°-W	〃
10	——	(2.56)	2.20	N-19°-W	*	34	——	(2.48)	6.16	N-8°-W	〃
11	——	(9.96)	1.72	N-8°-W	*	35	9.41	3.16	3.36	N-6°-W	〃
12	6.85	4.40	1.76	N-10°-W	*	36	——	2.72	2.52	N-4°-E	〃
13	14.82*	6.28	2.36	N-6°-W	*	37	(7.64)	(2.08)	3.80	N-3°-W	〃
14	——	(8.12)	3.36	N-2°-W	*	38	(5.76)	(2.44)	2.40	N-7°-W	〃
15	——	4.56	——	N-15°-W	*	39	——	(2.56)	3.00	N-2°-W	〃
16	7.25*	4.12	1.76	N-13°-W	*	40	——	5.20	——	——	D2区
17	9.21	5.28	1.88	N-7°-W	*	41	——	——	——	——	〃
18	——	——	(1.32)	——	*	42	——	——	——	——	〃
19	——	(6.68)	2.76	N-5°-W	*	43	——	——	——	——	〃
20	——	——	2.52	——	*	44	——	(0.84)	1.96	N-13°-W	C区
21	——	(6.52)	4.32	N-2°-E	*	45	——	——	——	——	〃
22	——	——	——	——	*	46	——	6.20	——	——	〃
23	——	(1.80)	1.20	N-13°-W	*	47	2.49	1.76	1.48	N-47°-W	〃
24	——	(0.60)	1.32	N-5°-W	*	48	——	(10.90)	2.44	N-27°-W	〃

＊面積の欄の括弧の数字は長軸と短軸を乗じて面積を算出している。



第121図　C区3面水田全体図



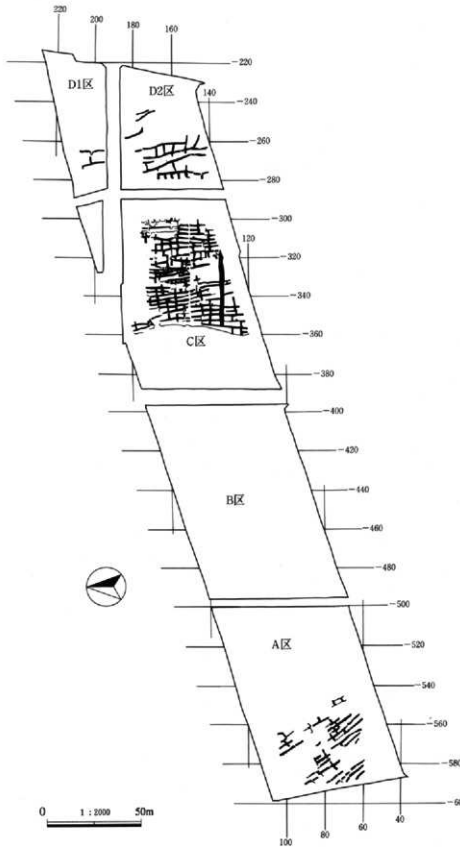
第122図　Ｄ１・Ｄ２区３面水田全体図

Ａ区４面水田

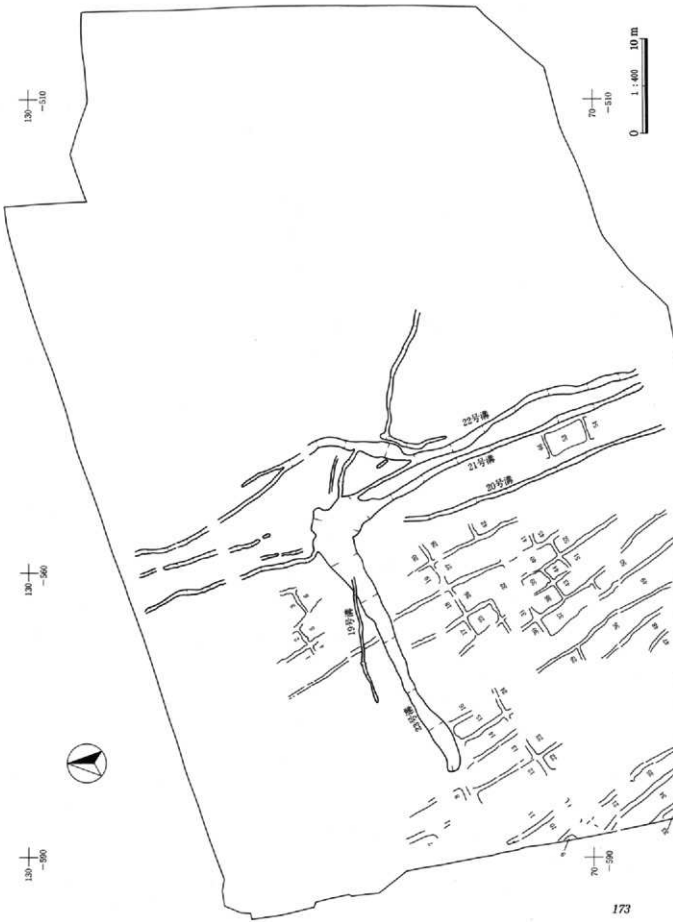
（第123～125図、ＰＬ40・65・66）

遺構　Ａ区の西側半分で確認できた。覆っていた土は、As-Cを含む黒色土であるが、Hr-FAも含んでいる。確認できた水田は、As-CとHr-FAを含む土を耕作土とする水田の基底面である。時期はHr-FA降下後と考える。水田は、北西・南東に長軸を持つ。確認できた水田は54枚で、明確に区画が判り、面積が計測できた水田は11枚で、平均面積は10.72㎡であった。

遺物　１～３は縄文土器の深鉢で胴部破片である。１・３は縦方向の２本の沈線で区画し、広い区画にＬＲ縄文を施す。中期加曽利Ｅ式である。２は沈線で「Ｕ」字形の区画で、地文は無文である。中期加曽利Ｅ式末である。４・５は弥生土器で

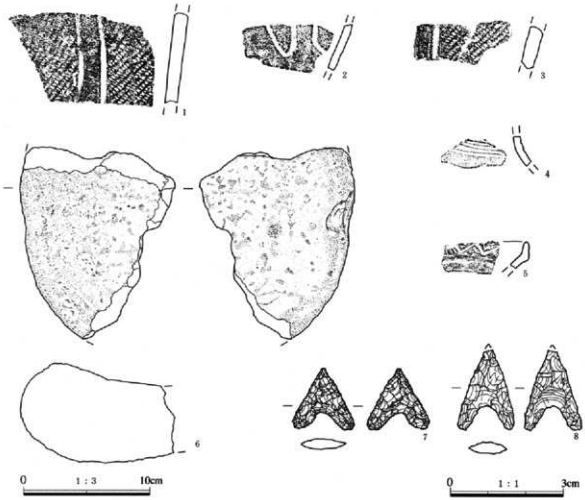


第123図　４面水田全体図



第154図　A区４面水田全体図

甕または壺で竜見町式である。４は頸部破片で篦状工具により横位に沈線を巡らす。５は受口状の口縁部破片で、外面に櫛衝文を施す。６は石皿で大半を欠損する。熱を受け赤変している。７・８は石鏃で、８は先端部を欠損する。図示した遺物以外に土師器甕77点、土師器坏50点、須恵器甕１点が出土している。



第125図　Ａ区４面水田出土遺物

表63　Ａ区４面水田遺物観察表

No.	種類 器種	出土遺構 出土層位	量目 (cm)	成・整形技法の特徴	①粘土 ②色調	時期・残存状況
1	縄文 深鉢	Ａ区黒色土	ＬＲ縄文を地文に２条の沈線文を施す。		①３mm前後の砂粒含む ②明赤褐(5YR5/8)	胴部破片 中期加曽利Ｅ式
2	縄文 深鉢	Ａ区２面	沈線で「U」字状の文様を施す。		①細かい砂粒含む ②橙(7.5YR6/6)	胴部破片 中期加曽利Ｅ式
3	縄文 深鉢	Ａ区黒色土	ＬＲ縄文を地文に２条の沈線文を施す。		①３mm前後の砂粒含む ②にぶい橙(7.5YR6/4)	胴部破片 中期加曽利Ｅ式
4	弥生 甕または壺	Ａ区２面	外面に篦状工具で横位に３条以上の沈線を巡らす。		①１mm程の白色鉱物含む　②褐灰(10YR4/1)	頸部破片 竜見町式
5	弥生 甕	Ａ区２面水田	受口状の口縁で、外面に櫛衝文を施す。		①微細白色鉱物含む ②黒褐(2.5Y3/1)	口縁部破片 竜見町式
6	石器 石皿	Ａ区２面	④(15.1)⑤(12.6) ⑥　7.9 ⑦1532g	被熱、赤変。裏面はより強く焼けている。使用痕は不明瞭。裏面は自然面と思われる。凹有り。		石皿部分破片 粗粒輝石安山岩
7	石器 石鏃	Ａ区２面	④　1.6 ⑤1.6 ⑥　0.2 ⑦0.42g	凹基無茎鏃。平面形は正三角形で、側縁は直線的である。抉りは深い。調整加工は器体全面で微細で丁寧である。		ほぼ完形 チャート
8	石器 石鏃	Ａ区２面	④(　2.1)⑤1.5 ⑥　0.3 ⑦0.7g	凹基無茎鏃。側縁形状は左側縁が膨らむ。抉りは深い。調整加工は微細で丁寧である。		先端部欠損 チャート

C区・D区4面水田の概要（第126・127図、PL42～45）

C区・D区の低地ほぼ全域で水田が確認できた。覆っていた土は、As-Cを含む黒色土で、3面水田の耕作土である。確認できた水田は3面水田の基底面と考える。C区で確認できた水田は198枚で、区画が判り、面積が計測できた水田は95枚で、その平均面積は8.48㎡である。D1区で確認できた水田は3枚で、区画が判るものはなかった。やや大きめの水田のようである。D2区で確認できた水田は21枚で、区画が判るものは5枚で、その平均面積は27.04㎡である。C区・D区の低地全体で221枚の水田が確認され、区画が判るものは100枚で、その平均面積は9.41㎡である。C区・D区低地の水田は西側の水田の区画が小さく、中央から東側の水田の区画が大きい傾向にある。C区低地の南西寄りで、大畦が確認された。この大畦を1号大畦と呼称する。1号大畦は、ほぼ直線的で東西方向、東側で調査区外に延びる。この1号大畦の芯材として、建築部材を使用している。建築部材を畦の芯材として再利用している。9号溝の東側の畦に165-355Gと130-355Gで水口が確認できた。北側の水口は1号大畦より北側の水田に水を送るためであり、南側の水口は1号大畦より南側の水田に水を送るための水口と考える。C区・D区の低地の東側で8号溝があり、9号溝同様2カ所で水口が確認されている。2カ所とも1号大畦より北側にあたる。1号大畦を含め畦の盛土の中に、As-Cが多量に、また純度が高い状態で確認できた。この水田はAs-C降下以後に造られた水田と考える。つまり3面水田の耕作時期は、As-C降下以後洪水層以前と考える。

水田の詳細は、C区4面水田1号大畦、C区4面水田南西部、C区4面水田北西部、D1区・D2区水田西部と部分ごとに報告する。出土遺物は、C区4面水田1号大畦の出土遺物は部分ごとに報告するが、他の遺物は水田の項目の最後にC・D区4面水田出土遺物として報告する。

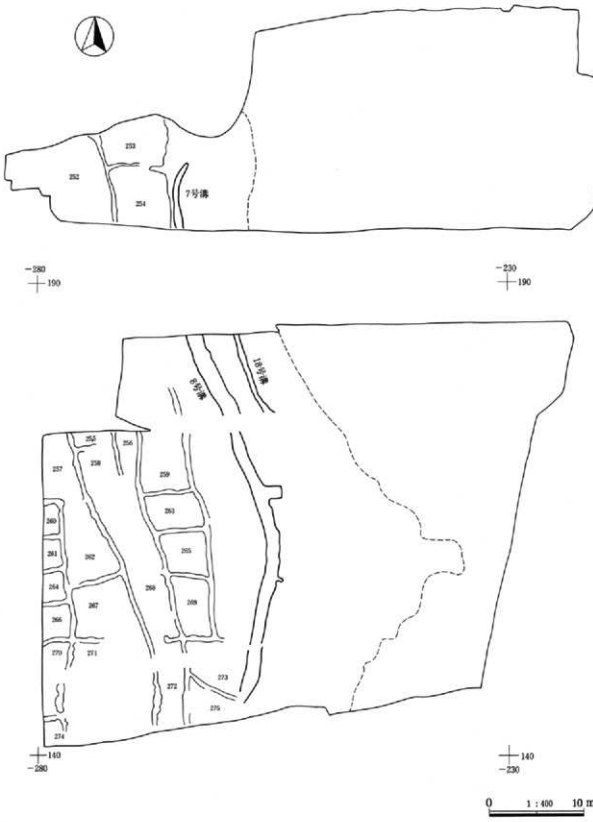
C区4面水田1号大畦（第128～143図、PL41・42・66～76）

遺構　C区低地の西側から南側で、355-130G～315-130Gにかけて、ほぼ東西方向（N－88°－E）で確認された。東側は調査区外に続く。西側は9号溝東側の畦とつながるものと考えられるが、不明瞭である。確認された長さは41.5m で、幅は下端で1.22～2.20m である。水田面との比高差は不明瞭であるが、10cm以上であったと推定される。畦の中心部分に建築部材や自然木を芯材として使用している。芯材は最も長いもので3,667cmであった。1,500～2,000cmの木材が多い。芯材の周囲はAs-Cを多量に含む黒色土で覆われていた。畦の北側から南側に水を通すような水口は確認できなかった。9号溝の東側の畦は1号大畦より北側、上流部にあたる所に9号溝から水田に水が入るように水口が付けられている。この水口から送られてきた水は、1号大畦より北側（上流部）の水田に水を送るためではなく、1号大畦より南側（下流部）の水田に水を送るためと考えられ、9号溝の東側の畦と1号大畦の接する付近にさらに水口が付けられていたものと考えられる。

遺物　1・2は不明木製品である。1は上部裏面を僅かに欠損するが、ほぼ完形である。平面形は細長い長方形で両端部がやや細くなる。表面は平面形に沿うように刳り抜かれている。何かの部品と考えられる。側面に小孔が10個と下端部に小孔が1個貫通している。両端部の内側に溝状の孔が裏面に貫通している。2は1枚板から削りだしている。上部は角材状になり、上端部を欠損する。右側縁は直線的で、左側縁は半円形である。

3～38が建築部材あるいは建築部材の可能性の考えられるものである。3～10は柱材である。3は丸太材で、下端部に伐採時の切断の痕跡がみられる。6・7は上下とも端部である。下部は断面形が丸味を帯びているが中央部から上部は面取りが施され断面形が方形になる。長さや形状が類似することから対になる可能

第126図　C区4面水田全体図



第127図　Ｄ１・Ｄ２区４面水田全体図

性が考えられる。６は中央やや下方に炭化している所がみられる。８は上端部が「Ｙ」字状に二股に分かれる。丸太材で芯持ちであるが、部分的に面取りが施され角材状のところがある。10は丸太材で、下端部を斜めに削り尖らせる。９は丸太材で、上端部が炭化している。上端部は二股に枝分かれする部分を使用している。４は丸太材で、幅30㎜程の削りの幅で面取りが10面施される。５は角材で芯去材である。下端部を欠損し、上端部は９㎝程下から厚さ１㎝程削り、上端部を突出させ、桁を受ける構造にしている。

８・13・19・34は梁材の可能性が考えられる。13は割材で、部分的に調整した工具の痕跡がみられる。上端部にわずかに炭化の痕跡がみられる。右側面に３カ所彫り込みがみられる。14は割材で、表裏面に平担に調整した工具の痕跡がみられる。右側面に３カ所彫り込みがみられ、下部は彫り込み部分から折れ、下端部を欠損する。22は割材で芯去材である。下部に「コ」の字状の切り込みがあり、渡り腮仕口の相方と思われる。17は割材で芯去材である。下部は板状で平担に加工している工具の痕跡がみられる。下部左側面に「コ」の字状の切り込みが、上部も一部分欠損で不明であるが、下部同様の切り込みがある。中央部右側面に両端の切り込みより小さい切り込みがある。

11・23～25は割材で、角材の一種と考えられるが、角材ほど面が整えられていない。23は芯去材で、上端部を欠損する。裏面と右側面は平担に調整されている。表面から剝がれ角材の断片の可能性が考えられる。25は両端部欠損である。左側面（樹皮側）が平担に整えられている。24は芯去材で、上端部を欠損する。下端部は断面形が長方形であるが、他は断面三角形である。11は両端部の木口が斜めに切断され、調査時以降の欠損の可能性が考えられるため、両端部は不明である。左側面が欠損で、角材の可能性が考えられる。

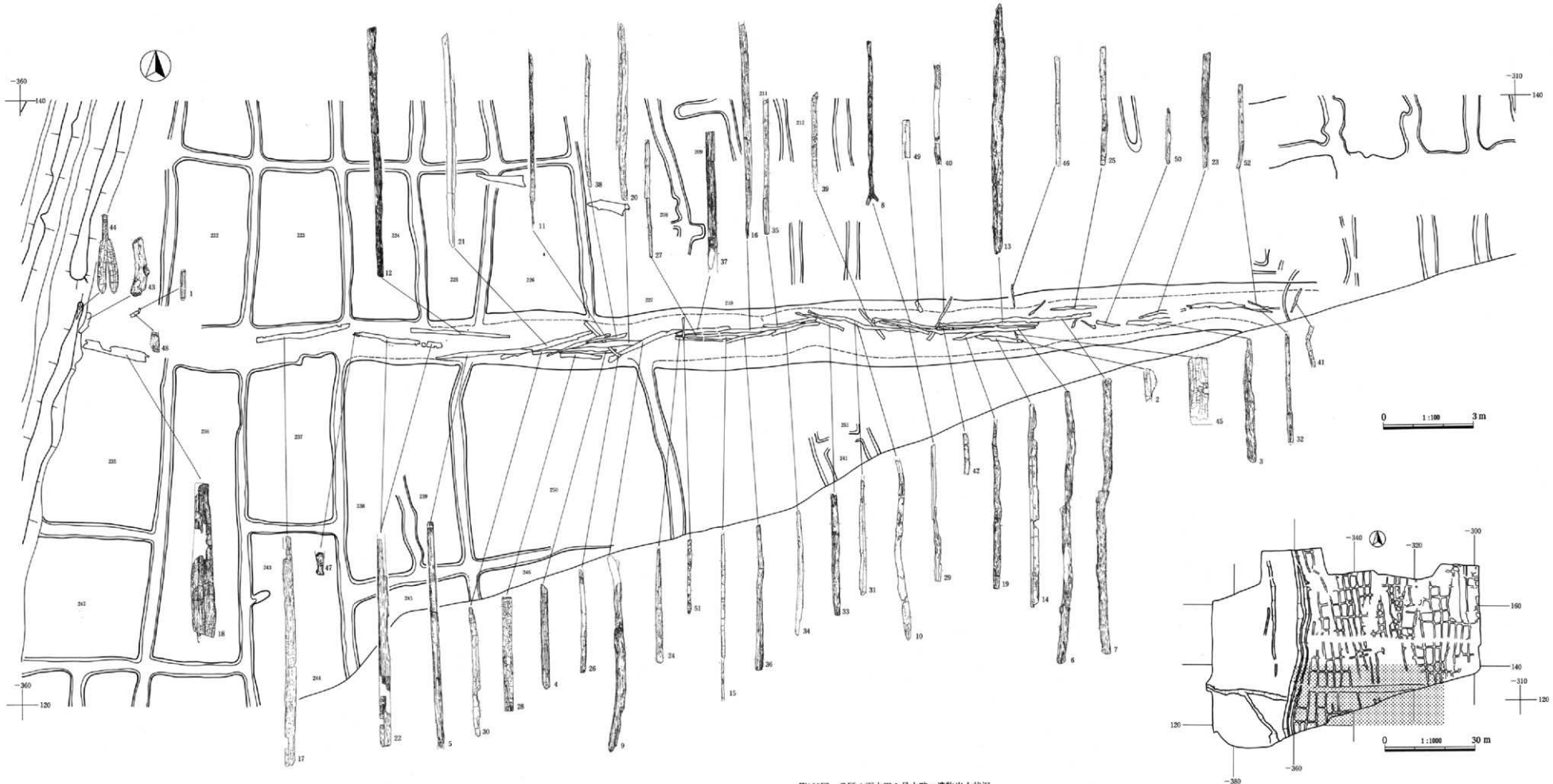
15・16・26・27・32～37は角材である。32は芯持材で両端部欠損である。下部は角材状で上部は丸太材状になっている。33は芯去材で、上端部を欠損する。下端部は左側面を削り幅を狭くし、角材状にしている。上部は薄くなり板状である。34は下端部から20㎝程まで薄く削られ段差をつけ、突出させている。５と類似し、芯去材で柱材の可能性が考えられる。16は下端部を欠損する。芯去材で下部は角材状で、徐々に上部になるにしたがい板状になる。35は芯去材で、下端部を欠損する。下部は板状、中央部から上部は角材状である。36は芯去材で、下部はやや幅広で、剝落等で木肌が荒れている。中央部から上部は角材状である。15は芯去材である。４片に分かれ接合できないが同一個体と思われる。37は上部は炭化し、上端部を焼失している。下部は厚く角材状であるが、上部になるにしたがい薄く板状となる。27は芯去材である。上部は角材状で、下部裏面は剝落し欠損のため板状であるが本来は角材状であったと思われる。26は芯去材で上端部を欠損する。

12・28は板材である。28は上端部を欠損する。表裏面と両側面の４面が丁寧に加工され、幅・厚さが均質に整えられている。貫材の可能性が考えられる。12は３ｍ以上の長さである。表裏面や側面の加工はやや雑である。右側面部に欠損か判らないが、不明瞭ながら桟穴状の窪みが３カ所みられる。

29・31は割材で断面形が三角形である。29はほぼ等間隔に欠き込みが３カ所みられる。31は上端部を欠損する。下部に比べ上部は細い。

19～21・30は割材で板状である。19は上端部を欠損する。20は両端部を欠損する。21は中央部から下部にかけて、左側面から中央にかけて表裏面とも15㎜程の段差がつく。30は両端部が細く、中央やや下部の左側面に「コ」の字状の欠き込みがみられる。

18・38は用途不明の木製品であるが建築部材の可能性が考えられるものである。38は下端部を欠損する。下部は角材状であるが上部になるにしたがい板状になる。上端部は頭状に作り出されている。祭祀的な建築部材の可能性が考えられる。18は１枚板で、中央部を欠損する。下端部は左から右に斜めで、中央より左側



第128図　C区4面水田1号大畦・遺物出土状況

に14cm程の長さで突起が削り出されている。用途不明としたが、棟覆材と考えられる。

39～43は樹皮が残っていたり、伐採時の痕跡、枝払いの痕跡等がみられる物で、一応丸太材と考えられる物である。41は両端部を欠損、中央で右側に屈曲する。42は両端部欠損で僅かに面取りの痕跡がみられる。40は両端部欠損で樹皮が残る。39は大半が樹皮で覆われている。43は下端部に伐採時の痕跡がみられ、上端部は焼失している。ほぼ全面樹皮で覆われている。

48・49は板材である。49は樹芯側が薄い。48は厚さが均一に加工されている。

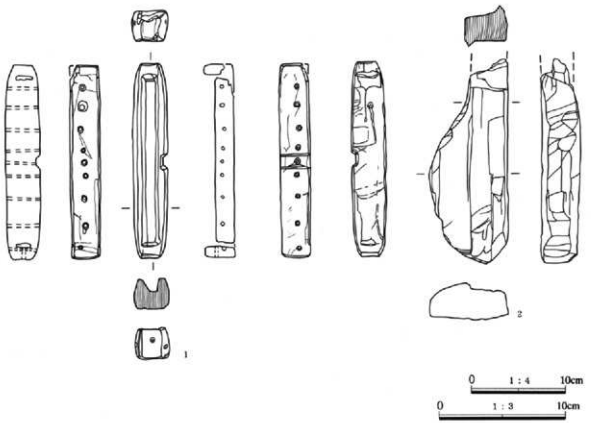
50は両端部を欠損し、現状では分割材であるが、丸太材の可能性が考えられる。

44・45・47は農具の身の部分である。44は二又鍬の鍬身である。連結部分の表面に削り込みがみられ、裏面が平坦に整えられている。膝柄がつけられたと推定される。全体に裏面が平坦で、表面が丸味を帯びる。47は鍬身の連結部分で、刃部を欠損する。裏面が平坦に調整され、両側面を削り込んでいる。45は広鍬の身部である。左側面側と上端部を欠損する。ほぼ中央上部に穴があけられ、柄穴である。柄穴は身と鋭角にあけられている。裏面柄穴の周りは厚く、削り残してある。

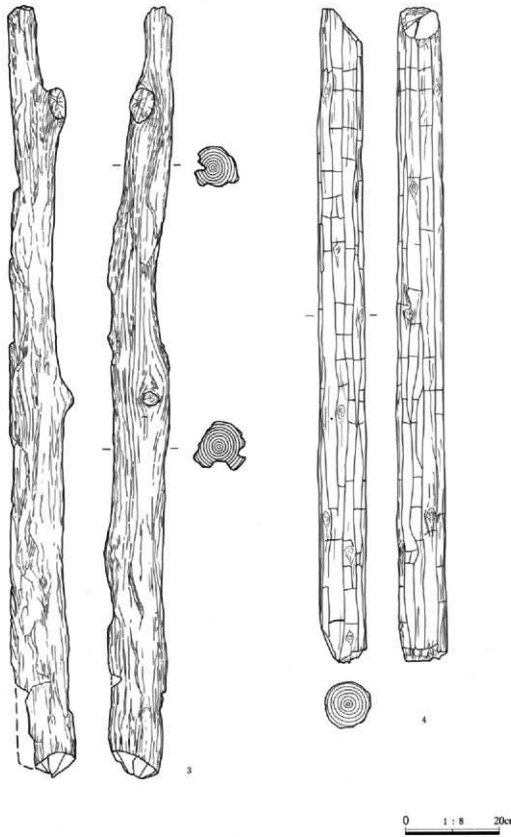
46は棒状で農具の柄の可能性が考えられる。分割材を使用し、角はよく面取りが施される。下端部はやや太くなり、上端部は欠損する。

52は棒状で樹皮で覆われている。上部裏面が半載されていることから掘り棒の可能性が考えられる。

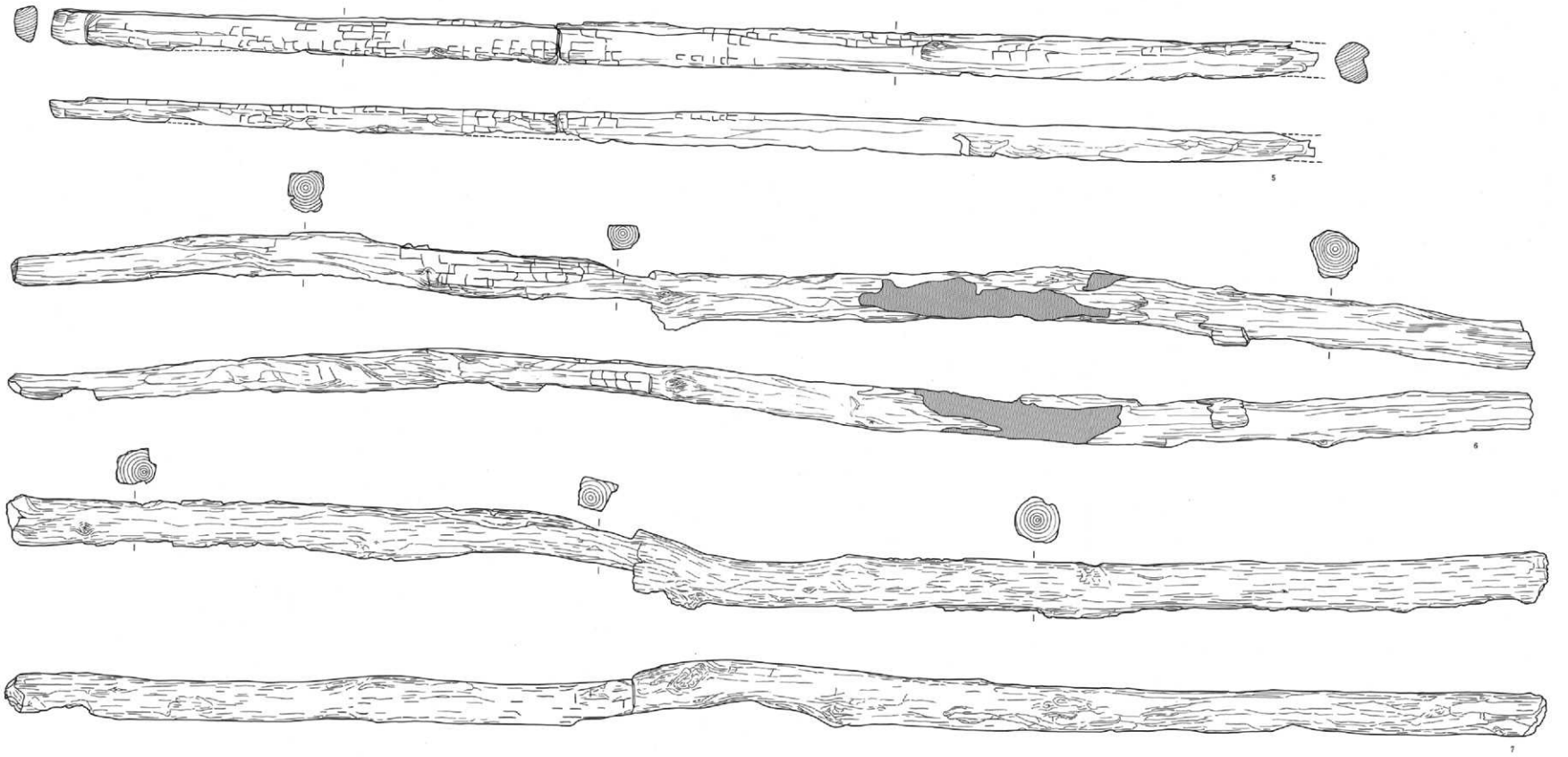
51は杭である。分割材を使用して、下端部を裏面と両側面から削り尖らせている。掘り棒の可能性が考えられる。



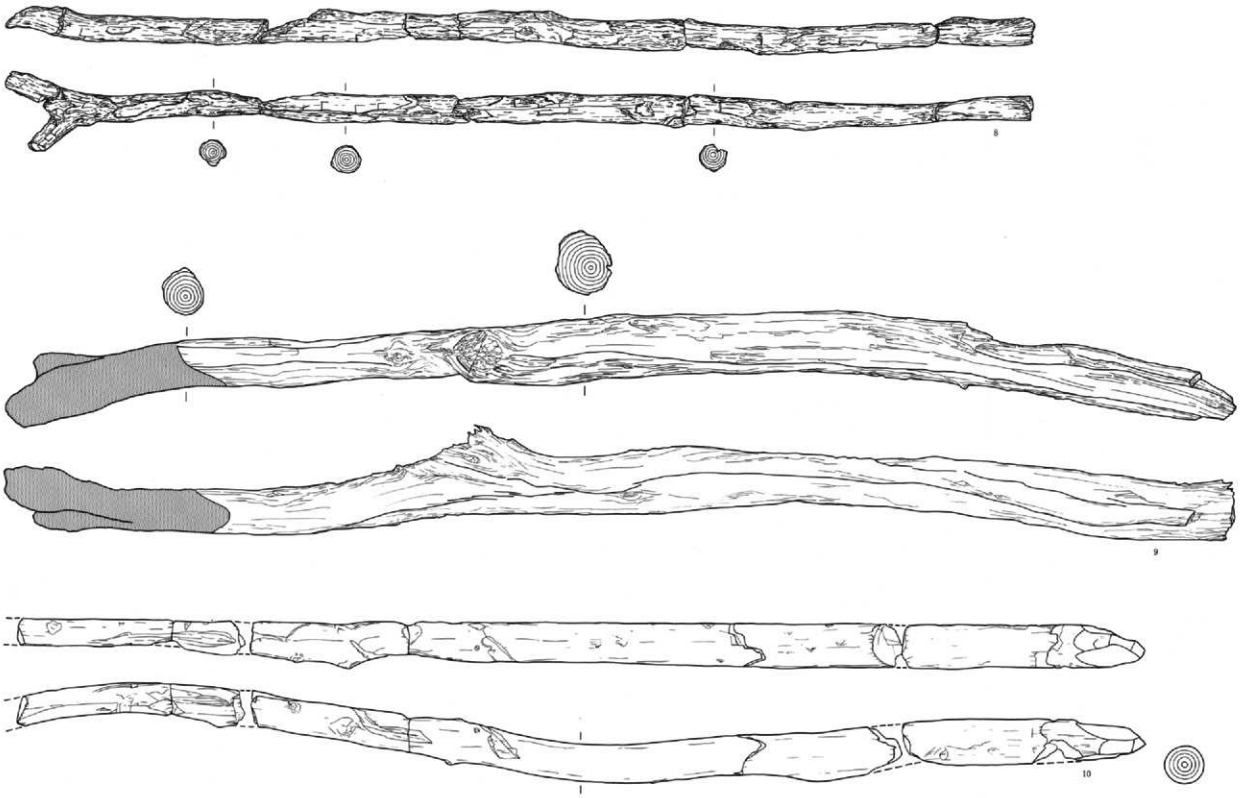
第129図　Ｃ区４面水田１号大畦出土遺物(1)



第130図　C区4面水田1号大畦出土遺物(2)

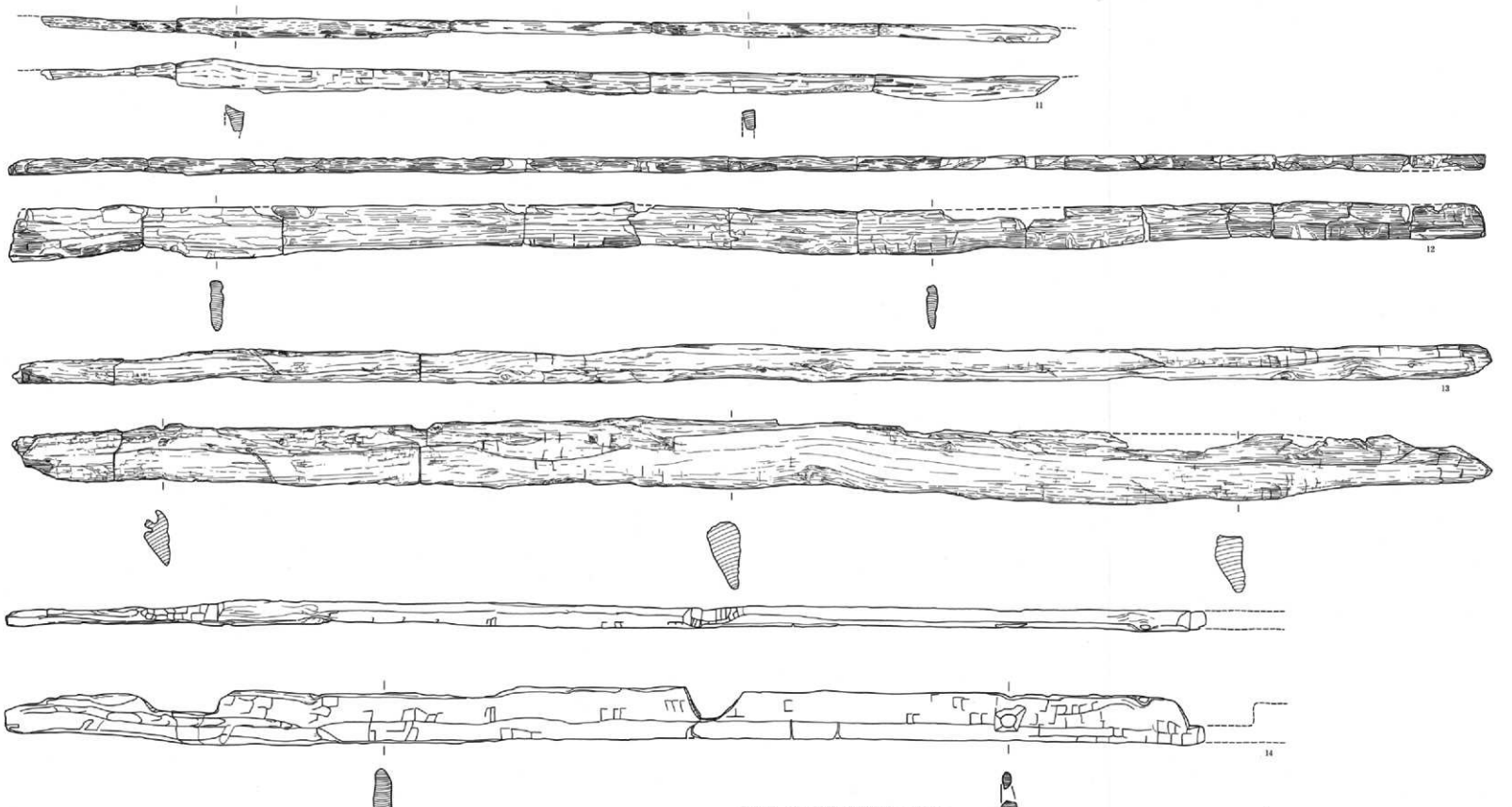


第131図　C区4面水田1号大畦出土遺物(3)

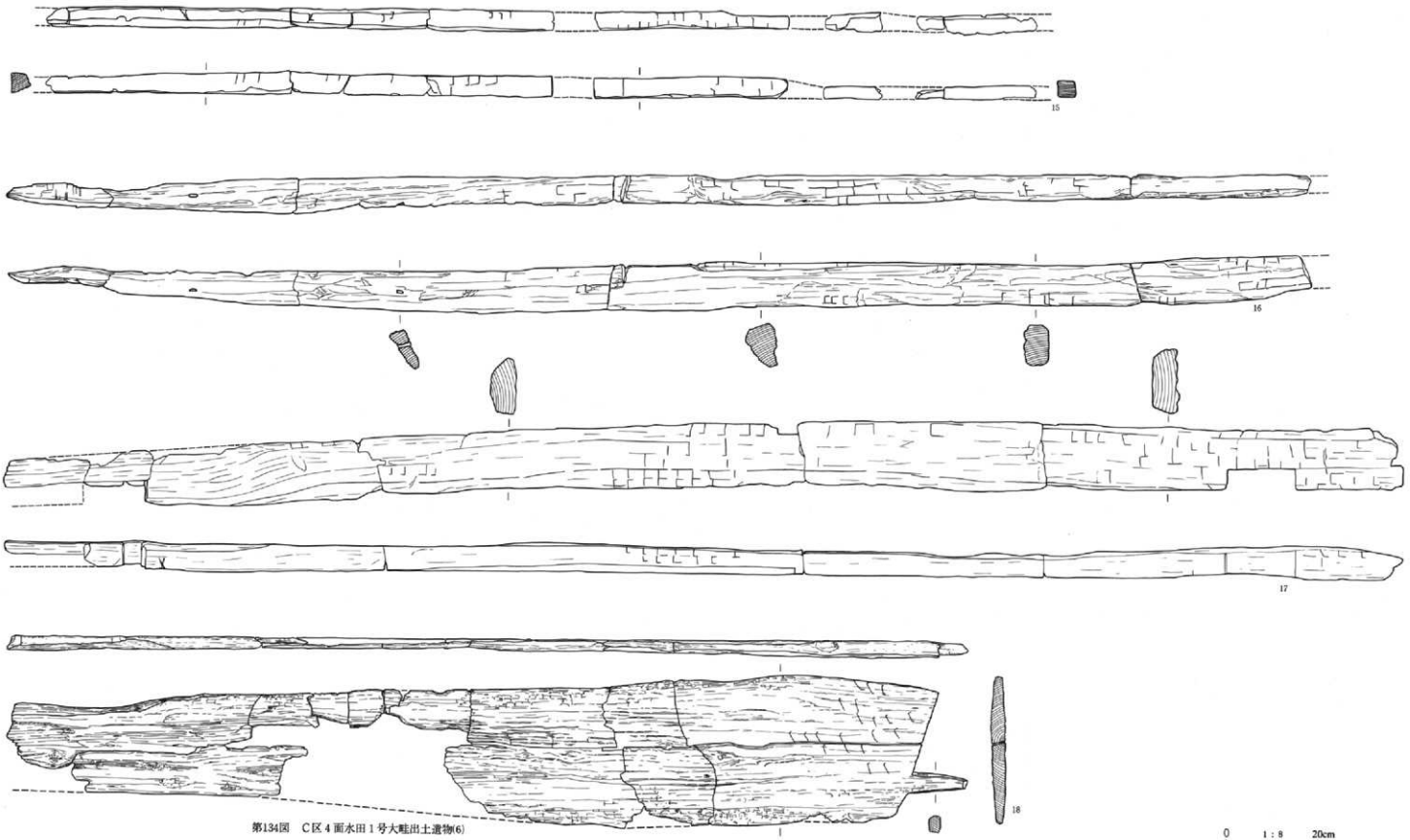


第132図　C区4面水田1号大畦出土遺物(4)

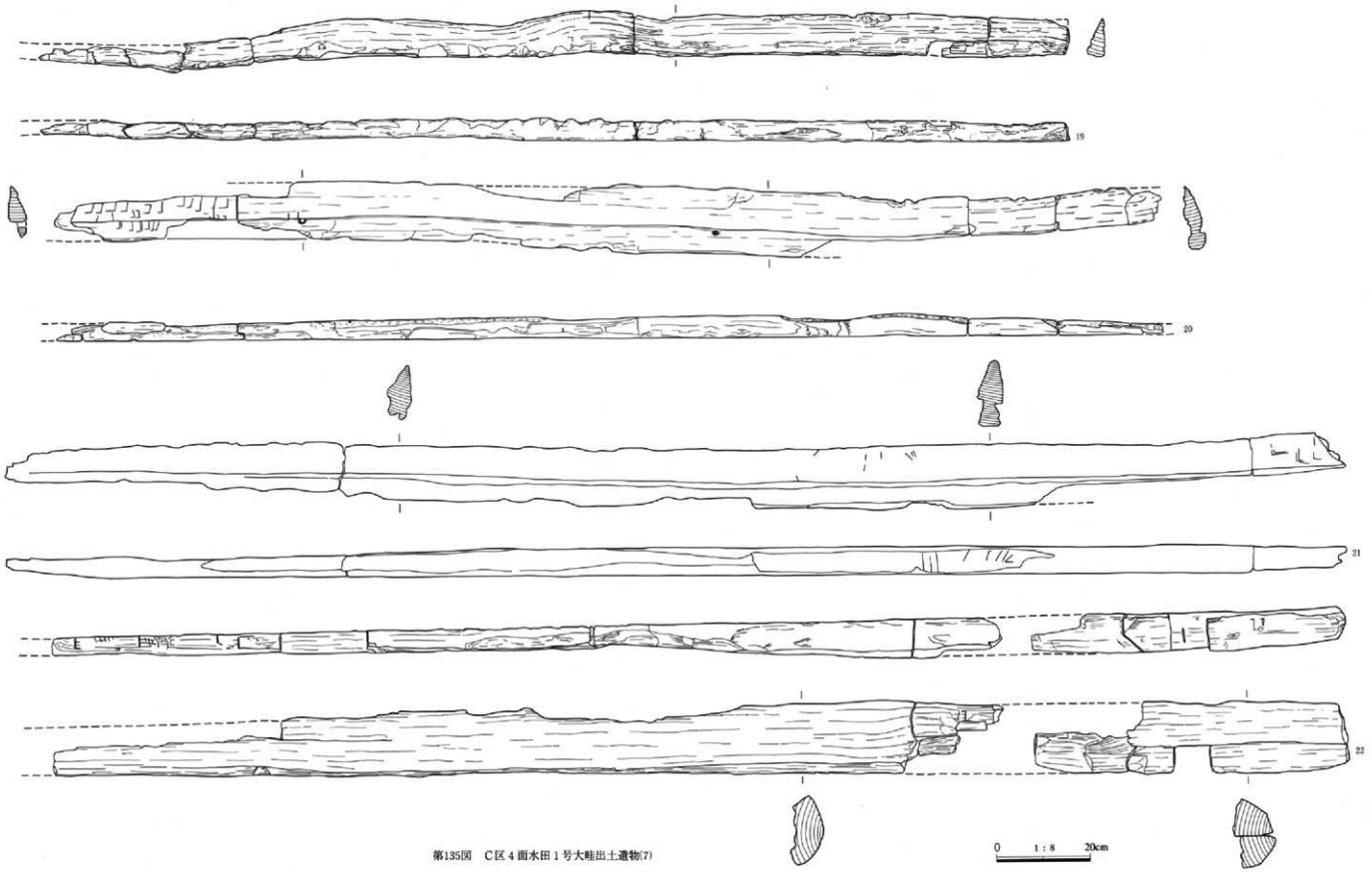
0　1：8　20cm



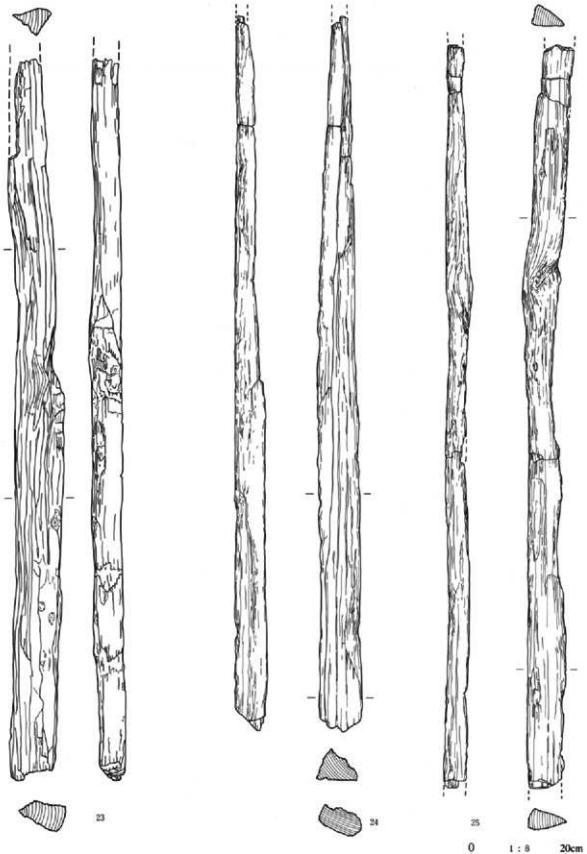
第133図　C区4面水田1号大畦出土遺物(5)



第134図　C区４面水田１号大畦出土遺物(6)



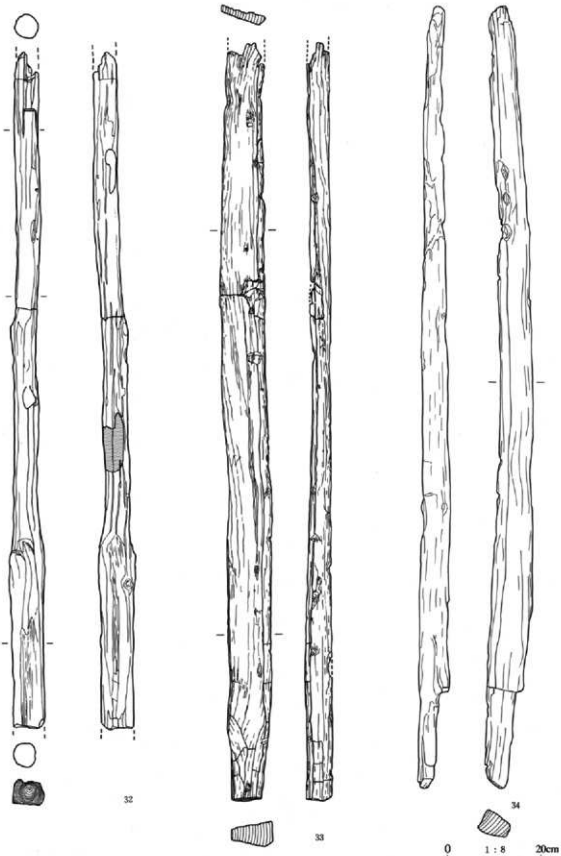
第135図　C区4面水田1号大畦出土遺物(7)



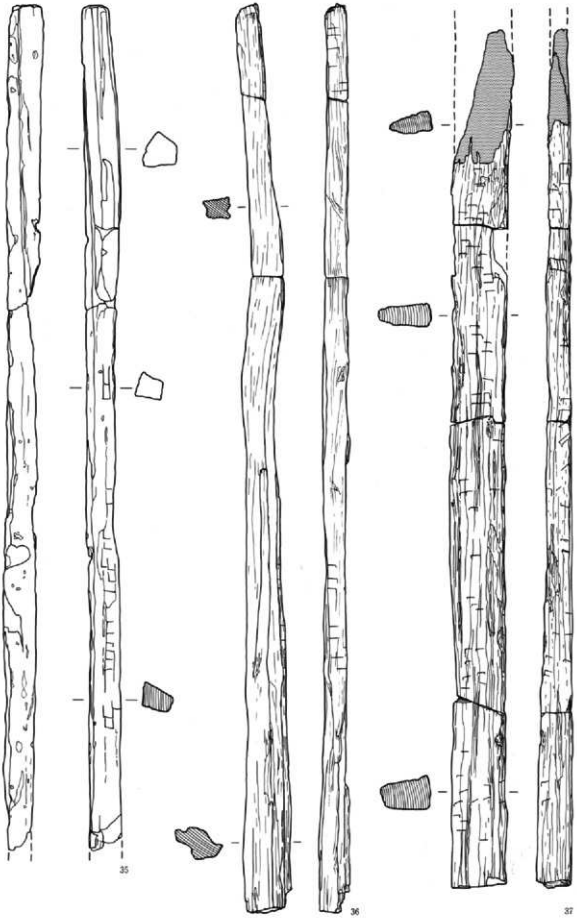
第136図　C区4面水田1号大畦出土遺物(8)

第137図　C区4面水田1号大畦出土遺物(9)

第138図　C区4面水田1号大畦出土遺物(1)

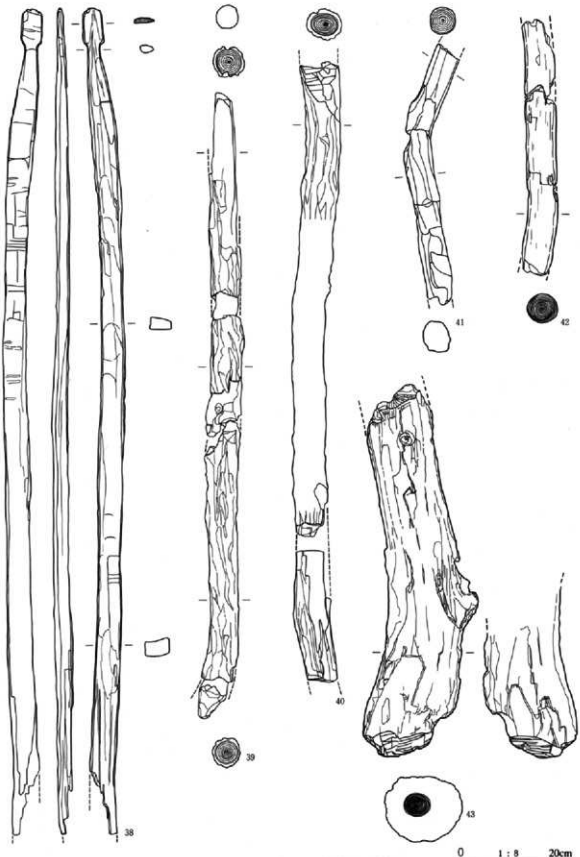


第139図　Ｃ区４面水田１号大畦出土遺物(11)

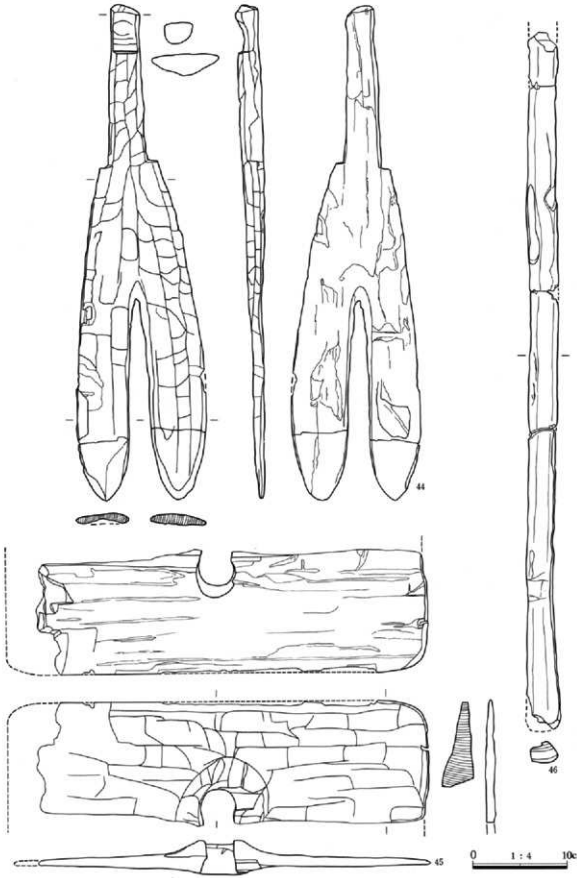


第140図　C区4面水田1号大畦出土遺物(2)

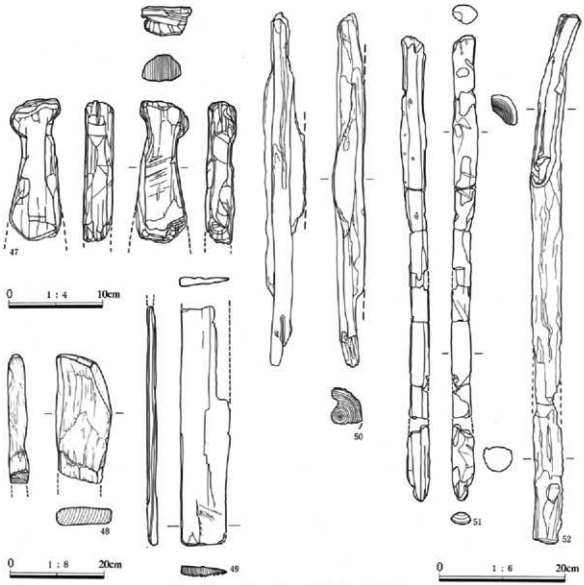
0　1：8　20cm



第141図　Ｃ区４面水田１号大畦出土遺物(13)



第142図　C区4面水田1号大畦出土遺物(4)



第143図　Ｃ区４面水田１号大畦出土遺物⑤

表64　４面水田１号大畦出土木器観察表(1)

No.	種　類	出土遺構 出土層位	木取り 樹種	加工・形状等の特徴	備　考 (長×幅×厚)
1	不明木製品	Ｃ区４面水田 １号大畦W372	カヤ	平面の形状は両方の木口付近の幅が中央部に比べ狭まる。底面から上面にかけて緩い曲線で上面の幅が底面より小さい。側面に小孔（チ4）10個反対側まで貫通している。上面に134×12×9で断面「U」字型の溝状の彫り込み。溝状の彫り込みの周端部に14×３の溝が貫通している。右木口に１個小孔が貫通している。側面の片側中央に幅10mm、深さ５mmの浅い彫り込み。	154×27×24 S＝1/3
2	不明木製品	Ｃ区４面水田 １号大畦W391	コナラ属クヌギ節	１枚の板から削り出して作っている。上端部角棒状になり、大半を欠損する。右側線は角棒の延長で直線的である。左側線は半円形である。	216×83×38 S＝1/4
3	柱材 (建築部材)	Ｃ区４面水田 １号大畦W8	芯持ち材 (クリ)	上部・下部とも端部である。下部は斜め上より中心に向かって切断され、伐採時の痕跡と思われる。下端部右側面は伐採時の欠損の可能性が考えられる。上部は二又に枝わかれする一方を残し、枝払いの痕跡がみられる。中央付近の１面を平坦に整える。	1630×114×100 S＝1/8
4	丸太材	Ｃ区４面水田 １号大畦W37	(スギ)	上部・下部とも端部である。両端部はそれぞれ斜めに切断し途中で折っている。丸太材を10面の面取りで削っている。削り幅は30mm前後である。建築部材の柱の可能性が考えられる。	1384×100×90 S＝1/8

表65　4面水田1号大畦出土木器観察表(2)

No.	種　類	出土遺構 出土層位	木取り 樹種	加工・形状等の特徴	備　考 (長×幅×厚)
5	柱材 (建築部材)	C区4面水田 1号大畦W41	芯去材 (クヌギ節)	下部は端部欠損で、上部は端部である。上端部は、90mm程下から10mm程削り、先端を突出させて、桁を受ける構造にしている。表面、側面に幅20mm程の削りがみられる。建築部材と考えられる。	3160×96×80 S＝1/8
6	柱材 (建築部材)	C区4面水田 1号大畦W13	(クヌギ節)	上部・下部とも端部である。丸太材を利用し部分的に面取りがなされ角材状になっている。中央やや下半に炭化がみられる。上端部左側面に抉りがみられる。中央部左右側面の同じ位置に切り込みがみられる。中央部に幅20mm前後の削りがみられる。祭祀的な建物の部材と考えられる。	3638×128×118 S＝1/8
7	柱材 (建築部材)	C区4面水田 1号大畦W11	(コナラ節)	上部・下部とも端部である。丸太材を利用し、部分的に面取りをし、角材状になる部分がみられる。中央部分で S字状に曲がる。この部分に表裏面に切り込みがなされ細くなる。切り込み部分に幅20mm前後の削りの痕跡がみられる。	3666×110×104 S＝1/8
8	柱材 (建築部材)	C区4面水田 1号大畦W18	芯持ち材 (クヌギ節)	幹の二又部分を利用し、Y字状にしている。Y字状の先端は切断され、端部となっている。中央やや上部で削りの痕跡がみられる。芯持ち材である。	L=2178, φ60 S＝1/8
9	柱材 (建築部材)	C区4面水田 1号大畦W31	(コナラ節)	上部・下部とも端部である。上部は二又に枝分かれする部分であり、炭化している。丸太材を使用しているが、下部は部分的に面取りが施される。	2624×146×134 S＝1/8
10	柱材・杭	C区4面水田 1号大畦W20-1	(クヌギ節)	2ヵ所接合しない部分があるが出土状態等から同一個体と考える。丸太材を利用し下端部は上から斜めに切断し、尖らせる。上部は端部を欠損する。杭または柱材と考える。	2288×640×58 S＝1/8
11	割材	C区4面水田 1号大畦W35	(クリ)	上下の木口とも斜めに切られ、調査時以降の欠損の可能性も考えられる。端部であるか不明瞭。右側面から裏面は平担に整えられている。表面から左側面は矢張と思われる。	2288×640×58 S＝1/8
12	板材 (建築部材)	C区4面水田 1号大畦W42	柾目 (クヌギ節)	上部・下部とも端部である。表裏面とも幅20mm前後の削りが不明瞭ながら施されている。右側面部に桝穴状の窪みが3カ所みられる。建築部材の可能性が考えられる。	3320×114×30 S＝1/8
13	割材・角材	C区4面水田 1号大畦W12	柾目 (クヌギ節)	上部・下部とも端部である。上端部に僅かに炭化がみられる。上部・下部端部とも斜めに切断されている。右側面に3ヶ所抉りがみられる。幅30mm前後の削りの痕跡が表裏面と右側面にみられる。桁材と思われ、建築部材の可能性が考えられる。	3330×162×80 S＝1/8
14	割材・板材	C区4面水田 1号大畦W14	柾目 (クヌギ節)	上部は端部で、下部は端部欠損である。下部は、右半分が突出する。下半分の中央に、38mm×28mmの孔があけられている。中央やや下部には左側面から13mm程の長さで半円状に抉られている。上半部中央やや下部に下半の孔と同様の孔があけられているが貫通はしていない。左側面より20cmの長さで長方形に抉られている。表裏側面に幅25mm前後の削りがみられる。建築部材と考えられる。梁材の転用と考えられる。	2716×116×48 S＝1/8
15	角材	C区4面水田 1号大畦W27	(クヌギ節)	4片に分かれ、4片とも接合できないが同一個体と思われる。上部・下部ともさらに伸びる。3面は幅15mm程の削りで面が整えられている。他の1面は工具の痕跡が不明瞭である。角は面取りが施される。	1916×46×42 S＝1/8
16	割材	C区4面水田 1号大畦W24	芯去材 柾目 (クヌギ節)	下部は端部欠損で、上部は端部である。上端部は斜めに切断されている。表裏と右側面に幅20mm前後の削りがみられる。中央部右側面に幅15mm深さ6mmの溝が彫られている。建築部材の可能性が考えられる。	2850×102×94 S＝1/8
17	梁材 (建築部材)	C区4面水田 1号大畦W44	芯去材 (クヌギ節)	上部・下部とも端部であり、左側面から長さ150mm、深さ40mmの彫り込みがみられる。中央部右側面に長さ35mm、深さ15mmの彫り込みがみられる。表面、両側面に幅25mm前後の削りがみられる。高床建物の部材と考えられる。	3080×144×60 S＝1/8
18	棟覆材 (建築部材)	C区4面水田 1号大畦W45	柾目 (クヌギ節)	下部は端部で、中央部分から上部を欠損する。一枚板から作り出している。下端部は、やや左より、140mm程の長さで突起が削り出されている。表裏とも幅25mm程の削りがみられる。	2110×320×30 S＝1/8

表66　4面水田1号大畦出土木器観察表(3)

No.	種　類	出土遺構 出土層位	木取り 樹種	加工・形状等の特徴	備　考 (長×幅×厚)
19	割材・板材	C区4面水田 1号大畦W15	柾目 (クヌギ節)	下部は端部で、上部は欠損し、さらに伸びる。左側面が厚く、右側面が薄く、断面形は三角形である。表裏面とも不明瞭であるが20～25mm程の幅で削りが施され、平坦に調整されている。	2180×44×20 S＝1/8
20	板材	C区4面水田 1号大畦W33	(クヌギ節)	上部・下部とも端部欠損である。上半部で15mm×20mmの孔があいている。両側面は部分的に欠損である。裏面は平坦に面を整えている。表面上半で幅25mm前後の削りがみられる。建築部材の可能性が考えられる。	2374×146×134 S＝1/8
21	板材	C区4面水田 1号大畦W39	柾目 (クヌギ節)	上部・下部とも端部と思われる。下部左側面を欠損する。表面中央やや左側が面取りが強くおこなわれ、15mm前後の段がつく。削りの痕跡は不明瞭であるが、幅20mm前後の削りと思われる。	2868×138×134 S＝1/8
22	梁材 (建築部材)	C区4面水田 1号大畦W43	1/4分割材 芯去材 (クヌギ節)	上部・下部とも端部の可能性が大きい。上半と下半に2つに分かれるが、出土状態・材質等から同一個体と考えられる。下部左側面に長さ85mm、深さ60mmの切り込みがみられる。裏面に30～50mm幅の削りがみられる。渡り腐仕口の相方で高床建物の部材である	2680×154×150 S＝1/8
23	割材	C区4面水田 1号大畦W7	(コナラ節)	下部は端部で、上部は端部欠損である。割材で左側面が中心部になる。下端部は切断面。表裏面と右側面に、幅20mm前後の削りの痕跡が見られる。角材の断片で、建築部材の可能性が考えられる	1528×104×98 S＝1/8
24	割材	C区4面水田 1号大畦W30	(クヌギ節)	下部は端部で、裏面から表面に斜めに3回以上の打撃で切断している。下部は断面形が長方形、中央から上部は三角形となる。左側面は工具の痕跡が不明瞭であるが平坦に調整している。	1542×92×66 S＝1/8
25	割材	C区4面水田 1号大畦W10	みかん割 (クヌギ節)	上下端部欠損。両方向にさらに伸びる。左側面に幅20mm程の加工の痕跡がみられる。右側面が薄く、断面形が三角形の割材である。	1560×80×48 S＝1/8
26	割材・角材 (建築部材)	C区4面水田 1号大畦W36	クリ (コナラ節)	上部は端部欠損で、さらに上方に伸びる。下部は端部で、切断の工具の痕跡がみられる。表面に幅15mm前後の削りの痕跡が部分的にみられる。断面形は四角形で、下部が太い。全体に左側に反る。建築部材の可能性が考えられる。	1346×68×48 S＝1/8
27	角材	C区4面水田 1号大畦W29	柾目 (クヌギ節)	上部・下部とも端部である。上端部は摩滅している。上半は角材状、下半の裏面が、割落していたためであるが角材であったと思われる。表面に不明瞭であるが幅25mm前後の削りがみられる。	1542×70×44 S＝1/8
28	板材 (建築部材)	C区4面水田 1号大畦W38	板目 ケヤキ	上部・下部とも端部である。表面と両側面に工具痕が残り平坦に調整されている。表面の削りの幅は30～45mm程でやや幅広である。裏面は工具による調整が部分的で荒れている。建築部材で貫材の可能性が考えられる。	1493×130×42 S＝1/8
29	割材	C区4面水田 1号大畦W19	柾目 (クヌギ節)	上部・下部とも端部である。中央部、下半部に強い削りがみられ段差がついている。下半に不明瞭ながら削りの痕跡がみられる。建築部材の可能性が考えられる。	1810×90×84 S＝1/8
30	割材・板材	C区4面水田 1号大畦W40	柾目 コナラ属クヌギ節	上部・下部とも端部と思われ、中央部より幅が狭くなる。下半部の左側縁にコの字状の抉りがみられる。表裏面とも幅15mm程の削りがみられる。建築部材の可能性が考えられる。	1694×96×29 S＝1/8
31	割材	C区4面水田 1号大畦W20-2	柾目 コナラ属クヌギ節	下部は端部で、上部は端部を欠損する。下端部は斜めに切断されている。裏面中央付近に幅30mm前後の削りがみられ、平坦に調整している。建築部材の可能性が考えられる。	L=1460、φ84 S＝1/8
32	角材	C区4面水田 1号大畦W5-1	コナラ属クヌギ節	上部・下部とも端部欠損で、さらに両方向に伸びる。下部は、4面を削り角材状にしている。工具の痕跡は不明である。中央部から上部は、丸太状である。中央部で一部炭化している。上部表面で、幅15mm前後の削りの痕跡がみられる。	1427×96×51 S＝1/8
33	角材	C区4面水田 1号大畦W22	(クヌギ節)	下部は端部で、左側面を削り込んで幅を狭くしている。削りの幅は40mm程である。上部は下部に比べ薄く板状となる。さらに上方に伸びる。	1594×94×58 S＝1/8
34	割材・角材	C区4面水田 1号大畦W23	(コナラ節)	上部・下部とも端部である。下端部は斜めに切断されている。下端から20cm程の所で右側面が削られ段差がつけられている。下部が太く、上部が細い。2面が面取りされているが割りの痕跡は不明瞭である。建築部材で柱材の可能性が考えられる。	1660×70×68 S＝1/8
35	角材	C区4面水田 1号大畦W25	(クヌギ節)	上部・下部とも端部であるが、下端部一部欠損する。下半は板状で、上半は角材状である。表面に不明瞭ながら幅25mm程の削りの痕跡がみられる。	1762×70×70 S＝1/8

表67　4面水田1号大畦出土木器観察表(4)

No.	種　類	出土遺構 出土層位	木取り 樹種	加工・形状等の特徴	備　考 (長×幅×厚)
36	角材	C区4面水田 1号大畦W26	(クヌギ節)	上部・下部とも端部である。下半部はやや幅広く、板状で、上半部は角材状である。右側面に幅20mm前後の削りがみられる。	1932×100×100 S＝1/8
37	角材	C区4面水田 1号大畦W28	(クヌギ節)	下部は端部で、上部先端部は炭化し、焼失したと思われる。厚さは下部が厚く、上部が薄くなる。面取りがなされ、4面とも幅15～20mm程の加工痕がみられる。	2000×118×112 S＝1/8
38	不明木製品	C区4面水田 1号大畦W34	柾目 コナラ属コナラ節	上部は端部で、下部は端部を欠損する。下部が太く、上部が細くなり、緩く右に曲がる。上端部は、下から急に細くなり75mm×40mmの頭部をつくりだしている。表裏とも平滑に調整され、幅30mm前後の削りも不明瞭ながらみられる。祭祀的な建物の部材の可能性が考えられる。	1749×55×35 S＝1/8
39	自然木 (丸太材)	C区4面水田 1号大畦W21	コナラ属クヌギ節	上部・下部とも端部欠損で、両方向に伸びる。上部を除き大半が樹皮で覆われている。下部でやや曲がる他は直線的で、丸太材の可能性も考えられる。	L=1318、φ67 S＝1/8
40	丸太材	C区4面水田 1号大畦W17	コナラ属コナラ節	2片に分かれ接合しないが、同一個体である。下部は端部近くであるが欠損している。上から下へ工具の痕跡がみられる。上部は端部欠損で、さらに上方に伸びる。全体に樹皮で覆われている。	L=1005、φ68 S＝1/8
41	丸太材	C区4面水田 1号大畦W1	コナラ属コナラ節	上部・下部とも端部欠損で両方向に伸びる。中央やや上で右側に屈曲する。この屈曲部で接払い時の工具痕がみられる。他に工具痕はみられない。	549×57×54 S＝1/8
42	丸太材	C区4面水田 1号大畦W16	コナラ属クヌギ節	上部・下部とも端部欠損で、さらに両方向に伸びる。全体に左に緩く曲がっている。表面中央部付近で幅15mm前後の削りの痕跡がみられる他は不明瞭である。	540×64×60 S＝1/8
43	丸太材	C区4面水田 1号大畦W46	コナラ属クヌギ節	下部は端部で斧状の工具で全方向斜め上から中心部に向かって切断している。中心部がやや尖る。上部は炭化し、焼失したと思われる。表裏ともほぼ樹皮に覆われ、加工の痕跡はみられない。	787×165×145 S＝1/8
44	膝柄二又鍬 鍬身部	C区4面水田 1号大畦W489	コナラ属クヌギ節	一枚板から削り出して作られている。表面に幅20mm前後の削りがみられる。裏面は平黒で、表面はやや丸味がある。着柄部は表面が抉られている。	525×137×24 S＝1/4
45	柄孔広鍬か横鍬かエブリ	C区4面水田 1号大畦W392	柾目 コナラ属コナラ節	1枚の板から削り出して作っている。鍬身部で左側縁・上端部欠損。刃部を部分的に欠損する。柄孔は径38mm。柄孔の開け方から鍬身部と柄の装着角度は鋭角になる。柄孔の周辺は表裏とも削り残して厚くしている。	414×129×33 S＝1/4
46	棒状 (農具柄)	C区4面水田 1号大畦W390	ヤマグワ	下部は端部で、端部を作り出す時の削りと思われる痕跡がみられる。上部は端部欠損で、さらに伸びる。上部に比べ下端部付近は幅広になる。表裏の角は面取りが施されている。	730×31×22 S＝1/4
47	鍬身	C区4面水田 1号大畦W233	柾目	鍬身の連続部と思われる。下部はさらに伸び、刃部がつくと推定する。上部両側縁に削りの痕跡がみられ、端部を作り出す。	150×55×30 S＝1/8
48	板材	C区4面水田 1号大畦W371	柾目	上部は端部で、緩い弧状で、角は面取りを施している。下部はさらに下方に伸びる。25mm幅の加工痕が表裏間にみられる。	260×118×40 S＝1/8
49	板材	C区4面水田 1号大畦W365	柾目 コナラ属クヌギ節	下部は端部で、上部はさらに伸びる。表裏とも工具で加工されていると思われるが痕跡は不明瞭である。側面は面取りが施されている。	500×104×19 S＝1/8
50	割材	C区4面水田 1号大畦W9	コナラ属コナラ節	上部・下部とも端部欠損で、さらに両方向に伸びる。全体に残存状態が悪い。上部・下部は髄芯が出てしまっている。工具の痕跡は不明である。現状では1/4分割材であるが、丸太材の可能性も考えられる。	745×73×65 S＝1/8
51	杭	C区4面水田 1号大畦W536	ヤマグワ	6片が接合し、他の1片は接合しない。形状、材質から他の1片は同一個体で、下端部と思われる。下端部は裏面からと両側面から削り先端を尖らせる。表面と両側面に幅15mm前後の削りがみられる。上部は端部である。掘り棒の可能性も考えられる。	715×40×29 S＝1/6
52	棒状木製品	C区4面水田 1号大畦W3	コナラ属クヌギ節	上部を除き大半が樹皮で覆われている。上部・下部とも端部と思われる。抜払い時の工具の痕跡が上部・下部ともに1ヶ所ずつみられる。上部は断面形が半円状になり、裏面にも、幅20mm前後の削りの痕跡がみられる。掘り棒の可能性が考えられる。	L＝834、φ40 S＝1/6

Ｃ区４面水田南西部（第144図）

遺構　南北方向の縦畦は比較的良好に残存し、１号大畦の北側の水田の縦畦と同様の位置に造られている。横畦は水田№236で南北方向に細長い区画になり、途切れる。水田№238・239も同様に細長い区画で、南側の畦の位置がやや北側にずれる。１区画の面積は、１号大畦北側の水田に比べると差が大きい。１号大畦の北側の水田は、南北方向の縦畦と東西方向の横畦がずれずに造られている。水田の形状や面積は１号大畦の南側の水田に比べ差は少ない。

遺物　１号溝と16号溝が合流する部分から９号溝と16号溝の間の畦と９号溝の東側の畦を乗り越えるように木製品等が出土している。この付近から出土した木製品の多くはAs-C混土の黒色土中というより、As-C混土の黒色土上面より出土している。洪水層下からの出土であり、３面水田に伴う時期のものと考える。出土状況から、１号溝の周辺や１号溝中にあった木製品等は、１号溝を通して洪水時に16号溝・９号溝そして水田に流されてきたものと考える。出土遺物はＣ区・Ｄ区４面水田遺物の項で報告する。

Ｃ区４面水田北西部（第145図）

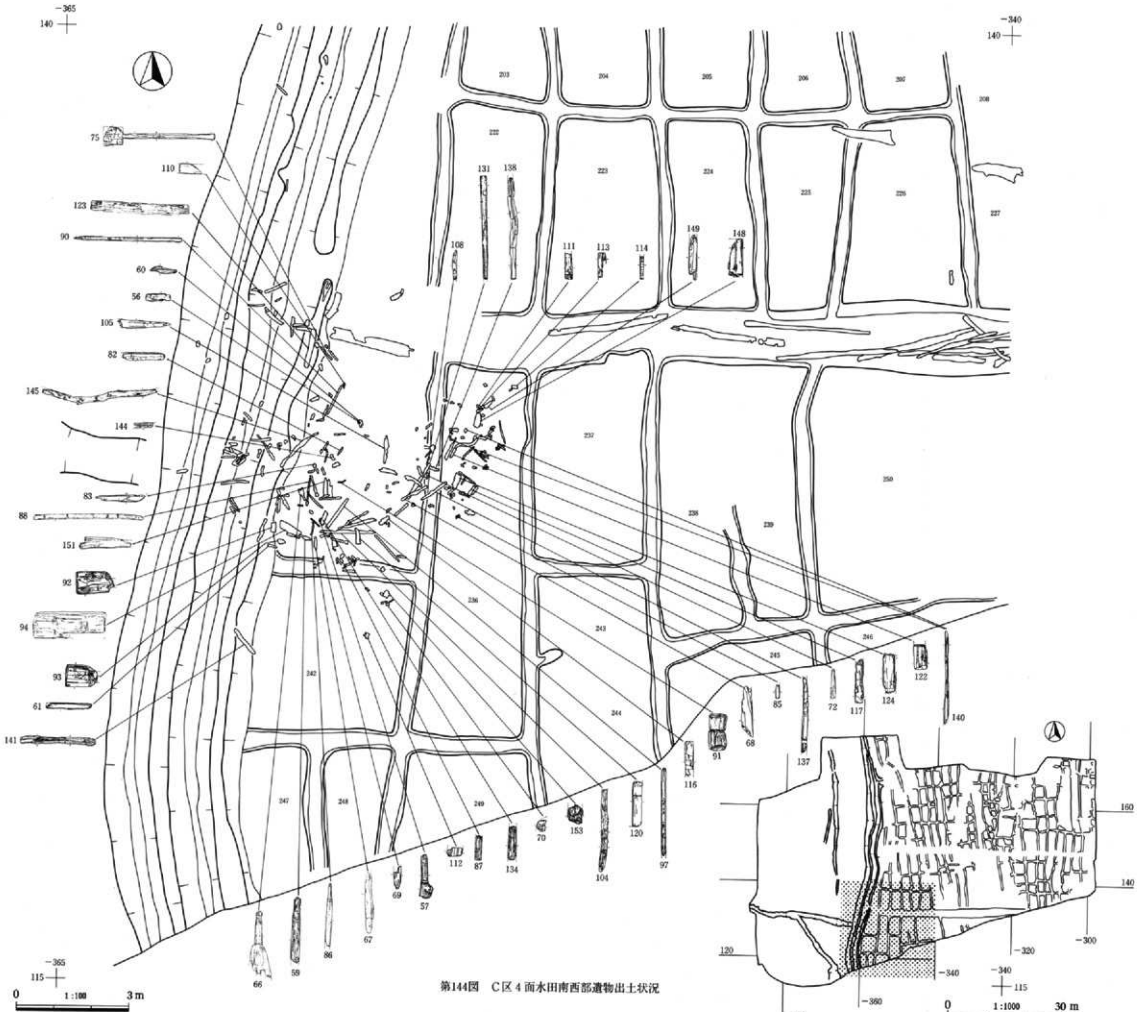
遺構　水田の区画は他の部分に比べ不明瞭な所が多い。水田№59・98の近くで９号溝の東側の畦が途切れ、水口になっている。１号大畦の北側の水田に送る水の水口の１つと考えられる。水田№57と№58の間の畦、水田№59と№98の間の畦は同一の自然木を芯材として利用し、畦を造っている。そのための付近の水田の区画の形状が乱れている。

遺物　９号溝の東側の畦と９号溝北側の水口付近に遺物が集中している。出土遺物はＣ区・Ｄ区４面水田遺物の項で報告する。

Ｄ１・Ｄ２区４面水田（第146図）

遺構　Ｄ１区、Ｄ２区とも縦畦の残存状態が比較的良好であった。水田№267と№268の間の畦に建築部材が畦の芯材に使用されている。Ｄ２区の南端部で東西方向に木器や木材が列状に並んで出土している。畦は確認できなかったが、畦があった可能性が高い。Ｄ１区の水田№252に自然木が確認できた。この木も畦の芯材に使用された可能性が考えられ、水田№252は２つ以上の区画に分けられる可能性が高い。東側の低地と台地の境界にあたる付近に８号溝と18号溝が併行する。低地よりの８号溝で水口が２カ所確認され、Ｄ２区の水田は、８号溝・18号溝を利用して送水されていたと推定される。西側のＣ区の９号溝・16号溝と同様の仕組みで送水されていたと思われる。

遺物　Ｄ２区南端部で木器や木材が列状に並んで出土している。出土遺物はＣ区・Ｄ区４面水田遺物の項で報告する。



第144図　C区４面水田南西部遺物出土状況